宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 230集

日向市所在

# 岡（おか）遺跡　（第16次調査）
# 馬込（まごめ）遺跡第２地点

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12

２０１４

宮崎県埋蔵文化財センター

馬込遺跡第２地点から岡遺跡方面を臨む（北から）

巻頭図版２

馬込遺跡第２地点　弥生土器

# 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（日向～都農間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成20年度から実施して参りました。本書は、平成24年度に実施した日向市大字平岩に所在する岡遺跡（第16次調査）と馬込遺跡第２地点の発掘調査の成果を記載しております。

今回報告する岡遺跡（第16次調査）では、後期旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺構・遺物が確認されました。主に後期旧石器時代では礫群、縄文時代早期では集石遺構や炉穴などの遺構が検出されています。

馬込遺跡第２地点では、主に縄文時代早期の集石遺構、炉穴、土坑、弥生時代の遺構などが検出されています。

今回の調査で得られた多くの成果が、今後、当地域の歴史を解明する上で非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成26年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　向井　大蔵

# 例　言

1　本書は、東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い、平成24年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した日向市大字平岩所在の岡遺跡（第16次調査）、馬込遺跡第２地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により、宮崎県教育委員会が調査主体となり、同県埋蔵文化財センターが実施した。

3　岡遺跡（第１～17次調査）は、高森川を挟み北側の字名が岡、南側の字名が谷口・平尾である。『日向市遺跡詳細分布調査報告書』1985によると、岡遺跡の所在地は遺跡番号6005の岡遺跡と6006の平尾遺跡に分けられる。このことから高森川より南に位置する岡遺跡（第３・４・５・７・12・14・15・17次調査）は、遺跡名を平尾遺跡と変更する。

4　現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。
　　基準点・グリッド杭等の設置
　　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・・(株）ケイディエム
　　空中写真撮影
　　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・・(有）スカイサーベイ九州

5　現地での遺構図作成・写真撮影については、各遺跡の担当者が行った。

6　整理作業は、各遺跡の担当者が、整理作業員の協力を得て宮崎県埋蔵文化財センターで行った。なお、一部の石器実測及びトレースについては、岡遺跡（第16次調査）、馬込遺跡第２地点ともに（株）パスコへそれぞれ業務委託した。

7　自然科学分析として、放射性炭素年代測定・樹種同定を（株）古環境研究所に委託し、その成果報告については、二方和也・新谷清が編集して掲載した。

8　本文の執筆は分担して行い、第Ⅰ章は松林豊樹・二方和也・新谷清、第Ⅱ章は二方和也、第Ⅲ章は新谷清・飯田博之、第Ⅳ章は長津宗重が執筆した。

9　本書の作成は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、二方和也が編集した。

10　出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

11　出土した陶磁器の分類については、埋蔵文化財センター福田泰典、柳田晴子の協力を得た。

# 凡　例

1　本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。

2　本書で「尾鈴山溶結凝灰岩」としたものは、「尾鈴山酸性岩類」の主体をなす溶結凝灰岩（WT1・WT2）を示す。遺跡で認められる「尾鈴山酸性岩類」には、他に花崗閃緑斑岩・火山角礫岩などが含まれるが、遺物や遺構の一部として「尾鈴山酸性岩類」が利用される場合、厳密な岩石名の特定が困難なことも多い。このため、本文中「尾鈴山溶結凝灰岩」と記載した資料には、溶結凝灰岩を主体としつつも、他の「尾鈴山酸性岩類」を含む可能性がある。

3　本書に使用した主な略記号は次の通りである。
　　SC＝土坑　　SE＝溝状遺構　　SI＝礫群・集石遺構　　SP＝炉穴　　SZ＝性格不明遺構
　　Gr＝グリッド　Tr＝トレンチ

4　本書で使用した標高は海抜高であり、方位は座標北（G.N.）を基本として一部の平面図・遺構実測図は磁北（M.N.）を用いた。

5　石器の節理面は１点鎖線で、敲打痕の認められる部分は波線の〇で表示した。

6　石器実測図への表現として以下のようにした。
※図面上で明示できない範囲については矢印とコ・ス・マ・ト・ビで示した。
　　コ＝敲打痕　ス＝磨痕　マ＝摩滅　ト＝砥痕　ビ＝微細剥離
※実測図中の網掛けは磨面・砥面20%、磨滅痕10%、強い磨滅痕30%、ガジリは黒塗りで表す。

7　遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。

# 本文目次


## 第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第３節　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第４節　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

## 第Ⅱ章　岡遺跡（第 16 次調査）の成果

第１節　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第２節　後期旧石器時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第３節　縄文時代早期の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第４節　その他の時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第５節　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第６節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

## 第Ⅲ章　馬込遺跡第２地点の成果

第１節　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第２節　旧石器時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第３節　縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第４節　弥生時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
第５節　その他の時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
第６節　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
第７節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102

## 第Ⅳ章　東九州自動車道建設に伴う調査成果　・・・・・・・・・・・・104

## 報告書抄録　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・巻末

# 挿図目次

## 第Ⅰ章　はじめに


第１図　東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図・・・・3
第２図　岡遺跡・馬込遺跡及び周辺遺跡分布図・・・・5
第３図　岡遺跡・平尾遺跡調査区・・・・・・・7
第４図　馬込遺跡調査区・・・・・・・・・・・9
第５図　岡遺跡・馬込遺跡及び周辺地形図　・・ 10


## 第Ⅱ章　岡遺跡（第 16 次調査）の成果


第６図　岡遺跡　第９・16・６次調査区基本土層比較図・・・・・13
第７図　土層断面図・・・・・・・・・・・・・14
第８図　遺構分布図・・・・・・・・・・・・・15
第９図　後期旧石器時代の遺構・遺物分布図・・16
第10図　礫群実測図・・・・・・・・・・・・・17
第11図　礫群・散礫分布図及び接合状況・・・・19
第12図　小グリッド重量別個体数・・・・・・・20
第13図　後期旧石器時代石器実測図（１）・・・・22
第14図　後期旧石器時代石器実測図（２）・・・・23
第15図　後期旧石器時代石器実測図（３）・・・・24
第16図　縄文時代早期の遺構・遺物分布図・・・25
第17図　縄文時代早期集石遺構・土坑実測図・・・・26
第18図　縄文時代早期SP1・2・3実測図・・・・28
第19図　縄文時代早期SP4～8・9実測図・・・・29
第20図　遺構内出土遺物実測図・・・・・・・・31
第21図　縄文時代早期土器実測図・・・・・・・31
第22図　縄文時代早期石器実測図（１）・・・・33
第23図　縄文時代早期石器実測図（２）・・・・34
第24図　縄文時代早期石器実測図（３）・・・・35
第25図　縄文時代早期石器実測図（４）・・・・36
第26図　その他の時代遺構分布図・・・・・・・38
第27図　その他の時代溝状遺構・土坑実測図　・・・・39
第28図　その他の時代陶磁器実測図・・・・・・・40
第29図　暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・42
第30図　炉穴出土の炭化材・・・・・・・・・・・44
第31図　岡遺跡・平尾遺跡調査区全体遺構分布図・・・・・・・47・48
第32図　岡遺跡・平尾遺跡調査区全体縄文時代早期遺構分布図・・・・・・47・48
第33図　岡遺跡・平尾遺跡調査区全体中世～近世遺構分布図・・・・・・・47・48


## 第Ⅲ章　馬込遺跡第２地点の成果


第34図　調査区グリッド配置図・・・・・・・・・51
第35図　基本土層図・・・・・・・・・・・・・・52
第36図　旧石器時代石器実測図・・・・・・・・・53
第37図　縄文時代遺構・遺物分布図・・・・・・・54
第38図　集石遺構分布図・・・・・・・・・・・・56
第39図　SI1実測図・・・・・・・・・・・・・・57
第40図　集石遺構実測図・・・・・・・・・・・・58
第41図　SI2~SI7実測図・・・・・・・・・・・・59
第42図　SI8・SI9実測図・・・・・・・・・・・・60
第43図　SI10・SI11実測図・・・・・・・・・・・61
第44図　SI12~SI22実測図（１）・・・・・・・・62
第45図　SI12~SI22実測図（２）・・・・・・・・63
第46図　SI23・SI24実測図・・・・・・・・・・・65
第47図　SI25~SI28実測図・・・・・・・・・・・66
第48図　SI29・SI30実測図・・・・・・・・・・・67
第49図　SI31~SI34実測図・・・・・・・・・・・68
第50図　SI35実測図・・・・・・・・・・・・・・69
第51図　土坑・炉穴実測図・・・・・・・・・・・69
第52図　縄文時代早期土器実測図・・・・・・・・71
第53図　縄文時代晩期土器実測図・・・・・・・・72
第54図　縄文時代石器実測図（１）・・・・・・・75
第55図　縄文時代石器実測図（２）・・・・・・・76
第56図　縄文時代石器実測図（３）・・・・・・・77
第57図　縄文時代石器実測図（４）・・・・・・・78

# 表目次

## 第Ⅰ章　はじめに


第１表　東九州自動車道（日向～都農間）
関連遺跡一覧表　・・・・・4
第２表　調査別遺跡対照表　・・・・・・・・・・・8


## 第Ⅱ章　岡遺跡第 16 次調査の成果


第３表　礫群一覧表・・・・・・・・・・・・・・・17
第４表　Ⅳ層散礫重量別個体数・・・・・・・・・・21
第５表　後期旧石器時代石器計測表・・・・・・・24
第６表　縄文時代早期集石遺構一覧表・・・・・・30
第７表　縄文時代早期炉穴一覧表・・・・・・・・30
第８表　縄文時代早期土器観察表・・・・・・・・37
第９表　縄文時代早期石器計測表・・・・・・・・37
第10表　その他の時代陶磁器観察表・・・・・・・40
第11表　測定試料、前処理・調整法
および測定法・・・・・・・・・・・42
第12表　放射性炭素年代測定法結果・・・・・・・42
第13表　樹種同定結果・・・・・・・・・・・・・・44


## 第Ⅲ章　馬込遺跡第２地点の成果


第14表　旧石器時代石器計測表・・・・・・・・・53
第15表　縄文時代集石遺構一覧表・・・・・・・・69
第16表　縄文土器観察表・・・・・・・・・・・・86
第17表　縄文時代石器計測表・・・・・・・・・・87
第18表　弥生土器観察表（１）・・・・・・・・・・95
第19表　弥生土器観察表（２）・・・・・・・・・・96
第20表　測定試料、前処理・調整法
および測定法・・・・・・100
第21表　放射性炭素年代測定法結果・・・・・・100
第22表　樹種同定結果・・・・・・・・・・・・・100


## 第Ⅳ章　東九州自動車道建設に伴う調査成果


第23表　東九州自動車道
調査成果一覧表・・・・・・126～132
第24表　東九州自動車道（県境～清武間）発掘
調査に伴う報告書刊行一覧・・・・133・134



第58図　縄文時代石器実測図（５）・・・・・・79
第59図　縄文時代石器実測図（６）・・・・・・80
第60図　縄文時代石器実測図（７）・・・・・・81
第61図　縄文時代石器実測図（８）・・・・・・82
第62図　縄文時代石器実測図（９）・・・・・・83
第63図　縄文時代石器実測図（10）・・・・・・84
第64図　縄文時代石器実測図（11）・・・・・・85
第65図　弥生時代以降の遺構分布図・・・・・・88
第66図　SZ1実測図・土層断面図（１）・・・・89
第67図　SZ1土層断面図（２）・・・・・・・・・90
第68図　SZ1埋納土坑平面図・・・・・・・・・・91
第69図　SZ1埋納土坑出土遺物実測図・・・・・91
第70図　SZ1出土弥生土器実測図（１）・・・・93
第71図　SZ1出土弥生土器実測図（２）・・・・94
第72図　SZ1出土弥生土器実測図（３）・・・・95
第73図　溝状遺構・竪穴状遺構実測図
・土層断面図・・・・・・・97
第74図　竪穴状遺構遺物・青磁実測図・・・・　98
第75図　暦年較正結果・・・・・・・・・・・・101
第76図　馬込遺跡第２地点の炭化材・・・・・101


## 第Ⅳ章　東九州自動車道建設に伴う調査成果


第77図　東九州自動車道（県境～北川間）
関連遺跡位置図・・・・・108
第78図　東九州自動車道（門川～都農間）
関連遺跡位置図・・・・・110
第79図　東九州自動車道（都農～西都間）
関連遺跡位置図・・・・・112
第80図　東九州自動車道（西都～清武間）
関連遺跡位置図・・・・・114

# 写真図版


巻頭図版１　馬込遺跡第２地点から
岡遺跡方面を望む（北から）

巻頭図版２　馬込遺跡第２地点　弥生土器

図版１　岡遺跡第16次調査区・・・・・・・・・・137
調査区全景、作業風景、Tr1・2・3土層断面

図版２　岡遺跡第16次調査区・・・・・・・・・・138
Ⅵ層散礫、SI1、SI2、SI3、SI4、
SP2焼土検出、SP1・2・3完掘

図版３　岡遺跡第16次調査区・・・・・・・・・・139
SP4~8完掘、SP9、SI5、SI6、SI7、
Ⅱ層下段完掘、SE2完掘、SC3完掘

図版４　岡遺跡第16次調査区・・・・・・・・・・140
後期旧石器時代石器

図版５　岡遺跡第16次調査区・・・・・・・・・・141
炉穴(第２群)出土遺物、縄文早期土器、
縄文早期石器30~60

図版６　岡遺跡第16次調査区・・・・・・・・・・142
縄文時代早期石器61~76、陶磁器

図版７　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・143
調査区全景、調査区、作業風景

図版８　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・144
土層断面、散礫、SI1、SI1完掘、SI2~4
SI5~7、SI5~7配石

図版９　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・145
SI8、SI9、SI10･11、SI12~22、
SI12~SI22完掘

図版10　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・146
SI12~SI22配石、SI24、SI24配石、
SI23･SI24完掘、SI25、SI26~SI28、
SI26~SI28配石・SI26~SI28完掘

図版11　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・147
SI29、SI30、SI31･SI32、SI31･SI32完掘、
SI33、SI34、SI35、SI36

図版12　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・148
SI37~SI40、SP1完掘、SC1、SZ1、
埋納土坑出土遺物

図版13　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・149
SZ1土層断面図、SZ1完掘、SE1、SE1･竪穴状遺構

図版14　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・150
旧石器時代石器、縄文時代早期石器(1)~(5)

図版15　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・151
縄文時代早期石器(６)~(13)

図版16　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・152
縄文時代早期石器(14)・(15)、縄文時代早期土器

図版17　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・153
縄文時代晩期土器、SZ1埋納土抗出土遺物(1)～(2)

図版18　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・154
弥生土器(１)~(８)

図版19　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・155
弥生土器(９)~(14)

図版20　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・156
弥生土器(15)~(21)

図版21　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・157
弥生土器(22)~(29)

図版21　馬込遺跡第２地点・・・・・・・・・・158
弥生土器(30)~(37)、青磁、竪穴状遺構出土台石

# 第Ⅰ章　はじめに

## 第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点として大分・宮崎両県の東海岸部を経由し鹿児島県鹿児島市に至る総延長436㎞の自動車専用道路である。宮崎県内では延岡～清武間が平成元年２月に基本計画決定されて以降、平成13年３月に西都～清武間、平成22年７月に高鍋～西都間、平成22年12月に門川～日向間の供用が開始されている。現在、上記を除く各区間において、有料道路方式と新直轄方式の併用により、道路建設事業が進行中である。

岡遺跡・馬込遺跡が所在する日向市は東九州自動車道の日向～都農間に含まれ、平成９年３月に整備計画区間（門川～西都間）が決定された。平成10年12月には門川～都農間34㎞について施行命令が発令され、事業が本格化している。

宮崎県教育委員会では、国の補助を得て、平成３年度に西都～清武間、平成６年度に延岡～西都間及び延岡道路、平成９年度に清武～日南間を対象とした広域的な分布調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地の周知化を図るとともに各区間に関する路線協議を進めた。平成17年度には、日向～都農間の計画路線19.7㎞区間を対象として、更に詳細な分布調査を実施し、306,700㎡の調査対象面積を道路公団（現西日本高速道路株式会社）に提示した。その後、暫定二車線化や工法変更による対象面積の変更等協議を重ねた結果、道路建設によって影響を受ける32遺跡261,400㎡について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。平成20年７月には西日本高速道路株式会社九州支社長と宮崎県知事の間で『埋蔵文化財発掘調査協定書』が締結され、同年から調査に着手し、平成25年３月末で調査は全て終了した。

岡遺跡は調査対象面積が40,000㎡と広く、用地買収や家屋移転等の関係から全面的な調査は不可能であったため、ある程度まとまった面積が確保できた時点で、細切れに調査を実施している。平成22年１月に第１次調査を開始し、平成24年５月の第17次調査で全ての調査を終了している。

馬込遺跡の第１地点と第２地点は高速道路の工事状況や用地買収の状況に応じて細切れに調査を実施した。第１地点は平成22年５月に第１次調査を開始し、平成24年11月までに調査を終了している。第２地点は平成24年11月に第１次調査を開始し、平成25年３月までに調査を終了している。馬込遺跡第２地点第２次調査の終了にともない、東九州自動車道（日向～都農間）の遺跡の発掘調査のすべてを終了した（第１図、第１表）。

なお平成24年度に行われた調査の詳細については、第４節を参照されたい。

## 第２節　調査の組織

岡遺跡の調査・整理報告作成に係る組織については、平成23年度に刊行された『宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第212集』「岡遺跡第Ⅲ章」、平成24年度に刊行された『宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第223集』「岡遺跡第Ⅰ章第２節」において第15次調査までの組織を明記している。

ここでは、平成24年度の第16次調査、第17次調査及び馬込遺跡の組織を示す。

事業主体　　西日本高速道路株式会社
調査主体　　宮崎県教育委員会
　教育長　　飛田　洋　（平成24･25年度）
　教育次長　　高原みゆき（平成24･25年度）
　　長濱美津哉（平成24年度）
　　山本真司　（平成24年度）
　　西立野康弘（平成25年度）
　　中野通彦　（平成25年度）
事業調整　　宮崎県教育庁文化財課
　文化財課長　　田方浩二　（平成24･25年度）
　課長補佐　　壹岐　進　（平成24･25年度）
　主幹兼埋蔵文化財担当リーダー
　主幹　　谷口武範　（平成24･25年度）
　主査　　今塩屋毅行（平成24･25年度）
調査実施　　宮崎県埋蔵文化財センター
　所長　　北郷恭道　（平成24年度）
　　向井大蔵　（平成25年度）

副所長　　佐々木真司（平成24年度）
　　長津宗重　（平成25年度）
総務課長　　坂上恒俊　（平成24･25年度）
調査第一課長　　長津宗重　（平成24･25年度）
総務担当リーダー
　副主幹　　高園寿恵　（平成24･25年度）
調査第一担当リーダー
　主幹　　飯田博之　（平成24･25年度）

**岡遺跡**

（第16次調査）
調査第一課　調査第一担当
　主任主事　　二方和也　（平成24年度）
　主事　　大嶋昭海　（平成24年度）
　主査　　日髙広人　（平成24年度）

（第17次調査）
調査第一課　調査第一担当
　主査　　新谷　清　（平成24年度）
　主事　　中川みな子（平成24年度）
　主査　　日髙広人　（平成24年度）

**馬込遺跡第１地点**

（第４次調査）
調査第一課　調査第一担当
　主査　　新谷　清　（平成24年度）
　主査　　竹下昭彦　（平成24年度）

**馬込遺跡第２地点**

（第１次調査）
　主査　　日髙広人　（平成24年度）
　主査　　松浦朋彦　（平成24年度）

（第２次調査）
　主査　　新谷　清　（平成24年度）
　主事　　大嶋昭海　（平成24年度）
　主査　　竹下昭彦　（平成24年度）
　主査　　日髙広人　（平成24年度）

（整理作業及び報告書作成）
　主任主事　　二方和也　（平成24･25年度）
　主査　　新谷　清　（平成24･25年度）
　主事　　大嶋昭海　（平成24年度）
　主査　　日髙広人　（平成24年度）
　主査　　柳田晴子　（平成24年度）
　主幹　　飯田博之　（平成25年度）
　主査　　橋本英俊　（平成25年度）
　主査　　松浦朋彦　（平成25年度）
　主事　　沖野　誠　（平成25年度）

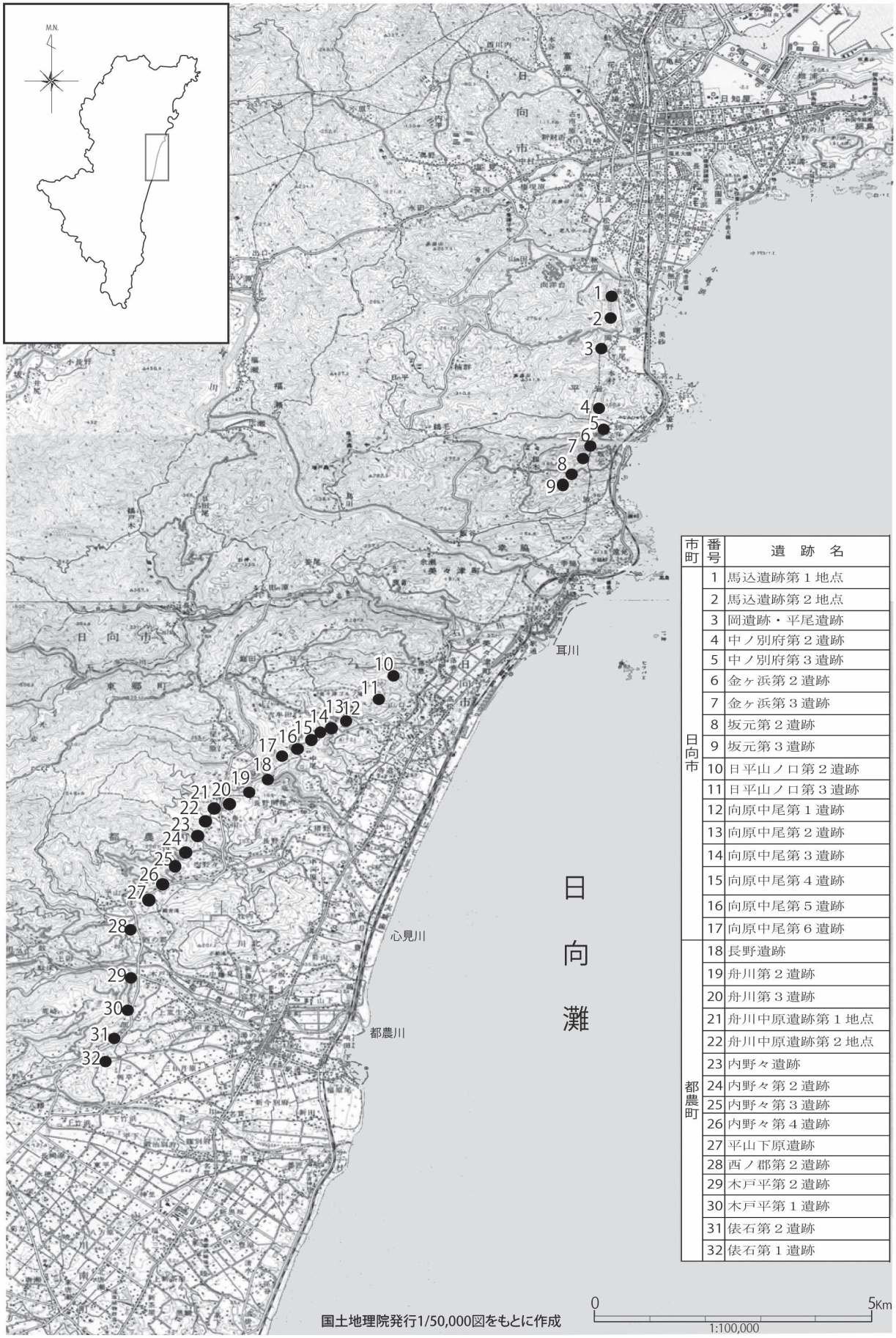
## 第３節　遺跡の位置と環境

### 3-1. 地理的環境

岡遺跡･馬込遺跡は、日向市大字平岩に所在する。日向市は宮崎県の北東部に位置し、東は日向灘を臨み、西は九州山地が海岸近くまで迫る起伏に富んだ地形を呈する。海岸線の多くは出入りの多い沈水海岸の様相を呈しており、美々津や細島など、古くから良港として利用されている。現在の日向市街地が広がる日知屋から財光寺付近の低地は、中央を東流する塩見川による開析や完新世の海成沖積等によって形成されたもので、財光寺には小倉ヶ浜と平行する数条の自然堤防がみられる。この沖積低地を取り囲むように迫る沈水型山麓線の裾部には狭小な海岸段丘がみられる。市内の大部分を山地が占め、海岸線の直近まで迫り、平野や扇状地は極端に狭く散在的である。陸地の基盤にあたるのは、主に四万十累層群と尾鈴山酸性岩類である。日向層群は、それまで海底にあったものが新生代古第３紀～新第３紀にかけて陸地化したもので、砂岩、泥岩、頁岩から構成されている。一方、尾鈴山酸性岩類は、流紋岩、石英斑岩、凝灰岩等の特徴を示しており、日向岬一帯～耳川北域の海岸線では波蝕を受けた柱状節理を見ることができる。この２つの基盤は、東郷地区の坪谷から塩見地区の坪谷川、耳川、塩見川南岸に続く遠見山断層線によって分かれ、この断層の北部が四万十累層群、南部は尾鈴山酸性岩類であり、岡遺跡・馬込遺跡が所在する平岩地区は、断層よりも南部に位置している。

岡遺跡は、標高約20ｍ～30ｍの海岸段丘上に立地しており、遺跡の南側には吉野川の支流である高森川が遺跡を横切るように流れている。

馬込遺跡は東側に日向灘を望み、北の赤石川や南の馬込川に挟まれた場所に位置しており、標高179.7ｍの山塊から南東に派生する標高約52ｍの丘陵上と北側の平坦地により構成された遺跡である。

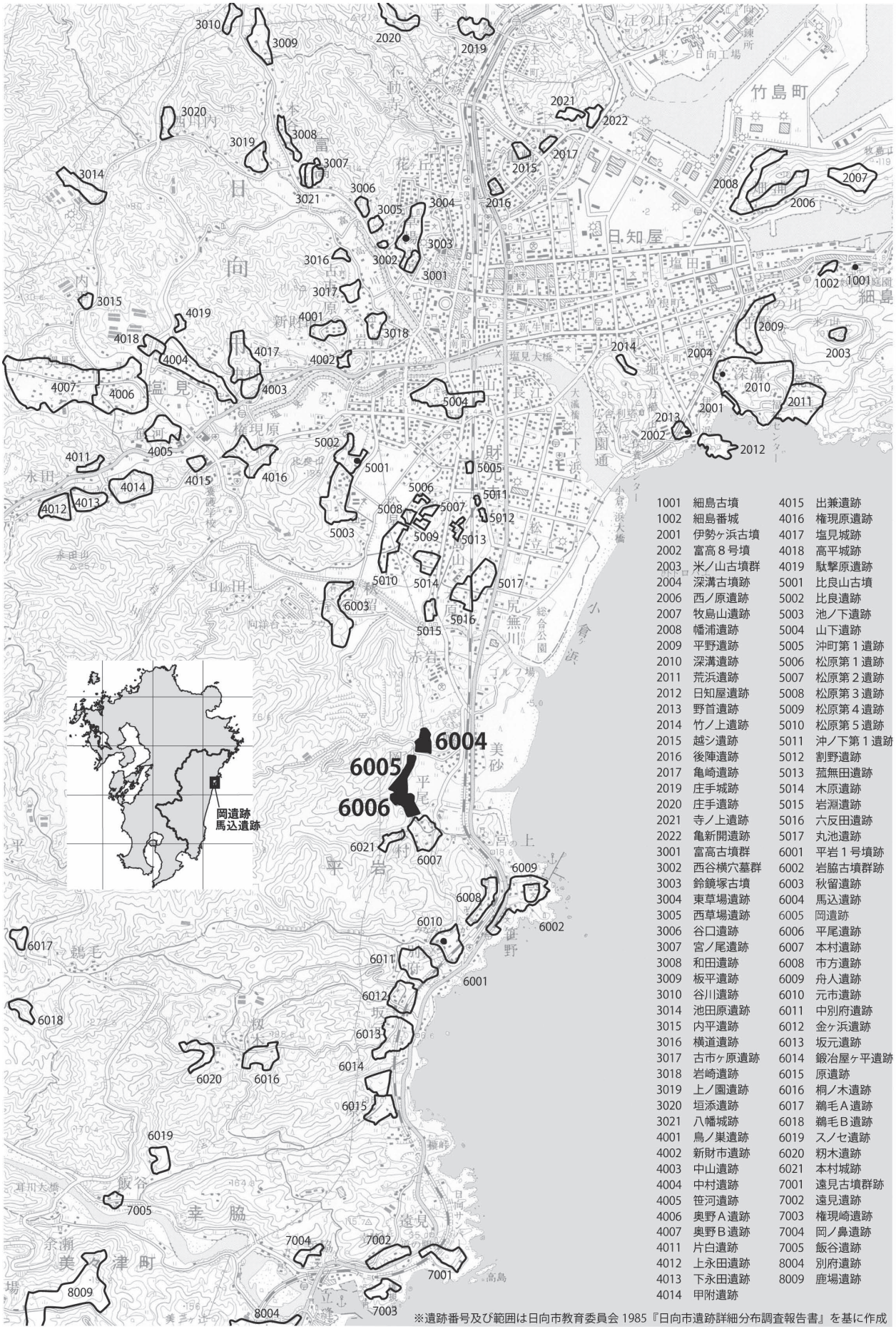



| 市町 | 番号 | 遺　跡　名 |
|---|---|---|
| 日向市 | 1 | 馬込遺跡第１地点 |
| | 2 | 馬込遺跡第２地点 |
| | 3 | 岡遺跡・平尾遺跡 |
| | 4 | 中ノ別府第２遺跡 |
| | 5 | 中ノ別府第３遺跡 |
| | 6 | 金ヶ浜第２遺跡 |
| | 7 | 金ヶ浜第３遺跡 |
| | 8 | 坂元第２遺跡 |
| | 9 | 坂元第３遺跡 |
| | 10 | 日平山ノ口第２遺跡 |
| | 11 | 日平山ノ口第３遺跡 |
| | 12 | 向原中尾第１遺跡 |
| | 13 | 向原中尾第２遺跡 |
| | 14 | 向原中尾第３遺跡 |
| | 15 | 向原中尾第４遺跡 |
| | 16 | 向原中尾第５遺跡 |
| | 17 | 向原中尾第６遺跡 |
| 都農町 | 18 | 長野遺跡 |
| | 19 | 舟川第２遺跡 |
| | 20 | 舟川第３遺跡 |
| | 21 | 舟川中原遺跡第１地点 |
| | 22 | 舟川中原遺跡第２地点 |
| | 23 | 内野々遺跡 |
| | 24 | 内野々第２遺跡 |
| | 25 | 内野々第３遺跡 |
| | 26 | 内野々第４遺跡 |
| | 27 | 平山下原遺跡 |
| | 28 | 西ノ郡第２遺跡 |
| | 29 | 木戸平第２遺跡 |
| | 30 | 木戸平第１遺跡 |
| | 31 | 俵石第２遺跡 |
| | 32 | 俵石第１遺跡 |

**第１図　東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図**

# 第１表　東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡一覧表

| 市町 | 番号 | 遺　跡　名 | 所　在　地 | 遺跡面積（㎡） | 調査面積（㎡） | 年度 | 種別 | 主な遺構・遺物の年代 | 調査期間 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 日向市 | 1 | 馬込遺跡第１地点 | 日向市大字平岩字馬込・字清水ノ元 | 7,900 | 130 | 22 | １次 | ― | H22. 5.17～H22. 5.21 |
| | | | | | 70 | 22 | ２次 | | H22.12.20 |
| | | | | | 150 | 23 | ３次 | | H23.11.21～H23.11.22 |
| | | | | | 30 | 24 | ４次 | | H24.11.12～H24.11.13 |
| | 2 | 馬込遺跡第２地点 | 日向市大字平岩字馬込 | 1,800 | 200 | 24 | １次 | 縄文［早・晩］、弥生〔終末〕 | H24.11.12～H24.11.21 |
| | | | | | 1,600 | 24 | ２次 | | H24.12.17～H25. 3.29 |
| | 3 | 岡遺跡<br>平尾遺跡 | 日向市大字平岩字岡・字谷口・字三拾歩・字平尾 | 40,000 | 140 | 21 | １次 | 旧石器、縄文［早・晩］、弥生、古代、近世 | H22. 1.14～H22. 1.15 |
| | | | | | 120 | 21 | ２次 | | H22. 2.16～H22. 2.18 |
| | | | | | 400 | 21 | ３次 | | H22. 3.10～H22. 3.11 |
| | | | | | 100 | 22 | ４次 | | H22. 6. 7～H22. 6. 8 |
| | | | | | 60 | 22 | ５次 | | H22. 6. 7～H22. 6. 9 |
| | | | | | 1,870 | 22 | ６次 | | H22. 7. 7～H23. 2.25 |
| | | | | | 3,560 | 22 | ７次 | | H22. 7.20～H22.11.19 |
| | | | | | 100 | 23 | ８次 | | H22.12.21～H22.12.22 |
| | | | | | 2,580 | 23 | ９次 | | H23. 5. 9～H23.11. 7 |
| | | | | | 60 | 23 | 10次 | | H23. 6.22 |
| | | | | | 150 | 23 | 11次 | | H23. 7. 6～H23. 7. 8 |
| | | | | | 20 | 23 | 12次 | | H23. 8. 1～H23. 8. 3 |
| | | | | | 1,230 | 23 | 13次 | | H23. 8.29～H23.11.28 |
| | | | | | 100 | 23 | 14次 | | H23. 9. 6～H23. 9. 7 |
| | | | | | 1,000 | 23 | 15次 | | H23. 9.26～H23.12.27 |
| | | | | | 1,000 | 24 | 16次 | | H24. 4. 9～H24. 8.10 |
| | | | | | 120 | 24 | 17次 | | H24. 5. 8 |
| | 4 | 中ノ別府第２遺跡 | 日向市大字平岩字コウ地 | 200 | 60 | 21 | １次 | ― | H21.12.16 |
| | 5 | 中ノ別府第３遺跡 | 日向市大字平岩字ミコノ子 | 1,900 | 80 | 22 | １次 | ― | H22. 9.29 |
| | 6 | 金ヶ浜第２遺跡 | 日向市大字平岩字金ヶ浜・字加原 | 300 | 30 | 21 | １次 | 旧石器、縄文、古墳以降 | H21.12.15 |
| | | | | | 10 | 22 | ２次 | | H22. 5.25 |
| | 7 | 金ヶ浜第３遺跡 | 日向市大字平岩字加原 | 200 | 25 | 21 | １次 | ― | H21.12.15 |
| | | | | | 16 | 22 | ２次 | | H22.11. 1 |
| | 8 | 坂元第２遺跡 | 日向市大字平岩字ナガソ・字中高鳥 | 2,000 | 10 | 21 | １次 | 縄文［早］、弥生、古墳 | H21.12.14 |
| | | | | | 5 | 22 | ２次 | | H22. 5.26 |
| | | | | | 300 | 23 | ３次 | | H23. 4.25～H23. 6. 3 |
| | 9 | 坂元第３遺跡 | 日向市大字平岩字中高鳥 | 200 | 75 | 21 | １次 | ― | H21.12.14 |
| | | | | | 15 | 22 | ２次 | | H22. 9.30 |
| | 10 | 日平山ノ口第２遺跡 | 日向市東郷町山陰字日平 | 1,600 | 25 | 20 | 県調査分 | | H20.11. 5～H20.11.10 |
| | 11 | 日平山ノ口第３遺跡 | 日向市東郷町山陰字日平 | 4,300 | 10 | 20 | 県調査分 | | H21. 3. 4～H21. 3.19 |
| | 12 | 向原中尾第１遺跡 | 日向市東郷町山陰字山ノ口 | 9,300 | 140 | 20 | １次 | 旧石器、縄文［晩］、弥生、古墳、近世 | H20.12.16～H21. 1. 6 |
| | | | | | 1,025 | 22 | ２次 | | H22. 6.28～H22.12.24 |
| | 13 | 向原中尾第２遺跡 | 日向市東郷町山陰字山ノ口 | 2,400 | 120 | 22 | １次 | 旧石器、縄文［早］、弥生 | H22. 6.21～H22. 7. 6 |
| | | | | | 1,200 | 22 | ２次 | | H22. 9. 2～H22.12.28 |
| | | | | | 500 | 24 | ３次 | | H24. 6.11～H24. 9.11 |
| | 14 | 向原中尾第３遺跡 | 日向市東郷町山陰字山ノ口・字向ヲ原 | 6,500 | 280 | 20 | １次 | 弥生、古墳 | H20.12. 2～H20.12.15 |
| | 15 | 向原中尾第４遺跡 | 日向市東郷町山陰字山ノ口 | 11,000 | 190 | 20 | １次 | 旧石器、縄文［早］ | H20.11.17～H20.12. 1 |
| | | | | | 60 | 21 | ２次 | | H21. 8. 5～H21. 8.31 |
| | | | | | 5,430 | 22 | ３次 | | H22. 4.26～H22.12.28 |
| | 16 | 向原中尾第５遺跡 | 日向市東郷町山陰字山ノ口 | 2,100 | 15 | 20 | 県調査分 | 旧石器、縄文［早］、弥生、古墳 | H20.11.17～H20.12. 1 |
| | | | | | 430 | 24 | １次 | | H24. 6.27～H24.10. 5 |
| | 17 | 向原中尾第６遺跡 | 日向市東郷町山陰字山ノ口 | 2,300 | 200 | 24 | １次 | 旧石器、縄文［早］ | H24. 6.11～H24. 9.10 |
| 都農町 | 18 | 長野遺跡 | 都農町大字川北字境谷 | 8,400 | 100 | 23 | １次 | 旧石器、縄文［早］、弥生 | H23. 3. 1～H23. 3. 4 |
| | | | | | 4,500 | 24 | ２次 | | H23. 5. 9～H23.11.21 |
| | 19 | 舟川第２遺跡 | 都農町大字川北字境谷・字舟川 | 10,600 | 270 | 21 | １次 | 旧石器、縄文［早］ | H21. 8. 5～H21. 9. 9 |
| | | | | | 3,000 | 21 | ２次 | | H21.10.26～H22. 3.12 |
| | | | | | 1,400 | 22 | | | H22. 4.14～H22. 8.20 |
| | | | | | 750 | 23 | ３次 | | H23. 9. 9～H24. 3. 9 |
| | 20 | 舟川第３遺跡 | 都農町大字川北字舟川 | 16,800 | 360 | 22 | １次 | 縄文［晩］、弥生 | H22. 5. 6～H22. 5.28 |
| | 21 | 舟川中原遺跡第１地点 | 都農町大字川北字舟川中原 | 2,600 | 15 | 22 | １次 | 旧石器、縄文［早］ | H22. 4.20～H22. 4.21 |
| | | | | | 215 | 23 | ２次 | | H23. 5. 9 |
| | 22 | 舟川中原遺跡第２地点 | 都農町大字川北字舟川中原・字舟川尾立 | 5,000 | 70 | 20 | １次 | 旧石器、縄文、近世 | H21. 1.15～H21. 1.27 |
| | | | | | 45 | 21 | ２次 | | H21. 9. 8～H21. 9.10 |
| | 23 | 内野々遺跡 | 都農町大字川北字内野後原・字西尾立・字榎谷 | 14,700 | 4,700 | 21 | １次 | 縄文［早・中・後］、弥生 | H21. 6. 5～H22. 1. 7 |
| | | | | | 20 | 22 | ２次 | | H22. 4.23～H22. 4.26 |
| | 24 | 内野々第２遺跡 | 都農町大字川北字内野後原 | 6,300 | 10 | 20 | 県調査分 | 旧石器、縄文［早・後］ | H21. 1.13～H21. 1.14 |
| | | | | | 1,410 | 21 | １次 | | H21.12. 7～H22. 1.25 |
| | 25 | 内野々第３遺跡 | 都農町大字川北字西尾立 | 2,700 | 280 | 22 | １次 | 縄文、弥生、古墳 | H22. 5.17～H22. 5.24 |
| | 26 | 内野々第４遺跡 | 都農町大字川北字宮原 | 2,200 | 20 | 20 | 県調査分 | 旧石器、縄文［早・前］、弥生、古墳 | H21. 1.15～H21. 1.23 |
| | | | | | 900 | 21 | １次 | | H21. 5.11～H22. 1. 7 |
| | 27 | 平山下原遺跡 | 都農町大字川北字下原・字寺下 | 18,900 | 400 | 20 | １次 | 旧石器、縄文［早］ | H20.11.25～H20.12.12 |
| | | | | | 6,680 | 21 | ２次 | | H21. 6. 8～H22. 2. 8 |
| | | | | | 910 | 22 | ３次 | | H22. 5.24～H22. 7.23 |
| | 28 | 西ノ郡第２遺跡 | 都農町大字川北字西ノ郡 | 18,800 | 150 | 20 | １次 | 旧石器 | H20.11.17～H20.11.21 |
| | | | | | | | | | H21. 1.28～H21. 2. 2 |
| | | | | | 520 | 21 | ２次 | | H21. 7.16～H21. 8. 4 |
| | 29 | 木戸平第２遺跡 | 都農町大字川北字木戸ノ平 | 8,400 | 40 | 20 | １次 | 旧石器、縄文［早］、弥生、古墳 | H21. 1. 6～H21. 1.14 |
| | | | | | 760 | 21 | ２次 | | H21. 7.13～H21. 9. 2 |
| | | | | | 1,280 | 21 | ３次 | | H21.10.13～H22. 1.18 |
| | | | | | 800 | 22 | ４次 | | H22.10.18～H23. 1.31 |
| | 30 | 木戸平第１遺跡 | 都農町大字川北字木戸ノ平・字荒崎平・字馬場口・字瓜生尾立 | 29,500 | 500 | 20 | １次 | 旧石器 | H20.12.15～H20.12.25 |
| | | | | | 300 | 21 | ２次 | | H21. 7. 1～H21. 7.15 |
| | 31 | 俵石第２遺跡 | 都農町大字川北字俵石 | 10,000 | 60 | 21 | １次 | 旧石器、縄文［早］ | H21. 6.16～H21. 7.14 |
| | | | | | 3,320 | 22 | ２次 | | H22. 4.12～H23. 2.17 |
| | 32 | 俵石第１遺跡 | 都農町大字川北字湯牟田 | 12,500 | 2,445 | 20 | １次 | 旧石器、縄文［早］、弥生 | H20.11. 4～H21. 3.31 |
| | | | | | 9,000 | 21 | | | H21. 4. 1～H21.11. 2 |
| | | | | | 255 | 22 | ２次 | | H22.11. 1～H22.12.24 |




第２図　岡遺跡・馬込遺跡及び周辺遺跡分布図（1:50,000）

### 3-2. 歴史的環境

岡遺跡･馬込遺跡が所在する旧日向市域では、細島地区１、日知屋地区17、富高地区18、塩見地区18、財光寺地区17、平岩地区21、幸脇地区５、美々津地区20の合計117 遺跡が確認されている（第２図）。

**後期旧石器時代**

平岩地区には、後期旧石器時代の遺跡は５箇所確認されている。標高20mの海岸段丘上に位置している中別府遺跡では、小型のナイフ形石器が出土している。本市で出土した石器の石材の多くは、本県の五ヶ瀬川流域から採取される無斑晶流紋岩や大分県姫島産黒曜石などが使われており、この時期から既に大分県との交流が行われていたことを窺わせる。また、岡遺跡（第９次調査）では、日向市内で３例目となるAT層下位の石器が確認されている。石器の量は多くないものの当該時期に生活の場または狩猟の場として利用された可能性を示唆する。

**縄文時代**

平岩地区では、縄文時代の遺跡は10箇所で確認されており、その多くが海岸段丘上に位置している。金ヶ浜遺跡は、２基の集石遺構が無文土器を伴う層から検出され、中別府遺跡では、塞ノ神式土器が出土している。平岩地区の南に隣接する幸脇地区の権現崎遺跡では、押型文土器が出土し、７基の集石遺構が円弧を描くように検出され、その中心付近から柱状岩が立った状態で出土している。

後期から晩期になると、本市内では遺跡数が増加する傾向にあるが、集落跡の発見例は未だなく、東草場遺跡で円形プランの竪穴建物跡が１軒検出されているのみである。

**弥生時代**

平岩地区では、中別府遺跡で中期の下城式とみられる甕形土器が出土しているのみである。この他、秋留、馬込、本村、坂元、原、鵜毛Bなどの遺跡が散布地として知られている。隣接する財光寺地区では、松原第３～第５遺跡では表採ではあるが、方形石庖丁が確認されている。

**古墳時代**

市内には、28基の古墳が確認されていたが、多くが滅失している。６基あったとされる前方後円墳についても１基を残すのみである。

平岩地区においては、平岩小中学校の敷地に旧県指定岩脇２号墳～７号墳が所在し、そこから南西約１kmに１号墳がある。いずれも墳丘の大部分を失っているが、これらのうち５基が前方後円墳であったとされている。２号墳からは鉄剣、鉾身、刀子が出土している。隣接する幸脇地区には、旧県指定岩脇８号墳～11号墳があり、いずれも円墳であったとされている。10号墳とみられる墳丘跡から６世紀後半～末の須恵器壷と提瓶を採集している。この他、近隣には、財光寺地区の比良山古墳があり、５世紀後半～６世紀初頭とみられる須恵器の高坏を採集している。

**古代**

布痕土器が、本市内において越シ遺跡、岩州遺跡、岡遺跡（第６・７・９次調査）から出土している。本市内には『延喜式』に記載された西海道のルートが通っていたとされ、周辺には刈田、美弥といった駅の想定地があり、美弥駅が美々津に比定されている。平岩地区は、刈田～美弥間に所在しており、官道のルートは、おおむね現在の旧国道10号線沿いを通っていたとも言われているが、はっきりとはしていない。官道の構造を考慮すると、上記遺跡が地図上で直線的に結ばれることは、その可能性を窺わせる。また、地区内には官道関連地名として、坂ノ下、馬込、峠、馬溝等の地名がみられる。

**中世**

市内には、伊東氏48城の一つである日知屋城、門川城とともに「日向三城」と呼ばれた塩見城跡や中山遺跡があり、中世の掘立柱建物跡や輸入陶磁器等が確認されている。

平岩地区には、本村城が所在し、現在も残る本村という地名から、かつて平岩の中心地であったともされている。本村城は、丘陵の先端付近を削平し、３箇所の曲輪を設け、３つの堀切を刻んでいるが、周辺との比高差は大きくない。この本村城跡の約200m東には、曹洞宗幸福寺が所在し、文禄５(1595)年に松葉源之丞景守が創建した古刹と伝えられている。平岩地区では、この他に秋留城、籾木

ノ城の城跡がある。

**近世**

近世の遺跡は調査例が少なく、詳細は不明であるが、岡遺跡（第７・９・13次調査）では、中世または近世と思われる掘立柱建物跡が９棟検出されており、柱穴の埋土からは青花皿や青磁碗の小片、備前焼、洪武通寶や寛永通寶といった銭貨が出土している。現在の日向市域は、江戸時代初期に県藩（延岡藩）に属していたが、元禄３(1690)年に発生した山陰・坪屋村百姓逃散一揆による政道不行届を問われ、藩主有馬氏が元禄５(1692)年に越前国糸魚川に転封になった。それにともない、日向市域のほとんどが幕府領となり、以後、幕府直轄の代官所支配を受けて幕末に至っている。

〈参考・引用文献〉

宮崎県　1987　『土地分類基本調査』　「日向」

宮崎県埋蔵文化財センター2004『中山遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第93集

宮崎県埋蔵文化財センター2013『岡遺跡（第９・13・15次調査）』

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第223集

日向市教育委員会1985『日向市遺跡詳細分布調査報告書』

日向市史編さん委員会2006『日向市史　自然編』日向市

日向市史編さん委員会2009『日向市史　資料編』日向市

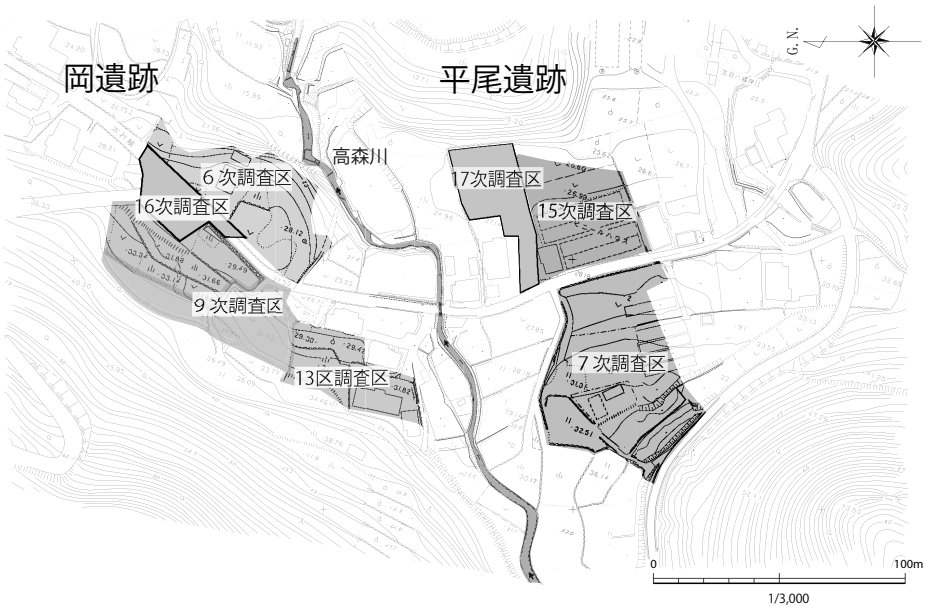
日向市史編さん委員会2010『日向市史　通史編』日向市

## 第４節　調査の概要

**岡遺跡**

岡遺跡は全体の調査対象面積が40,000㎡を測る。調査面積を確定するため、用地交渉がまとまった箇所から発掘調査を随時行うこととなった。第１～３次調査は平成21年度に実施し、平成22年度に第１次調査が第６次調査として継続された。第４～８次調査は平成22年度に行われ、第５次調査が第７次調査として継続された。平成23年度には第９～15次調査が行われ、第11次調査が第13次調査として、第12次調査が第15次調査として継続された。以下、平成24年度に調査された第16次調査、第17次調査の概要について述べる。

第16次調査は、第６次調査、第９次調査に隣接し、平成24年４月９日から平成24年８月10日まで1,000㎡を対象に調査を実施した。第９次調査の結果から、もともと緩やかな斜面地であったところを畑や道路とするために大きく改変したことが明らかになった。層序は近接する調査区と同様の傾向であったが、大きく削平されていた道路下では上層のほとんどが残存していない状況であった。調査区内からは後期旧石器時代や縄文時代早期の遺構・遺物を確認した。詳細については、第Ⅱ章で記述する。




第３図　岡遺跡・平尾遺跡調査区

第17次調査区は、第15次調査区に隣接しており、平成24年５月８日、調査対象面積965㎡を調査した。調査区は直前まで、宅地として利用されていたため、表土には木屑や瓦などが散在していた。調査では隣接する第15次調査区の遺構・遺物の確認状況から、トレンチを東側を中心に５本、西側に２本の計７本設定し、土層堆積状況や遺構・遺物の有無を確認しながら、重機による掘削を行った。層序はⅠ層からⅩⅣ層に分けられ、土層堆積状況から西側から東側に向けて傾斜する起伏のある地形であると考えられた。いずれのトレンチでも遺構・遺物が確認できず、第15次調査で認められるような包含層も確認できなかったため調査を終了した。

なお、例言でも述べたとおり岡遺跡は高森川を挟んで字名が岡である岡遺跡と字名が谷口と平尾である平尾遺跡とに分けられる。以下にこれまで行ってきた岡遺跡の各調査と岡遺跡・平尾遺跡との対照表を記す。

### 第２表　調査別遺跡対照表

| | 岡遺跡 | 平尾遺跡 |
|---|---|---|
| 第１次調査 | ○ | |
| 第２次調査 | ○ | |
| 第３次調査 | | ○ |
| 第４次調査 | | ○ |
| 第５次調査 | | ○ |
| 第６次調査 | ○ | |
| 第７次調査 | | ○ |
| 第８次調査 | ○ | |
| 第９次調査 | ○ | |
| 第１０次調査 | ○ | |
| 第１１次調査 | ○ | |
| 第１２次調査 | | ○ |
| 第１３次調査 | ○ | |
| 第１４次調査 | | ○ |
| 第１５次調査 | | ○ |
| 第１６次調査 | ○ | |
| 第１７次調査 | | ○ |

＊　調査の詳細について第1次調査～第８次調査までは、『宮崎県埋蔵文化財センター報告書212集』に、第９次調査～第15次調査までは、『宮崎県埋蔵文化財センター報告書223集』に掲載してある。

**馬込遺跡**

馬込遺跡第１地点、第２地点の調査対象面積は9,700㎡を測る。工事状況や用地買収等の関係から用地交渉がまとまり次第随時発掘調査を行うこととなった。以下、調査区ごとに概要を述べる。

**第１地点**

第１次調査は平成22年５月17日から平成22年５月21日まで、600㎡を対象に実施した。調査区は丘陵を削平して、平坦地となっており果樹園に造成されていた。調査区に７箇所のトレンチを設定し、重機による掘削を行い、遺跡の内容を確認した。層序はⅠ層の黒褐色土（表土）、Ⅱ層の暗褐色土（客土）、Ⅲ層の黄褐色土（地山）となっており、どのトレンチからも遺構・遺物は確認されなかった。

第２次調査は平成22年12月20日に第１次調査区の北側隣接1,800㎡を対象に実施した。調査区は丘陵の尾根部にあたる部分を切って平坦地としており、果樹園として利用されていた。調査区に東西方向３箇所のトレンチを設定し、重機による掘削を行い、遺跡の内容を確認した。層序はⅠ層の明褐色土（現耕作土）、Ⅱ層の暗褐色土、Ⅲ層の黒褐色土、Ⅳ層の黒褐色土となっており、どのトレンチからも遺構・遺物は確認されなかった。

第３次調査は平成23年11月21日から翌22日まで、3,000㎡を対象に実施した。調査区は西から東に向かっている傾斜地を造成して段々畑として利用されていた。調査区に12箇所のトレンチを設定し、重機による掘削を行い、遺跡の内容を確認した。層序はⅠ層の表土、Ⅱ層の明褐色土、Ⅲ層の黒色土、Ⅳ層の明褐色土（地山）となっており、表土の下に厚い礫を含んだ土層が多く見られるなど、土層の堆積状況が悪く、どのトレンチからも遺構・遺物は確認できなかった。

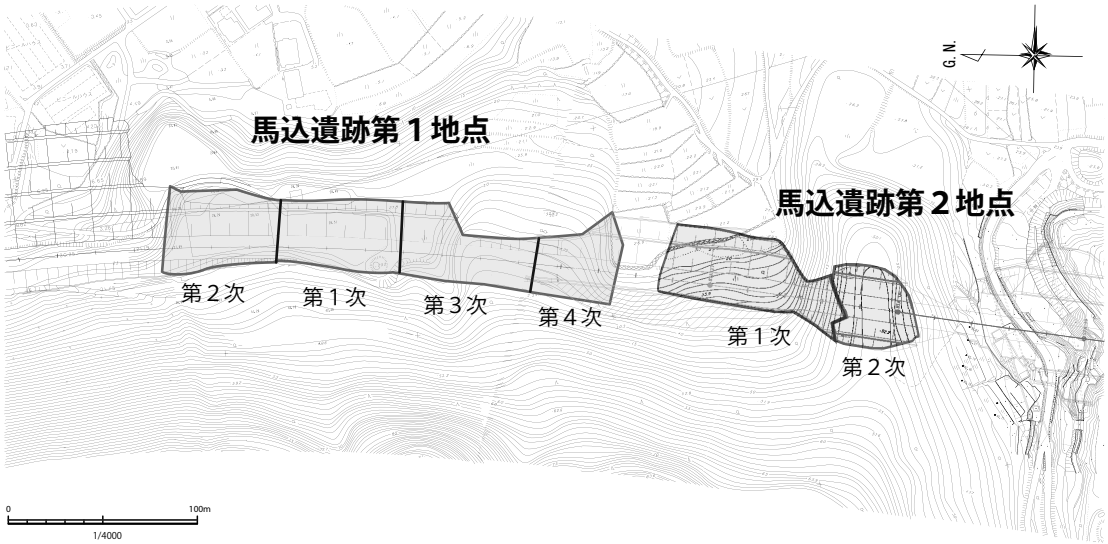
第４次調査は平成24年11月12日から翌13日まで、1,000㎡を対象に実施した。調査地点は以前、なだらかな傾斜地を造成して牛小屋が作られ、近年まで使用されていたため、西側のトレンチ付近には大量の造成土が堆積していた。調査では東側の崖下から30cmほどの鬼界アカホヤ火山灰層が確認されていたため、遺物包含層の可能性がある東側を中心に３

本、西側に１本のトレンチを設定し、重機による掘削を行い、遺跡の内容を確認した。層序はⅠ層の表土、Ⅱ層の明黄褐色土から黄褐色土、Ⅲ層の黒褐色土、Ⅳ層の黒色土となっている。どのトレンチからもⅠ層（表土）とⅢ層（黒褐色土）が確認され、鬼界アカホヤ火山灰層（Ⅱ層）は２箇所のトレンチから確認されたものの遺構・遺物は確認されなかった。

**第２地点**

第１次調査は平成24年11月12日から平成24年11月21日まで、1,800㎡を対象に調査を行った。この調査区は標高49.6ｍの丘陵上の一角にあり、調査区に18箇所のトレンチを設定し、重機及び人力により掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。層序はⅠ層の表土、Ⅱ層の盛土、Ⅲ層の鬼界アカホヤ火山灰二次堆積層、Ⅳ層の暗褐色土、Ⅴ層の黒褐色土、Ⅵ層の黄橙色粘質土、Ⅶ層の明黄橙色粘質土から黄橙色粘質土、Ⅷ層の岩盤層（地山）となっていた。Ⅲ層部分は調査区の西側一帯のみに残存しており、その下のⅣ層上面では散礫が露出する状況であった。調査区の東側では表土を剥ぐとすぐにⅣ層からⅤ層となり、その下は地山層（Ⅶ層～Ⅷ層）となっていた。この調査では８箇所のトレンチ内から縄文時代早期と考えられる土坑や散礫があり、散礫下からは多数の集石遺構が検出された。また、これらのトレンチから石鏃や剥片、縄文土器片などの遺物も多数出土したため、第２次調査として継続することになった。

第２次調査は平成24年12月17日から平成25年３月29日まで、1,600㎡を対象に実施した。第１次調査時に西側から多数の遺物が出土していたことから、西側を中心に重機及び人力により掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査区からは旧石器時代から中世までの遺構・遺物が確認された。詳細については第Ⅲ章で記述する。




第４図　馬込遺跡調査区

第５図　岡遺跡・馬込遺跡及び周辺地形図

# 第Ⅱ章　岡遺跡（第16次調査）の成果

## 第１節　調査の方法と経過

### 1-1. 発掘調査の方法と経過

本調査は、平成24年４月９日から平成24年８月10日まで実施した。調査対象面積は1,000㎡である。

本調査区は、第６次調査区と第９次調査区との隣接地点にあたることから、後期旧石器時代・縄文時代早期を中心とした遺跡が想定された。

調査は、第９次調査区の東側にあたる斜面地、市道本村線下、市道本村線から山へと分岐する山道入口について堆積状況や地形の様子等を考慮しながら段階的に行っていった。斜面地は、表土であるⅠ層を重機で除去したのち上・中・下段に分け調査を行った。上・中段においては地形の改変を受けていたため堆積状況が良好ではなく、Ⅳ層からの調査となった。下段においては、作業員とともに掘削作業を行いⅡ層にて遺構を検出した。精査の結果、溝状遺構２条、土坑１基、多数の小穴を検出した。その後、斜面地全体をⅣ層上面にて精査し掘削を進めていき、散礫、集石遺構、炉穴、土坑、縄文時代早期の遺物を確認した。市道本村線下、山道入口については、アスファルト下の路盤を重機で剥ぎとり精査を行った結果、大部分が削平を受けていたため、市道下はⅤ層から、山道入口はⅥ層からの調査となった。市道本村線下については、炉穴と思われる焼土と石鏃を確認したのみで、Ⅶ層上面（一部Ⅷ層上面）まで掘削を進めたが、その他の遺構・遺物は確認できず調査を終了した。山道入口については、Ⅵ層上面において散礫から礫群を確認した。

遺構については、検出面や完掘面での平面図・断面図、レベルを基本とし1/10または1/20で図化した。Ⅵ層で検出した散礫については1/20で図化し、レベルをとり点上げを行った。包含層内から出土した遺物は、トータルステーションで出土位置を記録し、取り上げた。

遺構の図化記録とともに写真記録も行った。写真記録は主として35mmモノクローム・リバーサル写真およびデジタルカメラを併用し記録した。

発掘調査の詳細については、調査日誌抄に代える。

調査日誌抄（平成24年）

0409　駐車場整備。
0410　事務所、器材庫、トイレ設置。
0412　重機による表土剥ぎ。
0416　調査区南西部で炉穴検出。
0419　作業員18名雇用開始。
0423　調査区の精査。M1Gｒ南西側山道入口付近のAT下層より微細剥離剥片出土。
0424　Ⅱ層掘削。溝状遺構検出。
0501　土坑、小穴検出。
0509　溝状遺構完掘写真の撮影。
0511　市道下北部Ⅴ層掘削。
0516　土坑、小穴完掘写真の撮影。
0518　市道下南部精査。石鏃出土。
0522　斜面地Ⅳ層散礫検出。
0523　集石遺構２基検出。
0530　山道入口精査。Tr3南壁より炉穴検出。
0604　斜面地Ⅴ層掘削。
0606　斜面地中央付近より炉穴検出。
0607　山道入口Ⅵ層上面まで掘削。
0611　山道入口より散礫、礫群検出。
0620　Tr3南側より集石遺構検出。
0621　豪雨により作業中止。
0625　集石遺構実測。
0705　山道入口の散礫、礫群実測。
0706　調査区北部（Ⅵ層）の地形図作成。
0725　第６次調査区から続くと思われる炉穴検出。
0727　調査区南部（Ⅵ層）の地形図作成。
0803　Tr1、Tr2の土層断面実測。
0808　炉穴実測。作業員雇用終了。
0810　調査終了。

### 1-2. 整理作業及び報告書作成

平成24年10月～平成25年10月の期間で整理作業を行った。水洗、注記、選別、計測等の作業を行った後、遺物台帳を作成した。平成24年10月から接合作業を行い、平成24年12月に遺物実測作業に入った。一部の遺物は拓本作業を行い、遺物実測図お

よび現場実測図はトレース作業を経て、レイアウトを行った。

報告書作成にあたっては、宮崎県埋蔵文化財センター報告書マニュアルに則って作成した。

整理作業風景（礫接合）

整理作業風景（実測）

### 1-3. 基本層序

本調査区は、1-1で述べたとおり第６次調査区と第９次調査区に隣接する地点にあたる。第９次調査区の東に接する斜面地は、調査以前は畑として利用され、近代～昭和の時期に石垣を造成するなど旧地形の改変が激しく行われていた。北東から南西に延びる市道本村線下は、アスファルト舗装時に大部分を削平されていたが、北東に向けて傾斜していたため、北東側ではⅤ層より下位の層で良好な堆積が認められた。市道本村線から分岐する山道入口は、路盤を剥ぐとⅤ層がわずかに堆積する程度であったが、Ⅵ層、Ⅶ層は北東に向かって厚く堆積していた。第９次調査区同様、第６次調査区で見られた二次堆積鬼界アカホヤ火山灰は石垣周辺のほんの一部しか残存していなかった。

旧地形としては、基本的に調査区の西側から東側に向かって緩やかに傾斜している。微地形であるため変化に富み、堆積状況も異なる様相をみせる。

基本層序を設定するにあたって、第６次調査の基本層序、第９次調査の基本層序、Tr1とTr2の壁面、調査区東側の迂回路に面した壁面を土層観察用として活用し、土層は色調、土質によりⅠ～Ⅷ層に分層した。以下、層位ごとにみていく。

Ⅰ層：　暗褐色土層（Hue10YR3/3）で表土である。

Ⅱ層：　暗褐色土層（Hue10YR3/3）で明治頃までの造成土とみられ、縄文時代から近世までの遺物を含む。

Ⅲ層：　褐色土層（Hue10YR4/6）で二次堆積した鬼界アカホヤ火山灰である。第９次調査区同様、本調査区でも南東の石垣周辺の一部にしかみられない。第６次・第13次調査区では主に縄文時代晩期の遺物が多く出土している。

Ⅳ層：　暗赤褐色土層（Hue5YR4/6）で粘土質層である。非常に粘性があり、しまりもある。３㎜以下の白色、赤橙色の岩片を多く含み、わずかに拳大の礫を含む。K3Gr、K4Gr、L2Gr、L3Grの斜面中段周辺約300㎡の範囲に堆積がみられるが、それ以外ではあまり堆積状況が良好ではない。縄文時代早期の遺物包含層。

Ⅴ層：　調査区の中でも一番堆積が厚い。粘性・含有物の違いでⅤa層、Ⅴb層に細分される。後期旧石器時代～縄文時代早期の遺物包含層。

Ⅴa層　黒褐色土層（Hue10YR2/3）で非常に粘性があり、しまりも強い。１㎝程度の礫、２㎜以下の白色、赤橙色の岩片を含む。主に縄文時代早期の遺物を含むが、堆積状況によっては後期旧石器時代の遺物も含まれる。

Ⅴb層　黒褐色土層（Hue10YR2/3）で粘性はあるもののⅤa層に比べるとやや弱いが、しまりは強い。また、小さな礫も多く含む。後期旧石器時代の遺物包含層。

Ⅵ層：　姶良Tn火山灰層（以下AT）混じり堆積層である。AT粒子の混ざり方でⅥa層、Ⅵb層に細分される。第９次調査区のⅦ層に相当する。AT上位の後期旧石器時代の遺物包含層。

Ⅵa層　黒褐色土層（Hue10YR2/2）で粘性があり、しまりもある。Ⅴ層までにみる白色、赤橙色の岩片が細かく少ない。表面を削るとシャリシャリとしAT火山灰層に黒色土が混じる。

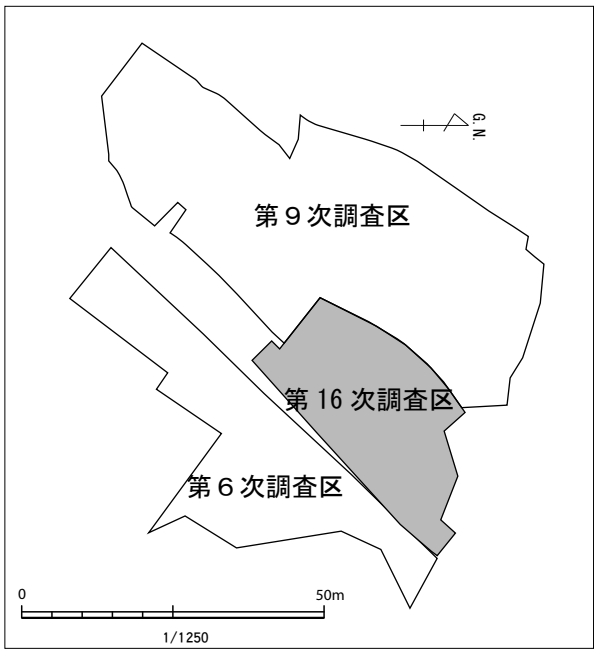
Ⅵb層　黒褐色土層（Hue10YR2/2）でしまりはあるが、粘性はあまりない。ATがブロックで確認できたがATの堆積状況は不安定である。

ブラックバンド状のブロックも堆積する。

Ⅶ層：　暗褐色土層（Hue7.5YR3/4）で粘性があり、しまりはわずかにある。５㎜程度の白色岩片を多量に含む。AT下位の遺物包含層で、第９次調査区のⅨ層に相当する。

Ⅷ層：　黄褐色土層（Hue10YR5/6）で粘土層である。下位では岩盤となる。

本遺跡は、先に述べたように第６次調査区、第９次調査区に隣接しており、堆積状況に類似性がみられることから、第６・９・16次調査区の基本層序については第６図に記す。




第９次調査区

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰ | 表土 | 縄文時代～近世 |
| Ⅱ | 黒褐色土 | 中世～近世 |
| Ⅲ | 二次堆積アカホヤ火山灰層 | 縄文時代晩期～古代 |
| Ⅳ | 黒褐色土 | 縄文時代早期 |
| Ⅴ | 黒褐色土 | 旧石器時代～縄文時代早期 |
| Ⅵ | 暗褐色土 | 旧石器時代 |
| Ⅶ | AT 火山灰を含む層 | |
| Ⅷ | 土石流層 | 無遺物層 |
| Ⅸ | 灰褐色土 | 旧石器時代 |
| Ⅹ | にぶい黄褐色 | 地山 |
| ⅩⅠ | 明黄褐色 | 地山 |

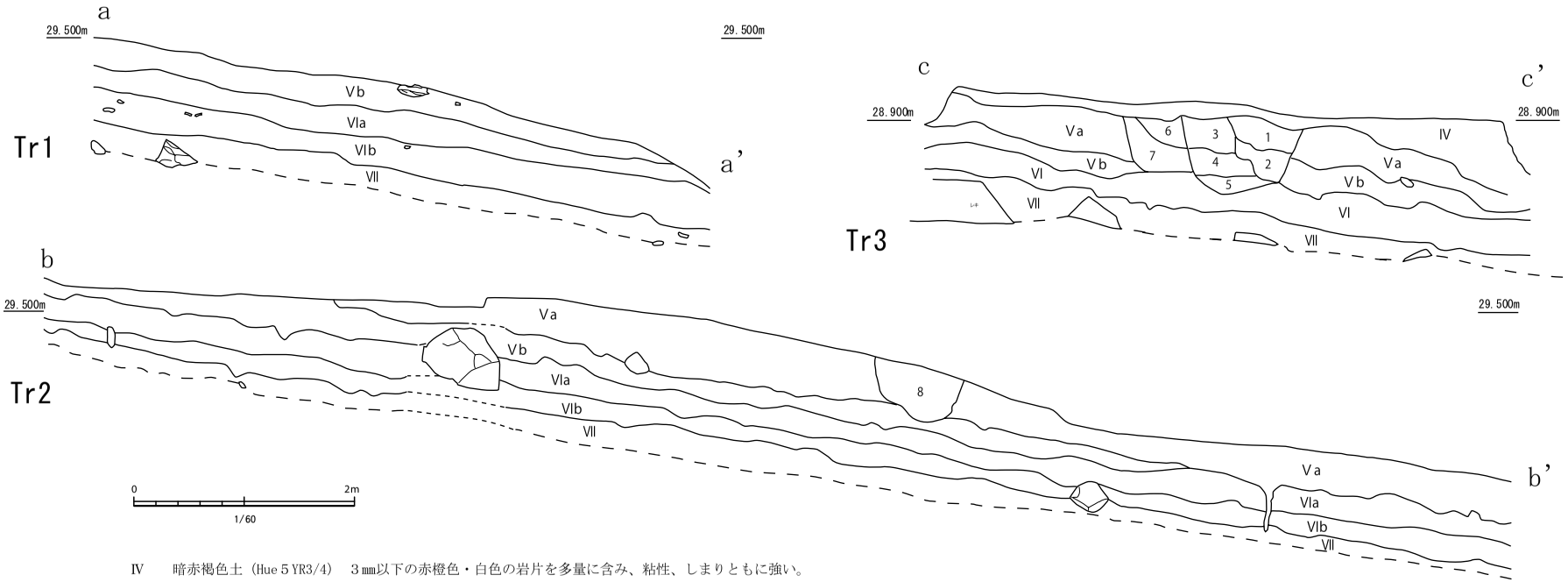
第 16 次調査区

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰ | 表土 | 縄文時代～現代 |
| Ⅱ | 暗褐色土 | 縄文時代～近世 |
| Ⅲ | 二次堆積アカホヤ火山灰層 | |
| Ⅳ | 暗赤褐色土 | 縄文時代早期 |
| Ⅴa | 黒褐色土 | 旧石器時代～縄文時代早期 |
| Ⅴb | 黒褐色土 | 旧石器時代 |
| Ⅵa | AT 火山灰を含む層 | 旧石器時代 |
| Ⅵb | | |
| Ⅶ | 暗褐色土 | 旧石器時代 |
| Ⅷ | 黄褐色土 | 地山 |

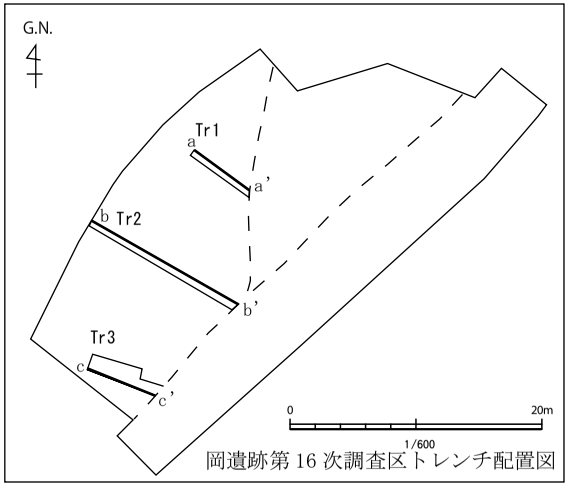
第６次調査区

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰa | 表土 | 中世～現代 |
| Ⅰb | | 縄文早期～近世 |
| Ⅱa | 二次堆積アカホヤ火山灰層 | 縄文早期～古代末 |
| Ⅱb | | 縄文時代晩期～古墳時代初頭 |
| Ⅱc | アカホヤ火山灰層 | 無遺物層 |
| Ⅲ | 明赤褐色土 | 縄文時代早期後半 |
| Ⅳa | 黒褐色土 | 縄文時代早期前半 |
| Ⅳb | 黒褐色土 | 旧石器時代 |
| Ⅴ | AT 火山灰を含む層 | |
| Ⅵ | 褐色土 | |
| Ⅶ | 黄褐色土 | |

第６図　岡遺跡　第９・16・６次調査区基本土層比較図

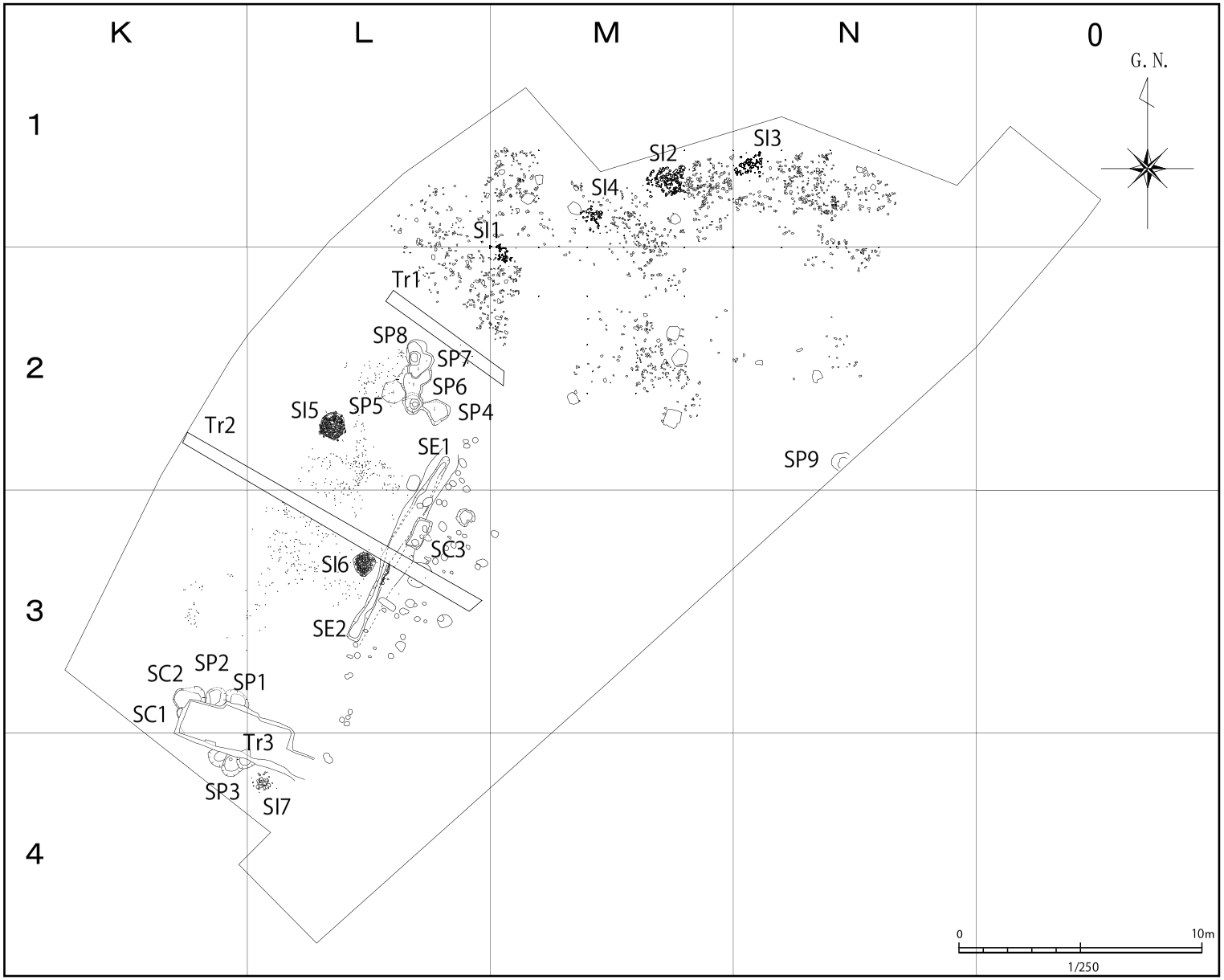



| | | |
|---|---|---|
| Ⅳ | 暗赤褐色土（Hue５YR3/4） | ３㎜以下の赤橙色・白色の岩片を多量に含み、粘性、しまりともに強い。場所によっては拳大から２㎝程度の礫を多く含む。 |
| Ⅴa | 黒褐色土（Hue10YR2/3） | ２㎝～３㎝程度の礫、２㎜以下の赤橙色・白色の岩片を含む。粘性は非常に強く、しまりも強い。 |
| Ⅴb | 黒褐色土（Hue10YR2/3） | 粘性がありかたくしまっているが、Ⅴa 層よりはパサパサした感がある。赤橙色・白色の岩片を含むがⅤa 層より小さめである。 |
| ⅥIa | 黒褐色土（Hue10YR2/2） | 赤橙色・白色の岩片を含むが少ない。AT が混じり表面を削るとシャリシャリとする。粘性しまりともにあり。 |
| ⅥIb | 黒褐色土（Hue10YR2/2） | しまりはあるが粘性はあまりない。赤橙色・白色の岩片はⅥIa 層よりは多い。場所によってはATがブロック状で混じる。 |
| Ⅶ | 暗褐色土（Hue7.5YR3/4） | 粘性はあるがしまりはわずかにある程度。１～４㎜程度の白色の岩片を多く含み、Ⅷ層に近づくにつれベタベタしてくる。 |
| Ⅷ | 黄褐色土（Hue10YR5/6） | 非常に粘性が強い。下位では岩盤である。 |
| 1 | 暗褐色土（Hue10YR3/4） | 5㎝程度の礫、３㎜以下の赤橙色・白色の岩片、炭化物を含む。粘性・しまりともに強く、褐色のブロックも混じる。 |
| 2 | 暗褐色土（Hue10YR3/4） | １と比べて礫、岩片ともに極端に少ない。やや軟質である。 |
| 3 | 暗褐色土（Hue10YR3/4） | １と似ているが、やや礫が少なく、しまりも弱い。 |
| 4 | 褐色土　（Hue7.5YR4/6） | 焼土 |
| 5 | 暗褐色土（Hue10YR3/3） | ２㎝程度の礫を含み、わずかに岩片も含む。しまりはややあり、粘性は強い。 |
| 6 | 暗褐色土（Hue10YR3/4） | １とほぼ同じ。 |
| 7 | 暗褐色土（Hue10YR3/4） | ２と似ているが、礫、岩片、褐色のブロックの割合が多くなる。 |
| 8 | 黒褐色土（Hue10YR2/3） | Ⅴa 層と似ている。部分的に軟質なところがあり、やや大きめの礫を含む。 |



岡遺跡第 16 次調査区トレンチ配置図

**第７図　土層断面図**


K
L
M
N
0
1
2
3
4
G. N.
SI1
SI2
SI3
SI4
SI5
SI6
SI7
Tr1
Tr2
Tr3
SP1
SP2
SP3
SP4
SP5
SP6
SP7
SP8
SP9
SE1
SE2
SC1
SC2
SC3
0
10m
1/250

第８図　遺構分布図

## 第２節　後期旧石器時代の遺構と遺物

### 2-1. 概要

基本層序のＶb～Ⅶ層が後期旧石器時代に相当する層である。第６次調査、第９次調査の調査報告を加味すると本調査のＶb・Ⅵ層がAT上位の遺物包含層、Ⅶ層がAT下位の遺物包含層に相当する。Ｖ層については、調査区が傾斜地であり、かつ微地形であるために堆積層として明確な判別が困難なところもあった。Ｖa層出土の遺物を形態的な特徴や石材との関係から判断し、後期旧石器時代の遺物に抽出したものも存在している。

### 2-2. 遺構

山道入口周辺から礫が広範囲に散らばった状態で確認されAT上位の礫群４基と散礫を検出した（第９図）。礫や赤化礫が一定量集まる箇所を礫群と認定し、礫群は主に調査区北部のM1GrからN1Grに向けた緩やかな傾斜地で検出した。検出面はⅥ層上面である。構成礫は全て尾鈴山溶結凝灰岩で、多くが破砕礫である。周辺には礫が点在しており、礫群以外に出土した礫は、出土状況から散礫とした。

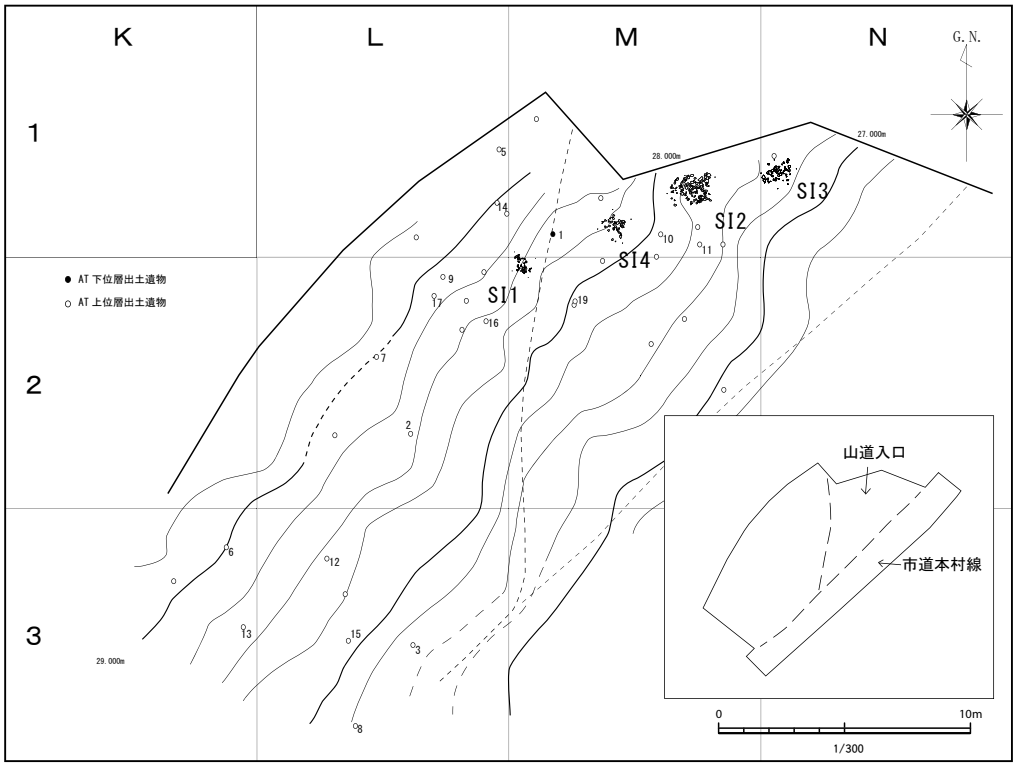
#### （１）礫群（第 10 図、図版２）

**SI1（第10図）**

M2Gr北西部の標高約28.8m地点に径0.8m×0.6mの範囲内で24点、平均重量144.6g、総重量3.76kgの礫を検出した。掘り込みは見受けられない。赤化率は約70％と部分的に焼けた弱い赤化礫も含むものの確認された礫群の中では最も高い。しかし、他と比べると小規模かつ小範囲のまとまりとなる。SI1内同士での接合はみられなかったが、SI1の西部から南部にかけた近辺の接合関係を調べた結果、礫28点、12個体、そのうち赤化した礫同士の接合が10点、５個体確認できた。

**SI2（第10図）**

SI3の西に位置し、標高約27.8mで検出した。径1.8m×1.2mと礫群では最も広い範囲に122点の礫を検出し、平均重量211.9g、総重量25.2kgと大型の礫が多い。掘り込みや炭化物は見受けられない。赤化率は約43％である。円弧状に配置されていた様相も見てとれる。SI2内同士で接合された礫は４点、２個体であり、周辺では10点、４個体の接合が確認できた。



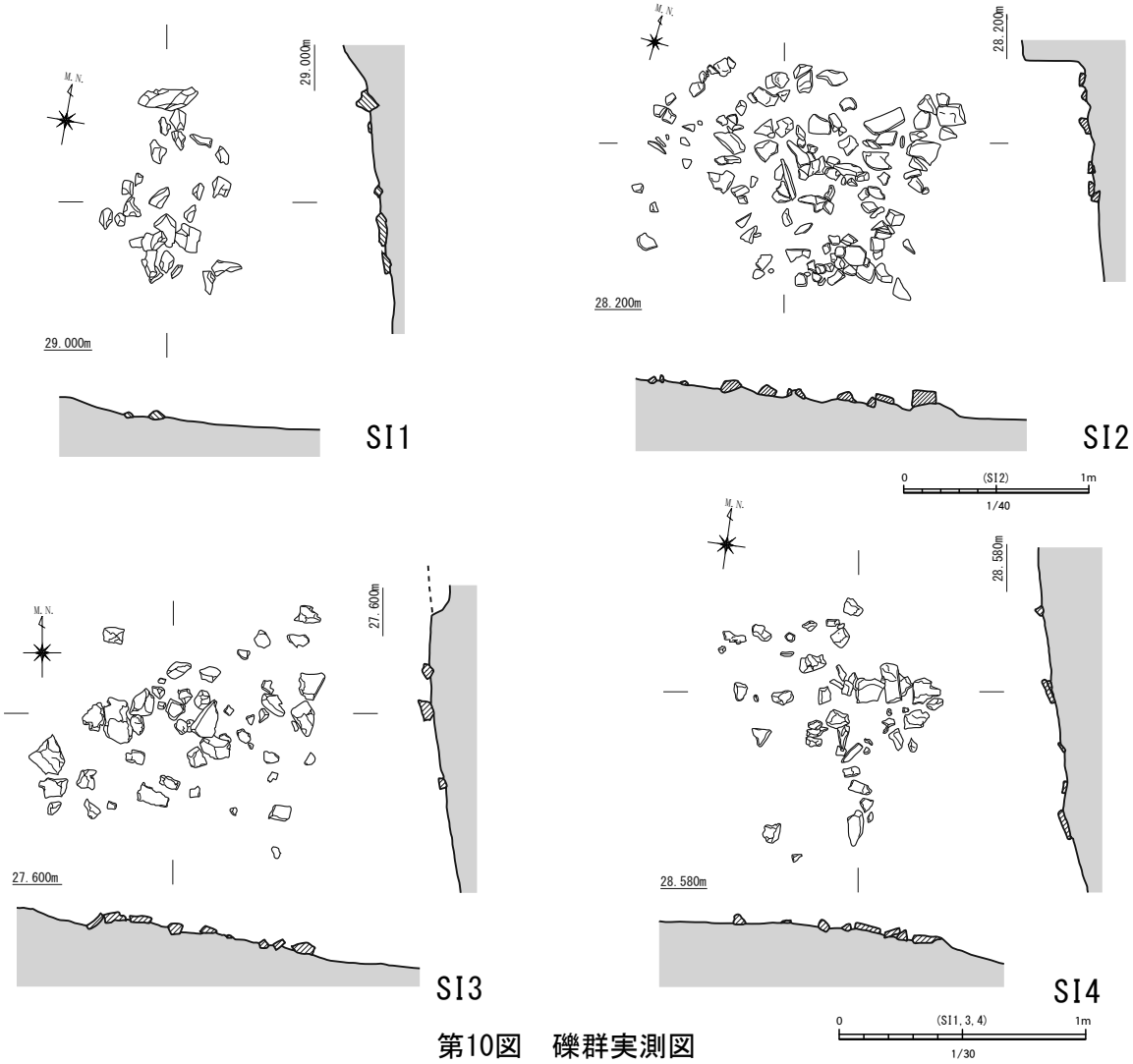

第９図　後期旧石器時代の遺構・遺物分布図

SI3（第10図）

礫群の中では最も東側に位置し、緩やかに下る地点の低地で50点の礫を検出した。標高は約27.5m、径1.25m×0.7mの範囲内に平均重量168.0g、総重量8.4kgの礫で構成されており、約50%の礫が赤化している。炭化物、掘り込みは見受けられない。SI3の礫同士での接合は２点、１個体あり、斜面に沿うようなかたちではあるが南東部において接合された礫が13点、5個体確認できた。

SI4（第10図）

標高約28.5mの地点で検出した。径1.5m×0.85mの範囲内に51点の礫を検出し、総重量は5.22kgである。平均重量も111.1gと比較的小ぶりの礫が集まる。掘り込みは見受けられない。赤化率は55%であり、強い熱を受けた礫が他の礫群より多くみられる。SI4内で接合された礫は２点、1個体である。また、SI4南東部の接合関係を調べた結果、接合が確認できた礫が14点、７個体、そのうち赤化した礫は10点、５個体である。




第10図　礫群実測図

## 第３表　礫群一覧表

| 遺構名 | グリッド | 検出層位 | 長軸（m） | 短軸（m） | 礫数 | 重量（kg） | 平均重量（g） | 赤化の具合 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI1 | M1 | Ⅵ | 0.8 | 0.6 | 24 | 3.76 | 144.6 | 7割赤化 |
| SI2 | M1 | Ⅵ | 1.8 | 1.2 | 122 | 25.2 | 211.9 | 4割赤化 |
| SI3 | N1 | Ⅵ | 1.25 | 0.7 | 50 | 8.4 | 168.0 | 5割赤化 |
| SI4 | M1 | Ⅵ | 1.5 | 0.85 | 51 | 5.22 | 111.1 | 5割赤化　強い赤化 |

（２）散礫

主に散礫を検出したのは、Ⅵ層上面で調査区東部にあたる約10×20ｍの緩やかに傾斜する範囲である（第11図）。1594点の礫（礫群の礫は除く）で構成され総重量は約239.35kg、一個体あたりの平均重量は約150.2ｇ、全て尾鈴山溶結凝灰岩である。散礫は、L1Gr～L2Gr、M1Gr～M2Gr、N1Gr～N2Grの範囲内を２×２ｍの小Grに分割した後、実測を行い１点ずつ取り上げた。また、赤化状況の確認と計測を行った。なお、礫の赤化の要因は被熱、鉄分の酸化等が考えられる。接合状況をみると、接合するものが118点、53個体であった。第11図は礫群・散礫の分布図、第12図・第４表は小Grごとの散礫の重量別個体数である。調査時には礫や赤化礫が比較的小規模にまとまっている４群を礫群と認定していたが、礫群の周りに接合礫や赤化礫が多く分布し、接合礫においては規則的な広がりがみられること、礫群の周辺部に破砕した小ぶりの礫が多く分布していることなどから、認定した４群以外にもM2-8Gr、N1-2Gr周辺一帯にも礫群が存在した可能性が指摘できる。

Ⅴ層掘削時から0.25㎥程度の尾鈴山溶結凝灰岩がいくつか露頭していた。これらはⅥ層中にみられる礫構成とも一致することから、礫群に使用した礫は身近にある礫を活用していた可能性がある。また、Ⅶ層においても礫が散乱していたが、範囲がⅥ層とほぼ同じ分布を示していることから、落ち込みまたは流れ込みによるものと判断し、トータルステーションでの記録とした。

2-3. 遺物（第13～15図１～19、図版４）

後期旧石器時代の遺物は、姶良Tn火山灰層（以下AT）の上下の層で確認した。遺物は出土した層だけでなく、形態的な特徴からも後期旧石器時代の遺物として抽出したものも含まれる。

（１）AT下位（第13図１）

AT下位に属する石器はⅦ層で出土した珪質頁岩製剥片１点のみである。

微細剥離剥片（第13図１）

１は縦長剥片を素材とし、左側縁上部、主要剥離面の下縁から右側縁にかけて微細剥離がみられる。２と同様のナイフ形石器を作るための素材剥片とも考えられる。

（２）AT上位（第13～15図２～19）

AT上位に属する石器は、ナイフ形石器２点、スクレイパー２点、二次加工剥片２点、微細剥離剥片５点、剥片22点、石核２点の総数35点出土した。そのうち18点の図化を行った。

ナイフ形石器（第13図２・３）

２は珪質頁岩製の不定形剥片を素材とする。右側縁と左側縁の一部及び腹面基部のバルブを除去するように加工を施す。刃部には微細剥離痕がみられる。３は流紋岩製の縦長剥片を素材とし二側縁に加工を施す。先端部は欠損しているが、両側縁ともブランティングを入念に施している。

スクレイパー（第13図４・５）

４・５はやや厚みのある剥片を素材とする。４は下部を欠損しているが、左側縁に加工を施し刃部を作出している。５は左側縁から下縁にかけて急斜度に加工を行い刃部を作出している。

二次加工剥片（第13図６・７）

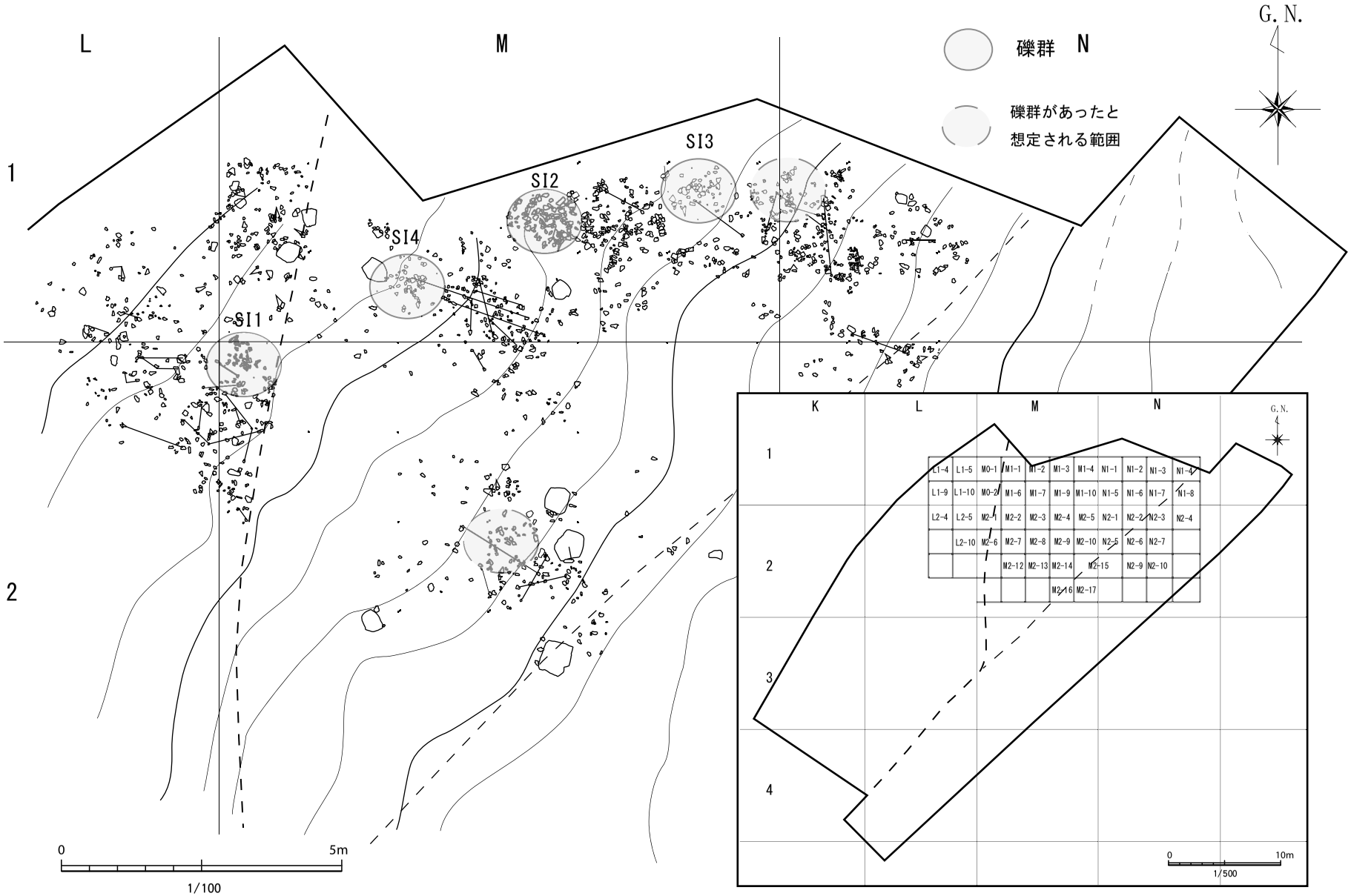
６は不定形剥片を素材とし、両側縁に二次加工が施されている。７は横長剥片を素材とする。下縁に二次加工を施し、右側縁には背面側からの二次加工もみられる。

微細剥離剥片（第13・14図８～13）

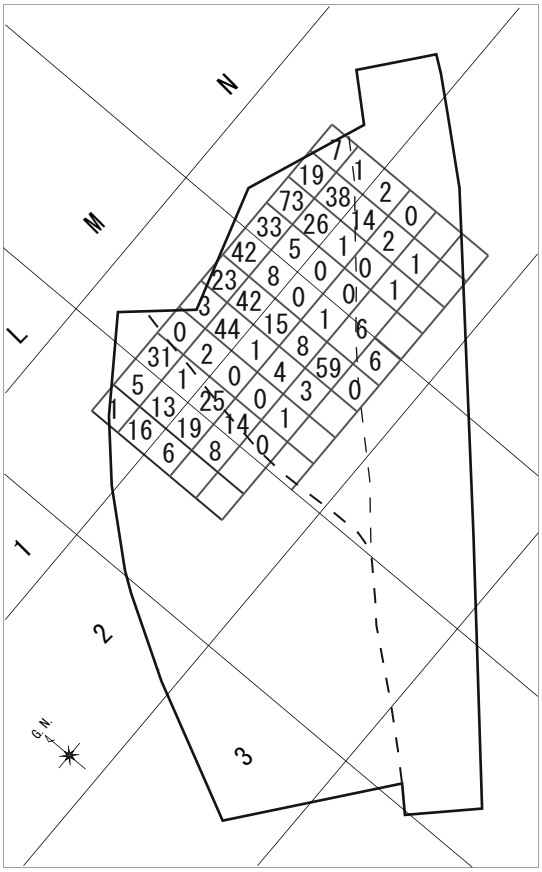
８～11は縦長剥片を素材とする。８は背面右下に自然面を残す。主要剥離面の右側縁及び左側縁下部に微細剥離がみられる。９は背面右側から下端にかけて自然面を残し、右側縁にわずかに微細剥離がみられる。10は上部、下部を欠損しているが、両側縁に微細剥離がみられる。スクレイパーとしての機能も考えられる。11は両側縁に微細剥離がみられ、打面部には打面調整が認められる。末端部は欠損している。12・13は幅広の不定形剥片を素材とする。12は背面に自然面を残し、主要剥離面の左側縁下部から下縁、右側縁にかけて微細剥離がみられる。13は下縁に微細剥離がみられる。

剥片（第14・15図14～17）

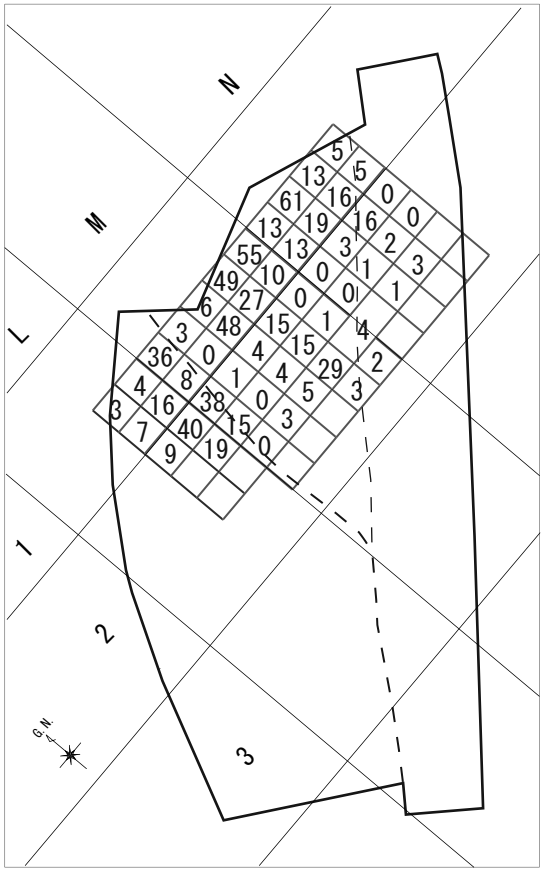
14は黒色の頁岩製の縦長剥片である。主要剥離面には大きくバルバスカーを残し、背面には末端側



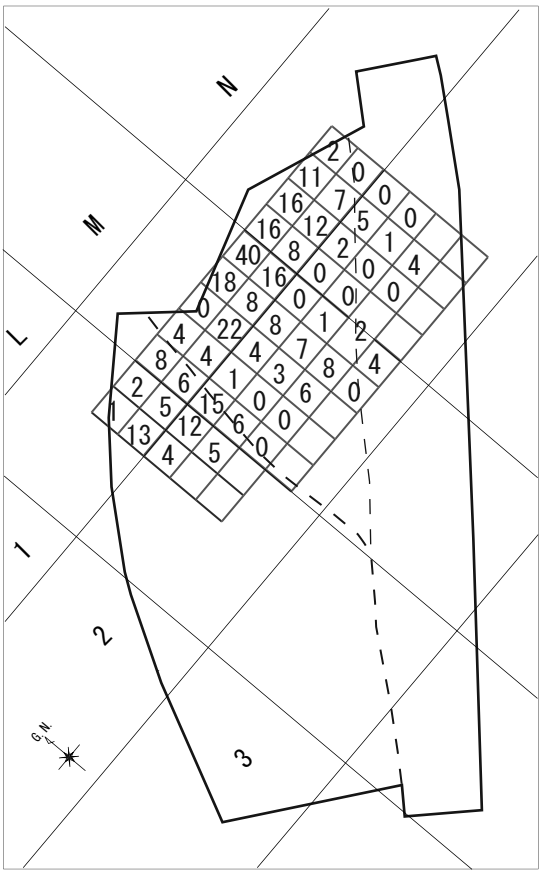

第11図　礫群・散礫分布図及び接合状況



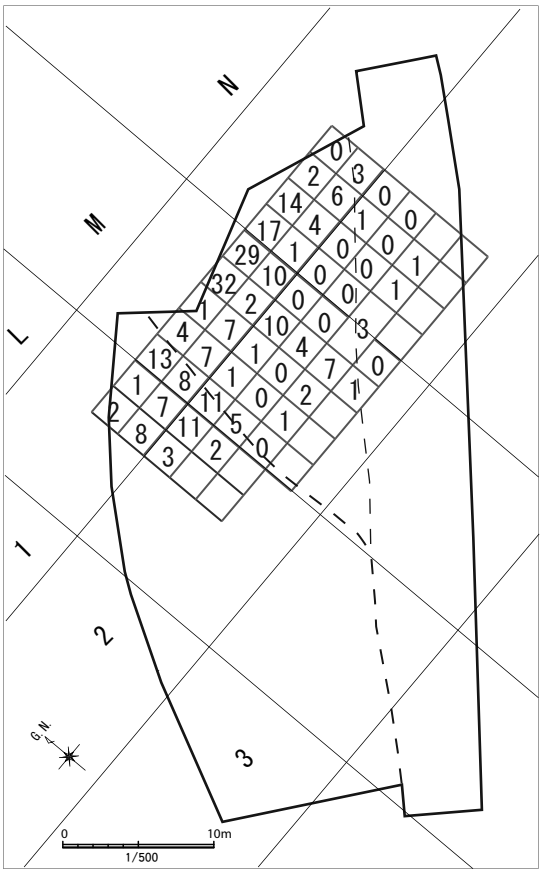

50g 以下の礫の個体数




51 ～ 150g 以下の礫の個体数




151 ～ 300g 以下の礫の個体数




300g 以上の礫の個体数

第12図　小グリッド重量別個体数

## 第４表　Ⅵ層散礫重量別個体数

| | ５０ｇ未満 | ５１ｇ～１００ｇ | １０１～１５０ | １５１～２００ | ２０１～３００ | ３０１～４００ | ４０１～５００ | ５００ｇ以上 | 総数 | 接合数 | 赤化率（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| L1-4 | 1 | 1 | 2 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 7 | 1 | 28 |
| L1-9 | 16 | 4 | 3 | 6 | 7 | 1 | 0 | 7 | 44 | 6 | 58 |
| L2-4 | 6 | 2 | 7 | 3 | 1 | 1 | 0 | 2 | 22 | 3 | 76 |
| L1-5 | 5 | 4 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 12 | 0 | 17 |
| L1-10 | 13 | 13 | 3 | 2 | 3 | 2 | 2 | 3 | 41 | 1 | 76 |
| L2-5 | 19 | 21 | 19 | 2 | 10 | 1 | 3 | 7 | 82 | 11 | 79 |
| L2-10 | 8 | 14 | 5 | 3 | 2 | 2 | 0 | 0 | 34 | 1 | 80 |
| M0-1 | 31 | 28 | 8 | 5 | 3 | 2 | 3 | 8 | 88 | 7 | 68 |
| M0-2 | 1 | 5 | 3 | 2 | 4 | 4 | 1 | 3 | 23 | 6 | 57 |
| M2-1 | 18 | 19 | 11 | 6 | 4 | 5 | 2 | 0 | 65 | 6 | 62 |
| M2-6 | 14 | 12 | 3 | 2 | 4 | 1 | 2 | 2 | 40 | 7 | 42 |
| M1-1 | 0 | 1 | 2 | 0 | 4 | 2 | 1 | 1 | 11 | 0 | 64 |
| M1-6 | 2 | 0 | 0 | 1 | 3 | 2 | 3 | 2 | 13 | 0 | 62 |
| M2-2 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 0 | 67 |
| M2-12 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5 | 0 | 0 |
| M1-2 | 3 | 4 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 10 | 0 | 30 |
| M2-3 | 1 | 2 | 2 | 3 | 1 | 1 | 0 | 0 | 10 | 2 | 60 |
| M1-7 | 23 | 22 | 10 | 6 | 6 | 2 | 0 | 1 | 70 | 6 | 65 |
| M2-8 | 4 | 3 | 1 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 11 | 0 | 27 |
| M2-13 | 3 | 4 | 1 | 2 | 4 | 1 | 0 | 1 | 16 | 2 | 50 |
| M1-9 | 42 | 20 | 7 | 4 | 4 | 2 | 0 | 0 | 79 | 4 | 49 |
| M2-4 | 15 | 11 | 4 | 5 | 3 | 4 | 3 | 3 | 48 | 4 | 43 |
| M2-9 | 8 | 10 | 5 | 3 | 4 | 2 | 0 | 2 | 34 | 4 | 33 |
| M2-14 | 59 | 21 | 8 | 3 | 5 | 2 | 2 | 3 | 103 | 4 | 32 |
| M2-16 | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 4 | 0 | 100 |
| M1-4 | 42 | 33 | 22 | 19 | 21 | 11 | 10 | 8 | 166 | 11 | 33 |
| M1-10 | 8 | 4 | 6 | 3 | 13 | 3 | 3 | 4 | 44 | 0 | 28 |
| M2-10 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 33 |
| M2-15 | 6 | 2 | 2 | 0 | 2 | 1 | 2 | 0 | 15 | 0 | 46 |
| M2-17 | 6 | 2 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 12 | 0 | 42 |
| N1-1 | 11 | 2 | 3 | 4 | 1 | 2 | 4 | 2 | 29 | 1 | 32 |
| N1-5 | 5 | 8 | 5 | 3 | 5 | 0 | 0 | 1 | 27 | 2 | 22 |
| N0-1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 |
| N1-2 | 73 | 32 | 29 | 7 | 9 | 7 | 3 | 4 | 164 | 12 | 27 |
| N1-6 | 24 | 8 | 11 | 4 | 8 | 1 | 3 | 0 | 59 | 3 | 19 |
| N2-2 | 1 | 2 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 6 | 0 | 0 |
| N2-6 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| N2-9 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 0 | 33 |
| N1-3 | 19 | 10 | 3 | 7 | 4 | 1 | 0 | 1 | 45 | 5 | 24 |
| N1-7 | 38 | 15 | 1 | 4 | 3 | 3 | 0 | 3 | 67 | 2 | 24 |
| N2-3 | 14 | 11 | 5 | 2 | 3 | 1 | 0 | 0 | 36 | 5 | 28 |
| N2-7 | 2 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 40 |
| N2-10 | 1 | 3 | 0 | 3 | 1 | 1 | 0 | 0 | 9 | 2 | 22 |
| N1-4 | 7 | 4 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 14 | 0 | 17 |
| N1-8 | 1 | 3 | 2 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 9 | 0 | 12 |
| N2-4 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 |
| 計 | 555 | 369 | 201 | 120 | 155 | 71 | 48 | 75 | 1594 | 118 | 39 |

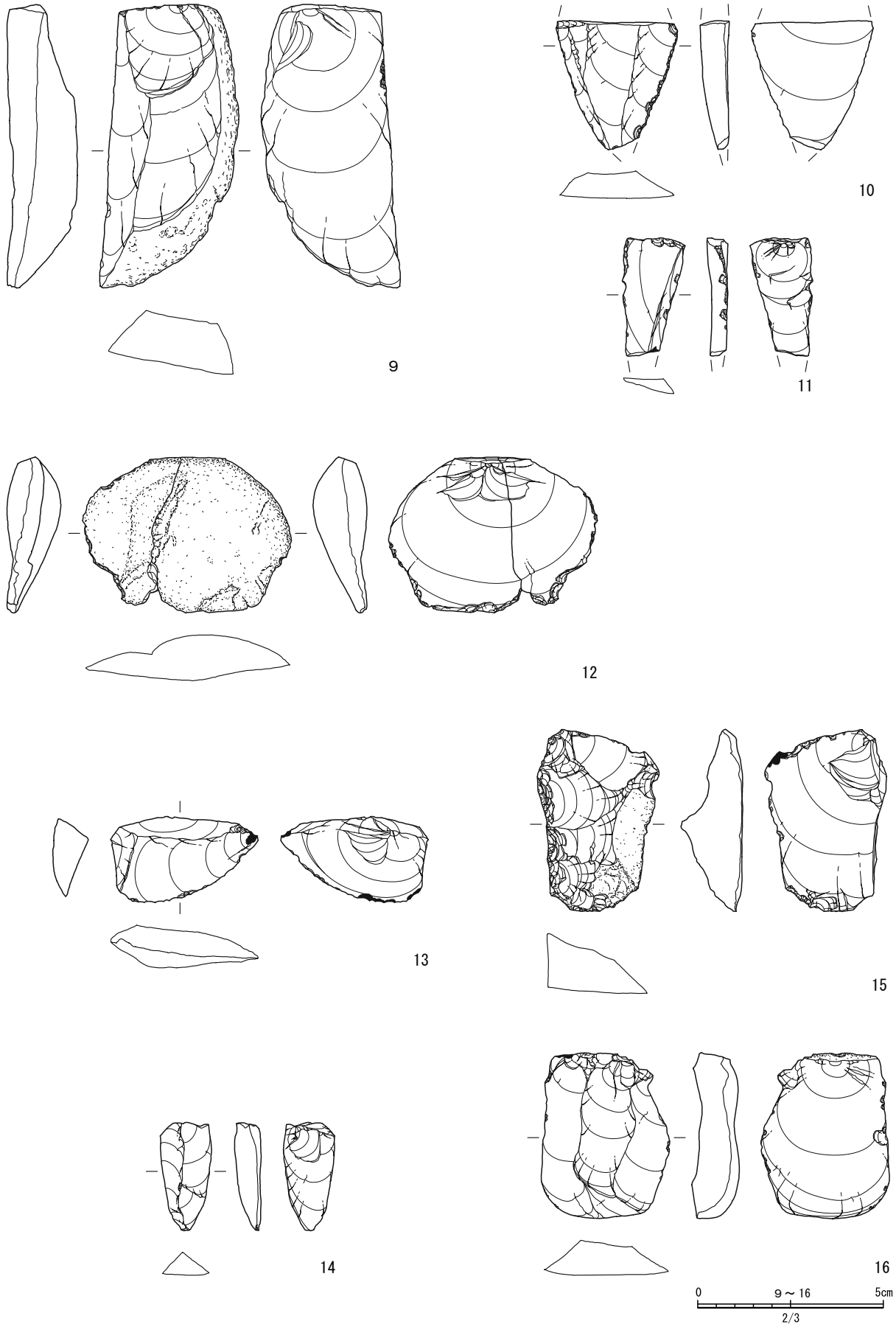
| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI1 | 7 | 3 | 5 | 3 | 2 | 2 | 0 | 2 | 24 | 0 | 70 |
| SI2 | 23 | 31 | 18 | 7 | 11 | 11 | 10 | 11 | 122 | 6 | 43 |
| SI3 | 22 | 5 | 3 | 3 | 8 | 5 | 1 | 3 | 50 | 3 | 50 |
| SI4 | 21 | 10 | 6 | 5 | 5 | 2 | 2 | 0 | 51 | 3 | 55 |
| 計 | 73 | 49 | 32 | 18 | 26 | 20 | 13 | 16 | 247 | 12 | 55 |

からの先行剥離が認められる。15は背面左側に石核調整痕を残す。16は頭部調整を行い、背面構成からは連続的に縦長剥片を３箇所剥離した可能性が指摘できる。17は不定形剥片を素材とし、この背面側には複数枚の不定形な剥片剥離が認められ、両側縁及び下縁部には微細剥離が残る。

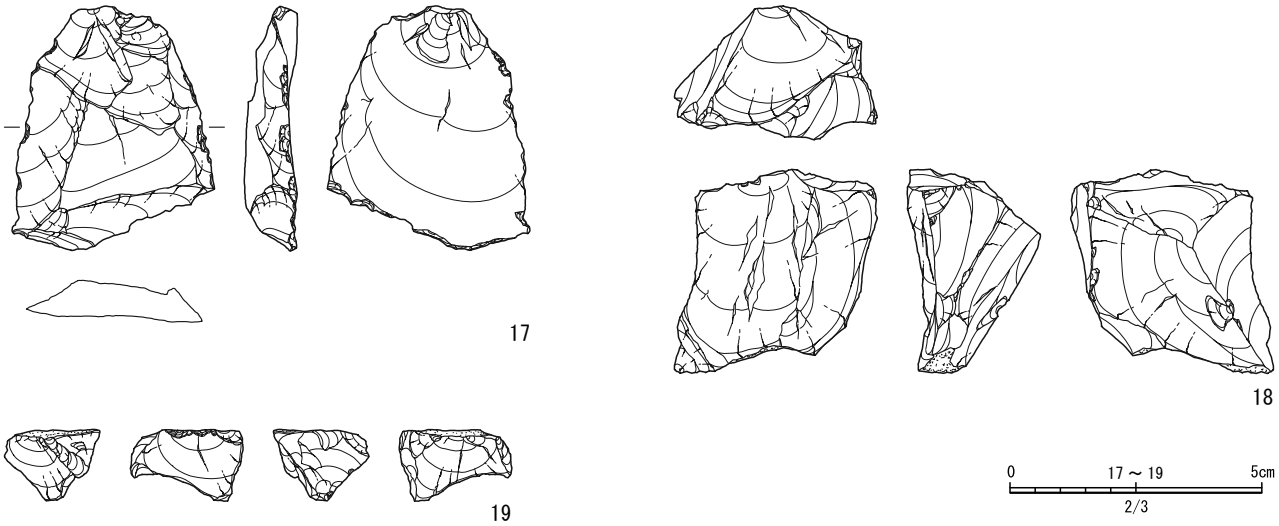
**石核（第15図18・19）**

18は黒色の頁岩製の石核である。石核端部に礫面を残し、多方向からの剥離によって剥片剥離を行っている。19はチャート製の石核である。単一の平坦面より剥片剥離作業を行っている。残核である。

第13図　後期旧石器時代石器実測図（１）




第14図　後期旧石器時代石器実測図（２）




第15図　後期旧石器時代石器実測図（３）

## 第５表　後期旧石器時代石器計測表

| No. | 出土地点（グリッド） | 層 | 器種 | 石材 | X 座標 | Y 座標 | Z 座標 | 法量 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） |
| 1 | M1 | Ⅶ | 微細剥離剥片 | 珪質頁岩 | -68258.838 | 58401.824 | 28.456 | 4.40 | 2.26 | 0.69 | 5.6 |
| 2 | L2 | Ⅴ | ナイフ形石器 | 珪質頁岩 | -68266.789 | 58369.139 | 28.873 | 4.39 | 2.29 | 0.94 | 6.4 |
| 3 | L3 | Ⅴ | ナイフ形石器 | 流紋岩 | -68275.164 | 58396.231 | 28.019 | 5.00 | 2.30 | 0.96 | 9.4 |
| 4 | L2 | Ⅵ | スクレイパー | 珪質頁岩 | - | - | - | 3.59 | 3.76 | 1.44 | 20.9 |
| 5 | L1 | Ⅵ | スクレイパー | 流紋岩 | -68255.519 | 58399.648 | 29.130 | 4.73 | 4.71 | 1.60 | 33.8 |
| 6 | K3 | Ⅴb | 二次加工剥片 | 流紋岩 | -68271.285 | 58388.818 | 29.389 | 4.36 | 2.68 | 1.49 | 16.4 |
| 7 | L2 | Ⅵa | 二次加工剥片 | 流紋岩 | -68263.720 | 58394.780 | 29.099 | 3.74 | 2.36 | 0.83 | 5.9 |
| 8 | L3 | Ⅵ | 微細剥離剥片 | 珪質頁岩 | -68278.334 | 58393.987 | 27.739 | 5.34 | 3.30 | 1.00 | 12.5 |
| 9 | L2 | Ⅵa | 微細剥離剥片 | 珪質頁岩 | -68260.560 | 58397.420 | 28.524 | 7.44 | 3.42 | 1.79 | 51.6 |
| 10 | M1 | Ⅵa | 微細剥離剥片 | 珪質頁岩 | -68258.850 | 58406.070 | 28.041 | 3.40 | 3.25 | 0.78 | 9.1 |
| 11 | M1 | Ⅵa | 微細剥離剥片 | 流紋岩 | -68259.270 | 58407.640 | 27.813 | 3.16 | 1.61 | 0.55 | 2.4 |
| 12 | L3 | Ⅵa | 微細剥離剥片 | 珪質頁岩 | -68271.729 | 58392.850 | 28.447 | 4.16 | 5.50 | 1.42 | 29.1 |
| 13 | K3 | Ⅴ | 微細剥離剥片 | 珪質頁岩 | -68274.454 | 58389.550 | 29.203 | 2.27 | 3.98 | 1.14 | 8.5 |
| 14 | L1 | Ⅵ | 剥片 | 珪質頁岩 | -68257.607 | 58399.590 | 29.093 | 2.88 | 1.37 | 0.71 | 2.5 |
| 15 | L3 | Ⅵa | 剥片 | 流紋岩 | -68275.011 | 58393.662 | 28.265 | 4.80 | 3.25 | 1.63 | 20.3 |
| 16 | L2 | Ⅵa | 剥片 | 流紋岩 | -68262.320 | 58399.120 | 28.346 | 4.44 | 3.41 | 1.22 | 20.1 |
| 17 | L2 | Ⅵa | 剥片 | 流紋岩 | -68261.300 | 58397.070 | 28.377 | 4.75 | 3.89 | 1.02 | 16.5 |
| 18 | K3 | Ⅴ | 石核 | 珪質頁岩 | - | - | - | 3.60 | 3.59 | 2.48 | 30.7 |
| 19 | M2 | Ⅵ | 石核 | チャート | -68261.551 | 58402.707 | 28.003 | 1.39 | 2.18 | 1.75 | 4.0 |

## 第３節　縄文時代早期の遺構と遺物

### 3-1. 概要

基本層序のⅣ・Ｖa層が縄文時代早期に相当し、ともに粘性の非常に強い層である。縄文時代早期の層は斜面地しか残存しておらず、遺構・遺物ともそのほとんどが斜面地での検出となった。なお、Ｖa層の遺物については第２節でも述べたように形態的な特徴や石材との関係から判断し後期旧石器時代の遺物としたものもある。

### 3-2. 遺構

遺構は、集石遺構３基、炉穴９基、土坑２基をⅣ・Ｖ層で検出した（第16図）。前述したとおり道路建設時に削平をうけたため遺構が集中する箇所の多くは斜面地である。市道本村線下のN2Grでは、第６次調査区から続くと思われる炉穴の一部を検出している。

#### （１）集石遺構（第17図、図版３）

Ⅳ層にて集石遺構を３基検出した。斜面部中央Ⅳ層上面では散礫が分布しており、上部の礫を取り上げた後に礫の集中部分がみられた箇所を集石遺構とした。使用された石材は全て尾鈴山溶結凝灰岩である。

**SI5（第17図）**

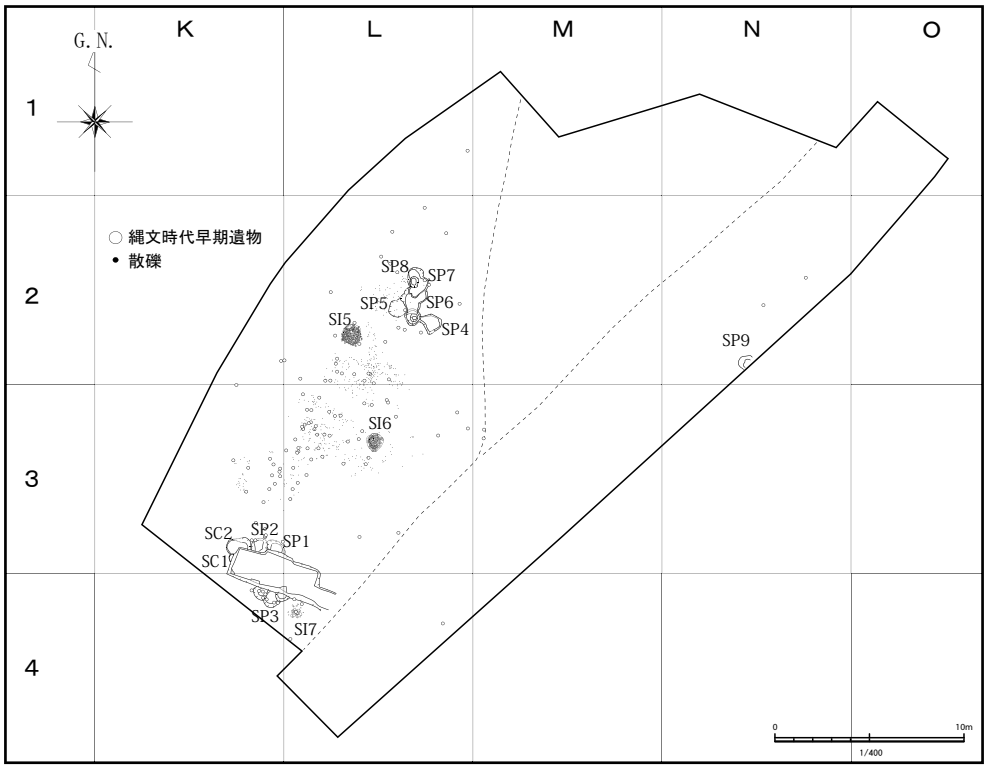
L2Gr南側で検出した。SP4～SP8と近接しており、長径1.2m×短径1.0mで掘り込みを有する。掘り込みは円形で断面は皿状を呈し、深さは最大で0.3mである。内部礫の残存状況は良好であり、礫は掌大サイズから約30cm程度の大きさまで様々な形状の礫で密に構成されている。礫は全て被熱のため赤化しており、総重量は約90.5kgである。

**SI6（第17図）**

調査区の中央付近であるL3Grで検出した。長径1.0m×短径0.85mで掘り込みを有する。掘り込みは円形で断面は皿状を呈し、深さは最大で0.25mである。SI5同様、内部礫は密であり、構成礫も全て被熱のため赤化しているが、礫個々の大きさは小さく10cm未満が多い。総重量は約43.0kgである。

**SI7（第17図）**

調査区の南部に位置するSP1～SP3に近接した場所、L4Grで検出した。畑や石垣の裏込めを造成する際に削平をうけた影響で、内部礫があまり残存していない状況での検出となった。長径0.8m×短径0.6mで掘り込みを有し、構成礫は全て被熱のため




第16図　縄文時代早期の遺構・遺物分布図

赤化している。掘り込みは約0.1mと浅く、総重量も約17.0kgである。

（２）散礫

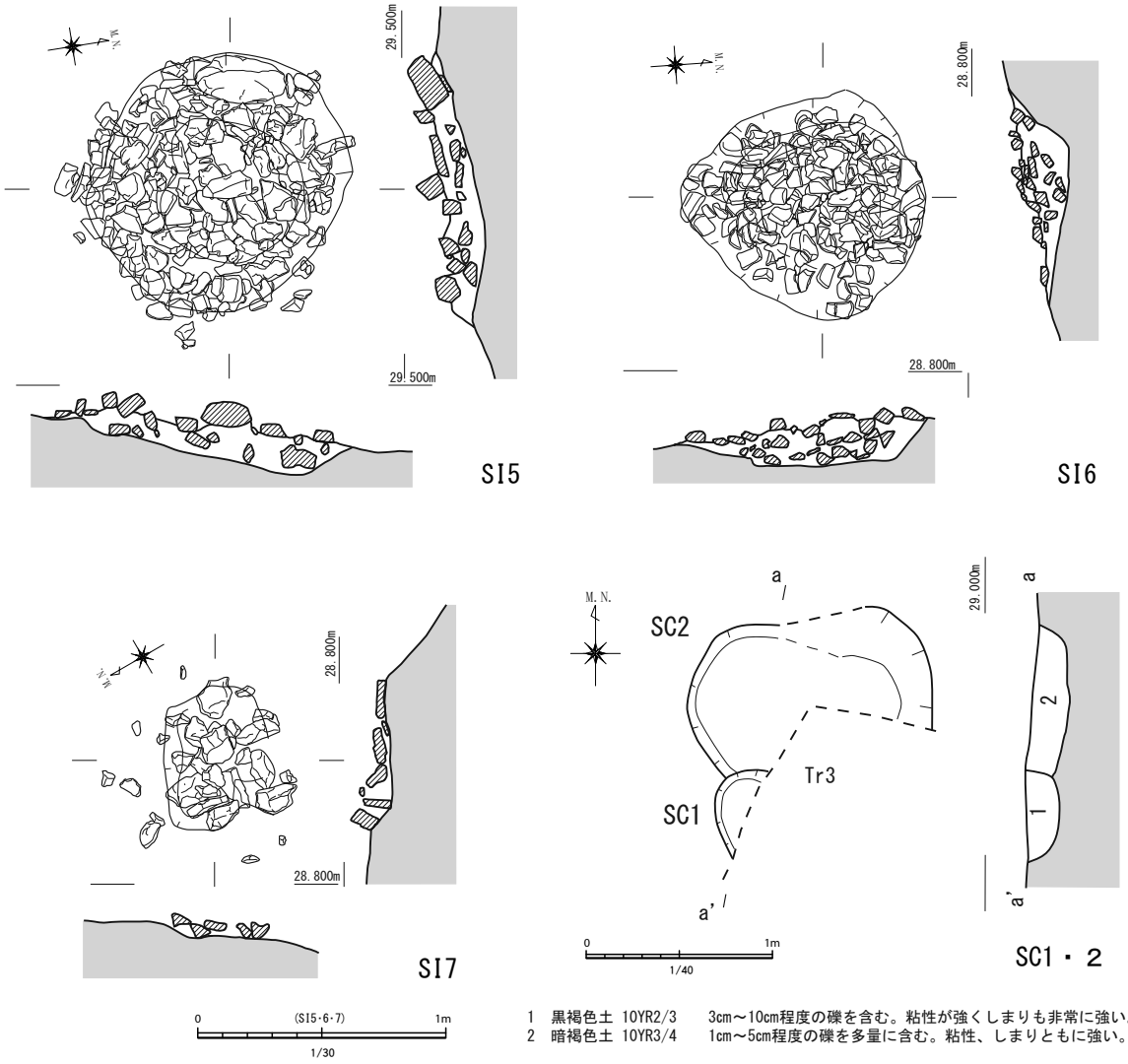
Ⅱ層を掘削し、粘性の非常に強いⅣ層上面を精査しているときに、赤化礫を含む拳程度から掌大サイズの礫の広がりが見られた（第16図）。散礫検出時より礫には疎密があり、やや礫が集中する場所では、その下部において集石遺構を検出した。散礫と集石遺構は同質の石材、尾鈴山溶結凝灰岩である。散礫の形成された場所は斜面地中央部約10×20mの範囲で東に向かって傾斜している。散礫と同様の広がりで縄文時代早期の遺物も多数出土している。

（３）土坑（第17図）

２基検出しており、いずれもTr3の掘削時に検出した。SC1とSC2は切り合っており、ともに焼土、炭化物は含まない。SC1はSC2を切るかたちで検出し、平面形は楕円形で最大幅0.5m、深さ0.2m程度、埋土は１層である。SC2はSP2の西側に隣り合うようなかたちで検出し、平面形は楕円形で最大幅1.4m、最深0.6mを測る。焼土は有しないが、炉穴との関係性も考えられる。

（４）炉穴（第18・19図、図版２・３）

炉穴は大きく３つの群に分かれて、計９基が検出された。K3Gr～K4Grでは、SP1～SP3（第１群）が




1　黒褐色土 10YR2/3　3cm～10cm程度の礫を含む。粘性が強くしまりも非常に強い。
2　暗褐色土 10YR3/4　1cm～5cm程度の礫を多量に含む。粘性、しまりともに強い。

第17図　縄文時代早期集石遺構・土坑実測図

調査区端のTr３沿いに検出された。L2Grでは、SP4～SP8（第２群）が、N2Grでは、SP9が検出されている。遺構の一部分のみの調査となった炉穴（第１群）は、その構造自体からでは遺構の認定が困難であったが、①焼土・炭化物を伴うこと、②群集していること、③ほぼ同一時期での切り合い関係がみられること、これら３点を重視して炉穴として報告する。

**SP1・SP2（第18図、図版２）**

SP1は残存長で長軸0.86m×短軸0.5m×深さ0.6mを計る。明瞭な焼土を伴っておらず、炭化物のみが伴っている。よってSP1に堆積している埋土は炉部の掻き出しに伴うものと考えられる。SP1はSP2に西側を切られており、近辺に炉部と思われる焼土堆積部は存在しなかったため、炉部は西部に存在していた可能性がある。

SP2は残存長で長軸0.86m×短軸0.78m×深さ0.64mを計る。SP1を切るかたちで構築されている。焼土が比較的厚く堆積しており、炉部として機能していたと思われる。SP2がSP1の西部のみ切っていることを考慮すると、SP1が東西主軸、SP2は南北主軸をもっている可能性がある。

**SP3-1・2・3（第18図、図版２）**

Ⅴ層を掘り込み面にもつ３つの土坑が切り合うように検出された。構築はSP3-1→SP3-2→SP3-3（以下１、２、３）の順と考えられるが、３つの土坑の関連性は判然としない。

１は２とトレンチに切られているので、規模の詳細は不明である。掘り込みは0.46mと他の炉穴と比較し少々浅い。

２も規模等の詳細は不明であるが、明瞭な焼土をもつ点が異なる。掘り込みの規模も東西で推定0.9mほどはあったと考えられる。３に切られている。

３は東西0.66mの規模をもつが、南北方向は不明である。下端はやや段掘状になっており、他の炉穴とは趣が違う。ただし、掘り込みはⅤ層と考えられ、埋土の観察からも大きな時期差はないようであるため、SP3に伴うものとして報告する。

**SP4・SP5・SP6・SP7・SP8（第19図、図版３）**

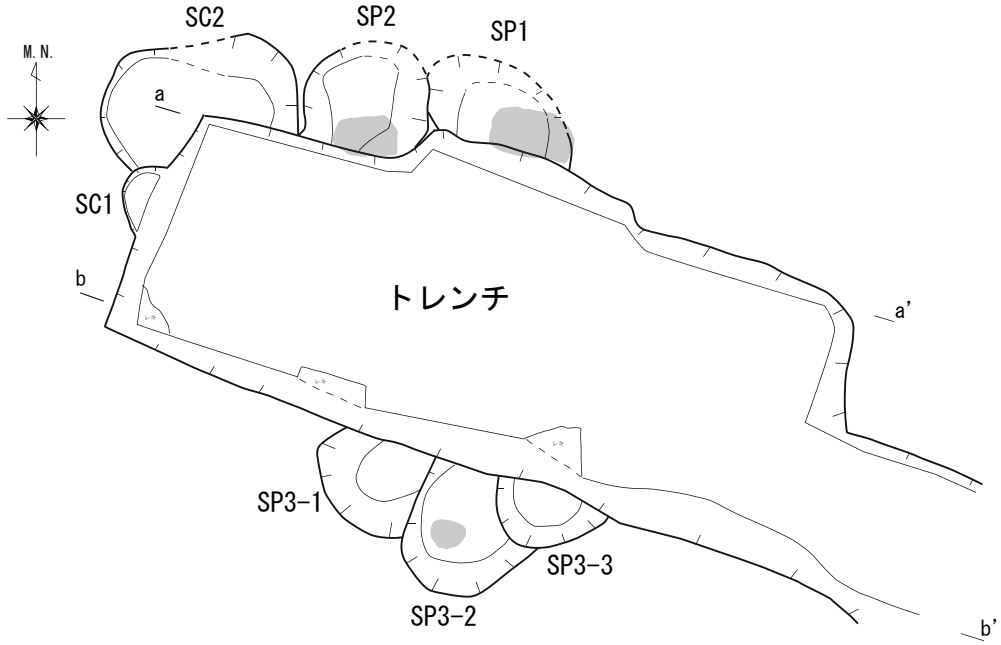
SP4～SP8は５基以上の炉穴が切り合うことにより、群をなす。構築順序は、SP4→SP5→SP6→SP7→SP8と考えられ、東西軸に設定されたタイプ（SP4・SP5）と南北軸に設定されたタイプ（SP6・SP7・SP8）に大きく分別できる。以下、個別に報告をおこなう。なお、遺構の計測値は復元した使用時の軸を重視し、足場から炉部へと向かう軸を「縦軸」、縦軸に対する横幅を「幅」とする。

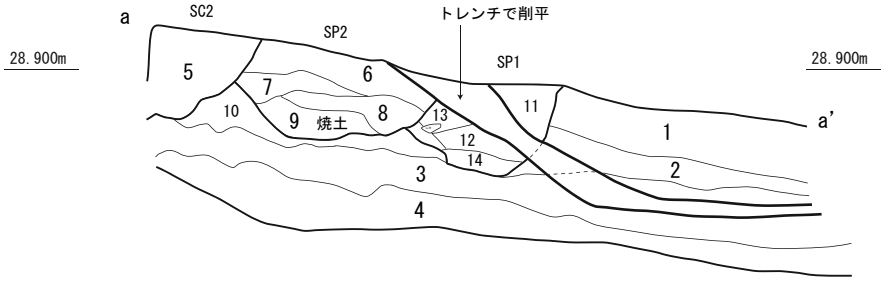
SP4は群において最初に造られた炉穴で、足場と炉部という構造が比較的良好に確認された。足場は炉部に向かってすぼまる扇状のプランをなし、足場と炉部との接続点が段状に掘り残されている点が特徴的である。縦軸は2.03mを計り、炉部の幅は残存で0.64m（復元幅0.9m程）、くびれ部の幅0.27m、足場最大幅1.06mを計る。くびれ部の掘り残し部は比高差で0.12～0.15m程で足場と炉部を区分する機能を有していたと思われる。炉部は焼土が0.4m以上堆積しており、床面は固く硬化している。西側の一部をSP6に切られている。

SP5は、残存長軸0.91m×短軸0.92mを計る。焼土の堆積は浅く明瞭ではなく、疎らに分布している。構築はSP6に切られていることを考慮すると、SP4とSP6の間の構築と考えられる。ただし、SP4との接続がやや不自然なため、間に１基存在していた可能性もある。SP6の項で述べるようにSP6として報告するものも一部SP5に含まれる可能性がある。

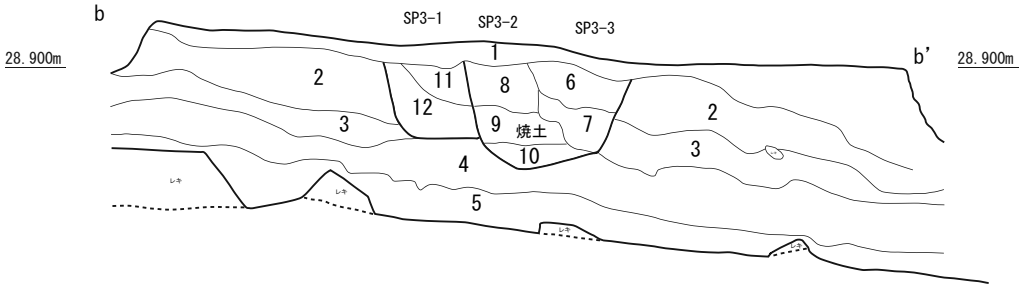
SP6はSP5を切るかたちで南北軸に構築されている。残存部を元に復元すると長軸1.44m×短軸0.89m以上となると考えられる。東側が張り出す、ややいびつな形状をなす。焼土は特に南側に比較的厚く堆積していたが、全面に分布しており、床面の硬化などもなく、炉部自体は明瞭でなかった。張り出しは、切り合いの可能性はあるが、掘削時の判断では土質の違いなどは捉えられなかった。ただし、張り出し部がSP5と同一軸であること、張り出し部には焼土の堆積は特に顕著ではなかった点を踏まえると、SP5の足場がSP6に切られた痕跡である可能性がある。

SP7はSP6を切って構築されている。埋土上層では判別できず、Ⅵ層への掘り込みで前後関係が判明した。残存長軸1.23m×短軸0.63mを計る。北壁側



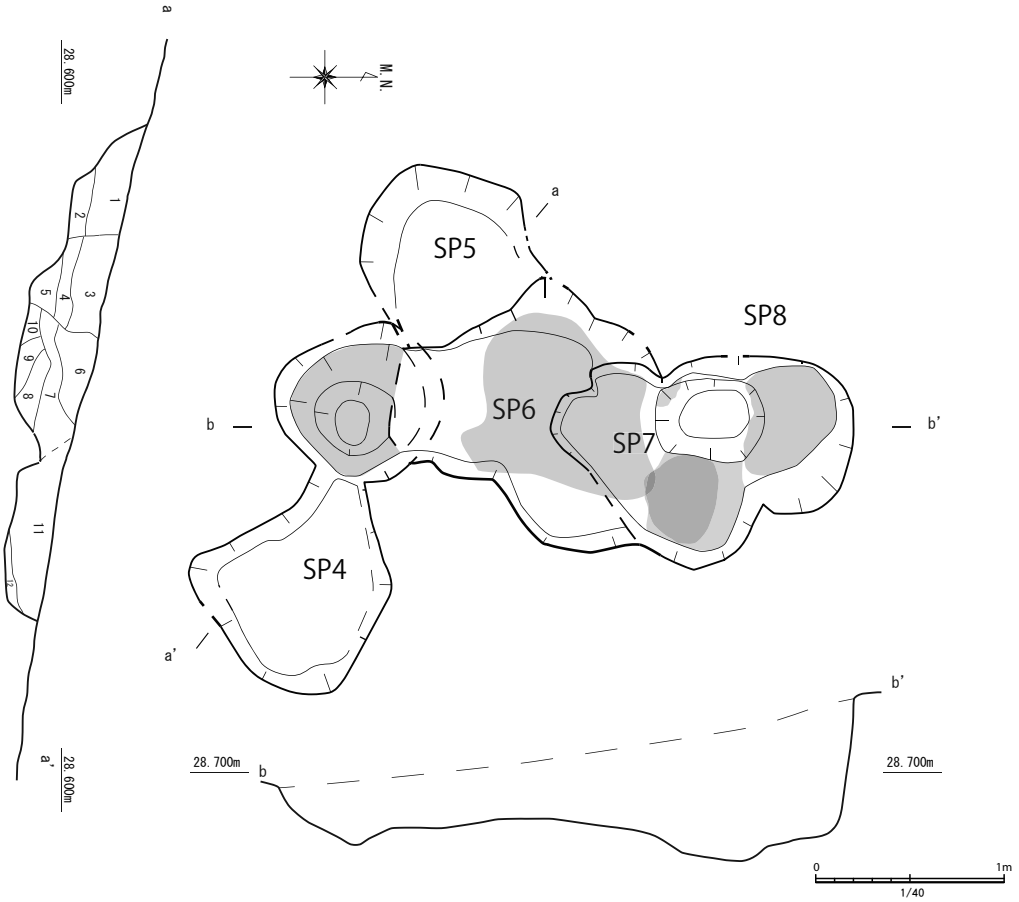

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | Hue10YR2/3 | Va 層。1cm 程度の礫、2 mm以下の赤褐、白色の岩片を含む。粘性、しまりともに強い。 |
| 2 | 黒褐色土 | Hue10YR2/3 | Vb 層。1 と同様だが 3 cm程度の礫を含む。 |
| 3 | 黒褐色土 | Hue10YR2/2 | Ⅵ層。1,2 より礫、粒子を多く含む。南側よりは色合いが明るい。粘性ややあり。しまり強い。 |
| 4 | 暗褐色土 | Hue7.5YR3/4 | Ⅶ層。2 cm程度の礫を多く含む。粒子は少なくなり軟質である。粘性強い。 |
| 5 | 暗褐色土 | Hue10YR3/4 | 5 cm以下の礫を多量に含む。粘性、しまりともに強い。褐色のブロックが混じる。 |
| 6 | 暗褐色土 | Hue10YR3/4 | 1 cm以下の礫、2 mm程度の赤褐、白色の岩片を多く含む。褐色のブロックが 5 より多く混じる。 |
| 7 | 暗褐色土 | Hue10YR3/3 | 1 mm程度の赤褐、白色の岩片が混じる。6 よりは軟質である。粘性強い。 |
| 8 | 暗褐色土 | Hue10YR2/3 | 7 と似ているが粘性、しまりともに弱くなる。 |
| 9 | 褐色土 | Hue7.5YR4/6 | 焼土である。 |
| 10 | 黒褐色土 | Hue10YR2/3 | 2 と似たような礫や岩片が混じる。粘性は強く、しまりはやや強い。 |
| 11 | 暗褐色土 | Hue10YR3/4 | 1 と似たような礫や岩片が混じる。1 よりは軟質だが粘性は強い。 |
| 12 | 暗褐色土 | Hue10YR3/3 | 2 mm以下の赤褐、白色の岩片を含み炭化物がわずかに混じる。粘性は強く、しまりあり。 |
| 13 | 黒褐色土 | Hue10YR2/3 | 12 より大きめの礫が混じる。粘性強く、しまりあり。炭化物が混じる。 |
| 14 | 暗褐色土 | Hue7.5YR3/3 | 焼土粒がまばらに入る。粘性ややあり、しまり強い。 |



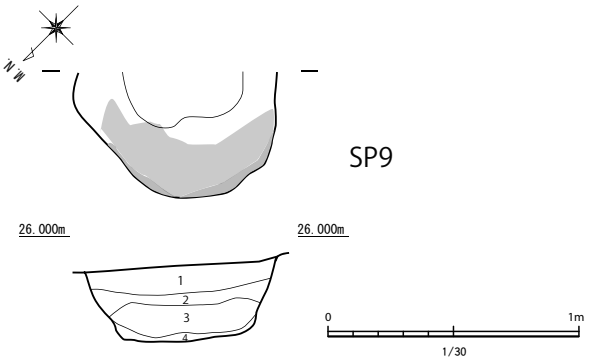

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 暗赤褐色土 | Hue5YR3/4 | Ⅳ層。拳大から 2 cm程度までの礫を多く含む。3 mm以下の赤色、白色の岩片も多量に含む。粘性、しまりともに強い。 |
| 2 | 黒褐色土 | Hue10YR2/3 | Va 層。3 mm程度の赤褐、白色の岩片を含む。粘性、しまりともに非常に強い。 |
| 3 | 黒褐色土 | Hue10YR2/3 | Vb 層。部分的に 2 より礫、岩片ともに多く含む。粘性、しまりともにあり。 |
| 4 | 黒褐色土 | Hue10YR2/1 | Ⅵ層。1 ～ 3 より礫、岩片ともに少なくなる。AT を含み削るとシャリシャリする。 |
| 5 | 暗褐色土 | Hue7.5YR3/4 | Ⅶ層。4 と同様にまばらに礫、岩片を含むが、やや軟質である。 |
| 6 | 暗褐色土 | Hue10YR3/4 | 5 cm程度の礫を含み、3 mm以下の赤褐、白色の岩片を含む。炭化物、褐色のブロックも含む。 |
| 7 | 暗褐色土 | Hue10YR3/4 | 6、8 と比べると礫、粒子ともに極端に少なくなる。やや軟質である。 |
| 8 | 暗褐色土 | Hue10YR3/4 | 6 と似ているが礫が少なく、しまりも弱い。 |
| 9 | 褐色土 | Hue7.5YR4/6 | 焼土である。 |
| 10 | 暗褐色土 | Hue10YR3/3 | 粘性は強いがしまりはややある程度。 |
| 11 | 暗褐色土 | Hue10YR3/4 | 6 と同様。 |
| 12 | 暗褐色土 | Hue10YR3/4 | 8 と似ているが、礫や岩片、褐色ブロックが多くなる。 |

0 1m
1/50

第18図　縄文時代早期SP1・２・３実測図




| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | Hue10YR2/3 | 粘性しまりともにあり。1㎜～3㎜の白色粒、炭化物をまばらに含む。焼土粒を多く含む。 |
| 2 | 黒褐色土 | Hue7.5YR2/3 | 粘性あり、しまり強い。1㎜～7㎜の白色粒をまばらに含み、わずかに焼土粒を含む。 |
| 3 | 黒褐色土 | Hue5YR3/1 | 1㎜～10㎜の白色粒を多く含む。 |
| 4 | 黒褐色土 | Hue7.5YR2/3 | 粘性あり、しまり強い。1㎜～5㎜の白色粒をまばらに含む。細かな焼土粒が多く、炭化物はまばらに含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | Hue10YR3/3 | 粘性ややあり、しまり強い。1㎜～3㎜の白色粒をわずかに含む。焼土粒、炭化物をわずかに含む。 |
| 6 | 黒褐色土 | Hue7.5YR3/2 | 粘性あり、しまり強い。白色粒、赤色粒をまばらに含む。細かな焼土粒をまばらに含む。 |
| 7 | 黒褐色土 | Hue7.5YR3/2 | 粘性弱く、しまりややあり。焼土粒、炭化物を多く含む。やや硬化している。 |
| 8 | 褐色土 | Hue7.5YR4/3 | 粘性なし、しまりもほとんどない。焼土堆積層でありボソボソしている。炭化物も含む。 |
| 9 | 黒褐色土 | Hue7.5YR3/2 | 粘性なく、しまりあり。焼土堆積層であるが、8と比べてしまりはある。焼土はブロック状にはいる。 |
| 10 | 黒褐色土 | Hue10YR2/2 | 粘性ややあり、しまりあり。焼土粒、炭化物をまばらに含む。 |
| 11 | 極暗褐色土 | Hue7.5YR3/2 | 粘性あり、しまり弱い。大きめの白色粒を多く含む。褐色ブロック、白色透明鉱物も含む。 |
| 12 | 暗褐色土 | Hue7.5YR3/3 | 粘性ややあり、しまり弱い。1㎜～5㎜の白色粒が混じり、1㎜程度の赤褐色鉱物、褐色ブロックを含む。 |




| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 黒色土 | Hue7.5YR2/1 | 固くしまっており粘性もある。炭化物と焼土粒を含む。 |
| 2 | 明赤褐色土 | Hue5YR5/8 | 焼土。3より極暗褐色土を多く含み、炭化物も含む。粘性、しまりなし。 |
| 3 | 明赤褐色土 | Hue5YR5/8 | 焼土。粘性、しまりともなし。他の粒子等の混ざりなし。 |
| 4 | 極暗褐色土 | Hue7.5YR2/3 | 粘性、しまりともなし。焼土粒が多く混ざる。 |

第19図　縄文時代早期SP４～８・９実測図

に焼土が堆積し、床面は硬下している。焼土および硬化面はSP8に切られている。

SP8はSP7を切って構築されている。SP7と足場を共有していたと想定すると縦軸1.58m、炉部の幅0.83mとなり、長軸0.59m×短軸0.43m×深さ0.07～0.11mの掘り込みがあった。焼土は掘り込み部にもかかるように堆積していたことより、炉穴機能時に使用されていたと考えられる。SP4の段状の掘り残しとはやや様相を異にするが、炉部と足場は別に掘り込むという点では共通性があり、SP8の掘り込みも、炉部と足場を区分する機能があったと考えられる。

**SP9（第19図、図版３）**

SP9は調査区北東部N2Grに位置し、第６次調査区で検出された炉穴（SP3）から続くと想定される範囲を重機で掘削し、精査中に焼土面を確認した。焼土部分のみの検出のため炉部の残存は長軸0.8m×短軸0.5mである。焼土面の堆積は0.15mあり、強い熱を帯びていたため焼土の周囲には灰白色の土の焼け跡もみられた。分布の様子から第６次調査区のSP3と同群をなし、主軸を東西に向ける炉穴であると考えられる。

## 第６表　縄文時代早期集石遺構一覧表

| 遺構名 | グリッド | 検出層位 | 長軸（m） | 短軸（m） | 掘り込み | | 配石 | 重量（kg） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 残深（m） | 平面形 | | |
| SI5 | L2 | Ⅳ | 1.2 | 1.0 | 0.3 | 円形 | なし | 90.5 |
| SI6 | L3 | Ⅳ | 1.0 | 0.85 | 0.25 | 円形 | なし | 40.3 |
| SI7 | L4 | Ⅳ | 0.8 | 0.1 | 0.1 | 楕円形 | なし | 17.0 |

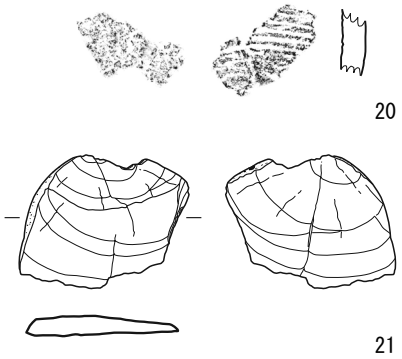
## 第７表　縄文時代早期炉穴一覧表

| 遺構名 | グリッド | 検出層位 | 残存規模 | | | 平面形 | 焼土 | 放射性炭素年代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長軸（m） | 短軸（m） | 残深（m） | | | |
| SP1 | K3 | Ⅴ | 0.86 | 0.5 | 0.6 | 不明 | 疎らに堆積 | ― |
| SP2 | K3 | Ⅴ | 0.86 | 0.78 | 0.64 | 不明 | 比較的厚く堆積 | ― |
| SP3-1 | K4 | Ⅴ | 0.7 | 0.6 | 0.64 | 不明 | なし | 9565±30年BP |
| SP3-2 | | Ⅴ | 0.85 | 0.8 | 0.9 | 不明 | 明瞭な焼土あり | ― |
| SP3-3 | | Ⅴ | 0.66 | 0.66 | 0.5 | 不明 | なし | ― |
| SP4 | L2 | Ⅴ | 2.03 | 0.9 | 0.45 | 長楕円形 | 40cm程度の焼土あり | 9490±30年BP |
| SP5 | | Ⅴ | 0.91 | 0.92 | 0.4 | 長楕円形 | 浅く疎らに堆積 | ― |
| SP6 | | Ⅴ | 1.44 | 0.89 | 0.48 | 長楕円形 | 南側に厚く堆積 | 9485±30年BP |
| SP7 | | Ⅴ | 1.23 | 0.63 | - | 長楕円形 | 疎らに堆積 | ― |
| SP8 | | Ⅴ | 1.58 | 0.83 | 0.75 | 長楕円形 | 明瞭な焼土あり | 9490±30年BP |
| SP9 | N2 | Ⅴ | 0.8 | 0.5 | 0.3 | 不明 | 15cm程度の焼土あり | 9380±30年BP |

### 3-3. 遺構内遺物（第20図20・21、図版５）

第２群の炉穴からは、SP6の埋土から土器片２点、SP8の埋土上層から石器１点が出土している。ただし、土器片１点は風化が激しいため、土器片１点、石器１点を図化し報告する。なお、図示できなかった１点は深鉢形土器の口縁部で、内面に横方向の条痕を有していた。

SP6出土の20は深鉢形土器の口縁部付近で、内面に横方向の比較的シャープな条痕が施されている。SP8出土の21はホルンフェルス製の使用痕のある剥片である。左側縁部および右側縁の一部に自然面を残し、打面の反対側の鋭利な部位に使用によると思われる剥離がみられる。




第20図　遺構内出土遺物実測図

### 3-4. 包含層内遺物

縄文時代早期に属する遺物はⅣ･Va層で出土した。

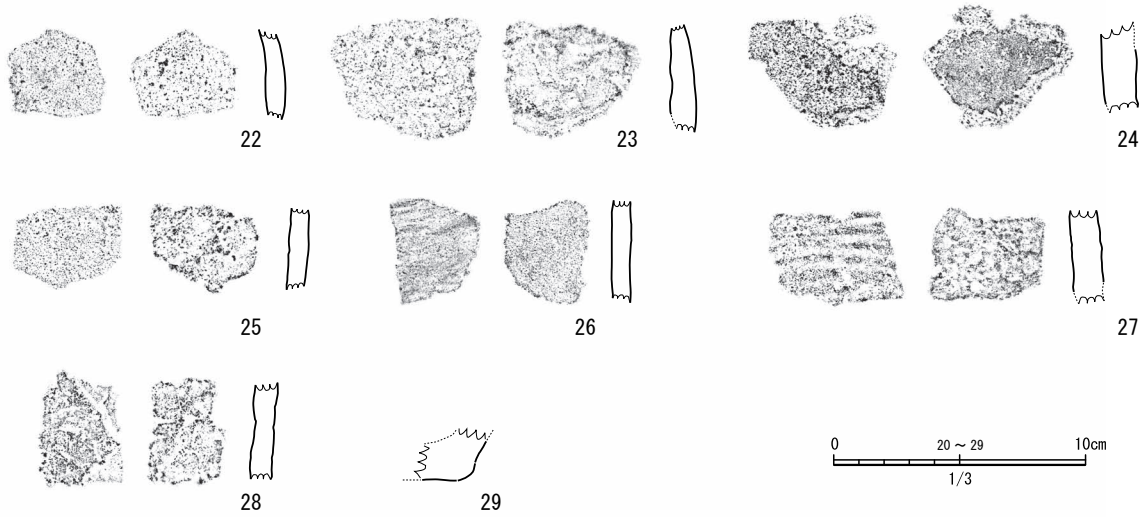
#### （１）土器（第21図22～29、図版５）

縄文時代早期層（Ⅳ～Va層）から出土した土器に関しては、ほとんどが小破片で風化が著しい。また、文様や形状が不明瞭であり型式を特定できるものも少ないため実測等に耐えうるもののみ８点を実測した。

22～28は深鉢形土器の胴部片で、22～25は風化が激しく調整は不明瞭である。26は風化が激しいものの外面にナデ調整がみられる。27は内面をナデ調整、外面に条痕が施されている。28は外面に指圧痕がみられる。29は深鉢形土器の底部である。風化のため土器面が摩耗して器形に変化がみられる。

#### （２）石器（第22～25図30～76、図版５・６）

石器の出土数は143点で、石鏃２点、楔形石器１点、スクレイパー８点、蛤形剥片石器15点、二次加工剥片３点、微細剥離剥片１点、剥片82点、石核２点、礫器７点、打製石斧４点、石錘１点、磨石10点、不明７点である。そのうち、48点を図化した。利用石材はホルンフェルスや砂岩が多く黒曜石といった石材はほとんどみられない。




第21図　縄文時代早期土器実測図

**石鏃(第22図30・31)**

30はチャート製で完形である。平面形は二等辺三角形に近く、両側縁は膨らみをもち丁寧に整形されている。基部には抉りがみられる。31は上青木・桑ノ木津留産系の黒曜石で、左脚部がわずかに欠損する。平面形は正三角形に近く、両側縁の形状はやや膨らみをもち基部はわずかに内湾する。

**楔形石器(第22図32)**

チャート製で両設打面を有する楔形石器である。

**スクレイパー(第22図33～40)**

33～35はホルンフェルス製で背面に大きく自然面を残す。33は縦長剥片を素材とし、はじめ右側縁に大きく加工を行い、細かな加工を施して刃部を作出している。34は下部が欠損しているが、剥片端部に連続的に剥離を行い刃部を作出している。35は不定形剥片を素材とし、下縁部には鋸歯状を呈する刃部を作出している。36～40は砂岩製である。36は幅広の剥片を素材とする。周縁に連続的に加工を施し刃部を作出している。上部は欠損している。37は厚みのある幅広の剥片を素材とし、背面下縁部及び腹面上縁に急斜度な加工を施す。右側は欠損している。38は縦長剥片を素材とし、大まかな剥離で整形し、下縁に細かな加工を施している。石斧からの転用品の可能性も考えられる。39は幅広い剥片を素材とし背面に大きく自然面を残す。腹面の上縁及び下縁に加工を施し刃部を作出している。石斧の未製品とも考えられる。40は厚みのある不定形剥片を素材とし、背腹面にはそれぞれ自然面、節理を残す。左側縁下部に抉りを入れ刃部を作出している。石核の転用品の可能性も考えられる。

**蛤形剥片石器(第22・23図41～55)**

自然礫から打面調整を行わず剥離された剥片の素材を生かしたものを一括して蛤形剥片石器として報告する。これらは珪質頁岩製、ホルンフェルス製、砂岩製の剥片を素材としている。41～43・55・57は周縁に、44～46・50は下縁周辺に使用痕らしき微細剥離がみられる。47は下縁に刃部を作出するための加工が施されている。48・49は剥離された際に下部が薄く剥離され、それらを刃部として活用している。53～55は側縁を細かな剥離で整えている。

**二次加工剥片(第23図56・57)**

56は姫島産黒曜石で、両設方向からの剥片剥離がみられ、下縁には細かな剥離を施している。57は自然面を大きく残した横長剥片を素材とし、右側縁に二次加工を施している。

**微細剥離剥片(第23図58)**

58はホルンフェルス製の縦長剥片を素材とする。背面左部から下部にかけて自然面を残す。下縁に微細剥離痕がみられる。

**石核(第23図59・60)**

59・60は砂岩製の石核である。60には両面に敲打痕がみられる。

**礫器(第24図61～66)**

61～65はやや厚みのあるホルンフェルス製で、両面とも自然面を残す。下縁に粗い加工を施し刃部を作出している。61は右部を欠損している。65は左側縁に細かな剥離作業を行い尖頭状に刃部を作出している。66は砂岩製である。大きな剥離ののち下縁に粗い加工を施し刃部を作出している。

**打製石斧(第24図67～69)**

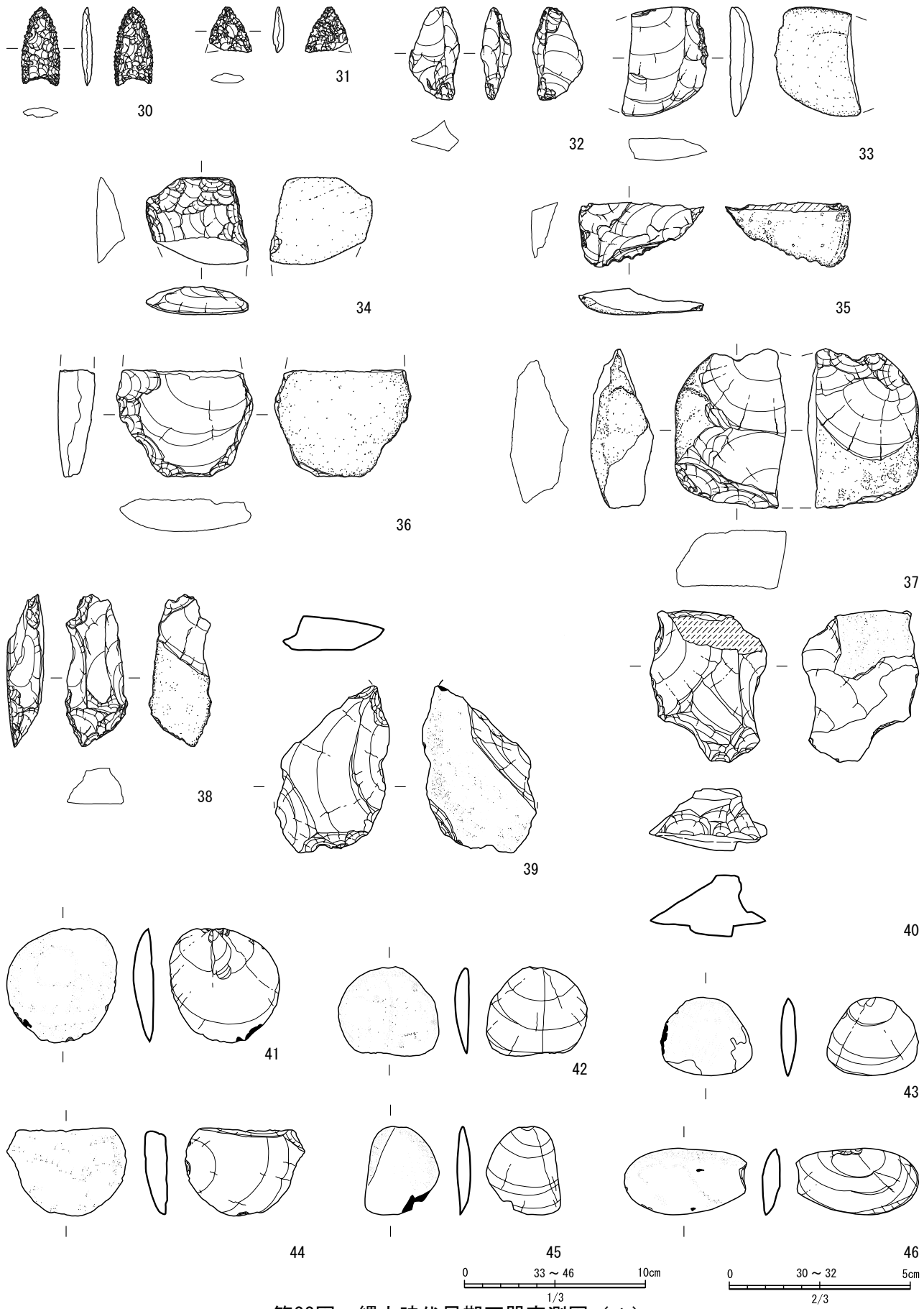
67～69は背面に自然面を残す剥片を素材としている。背面から周縁にかけて剥離を行い、両側縁が直線的になるように調整している。横断面がカマボコ状になる。67・69は刃部を、68は上部を欠損している。

**石錘(第25図70)**

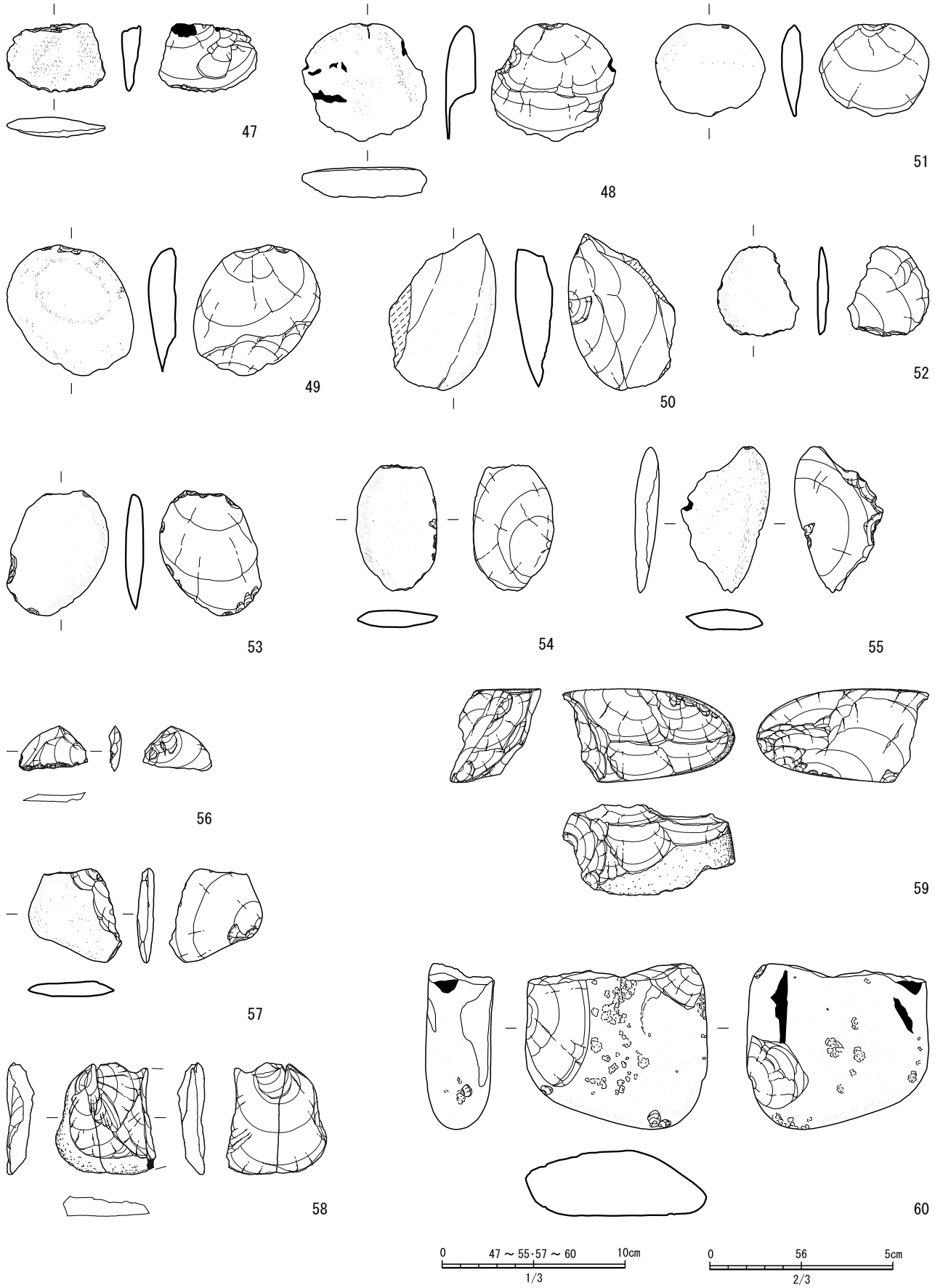
70は砂岩製の扁平な礫を素材とする。長軸方向に抉入状の加工を施し着紐部を作り出している。

**磨石(第25図71～76)**

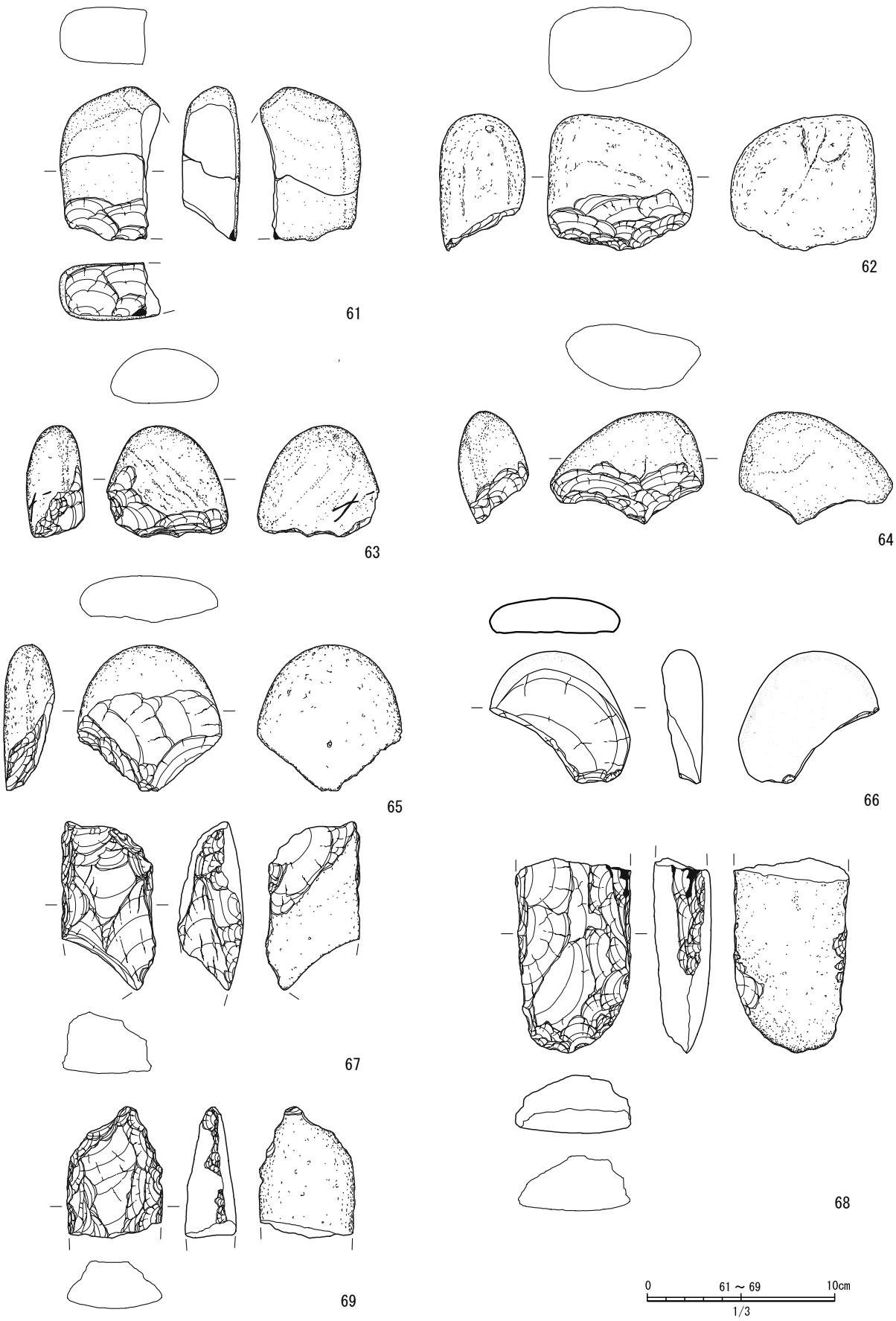
71・72は砂岩製である。71は両面ともに中央に縦長の凹みと摩滅がみられる。上部には抉入状の加工が施されている。石錘としての転用も考えられる。72は上部が欠損している。周縁に敲打痕がみられる。73～75は尾鈴山溶結凝灰岩製である。円礫を素材とし両面に摩滅がみられる。73は両側縁に顕著な摩滅がみられる。76は上部を欠損しているが、被熱を受けているため赤化している。



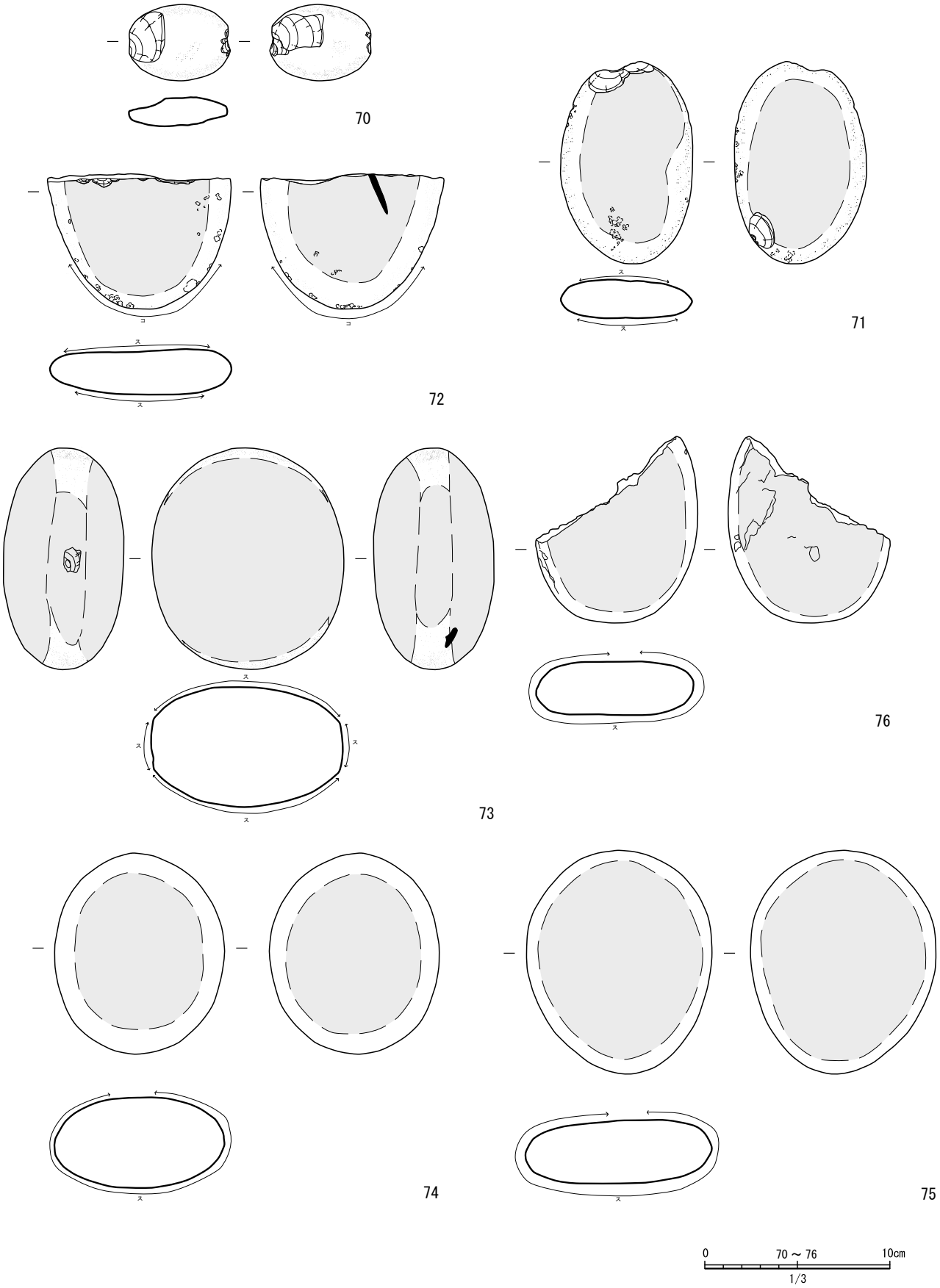

第22図　縄文時代早期石器実測図（１）




第23図　縄文時代早期石器実測図（２）




第24図　縄文時代早期石器実測図（３）




第25図　縄文時代早期石器実測図（４）

## 第８表　縄文時代早期土器観察表

| No. | 出土地点（グリッド） | 器種 | 部位 | 法量 | | | 手法・調整・文様ほか | | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 外 | 内 | 外 | 内 | |
| 20 | SP6 | 深鉢 | 口縁部 | ― | ― | ― | 風化のため調整不明 | 横方向の条痕文 | 灰褐 ５YR4/2 | 黒褐 ５YR2/1 | 2.5㎜以下の灰白粒、２㎜以下の黒色光沢粒、１㎜以下のにぶい橙粒、透明光沢粒 |
| 22 | L2 | 深鉢 | 胴部 | ― | ― | ― | 風化のため調整不明 | 風化のため調整不明 | にぶい赤褐 ５YR4/4 | 黒褐 7.5YR3/2 | ３㎜以下の灰褐粒、2.5㎜以下の透明光沢粒、２㎜以下の黒粒、褐色粒 |
| 23 | L2 | 深鉢 | 胴部 | ― | ― | ― | 風化のため調整不明 | 風化のため調整不明 | 明赤褐 ５YR5/6 | 黒褐 10YR3/2 | 1.5㎜以下のにぶい黄橙粒、１㎜以下の黒粒、黒色光沢粒 |
| 24 | L4 | 深鉢 | 胴部 | ― | ― | ― | 風化のため調整不明 | 風化のため調整不明 | 褐 7.5YR4/3 | 明褐 7.5YR5/6 | ３㎜以下の灰褐粒、灰白粒、２㎜以下の黒色粒、１㎜以下の透明光沢粒 |
| 25 | L3 | 深鉢 | 胴部 | ― | ― | ― | 風化のため調整不明 | 風化のため調整不明 | 赤褐 ５YR4/6 | 黒褐 7.5YR3/1 | ４㎜以下の褐色粒、３㎜以下の灰白粒、２㎜以下の黒色光沢粒、１㎜以下の透明光沢粒 |
| 26 | L2 | 深鉢 | 胴部 | ― | ― | ― | ナデ | 風化のため調整不明 | 明褐 7.5YR5/8 | 橙 7.5YR6/6 | ６㎜以下の灰褐粒、３㎜以下の橙粒、２㎜以下の黒色光沢粒、明褐粒、黄橙粒 |
| 27 | K3 | 深鉢 | 胴部 | ― | ― | ― | 条痕 | ナデ | 橙 7.5YR6/6 | 橙 7.5YR7/6 | ２㎜以下の赤褐粒、灰白粒、1.5㎜以下の透明光沢粒 |
| 28 | L2 | 深鉢 | 胴部 | ― | ― | ― | 風化のため調整不明 | 指圧痕 | 橙 7.5YR7/6 | にぶい橙 7.5YR7/4 | ２㎜以下の灰白粒、１㎜以下の黒色粒 |
| 29 | K3 | 深鉢 | 底部 | ― | ― | ― | 風化のため調整不明 | 風化のため調整不明 | 橙 7.5YR6/6 | ― | １㎜以下の灰白粒 |

## 第９表　縄文時代早期石器計測表

| No. | 出土地点（グリッド） | 層 | 器種 | 石材 | 法量 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） |
| 21 | SP8 | － | 剥片 | ホルンフェルス | 5.35 | 6.70 | 0.80 | 29.6 |
| 30 | L4 | Ⅴ | 石鏃 | チャート | 1.94 | 1.06 | 0.28 | 0.7 |
| 31 | L2 | Ⅳ | 石鏃 | 上青木・桑ノ木津留産黒曜石 | 1.18 | 1.07 | 0.29 | 0.3 |
| 32 | K4 | Ⅳ | 楔形石器 | チャート | 2.51 | 1.31 | 0.82 | 1.8 |
| 33 | L2 | Ⅴ | スクレイパー | ホルンフェルス | 5.81 | 4.34 | 1.26 | 46.0 |
| 34 | L3 | Ⅴ | スクレイパー | ホルンフェルス | 4.80 | 5.21 | 1.53 | 46.0 |
| 35 | － | カクラン | スクレイパー | ホルンフェルス | 3.45 | 6.75 | 1.38 | 25.9 |
| 36 | K3 | Ⅳ | スクレイパー | 砂岩 | 5.83 | 7.45 | 1.98 | 111.7 |
| 37 | L3 | Ⅴ | スクレイパー | 砂岩 | 8.75 | 6.07 | 3.41 | 218.4 |
| 38 | L3 | Ⅴ | スクレイパー | 砂岩 | 8.25 | 3.41 | 2.01 | 60.1 |
| 39 | K4 | Ⅳ | スクレイパー | 砂岩 | 9.30 | 6.30 | 1.90 | 103.7 |
| 40 | L3 | Ⅴ | スクレイパー | 砂岩 | 8.45 | 6.40 | 3.45 | 153.9 |
| 41 | L3 | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | 珪質頁岩 | 6.30 | 6.10 | 1.10 | 45.2 |
| 42 | L3 | Ⅴ | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 4.95 | 5.55 | 0.75 | 23.7 |
| 43 | N2 | Ⅴ | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 3.10 | 3.55 | 0.60 | 6.7 |
| 44 | L3 | Ⅴ | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 6.60 | 4.80 | 1.25 | 50.0 |
| 45 | N2 | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 4.90 | 3.90 | 0.70 | 17.4 |
| 46 | K3 | Ⅴ | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 3.70 | 6.80 | 0.95 | 28.9 |
| 47 | L3 | Ⅴ | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 3.70 | 5.25 | 1.00 | 20.6 |
| 48 | K3 | Ⅴ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 6.40 | 6.60 | 1.60 | 62.0 |
| 49 | L2 | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 7.15 | 6.90 | 1.50 | 74.4 |
| 50 | L2 | Ⅴ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 8.60 | 5.60 | 2.00 | 107.5 |
| 51 | L2 | Ⅴ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 5.10 | 6.00 | 1.10 | 34.8 |
| 52 | L2 | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 5.50 | 4.35 | 0.60 | 12.7 |

| No. | 出土地点（グリッド） | 層 | 器種 | 石材 | 法量 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） |
| 53 | L3 | Ⅴ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 6.85 | 5.55 | 0.95 | 43.6 |
| 54 | K4 | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 6.90 | 4.40 | 0.90 | 34.8 |
| 55 | － | Ⅴ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 8.00 | 4.70 | 1.30 | 44.4 |
| 56 | － | Ⅴ | 二次加工剥片 | 姫島産黒曜石 | 1.10 | 1.85 | 0.30 | 0.4 |
| 57 | L3 | Ⅴ | 二次加工剥片 | ホルンフェルス | 5.15 | 5.10 | 0.90 | 25.9 |
| 58 | L3 | Ⅳ | 微細剥離剥片 | ホルンフェルス | 6.05 | 5.29 | 1.47 | 42.5 |
| 59 | L3 | Ⅴ | 石核 | 砂岩 | 5.09 | 8.55 | 3.91 | 215.0 |
| 60 | N2 | Ⅴ | 石核 | 砂岩 | 9.05 | 9.05 | 3.60 | 476.2 |
| 61 | L2 | Ⅳ | 礫器 | ホルンフェルス | 8.16 | 4.83 | 3.05 | 189.5 |
| 62 | K3 | Ⅳ | 礫器 | ホルンフェルス | 7.06 | 7.73 | 4.51 | 333.6 |
| 63 | L3 | Ⅴ | 礫器 | ホルンフェルス | 5.84 | 6.19 | 3.02 | 154.0 |
| 64 | － | Ⅲ | 礫器 | ホルンフェルス | 5.88 | 8.10 | 3.63 | 168.2 |
| 65 | － | Ⅴ | 礫器 | ホルンフェルス | 7.75 | 7.70 | 2.64 | 179.1 |
| 66 | L3 | Ⅴ | 礫器 | 砂岩 | 7.10 | 7.50 | 2.20 | 121.1 |
| 67 | K3 | Ⅳ | 打製石斧 | ホルンフェルス | 7.87 | 4.87 | 3.47 | 158.4 |
| 68 | K3 | Ⅳ | 打製石斧 | 砂岩 | 10.20 | 6.08 | 3.03 | 249.6 |
| 69 | K2 | Ⅴ | 打製石斧 | 砂岩 | 6.74 | 5.08 | 2.72 | 107.3 |
| 70 | － | Ⅱ | 石錘 | 砂岩 | 5.50 | 5.10 | 1.50 | 55.7 |
| 71 | M3 | Ⅴ | 磨石 | 砂岩 | 12.00 | 7.15 | 2.10 | 229.7 |
| 72 | － | Ⅱ | 磨石 | 砂岩 | 7.40 | 9.90 | 2.45 | 258.1 |
| 73 | － | Ⅱ | 磨石 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 12.00 | 10.40 | 6.50 | 1173.6 |
| 74 | － | 表 | 磨石 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 10.90 | 9.15 | 4.90 | 706.2 |
| 75 | － | Ⅲ | 磨石 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 12.15 | 10.05 | 3.45 | 640.0 |
| 76 | K3 | Ⅳ | 磨石 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 10.10 | 8.80 | 2.90 | 321.4 |

## 第４節　その他の時代の遺構と遺物

### 4-1. 概要

斜面部の表土を除去し精査した後、斜面部下段Ⅱ層上面において溝状遺構２条、土坑１基、小穴61基を検出した（第26図）。時期は判断しづらいため、ここで取り扱うこととした。

### 4-2. 遺構

**（１）SE1（第27図、図版３）**

長さは8.8m、中央部の断面幅は1.2m、最深0.15m、検出面では、最も高い中央部と最も低い南部とのレベル差は0.47mであった。SE１を構築した後にSE２を構築していたため、SE１の南部のほとんどは消失していた。埋土は１層で、遺物は出土しなかった。

**（２）SE2（第27図、図版３）**

長さは8.5m、中央部の断面幅は0.6m、最深0.2m、検出面では、最も高い中央部と最も低い南部とのレベル差は0.36mであった。中央部には16個の礫で長さ0.95mに渡って石が規則的に組まれていた。ただ、畑などによる削平のため一部を損傷していると思われる。埋土は１層で、遺物は出土しなかった。

**（３）SC3（第27図、図版３）**

溝状遺構を掘削時に検出された土坑である。溝状遺構で削平をうけており検出面では長軸1.3m×短軸0.7mの方形のプランをなす。深さは0.1m程度であり、ごく浅い。用途は不明である。

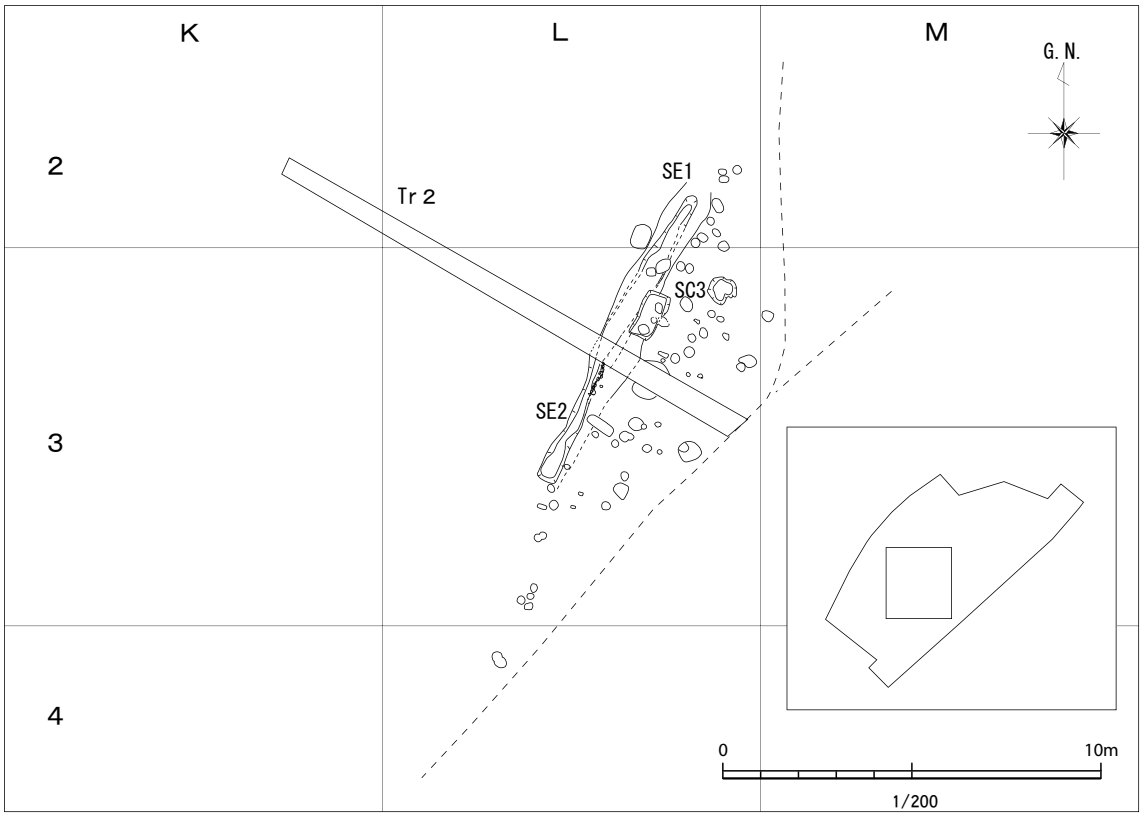
**（４）小穴（図26図、図版３）**

調査区中央の斜面下段においてⅡ層掘削時に多く検出されたが、遺物の出土も少ないことから時期、用途ともに不明である。分布状況のみを示す（第26図）。隣接する第９次調査の遺物出土状況や分布状況を加味すると近世の可能性が考えられる。

### 4-3. 遺物

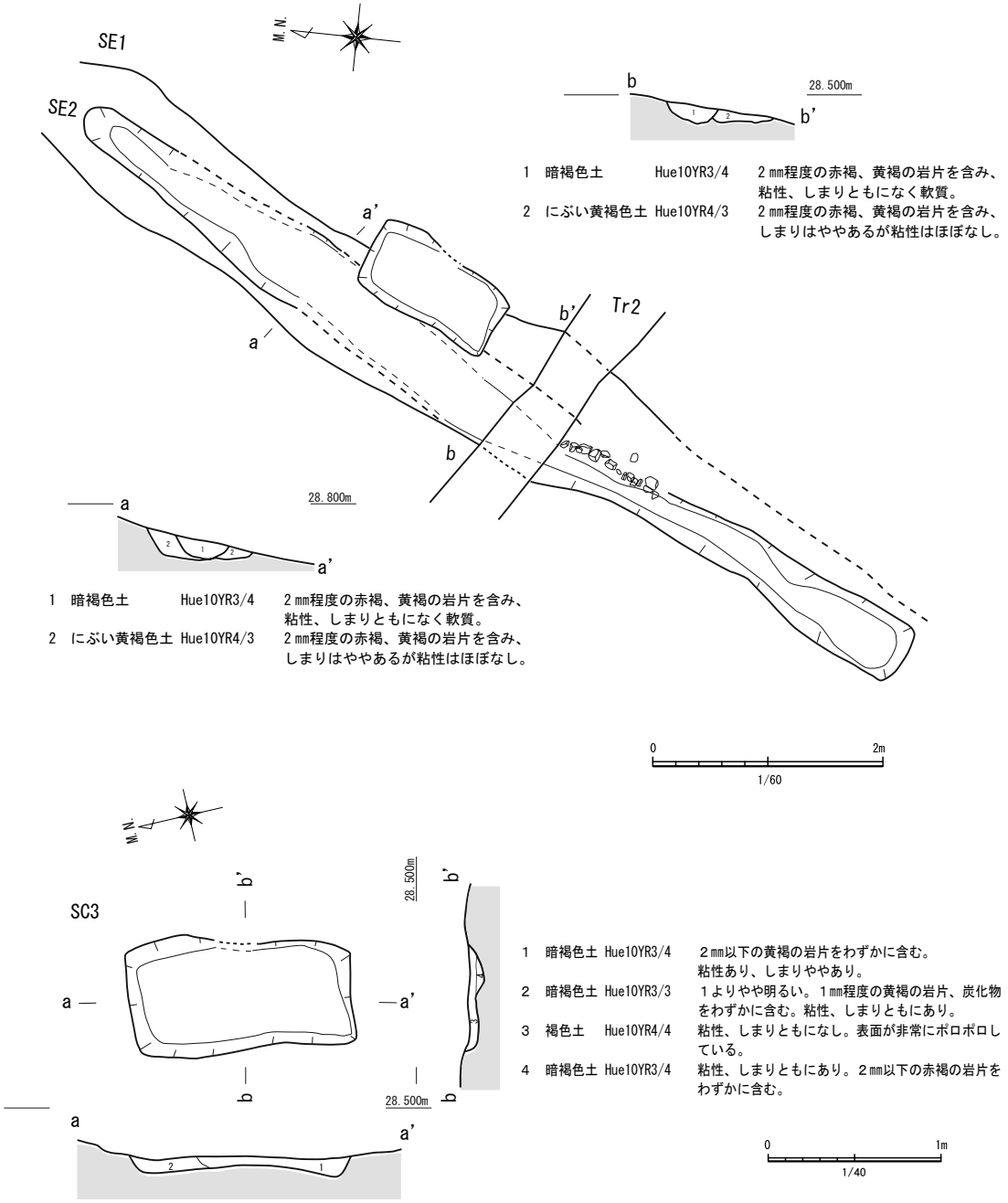
**（１）陶磁器（第28図77～83、図版６）**

77～83は国産陶磁器である。77は染付皿の底部で見込みは不明であるが、高台にハリ跡がみられる。78は染付丸碗の口縁部で外面に草花文を施文する。

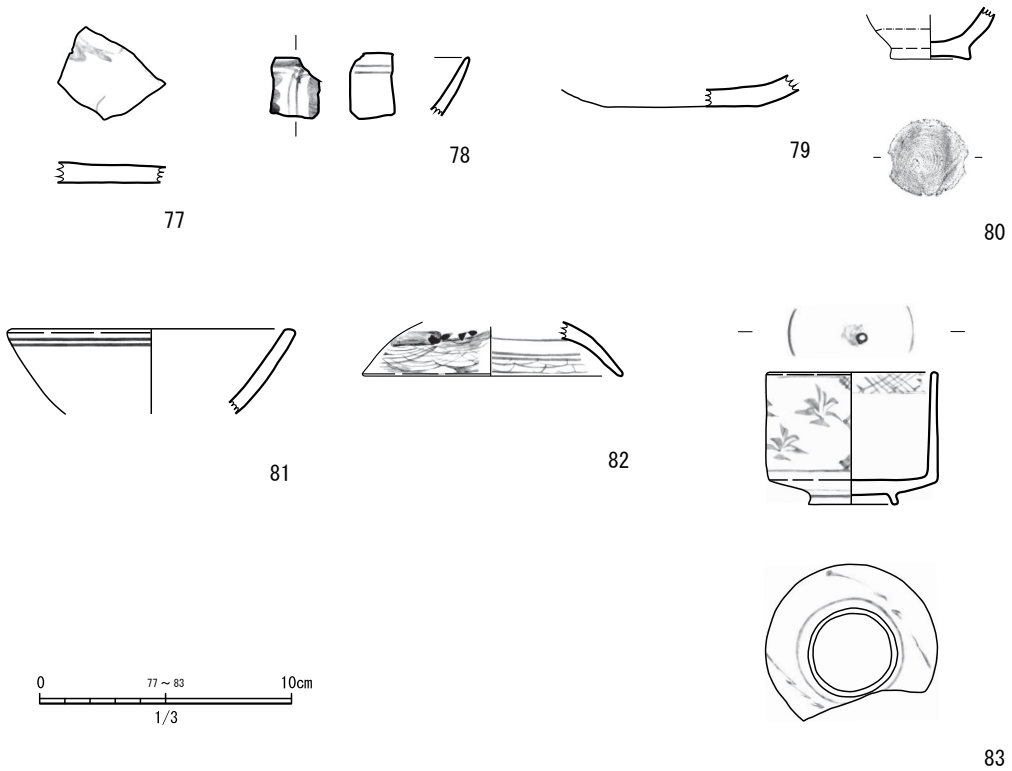



第26図　その他の時代遺構分布図

79は土瓶の底部で重ね焼きの時についたと思われる溶着痕がみられる。80は碗の底部に回転糸切り痕を残す。81は統制陶器の口縁部で二重圏線がみられる。82は碗蓋の口縁部で外面は山水文、内面は簡略化した青海波文を施文する。83は筒形碗で、外面は四つ目結び文で区画し、その中に草文を描く。内面口縁部には四方襷文を巡らし、見込みには五弁花文を施文する。




第27図　その他の時代溝状遺構・土坑実測図




第28図　その他の時代陶磁器実測図

## 第10表　その他の時代陶磁器観察表

| No. | 出土地点（グリッド） | 種別 | 器種 | 部位 | 法量 | | | 手法・調整・文様ほか | | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 外 | 内 | 外 | 内 | | |
| 77 | 撹乱 | 染付 | 皿 | 底部 | ― | ― | ― | ハリ跡あり | 施釉 | 釉　灰白 N8/0 | 胎土　灰白 5Y8/1 | 精良 | 17ｃ　肥前系 |
| 78 | 撹乱 | 染付 | 碗 | 口縁 | ― | ― | ― | 草花文 | 施釉 | 釉　灰色 10Y8/1 | 胎土　灰色 7.5YR8/1 | 精良 | 18ｃ後半　肥前系 |
| 79 | 撹乱 | 陶器 | 土瓶 | 底部 | ― | 6.0 | ― | | 施釉 | 釉　暗オリーブ褐 2.5YR3/3 | 胎土　にぶい橙 5YR6/4 | 精良 | |
| 80 | N2 | 陶器 | 碗 | 体～底部 | ― | 3.2 | ― | 回転糸切り痕あり | 施釉 | 釉　橙 7.5YR7/6 | 胎土　にぶい橙 7.5YR7/4 | 精良 | |
| 81 | N1 | 磁器 | 碗 | 口縁～体部 | 11.3 | ― | ― | 施釉 | 施釉 | 釉　白色 9/0 | 胎土　白色 9/0 | 精良 | 統制陶器 |
| 82 | 表採 | 染付 | 碗蓋 | 口縁 | 10.3 | ― | ― | 山水文 | 簡略化した青海波紋 | 釉　灰白 10Y8/1 | 胎土　灰白 N8/0 | 精良 | 18ｃ後半　肥前系 |
| 83 | 表採 | 染付 | 筒形碗 | 口縁～底部 | 6.95 | 3.65 | 5.4 | 四つ目結び文<br>草文 | 四方襷文<br>見込五弁花文くずれ | 釉　灰白 10Y8/1 | 胎土　灰白 N8/0 | 精良 | 18ｃ後半　肥前系 |

## 第５節　自然科学分析

本遺跡の炉穴の埋土中より炭化材、焼土が確認された。それらを試料として放射性炭素年代測定（AMS法）と樹種同定を実施した。放射性炭素年代測定は、遺構の時期決定の参考にする目的で実施し、樹種同定は、当時の遺跡周辺の植生を復元するとともに、当時の植物利用の実態を推察する目的で実施した。

各分析に使用した試料及び分析方法・結果等については下記に掲載した。

### １　放射性炭素年代測定

#### 1-1.　試料と方法

第11表参照。

#### 2-2.　測定結果

加速器質量分析法（AMS）によって得られた$^{14}$Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（$^{14}$Ｃ）年代および暦年代（較正年代）を算出した。第12表にこれらの結果を示し、第29図に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

**（１）δ$^{13}$Ｃ測定値**

試料の測定$^{14}$Ｃ/$^{12}$Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}$Ｃ/$^{12}$Ｃ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ$^{13}$Ｃ値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

**（２）放射性炭素（$^{14}$Ｃ）年代測定値**

試料の$^{14}$Ｃ/$^{12}$Ｃ比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。$^{14}$Ｃの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差（±）は１σ（68.2%確率）である。$^{14}$Ｃ年代値は下１桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下１桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

**（３）暦年代（Calendar Years）**

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中$^{14}$Ｃ濃度の変動および$^{14}$Ｃの半減期の違いを較正することで、放射性炭素（$^{14}$Ｃ）年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な$^{14}$Ｃ測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と$^{14}$Ｃ年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 09、較正プログラムはOxCal 3.1である。

暦年代（較正年代）は、$^{14}$Ｃ年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により１σ（68.2%確率）と２σ（95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・２σ値が表記される場合もある。（　）内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は$^{14}$Ｃ年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

#### 2-3.　所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№.１では9565±30年BP（２σの暦年代でBC9140～8780年）、№.２では9490±30年BP（BC9120～9000,8920～8900,8860～8700,8680～8650年）、№.４では9485±30年BP（BC9120～9070,9060～9010,8850～8700,8680～8640年）、№.５では9490±30年BP（BC9120～9000,8920～8900,8860～8700,8680～8650年）、№.６では9380±30年BP（BC8750～8560年）の年代値が得られた。

文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon,37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, p.355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

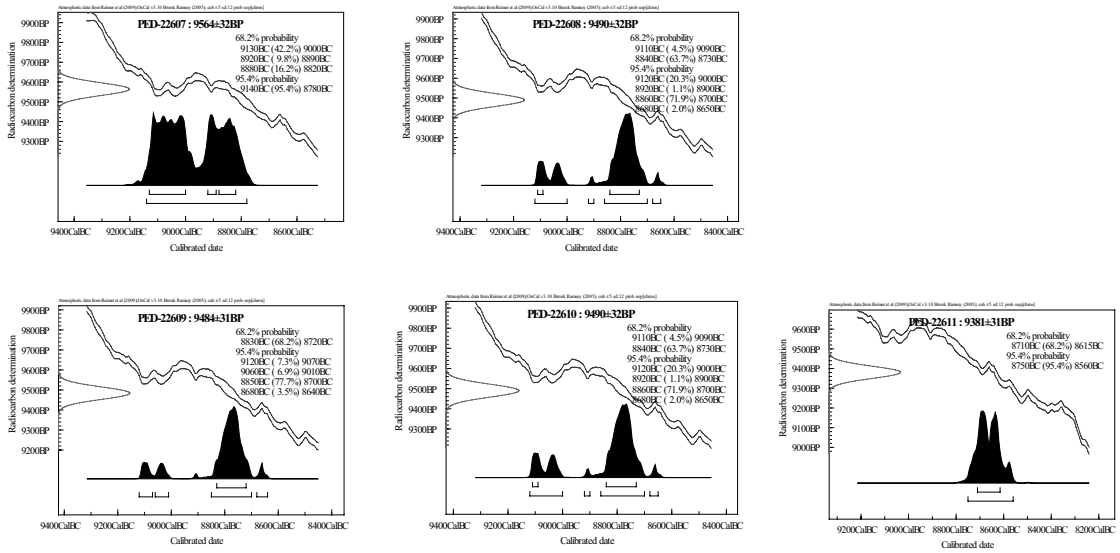
中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p.301-322.

## 第11表　測定試料、前処理・調整法および測定法

| 試料No. | 採取箇所 | 種類 | 前処理・調整法 | 測定法 |
|---|---|---|---|---|
| No.１ | SP ３，焼土中 | 炭化材（広葉樹） | 超音波洗浄，酸－ｱﾙｶﾘ－酸処理 | AMS |
| No.２ | SP ４，焼土中 | 炭化材（クルミ属） | 超音波洗浄，酸－ｱﾙｶﾘ－酸処理 | AMS |
| No.４ | SP ６，焼土中 | 炭化材（コナラ属コナラ節） | 超音波洗浄，酸－ｱﾙｶﾘ－酸処理 | AMS |
| No.５ | SP ８，焼土中 | 炭化材（ニレ属） | 超音波洗浄，酸－ｱﾙｶﾘ－酸処理 | AMS |
| No.６ | SP ９，焼土中 | 炭化材（クリ） | 超音波洗浄，酸－ｱﾙｶﾘ－酸処理 | AMS |

## 第12表　放射性炭素年代測定法結果

| 試料No. | 測定番号 PED- | $\delta^{13}C$ (‰) | 暦年較正用年代（年 BP） | $^{14}C$ 年代（年 BP） | 暦年代（較正年代）：cal- | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | １σ（68.2%確率） | ２σ（95.4%確率） |
| 1 | 22607 | -26.83 ± 0.17 | 9564 ± 32 | 9565 ± 30 | BC9130-9000(42.2%)<br>BC8920-8890( 9.8%)<br>BC8880-8820(16.2%) | BC9140-8780(95.4%) |
| 2 | 22608 | -25.85 ± 0.24 | 9490 ± 32 | 9490 ± 30 | BC9110-9090( 4.5%)<br>BC8840-8730(63.7%) | BC9120-9000(20.3%)<br>BC8920-8900( 1.1%)<br>BC8860-8700(71.9%)<br>BC8680-8650( 2.0%) |
| 4 | 22609 | -27.83 ± 0.19 | 9484 ± 31 | 9485 ± 30 | BC8830-8720(68.2%) | BC9120-9070( 7.3%)<br>BC9060-9010( 6.9%)<br>BC8850-8700(77.7%)<br>BC8680-8640( 3.5%) |
| 5 | 22610 | -25.35 ± 0.23 | 9490 ± 32 | 9490 ± 30 | BC9110-9090( 4.5%)<br>BC8840-8730(63.7%) | BC9120-9000(20.3%)<br>BC8920-8900( 1.1%)<br>BC8860-8700(71.9%)<br>BC8680-8650( 2.0%) |
| 6 | 22611 | -25.67 ± 0.23 | 9381 ± 31 | 9380 ± 30 | BC8710-8615(68.2%) | BC8750-8560(95.4%) |




第29図　暦年較正結果

## ２　樹種同定

### 2-1.　試料

試料は、SP3、SP4、SP6、SP8、SP9の焼土中から採取された炭化材７点である。

### 2-2. 方法

以下の手順で樹種同定を行った。

１）試料を洗浄して付着した異物を除去

２）試料を割折して、木材の基本的三断面（横断面：木口，放射断面：柾目，接線断面：板目）を作成

３）落射顕微鏡（40～1000倍）で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

### 2-3. 結果

第13表に同定結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真（第30図）を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

１）クルミ属　Juglans　クルミ科　（試料２、３）

大型で丸い道管が単独あるいは２～数個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が多少波打ちながら短接線状に１列に並び、網状柔組織をつくる傾向がある。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性放射組織型で平伏細胞からなるが、ときおり上下の縁辺にいくぶん大きい方形細胞が見られ１～３細胞幅である。

以上の特徴からクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15～30m、径70～90cmである。材は耐朽性、保存性は低いが、狂いが少なく靭性に富んでいて、建築、器具、彫刻など広く用いられる。

２）クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　（試料６、７）

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は単列の同性放射組織型で平伏細胞からなる。

以上の特徴よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

３）コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　（試料４）

年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性放射組織型で平伏細胞からなる単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

４）ニレ属　Ulmus　ニレ科　（試料５）

年輪のはじめに中型から大型の道管が１～３列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなり同性放射組織型で１～５細胞幅ぐらいである。

以上の特徴よりニレ属に同定される。ニレ属にはハルニレ、オヒョウなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

５）広葉樹　broad-leaved tree　（試料１）

道管と放射組織が存在する。試料の保存状態が悪く小片で広範囲の観察が困難なため、広葉樹の同定にとどめた。

## 2-4. 所見

樹種同定の結果、各遺構の埋土中から採取された炭化材では、クルミ属２点、クリ２点、コナラ属コナラ節１点、ニレ属１点、広葉樹1点が同定された。クルミ属は、沢沿いなどの適潤地に生育する落葉高木である。クリは、暖温帯と冷温帯の中間域では、純林を形成することもあり、乾燥した台地や丘陵地を好む落葉高木で二次林要素でもある。コナラ属コナラ節は、日当たりの良い山野に生育する落葉高木で、温帯を中心に広く分布する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帯性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。ニレ科は温帯を中心とした湿潤地ないし山地に分布する落葉広葉樹である。いずれの樹種も当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

文献

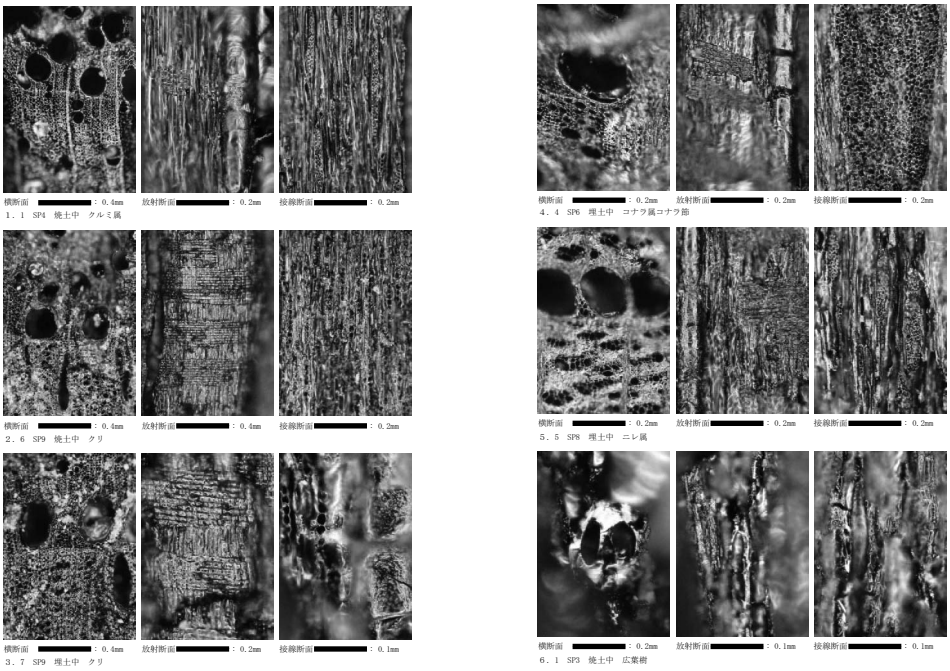
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別１号．植生史研究会，242p.

### 第13表　樹種同定結果

| 分析番号 | 遺構番号 | 出土位置 | 結果（学名／和名） | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | SP3 | 焼土中 | broad-leaved tree | 広葉樹 |
| 2 | SP4 | 焼土中 | Juglans | クルミ属 |
| 3 | SP4 | 埋土中 | Juglans | クルミ属 |
| 4 | SP6 | 埋土中 | Quercus sect. Prinus | コナラ属コナラ節 |
| 5 | SP8 | 埋土中 | Ulmus | ニレ属 |
| 6 | SP9 | 焼土中 | Castanea crenata Sieb. et Zucc. | クリ |
| 7 | SP9 | 埋土中 | Castanea crenata Sieb. et Zucc. | クリ |




第30図　炉穴出土の炭化材

## 第６節　小結

岡遺跡（第16次調査）では、後期旧石器時代、縄文時代早期にかけての遺構・遺物を確認した。縄文時代早期以降の遺構・遺物は旧地形の改変が激しく、なおかつ道路建設時にも削平をうけていたためほとんど確認することができなかった。後期旧石器時代及び縄文時代早期にかけては、隣接する第６次調査、第９次調査と出土する遺構・遺物が同様の様相をみせていることより比較検討を行いながら本調査の調査成果について触れ小結とする。

**後期旧石器時代**

後期旧石器時代は、ATを境に２時期の遺物が確認されたが、AT下位層は珪質頁岩製の微細剥離剥片１点のみであった。第９次調査では、本調査区に比較的近いK4Gr、J5Gr、I5GrのAT下位層から遺物が11点確認されている。そのうち同石材の珪質頁岩は８点あるが、石錐（１）、スクレイパー（３）、微細剥離剥片（６）、剥片（７）の４点は、本調査区から出土した微細剥離剥片と肉眼での判断ではあるが限りなく同一母岩に近いと考えられる。ただし、接合関係はみられなかった。AT上位層の遺構は、散礫を伴うかたちで礫群を４基検出した。Ⅵ層における礫群・散礫を合わせた礫の総数は1841点、接合数は計130点、57個体である。第２節で述べたように礫や赤化礫が一定量集まる箇所を礫群と認定したが、接合礫の分布状況や礫の重量別個体数を考慮すると他にも２基程度の礫群が存在した蓋然性は高いと思われる。散礫については、斜面上方からの礫の混入の可能性も捨てきれないが、調査区上部にあたる第９次調査で礫群が１基確認されているものの散礫が確認されていないこと、接合礫の分布が規則的な広がりをみせ礫群の周囲での移動がほとんどであること、そして、散礫の近くに母岩となす尾鈴山溶結凝灰岩が多数露頭していたことなどから、使用礫の抜き取りやストックなどといった人為的な要因によるものであると考えたい。日向市はAT上位層において寺ノ上遺跡、百町原地区遺跡、八ッ山遺跡、上野原遺跡で礫群が確認されている。どの礫群も密集または散在するがまとまりの認められるものであり、岡遺跡と同様に掘り込みはもたない。向原中尾第２遺跡では礫群と認定されていないものの、赤化した礫の散乱が認められているが、その性格や機能は不明である。

後期旧石器時代の岡遺跡全体としての遺構は礫群が６基、遺物は石材別に珪質頁岩40点、ホルンフェルス17点、流紋岩14点、チャート４点、砂岩４点、黒曜石３点、石英２点、頁岩１点の総計85点である。器種は石錐、ナイフ形石器、スクレイパー、二次加工剥片、微細剥離剥片、剥片、礫器、石核であった。遺構・遺物の量は多くないものの当該時期に生活の場として利用された可能性は考えられる。

**縄文時代早期**

縄文時代早期では、集石遺構３基、炉穴９基、土坑２基を検出した。集石遺構は散礫を伴ってⅣ層上面にて確認された。SI7のみ削平をうけていたため残存状況はよくなかったが、他の２基は内部礫の残存状況は良好であり、ほとんどの礫が熱を帯び赤化した状態であった。全ての集石遺構において掘り込みはみられたが、配石はみられなかった。これは、第６次調査の掘り込みも配石ももたないタイプ、第９次調査の掘り込みも配石ももつタイプと大きく異なる。遺物や炭化物が確認されなかったため、これらの集石遺構との正確な時期差については不明である。

炉穴はSP1～3（第１群）、SP4～8（第２群）、SP9に分けられる。主軸を東西に向けるタイプ（SP4･5･9）と南北に向けるタイプ（SP6･7･8）があり、第６次調査、第９次調査とも主軸の向きが合致している。これまでの調査で指摘されてきた地形を生かし谷風を意識した炉穴構造の重要性が増してきた。炉穴の形態としては、古い炉穴をもとに軸をずらし交差するように新しい炉穴を構築するようなタイプや古い炉穴の軸に対して並列するように構築するタイプが考えられる。また、足場から炉部に向かってすぼまる扇状のプランがSP4・SP8でみられ、接続点が段状に堀り残されている箇所があるなど足場と炉部とを区分する機能があったのではないかと推測される点が特徴的である。炉穴（第２群）の埋土下部に集石遺構と同石材の赤化した礫が13点出土した。第２群とSI5、第１群とSI7は切り合い関

係は見られないものの近接しており、両遺構とも散礫を取り除いた後に検出されたこともふまえると、炉穴と集石遺構は同時期に併設していたとも考えられる。炉穴から確認された炭化物の放射性炭素年代測定と樹種同定を行った。第１群は9564±30年BP、第２群は9485～9490±30年BP、SP9は9380±30年BPとほぼ同時期を示し、クルミ属、クリ、コナラ属コナラ節、ニレ属が同定された。これらは食材、建築、器具、薪炭等に用いられる樹種であり、当時の岡遺跡周辺の環境については日当たりがよく山地や湿潤地が広がり落葉高木が植生していたことが理解される。石器の石材は、後期旧石器時代と比べると砂岩・ホルンフェルスが極端に多くなり出土遺物の６割を超える。

縄文時代早期の岡遺跡全体としての遺構数は集石遺構14基、炉穴17基、土坑11基を確認した。各調査区の放射性炭素年代測定結果より、第６次調査（SP：9490±35年BP～9380±30年BP）、第９次調査（SI・SP:10880±35年BP～9120±30年BP）、第16次調査（SP:9564±30年BP～9380±30年BP）とそれぞれが縄文時代早期前半の近い年代を示した。土器については第16次調査において、どれも風化が激しく明確な時期特定には至らなかったが、第６次調査では円筒形貝殻文土器、山形押型文土器が、第９次調査では円筒形貝殻文土器が同様の包含層から出土しており放射性炭素年代測定結果と時期的にも合致している。石器は砂岩、チャート、ホルンフェルスが多く、器種としては石鏃、蛤形剥片石器やスクレイパー、打製石斧、磨石、石錘が多数出土している。

岡遺跡ではこの時期の遺構・遺物が最も多く確認されていることから、この地が狩猟・漁労によって捕らえられたものや採集した植物などの調理・加工を行っていた空間であり、人々の活動の最盛期を迎えていたのではないかと考えられる。今回の調査で竪穴建物跡は確認できなかったが、遺跡の様相から岡遺跡の所在地より山側（西側）の方まで人間活動の営みの広がりがあったのではないかと想定される。

調査報告の関係上ここでは、第６次調査、第９次調査と比較検討を行いながら後期旧石器時代及び縄文時代早期について述べてきたが、縄文時代晩期、弥生時代～古代、中世～近世、近代の総括については、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第223集『岡遺跡（第９・13・15次調査）』2012に記載している。

〈参考文献〉

日向市教育委員会1985『日向市遺跡詳細分布調査報告書』
日向市教育委員会1994『百町原地区遺跡』
日向市教育委員会1995『寺ノ上遺跡』
日向市史編さん委員会2009『日向市史　資料編』日向市
日向市史編さん委員会2010『日向市史　通史編』日向市
宮崎県埋蔵文化財センター2008『林遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第174集
宮崎県埋蔵文化財センター2010『野首第２遺跡（二・三次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第188集
宮崎県埋蔵文化財センター2011『板平遺跡（第3・4次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第199集
宮崎県埋蔵文化財センター2011『内野々遺跡　内野々第２・第３遺跡　内野々第４遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第202集
宮崎県埋蔵文化財センター2012『岡遺跡（第６・７次調査）・坂元第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第212集
宮崎県埋蔵文化財センター2012『向原中尾第1・2遺跡　向原中尾第４遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第213集
宮崎県埋蔵文化財センター2012『岡遺跡（第9・13・15次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第223集
宮崎県埋蔵文化財センター2012『長野遺跡・舟川第２遺跡（第３次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第226集
保坂康夫2012『日本旧石器時代の礫群をめぐる総合的研究』
九州縄文研究会2003『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』第13回宮崎大会

# 第Ⅲ章　馬込遺跡第２地点の成果

## 第１節　調査の方法と経過

### 1-1. 発掘調査の方法と経過

本調査区は平成24年12月17日から平成25年３月29日までの間に発掘調査を行った。調査対象面積は1,600㎡である。第１次調査において縄文土器片（楕円押型文・山形押型文）、スクレイパー、石鏃、石斧、剥片などが出土したため、縄文時代早期を中心とする遺跡である事を念頭に調査計画を作成した。第１次調査で多数の遺物が調査区西側より出土していたために、はじめに西側を中心に掘削作業を行った。また掘削の進め方として、遺跡の標高が高い場所より南北方向の傾斜にそって掘削作業を進めていくことにした。

本調査区は山林であったため、木の切り株が多く散在しており、調査開始時は人力で切り株の除去を行った。調査区の環境整備を行う作業と同時に土層の堆積状況や地形の様子を考慮しながら、重機と人力により、表土剥ぎを行った。表土剥ぎや掘削時に出た排土を置く場所として、調査区外の北側の斜面地に排土置き場を設置した。その後、業者に委託して本調査区の測量を行い、10ｍ間隔でグリッド杭を設置した。調査区西側から東側に対して、Ａ～Ｆ、北側から南側に向かって１～６までのグリッド番号を設定した。

表土は平均30㎝ほど堆積しており、鬼界アカホヤ火山灰二次堆積層（Ⅲ層）は調査区の西側一帯のみに残存しており、その下のⅣ層から散礫が検出される状況であった。散礫は調査区西側に集中して検出され、調査を進めた結果、多数の集石遺構が検出された。

縄文時代の遺構は早期の包含層であるⅣ層からⅤ層に集石遺構40基、炉穴1基、土坑1基を検出した。本調査区の集石遺構はほとんどが、配石を持ち、掘り込みを有するタイプであり、掘り込みを持たないタイプが1基だけ確認されている。集石遺構の中には、２～３基以上が上下に切り合った状態も確認されている。この時代の遺構として検出された土坑には２つのピットと落ち込みがあり、落ち込みの床面から焼土が確認され、炉穴として使用された可能性がある。また２つのピットは杭の跡と考えられ、陥し穴として使用された可能性もある。

遺物は縄文時代早期の包含層であるⅣ層～Ⅵ層にかけて、多数出土している。またⅠ層･Ⅱ層から、縄文時代晩期の遺物も出土しており、無刻目突帯文、刻目文、黒色磨研系の土器などが見られる。調査区西側からは、弥生土器を多量に出土した遺構が検出されたが、その用途、性格については不明である。

その他、時期不明の遺構として、溝状遺構１条と竪穴状遺構１基を検出している。溝状遺構は調査区の南から北東方向へ向かって確認された。道路状遺構の可能性もあるが、硬化面は確認できなかった。当初の計画では３月８日を期限としていたが、調査区西側の弥生土器を多量に出土する遺構の調査に手間取り、調査期間を延長して、３月29日にすべての調査を終了した。

本調査区から出土した集石遺構は1/10、土坑や炉穴などの遺構は1/20で実測図を作成した。ただし、B3Gr～B4Grで検出した集石遺構を含む散礫群については、1/20で実測図を作成した。撮影記録については６×７カラーフィルム、35㎜モノクローム・リバーサル写真、デジタルカメラを併用して記録した。集石遺構や不明遺構の埋土から採取した炭化材は業者に委託し、自然科学分析、樹種同定を行い、そのデータを参考にして遺構の時期決定の参考資料にした。遺物についてもトータルステーションにより、位置を記録し、取り上げを行った。また調査区全景を上空から記録するために業者に委託して、ラジコンヘリコプターを使って空中写真撮影を行った。発掘調査の経過は調査日誌抄で代える。

**調査日誌抄**

平成24年度

1217　環境整備、安全対策等。

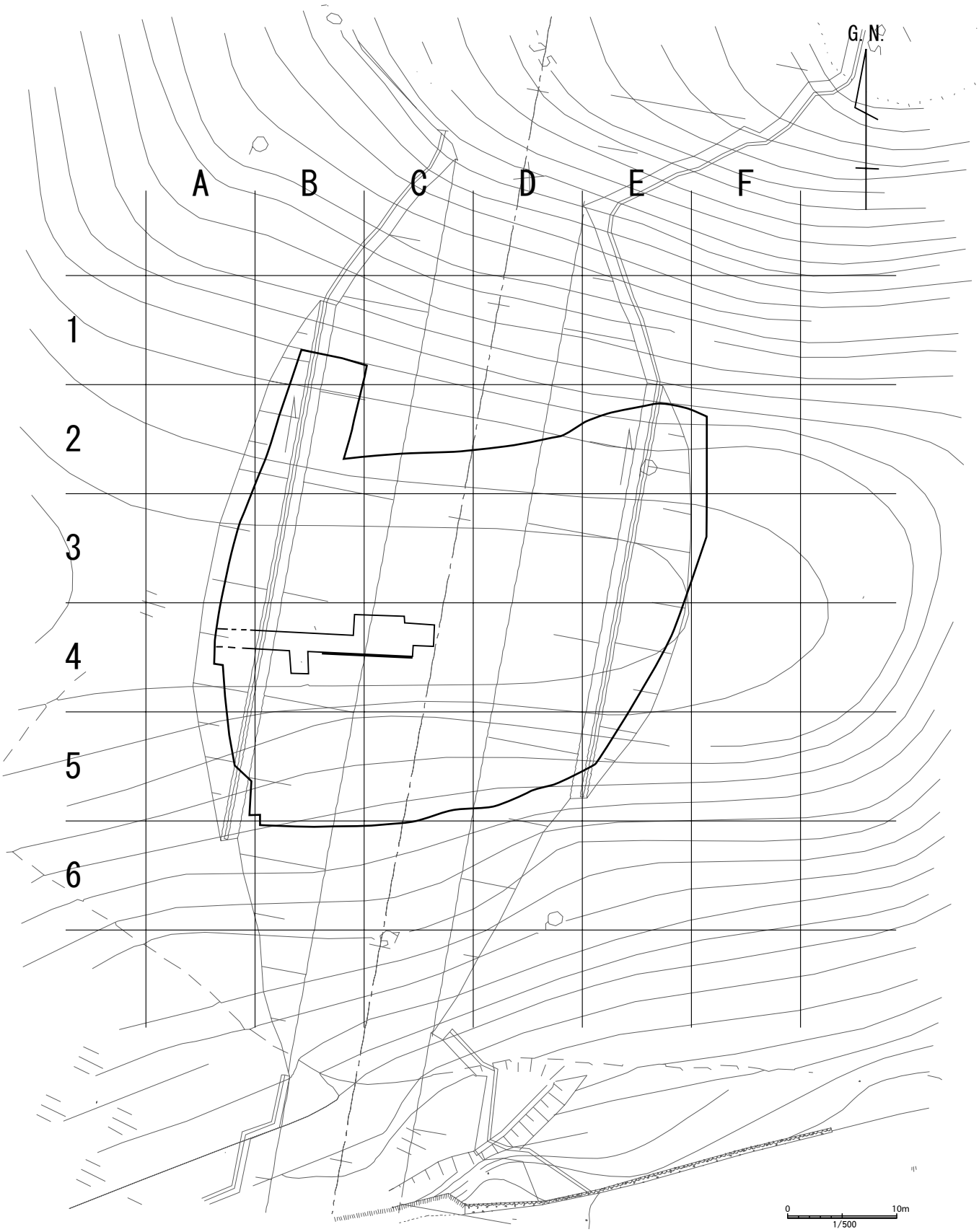
1218　重機による表土剥ぎ開始。

現場事務所・器材庫の設置。
作業員通路の整備。
1220　遺跡入り口周辺の草刈り、環境整備。
1221　重機による表土剥ぎ終了。
1225　作業員18人雇用。
1226　調査区南西側遺構検出。
0107　排土置き場流失防止対策、遺跡入口の整備。
0108　調査区北西部遺構検出。
0109　遺跡壁面遺構検出・遺跡南側の掘削。
0111　調査区内の切り株、伐根作業開始。
0118　調査区北西部に礫のまとまり３箇所確認。
調査区西側の遺構検出を開始。
0121　調査区北側をⅢ層まで掘削し遺構検出。
調査区南側はⅣ層までの礫分布を確認し、
多数の集石遺構を確認。
0128　調査区東側掘削、遺構検出開始。
0204　遺物状況写真撮影、作業員は雨天
のため作業中止。
0205　集石遺構2基確認。
0207　調査区北西部より山形押型文土器が出土。
0208　重機による排土除去実施。
0212　SZ1遺物出土状況写真撮影。
0213　空中写真撮影のための調査区清掃。
0214　空中写真撮影。
0215　調査区の全体図作成。
散礫範囲の図面作成・散礫除去。
0221　調査区西側掘削。
土層断面図作成。
0222　集石遺構の写真撮影。
0225　集石遺構の実測図作成開始。
0228　調査区東側を重機にて掘削。
遺構・遺物共になし。
0301　集石遺構の実測図作成。
0311　SC1の掘削。
0314　地形測量図・遺構分布図作成。
0315　調査区東側を重機にて掘削し、深いトレン
チを設定し、掘り下げる。遺構・遺物は共になし。
現場事務所撤去。
作業員雇用終了。
0316　SZ1掘削。
0317　SZ1内から、礫、打製石斧、壺がまとまって
出土する。
0329　SZ1完掘、実測図作成、写真撮影。
調査区内撤収作業。
調査終了。

### 1-2. 整理作業及び報告書作成

馬込遺跡の整理作業は平成25年４月から開始し、出土した遺物を水洗・注記・計測・接合、実測等を行い、遺物台帳を作成した。遺物の実測は石器60点を業者に委託し、それ以外の石器67点、縄文土器32点・弥生土器42点、青磁１点を宮崎県埋蔵文化財センターで整理作業員及び、センター職員により、実測を行った。また本遺跡の集石遺構や不明遺構の埋土より出土した炭化材６点を放射線炭素年代測定、樹種同定２点を委託した。その後、遺構・遺物の各実測図を基にトレース作業を行い、レイアウト、版下作成、写真撮影を行った。報告書作成にあたっては、宮崎県埋蔵文化財センター報告書マニュアルに則って作成した。

整理作業風景




第34図　調査区グリッド配置図

### 1-3. 基本層序

調査区の基本層序は表土（Ⅰ層）、暗褐色土～褐色土（Ⅱ層）の下に鬼界アカホヤ火山灰二次堆積層（Ⅲ層）と褐色土～暗褐色土（Ⅳ層）、黒褐色土（Ⅴ層）、褐色土（Ⅵ層）、明褐色土（Ⅶ層）があり、更にその下位が岩盤層（Ⅷ層）となっている。Ⅲ層は調査区の西側一帯のみに残存しており、その下のⅣ層上面で散礫が露出する状況であった。調査区北側の斜面地ではⅠ層下位から、一部にⅢ層・Ⅳ層の流れ込みが見られた。調査区の東側では表土を剥ぐとすぐにⅦ層、Ⅷ層（岩盤）となっていた。Ⅳ層～Ⅵ層は縄文時代早期の遺物包含層であり、縄文土器片（楕円・山形押型文）、スクレイパー、剥片、石鏃などの遺物も出土した。Ⅳ層からⅤ層では、多数の集石遺構が検出された。

またⅣ層からは数点の旧石器時代の石器が出土した。なお本遺跡からはＡＴ火山灰層は確認されなかった。

以下は各層ごとの特色と土層断面図である。

Ⅰ層：　表土

Ⅱ層：　耕作土でabに分かれる。Ⅲ層とその以後の旧表土の遺物を撹拌して包含している。

Ⅱａ：　暗褐色土（Hue7.5YR3/3）粘性、しまり共にほとんどなし。微細子炭化物を多く含む。

Ⅱｂ：　褐色土（Hue7.5YR4/3）aと比べると粘性、しまり共に強い。

Ⅲ層：　明褐色土（Hue7.5YR5/6）で粘性をわずかに持ち、しまりは弱い。K-Ah粒を多く含み、二次堆積したアカホヤ火山灰層である。炭化物をまばらに含み、調査区西側のみに残存している。１㎜以下の白色と褐色の鉱物を含み、縄文時代晩期から古代の遺物が包含されていた。

Ⅳ層：　縄文早期包含層でシルト質と粘質土に分かれる。

Ⅳa：褐色土（Hue7.5YR4/6）シルト質から粘質土の中間くらいの土質を持つ。Ⅴ層と混じり合っているため、判別は困難である。

Ⅳb：暗褐色土（Hue7.5YR3/4）粘性・しまりはややあり、１㎜程の赤褐色鉱物、白色鉱をまばらに含み、堆積状況の厚みが部分的に大きく異なる。

Ⅴ層：　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）粘性があり、しまりが強い。１㎜から５㎜の程の黄褐色、白色の鉱物を多く含む。

Ⅵ層：　褐色土（Hue10YR4/4）粘性強く、しまりは非常に強く、２㎜から５㎜程の白色、褐色の粒を多く含む。炭化物をわずかに含む。

Ⅶ層：　明褐色土（Hue7.5YR5/6）粘性、しまりは共に強く、炭化物をわずかに含む。非常にもろい岩盤であり、明褐色のマーブル状を形成している箇所もある。

Ⅷ層：　地山の岩盤層。

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰ | 表土 | |
| Ⅱ | a　暗褐色土（Hue7.5YR3/3） | |
| | b　褐色土（Hue7.5YR4/3） | |
| Ⅲ | アカホヤ火山灰二次堆積 | 縄文時代晩期以降 |
| | 明褐色土（Hue7.5YR5/6） | |
| Ⅳ | a　褐色土（Hue7.5YR4/6） | 縄文時代早期層 |
| | b　暗褐色土（Hue7.5YR3/4） | |
| Ⅴ | 黒褐色土（Hue7.5YR3/2） | |
| Ⅵ | 褐色土（Hue10YR4/4） | |
| Ⅶ | 明褐色土（Hue7.5YR5/6） | |
| Ⅷ | 岩盤層 | |

第35図　基本土層図

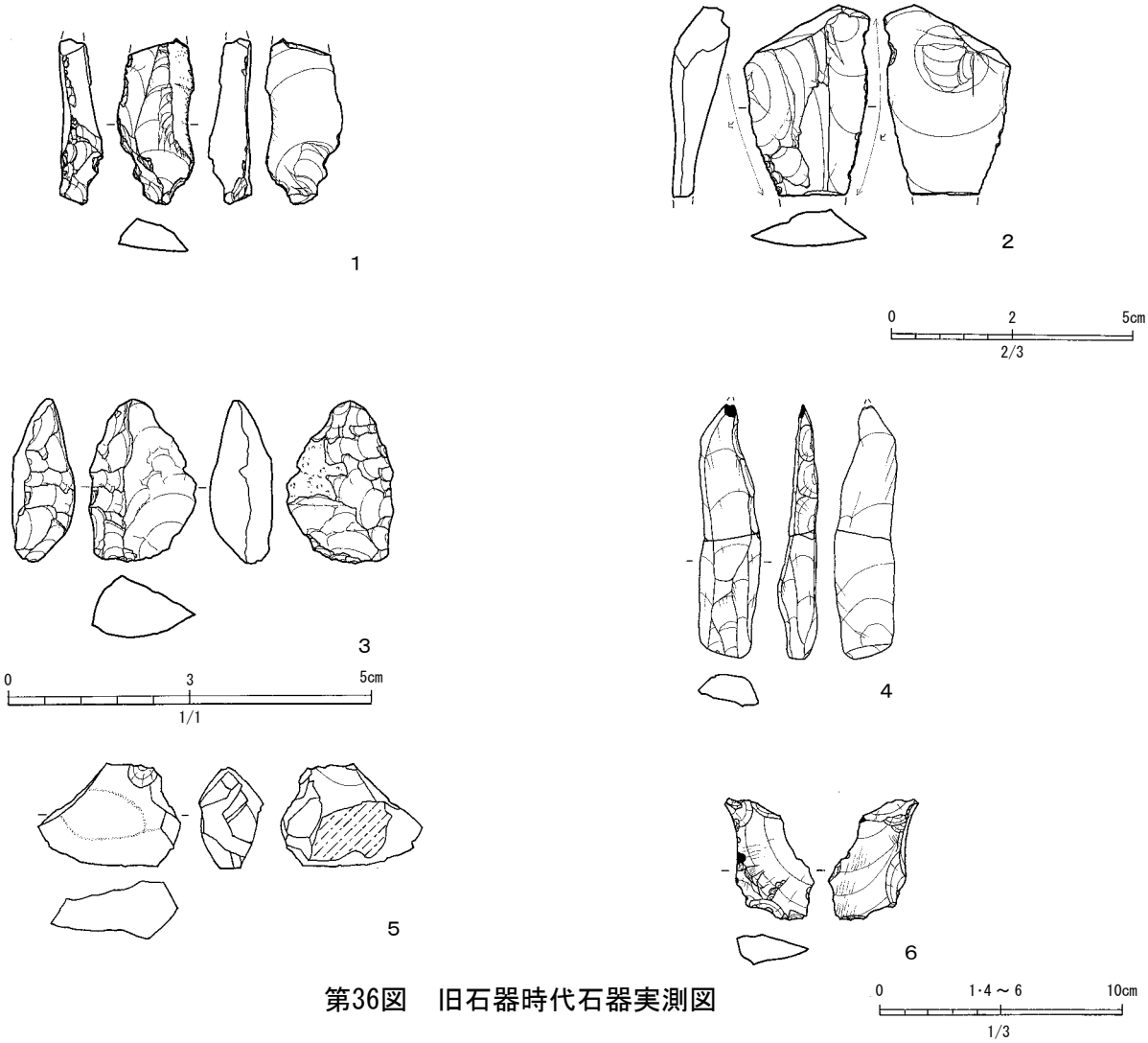
## 第２節　旧石器時代の遺物

### 2-1. 概要

本調査区では旧石器時代の包含層は確認されていないが、Ⅳ層～Ⅵ層より出土した遺物の中で器種の形態、石材を基に旧石器時代の遺物として判断して、抽出した。

### 2-2. 遺物（第36図１～６、図版14）

１はナイフ形石器である。縦長剥片を素材にしている。先端部が欠損しており、左右に粗雑な調整を施して基部を作り出している。2はスクレイパーである。縦長剥片を素材にしている。左右側縁に微細剥離痕があり、右側縁下に刃部がある。3は角錐状石器であり、断面が三角形を呈している。4はナイフ形石器である。右側縁に調整が施され、先端部は欠損している。5は剥片である。下部を打ち欠いて刃部を作り出している。6は剥片である。縦長剥片を素材に作られている。左側縁を打ち欠いて、鋭利な刃部にしている。




第36図　旧石器時代石器実測図

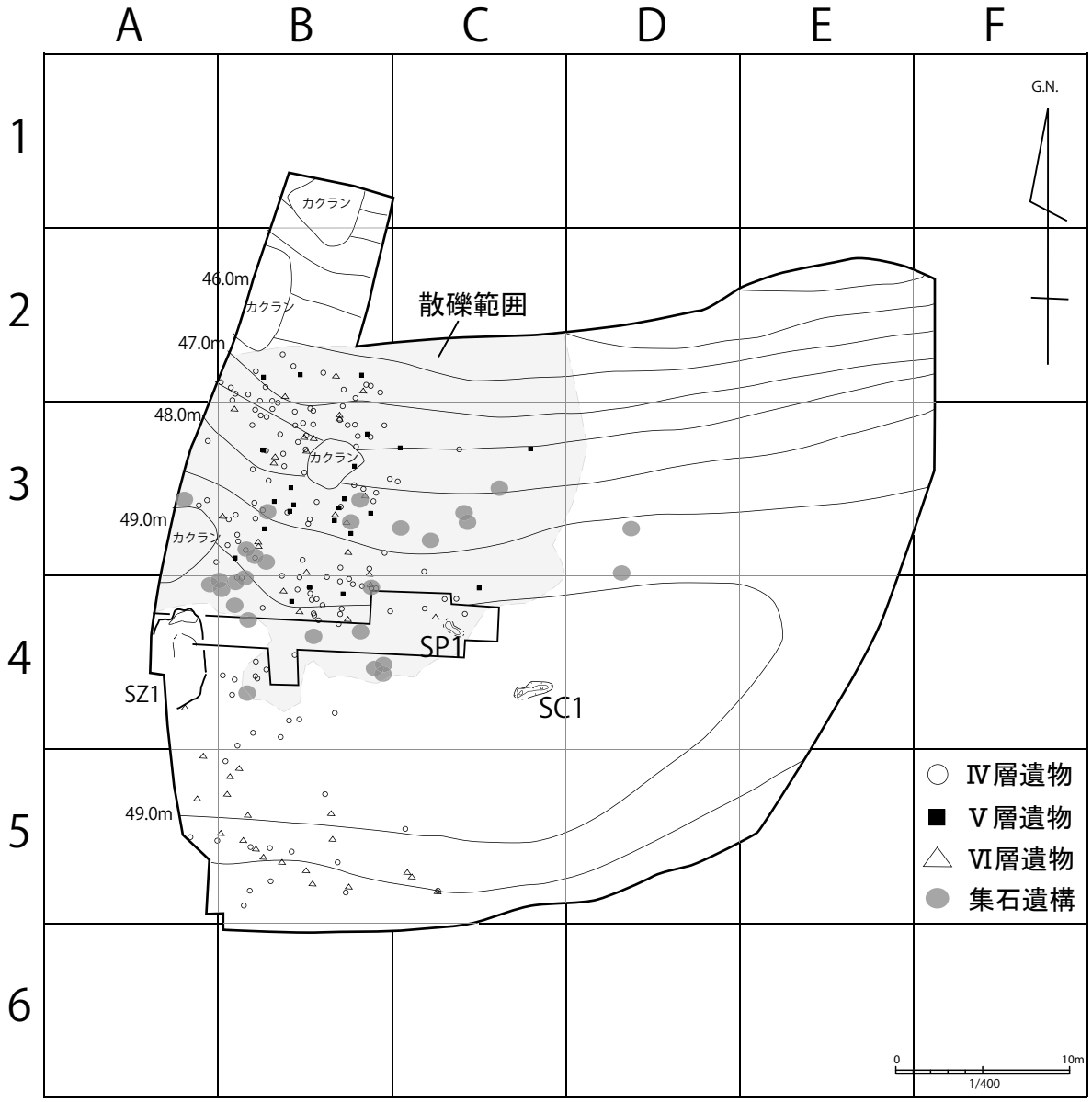
### 第14表　旧石器時代石器計測表

| No. | 出土地点 グリッド 遺構等 | 層 | 器　種 | 石　材 | X座標 | Y座標 | Z座標 | 法　量 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） |
| 1 | B3 | Ⅳ | ナイフ形石器 | 流紋岩 | -67868.814 | 58455.131 | 49.018 | 6.63 | 2.90 | 1.70 | 28.0 |
| 2 | B2 | ― | スクレイパー | 流紋岩 | -67856.291 | 58455.172 | 46.767 | 3.89 | 2.54 | 1.06 | 8.4 |
| 3 | A4 | Ⅳ | 角錐状石器 | ホルンフェルス | - | - | - | 2.21 | 1.44 | 0.85 | 2.4 |
| 4 | B4 | Ⅳ | ナイフ形石器 | ホルンフェルス | -67871.837 | 58457.417 | 49.249 | 10.50 | 2.60 | 1.30 | 38.5 |
| 5 | B5 | Ⅳ | 剥片 | 流紋岩 | -67886.240 | 58454.279 | 48.683 | 4.20 | 5.80 | 2.40 | 52.2 |
| 6 | ― | Ⅳ | 剥片 | 流紋岩 | - | - | - | 5.00 | 3.70 | 1.25 | 20.0 |

## 第３節　縄文時代の遺構と遺物

### 3-1. 概要

縄文時代の遺構・遺物のほとんどが、調査区の西側に集中し、Ⅳ層～Ⅵ層から出土している。遺構では集石遺構40基と炉穴１基、土坑１基が確認された。遺物は、縄文時代早期の土器片（楕円押型文、山形押型文、貝殻条痕文、撚糸文）、縄文時代晩期の土器片（無刻目突帯文・刻目文）が出土した。また石器はスクレイパー、剥片、石鏃、石錘などが出土した。




第37図　縄文時代遺構・遺物分布図

## 3-2. 遺構

### （１）集石遺構（第38図～50図、図版８～12）

本調査区の集石遺構は調査区西側にあった散礫を取り除いた後に集中して検出されている。ほとんどが掘り込みを持ち、配石をもつタイプで、Ⅳ層とⅤ層より検出されている。構成礫は尾鈴山溶結凝灰岩や千枚岩などが使用され、赤化した礫も多く見られる。

**SI１（第39図）**

配石がしっかりと残存し、掘り込みを持ち遺跡内で最も整った状態の集石遺構である。遺構内からはスクレイパー(55)１点、剥片(60)1点、蛤形剥片石器(88･91)２点が出土している。長軸61cm、短軸55cm、深さ32cmの楕円形状の掘り混みを有している。掘り込み内には人頭大程の扁平な礫が配石として置かれている。内部礫の残存状況が良好な状態で検出しており、掘り込みに沿うように扁平な礫が配置してあり、ほぼ、すべてが赤化している。配石と掘り込みの間に５cm程の小礫が敷かれており、裏込めとして配置されたものと考える。

**SI２～４（第41図）**

B3Gr内に所在し、切り合って構築された集石遺構である。SI2は、SI3を切るような状態で上部に作られている。SI2は、断面を見ると配石と考えられる扁平な礫が存在し、約10cmほどの掘り込みが確認できる。SI3は深さ約15cmほどの掘り込みがあるが、内部礫がほとんどない状態である。SI4は深さ約25cmの掘り込みを持ち、掘り込み北側の上部で礫を確認しているが、内部礫はほとんどない。

**SI５～７（第41図）**

この遺構もB3Gr内に所在し、礫が東西方向に広がって検出された。遺構内からは剥片(66)１点が出土している。中央付近の断面図を掲載しているが、３つの集石遺構の切り合いが確認できる。最も古いのがSI７で、それを切るようにSI６が上部に作られ、最後にSI５が作られている。SI7の掘り込みは、長軸95cm、短軸75cm、深さは検出面から５cmを測る。

**SI８（第42図）**

南側の配石がなくなっており、馬蹄形のような残存形状を呈している。掘り込みは長軸68cm、短軸54cm、深さ10cmで、形状は楕円形を呈するが、南側がはっきりしない。配石は20cm大の礫が掘り込み周縁部に敷き詰めるように配置されているが、中央には見られない。

**SI９（第42図）**

長軸63cm、短軸61cm、深さ10cmの円形の掘り込みを有している。遺構内からは蛤形剥片石器(83)1点が出土している。掘り込み中央に配置されていた礫は確認できるが、内部礫の残存状況が良好ではない。

**SI10（第43図）**

北側の形状がはっきりしないが、長軸58cm、短軸40cm、深さ11cmの楕円形の掘り込みを持つ。遺構内からは剥片（70）1点、蛤形剥片石器(82)1点が出土している。明確な配石は確認できない。遺構内から採取した炭化材を放射性炭素年代測定にかけたところ、3390±30年BPの結果が出た。

**SI11（第43図）**

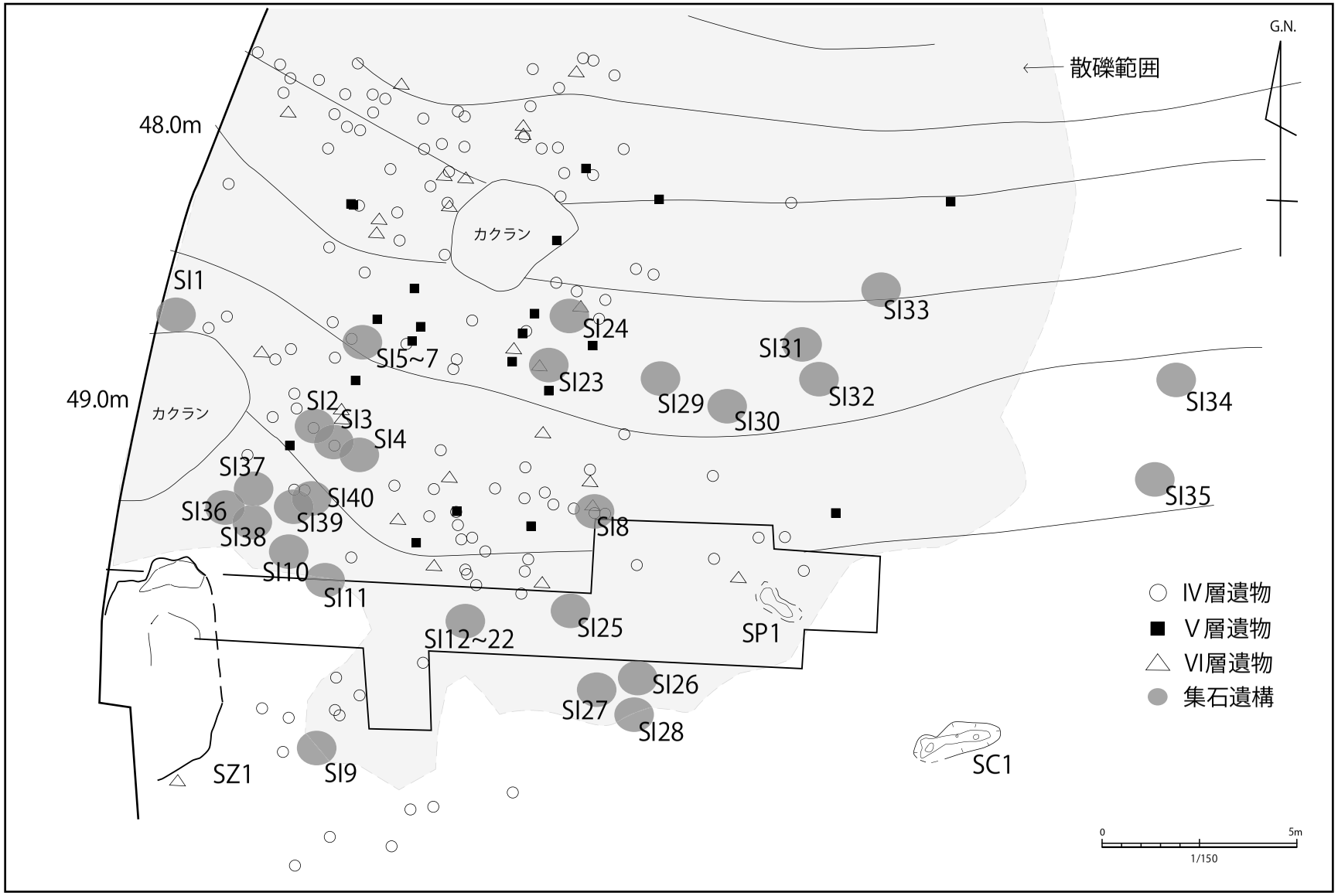
長軸120cm、短軸85cm、深さ25cmの不整な楕円形状の掘り込みを持つ。一部に配石と考えられる扁平な礫が残存する。

**SI12～22（第44・45図）**

B4Gr内に位置し、11基の集石遺構が集中して切り合った状態で検出された。11基の遺構はいずれも掘り込みを持っている。SI13・19を除き、配石、あるいは配石と考えられる礫の配置が確認できる。その中でSI15は配石を２回作り直している状況が断面で確認でき、SI16も複数の配石構築の状況が確認できる。それぞれの掘り込みの規模については、第15表を参照されたい。この集石遺構群の先後関係は、古い順に示すと、SI12→SI13→SI16→SI14→SI15、SI19→SI21→SI20、SI18→SI22、SI18→SI17である。

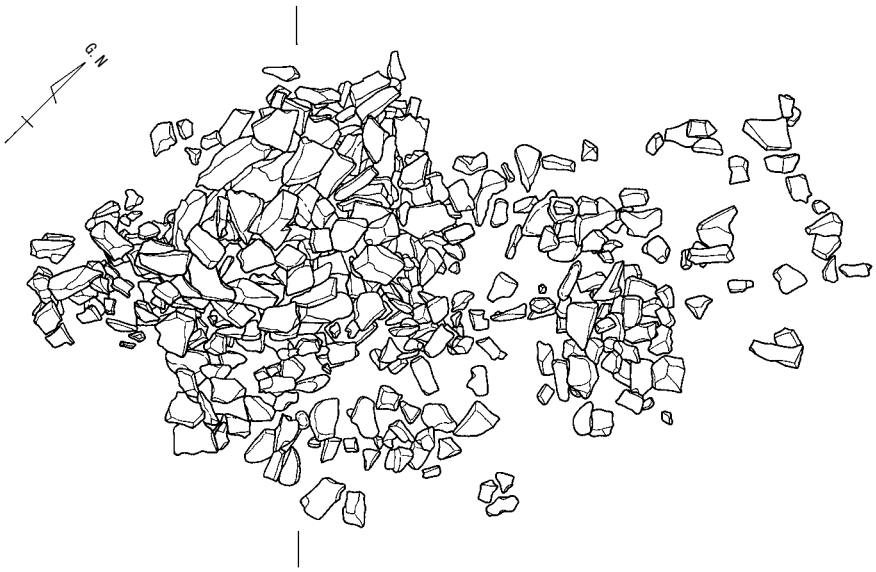
**SI23（第46図）**

SI24と隣接している。当初はSI24を先に検出し、掘り進めていったところ、南西方向に掘り込みが広がり確認された。掘り込みはほぼ南北方向に向き、幅65cm、深さ10cmの細長い形状を呈している。掘り込み南側に扁平な礫があり、配石と考えられるが北側の形状が不明瞭である。SI24との切り合い関係はわからない。



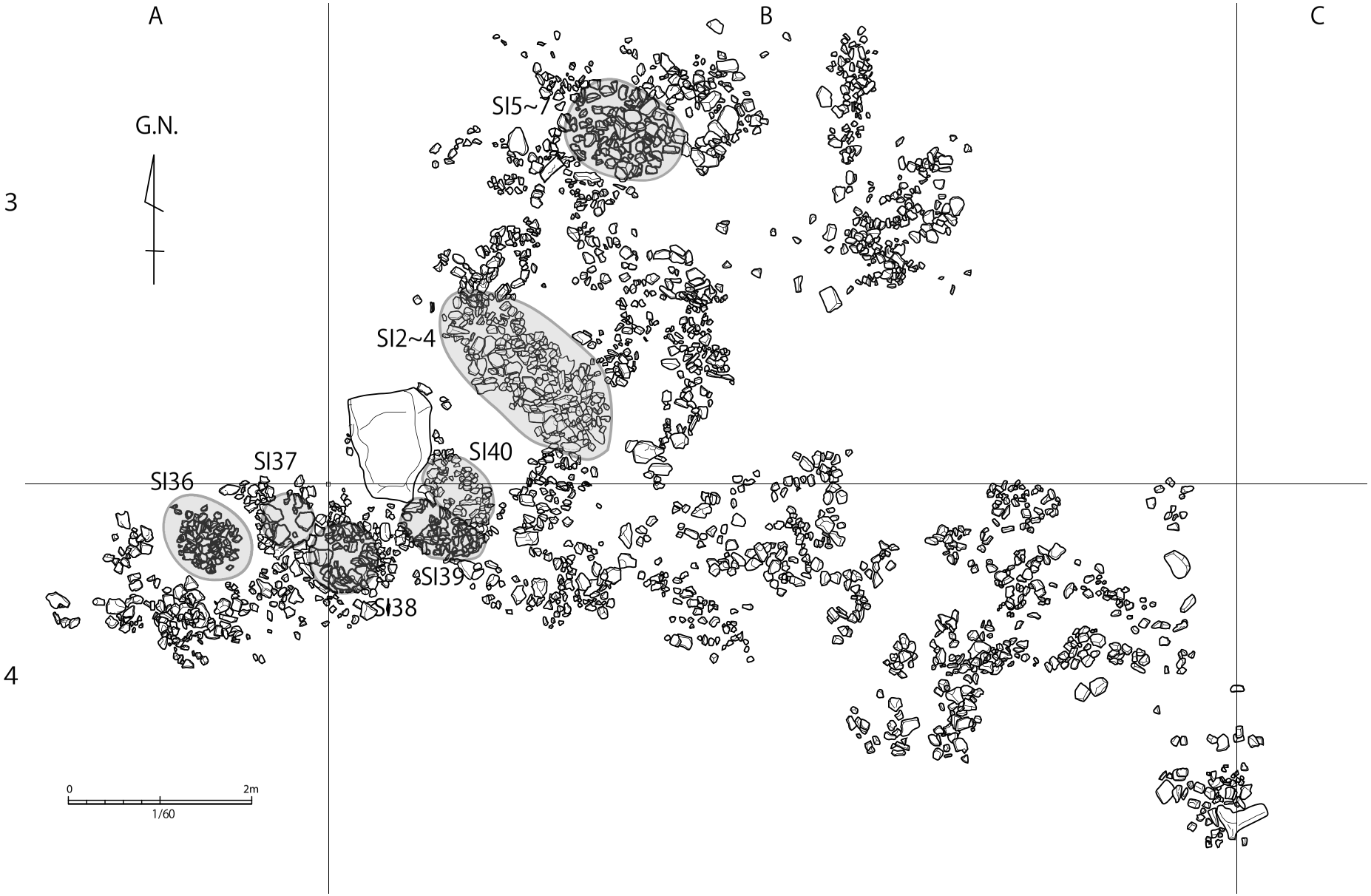

第38図　集石遺構分布図

SI1

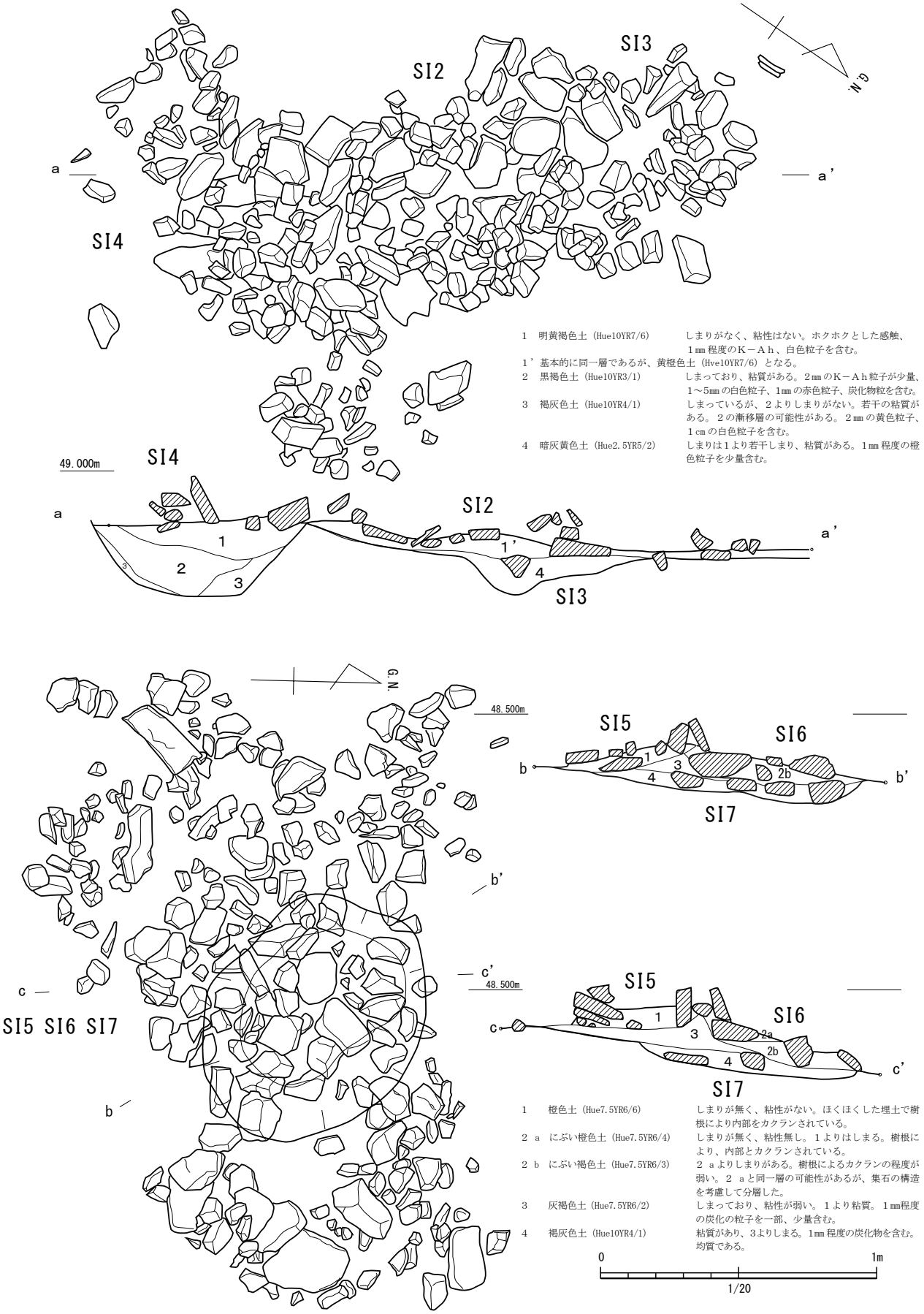



SI1

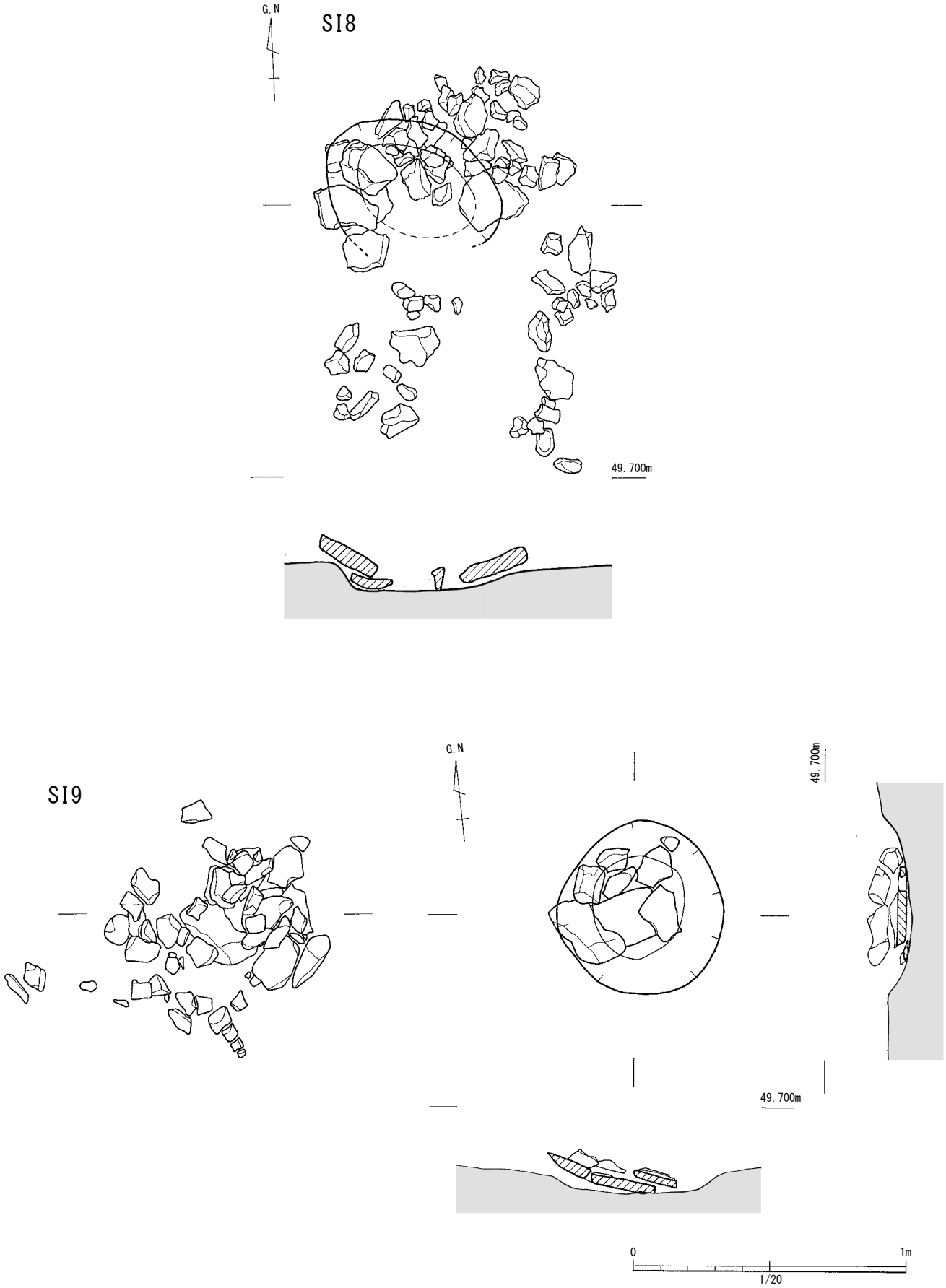
第39図　SI1実測図



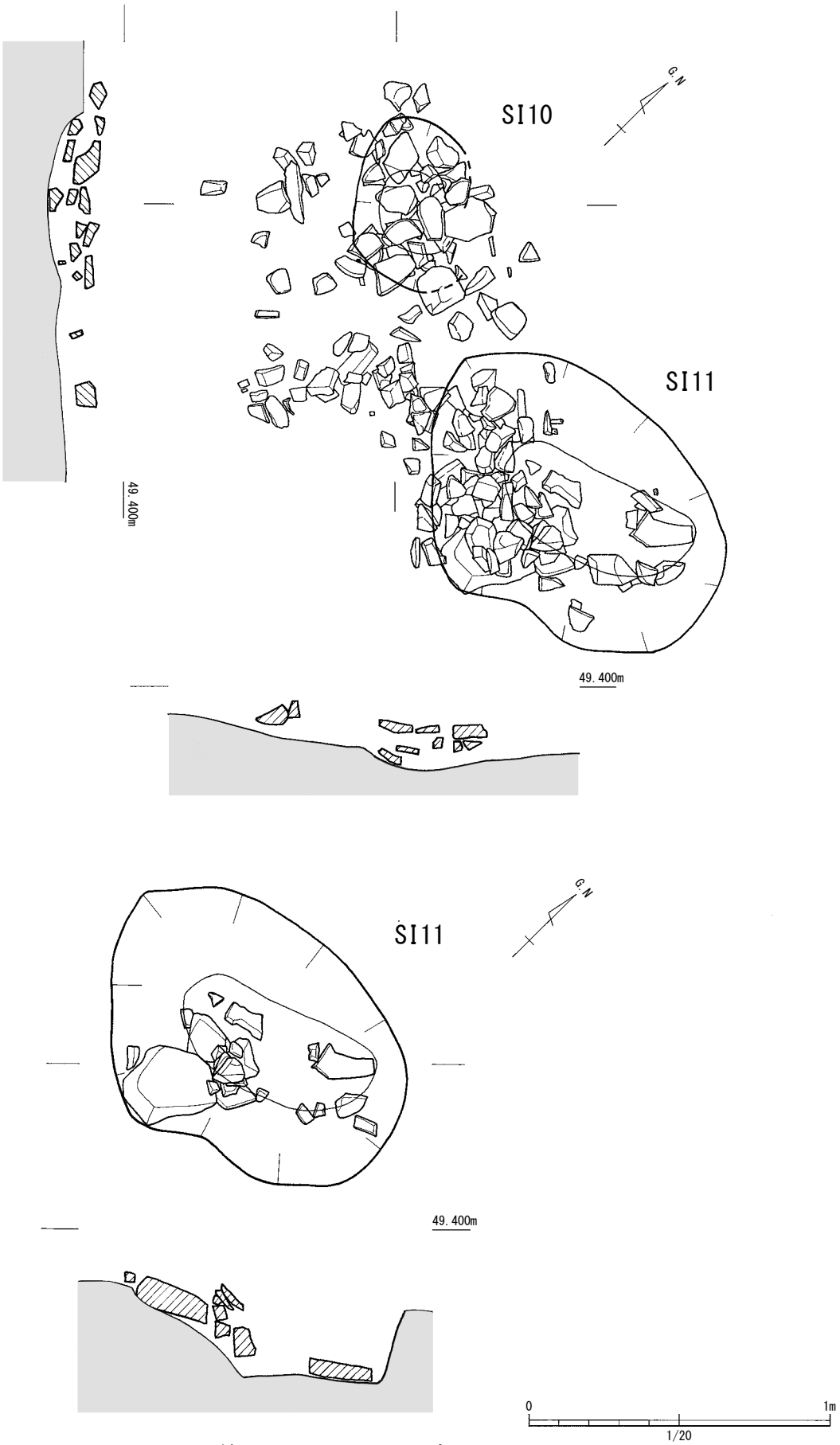

第40図　集石遺構実測図




第41図　SI2～SI7実測図

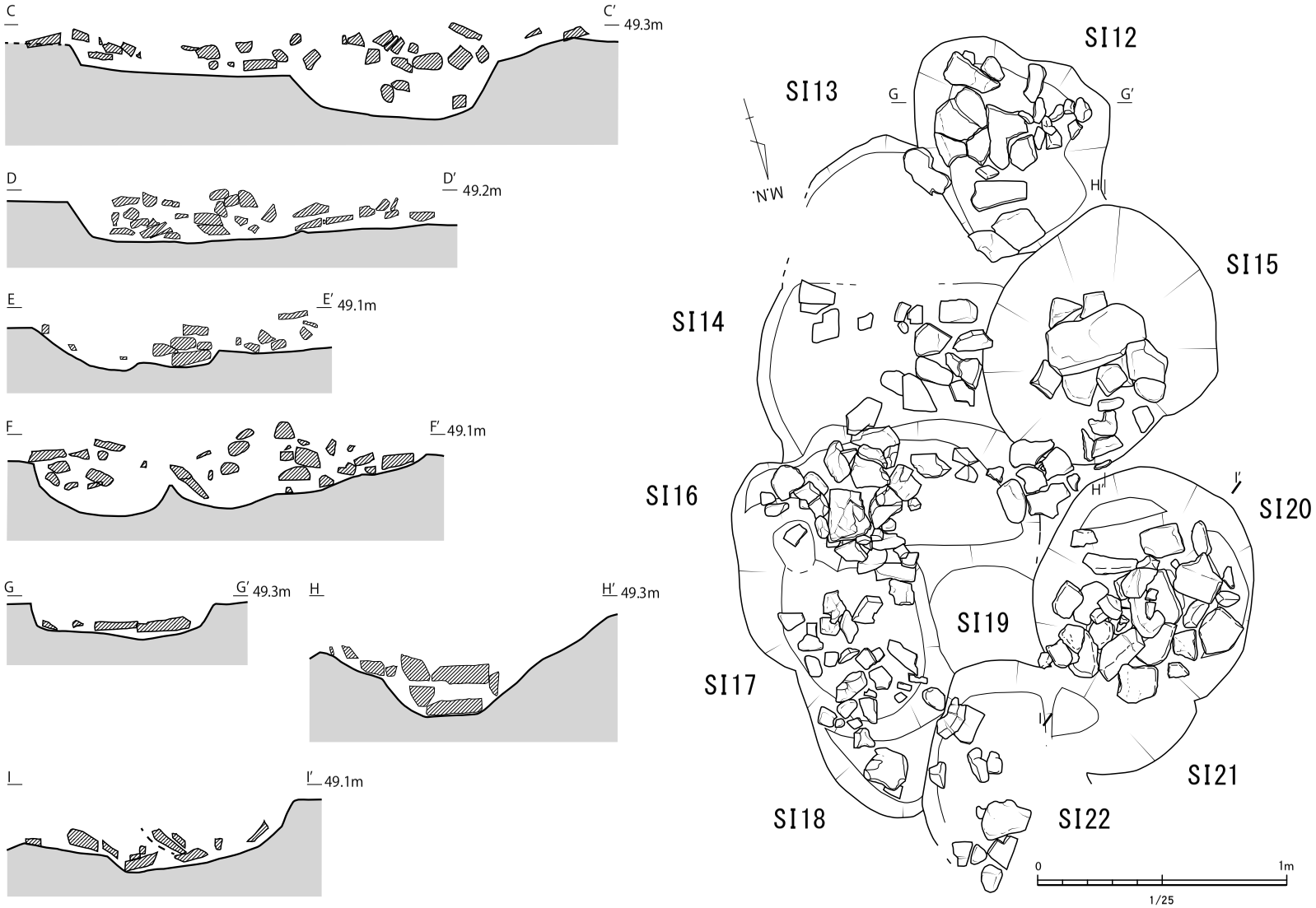



第42図　SI8・SI9実測図




第43図　SI10・SI11実測図

第44図　SI12～SI22実測図（１）




第45図　SI12～SI22実測図（２）

SI24（第46図）

本遺跡内でも比較的しっかりとした配石を持ち、残存状態も良好である。長軸130cm、短軸77cm深さ約20cmの不整な楕円形の掘り込みを持つ。遺構内からは蛤形剥片石器(75･79)2点、磨石(148)1点が出土している。15～25cm程度の扁平な礫が敷かれ、斜め方向に差し込まれた礫も構築されており、作りは良好である。斜め方向の配石西側に長軸40cmの扁平な礫が敷かれており、別遺構の配石なのか、元々SI24を構成していたのか判断が難しい。

SI25（第47図）

長軸、短軸とも約50cm、深さ約15cmのほぼ円形状の掘り込みを有している。遺構内からは礫器(99)１点が出土している。掘り込みの床面から浮いた状態で配石と考えられる礫が同じレベルで確認されている。

SI26（第47図）

長軸83cm、短軸52cm、深さ12cm程の楕円形状の掘り込みを有しており、配石と考えられる礫が一部残存している。埋土に炭化材を含んでいる。

SI27（第47図）

深さ約12cmの不定形の掘り込みを有しており、内部構成礫の残存状況が良好ではない。

SI28（第47図）

SI27と近接し長軸30cm、短軸27cm、円形状の掘り込みを有している。掘り込み中央付近に配石と見られる礫が残存している。

SI29（第48図）

長軸、短軸とも約70cm、深さ11cmの円形の掘り込みをもつ。内部礫の残存状況が良好ではなく、配石の状況は不明であるが、一部扁平な礫が床面から浮いた状態で確認されている。赤化した礫が多数、出土している。

SI30（第48図）

C3Grに位置し、南西側のプランが不明瞭であるが、直径約90cm、深さ約37cmの円形状の掘り込みをもつ。遺構内からは剥片(67)１点が出土している。掘り込みに沿うような状態で配石が一部残存している。

SI31（第49図）

SI32と隣り合わせて検出された。長軸80cm、短軸66cm、深さ約15cmの不定形の掘り込みをもつ。一部配石と想定される扁平な礫を確認している。南に隣接するSI32との先後関係は不明である。

SI32（第49図）

SI31と連接して検出された。遺構内からは蛤形剥片石器(93)が1点、出土している。長軸64cm、短軸47cm、深さ13cmの不定形の掘り込みを有している。内部礫の残存状況が良好ではないが、中央と南側に配石らしき扁平な礫を確認できる。

SI33（第49図）

長軸54cm、短軸50cm、深さ約10cmのハート形の浅い皿状の掘り込みを有している。配石と考えられる扁平な礫が掘り込み床面から浮いた状態で確認されている。掘り込み内から採取した炭化材を放射性炭素年代測定にかけたところ、7996±30年BPの年代結果が出た。また樹種同定を行ったころ、マツ属複維管束亜属の木材という結果が出た。

SI34（第49図）

長軸46cm、短軸42cm、深さ8cmの円形の掘り込みをもつ。扁平な礫が床面から少し浮いた状態で確認され、配石と考えられる。

SI35（第50図）

長軸、短軸とも約60cm、深さ10cmの掘り込みを有している。配石と見られる礫は床面から浮いた状態で確認されているが、礫の残存状況が良好ではなく、配置状況は不明である。遺構内から採取した炭化材を放射性炭素年代測定にかけたところ、9110±30年BPの年代結果が出た。

SI36（第40図）

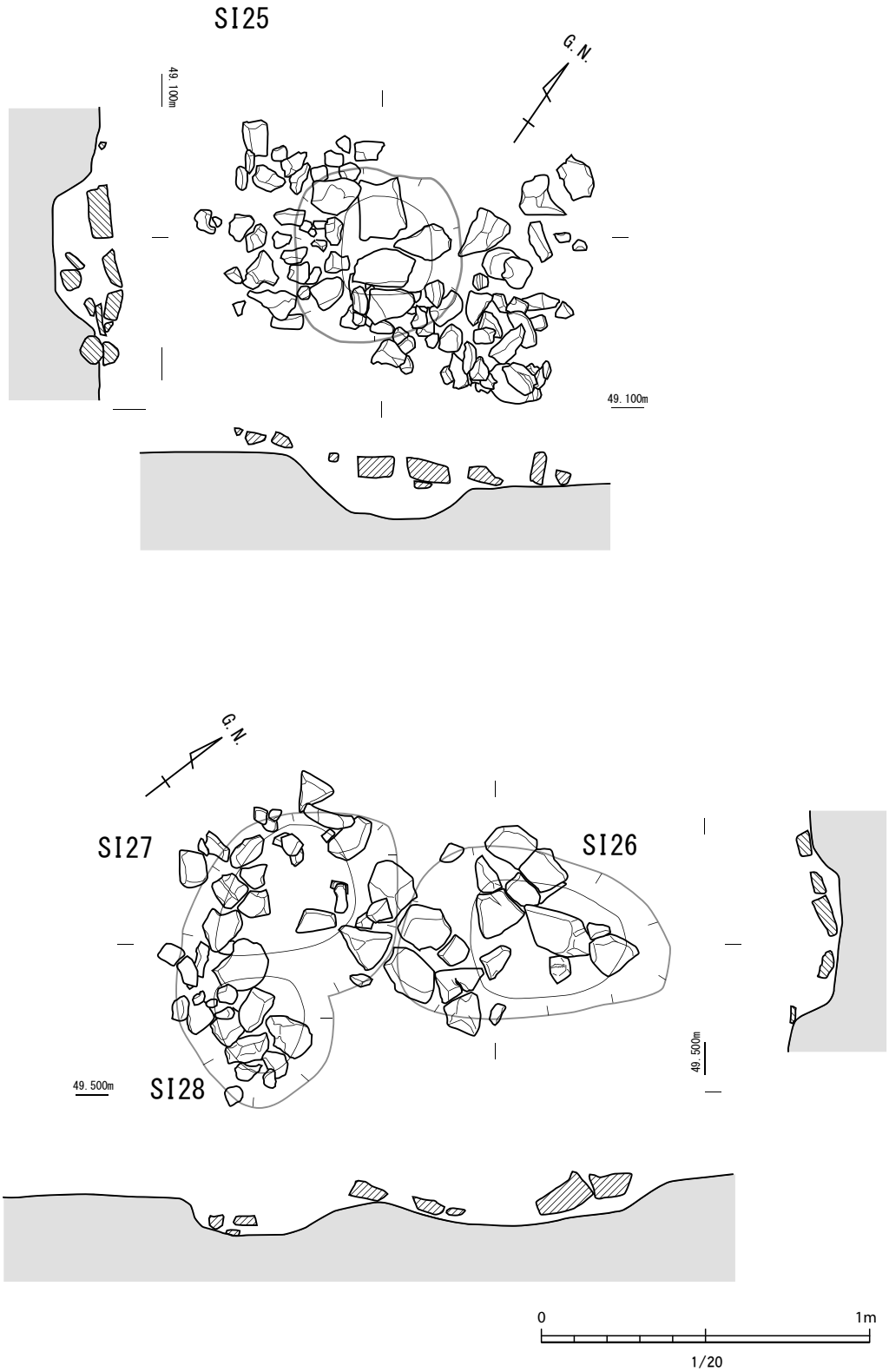
唯一掘り込みをもたない集石遺構である。礫の密度があり、直径約70cmの円形状を呈している。遺構内からは、蛤形剥片石器(82･84･86･96)4点が出土している。

なお、SI36～SI40は平面図のみで単独図面はなく、集石遺構であった可能性のあるものとして報告する。

SI37～SI40（第40図）

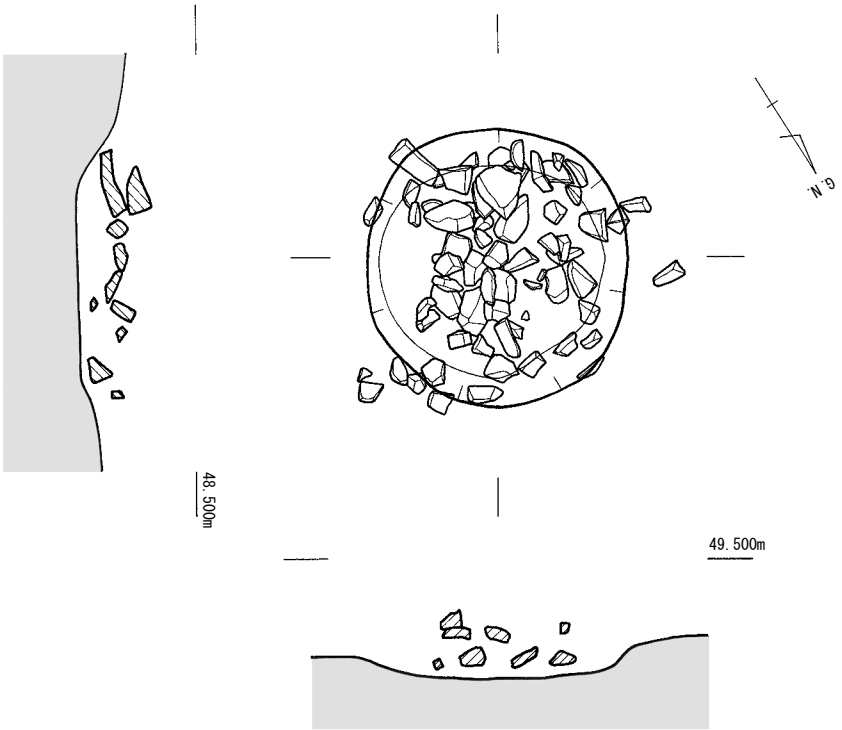
A4Gr～B4GRに位置しており、調査区西側の集中した散礫の中から、検出されている。SI37は長軸

第46図　SI23・SI24実測図

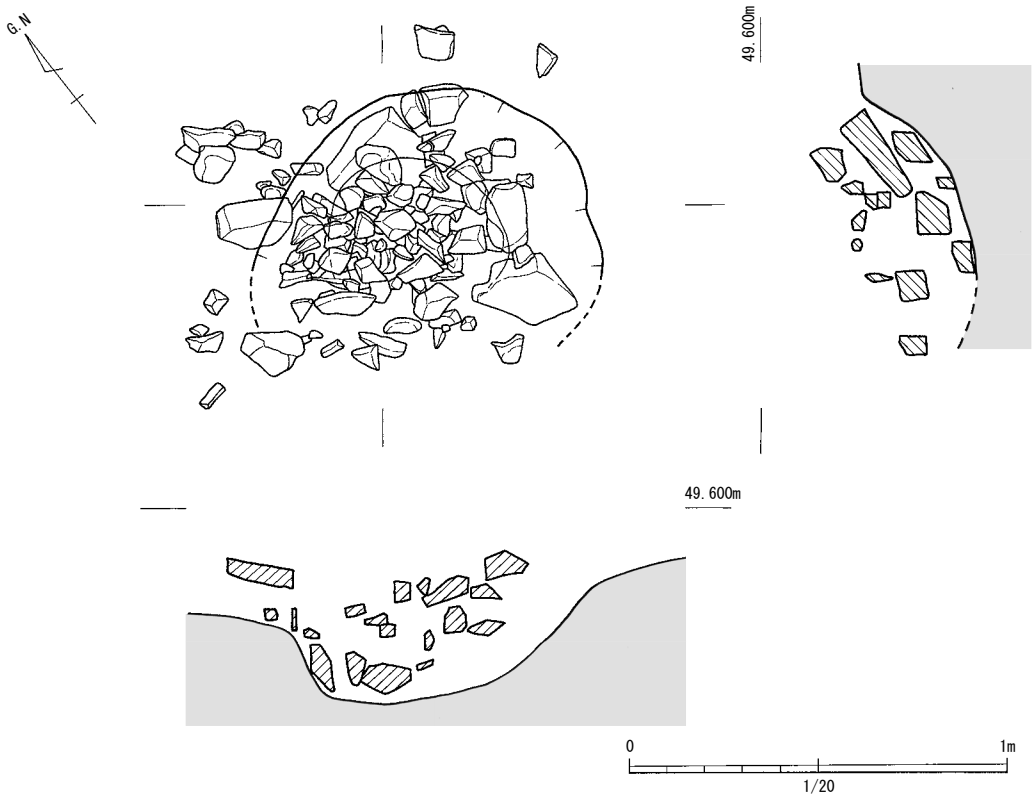



第47図　SI25～SI28実測図

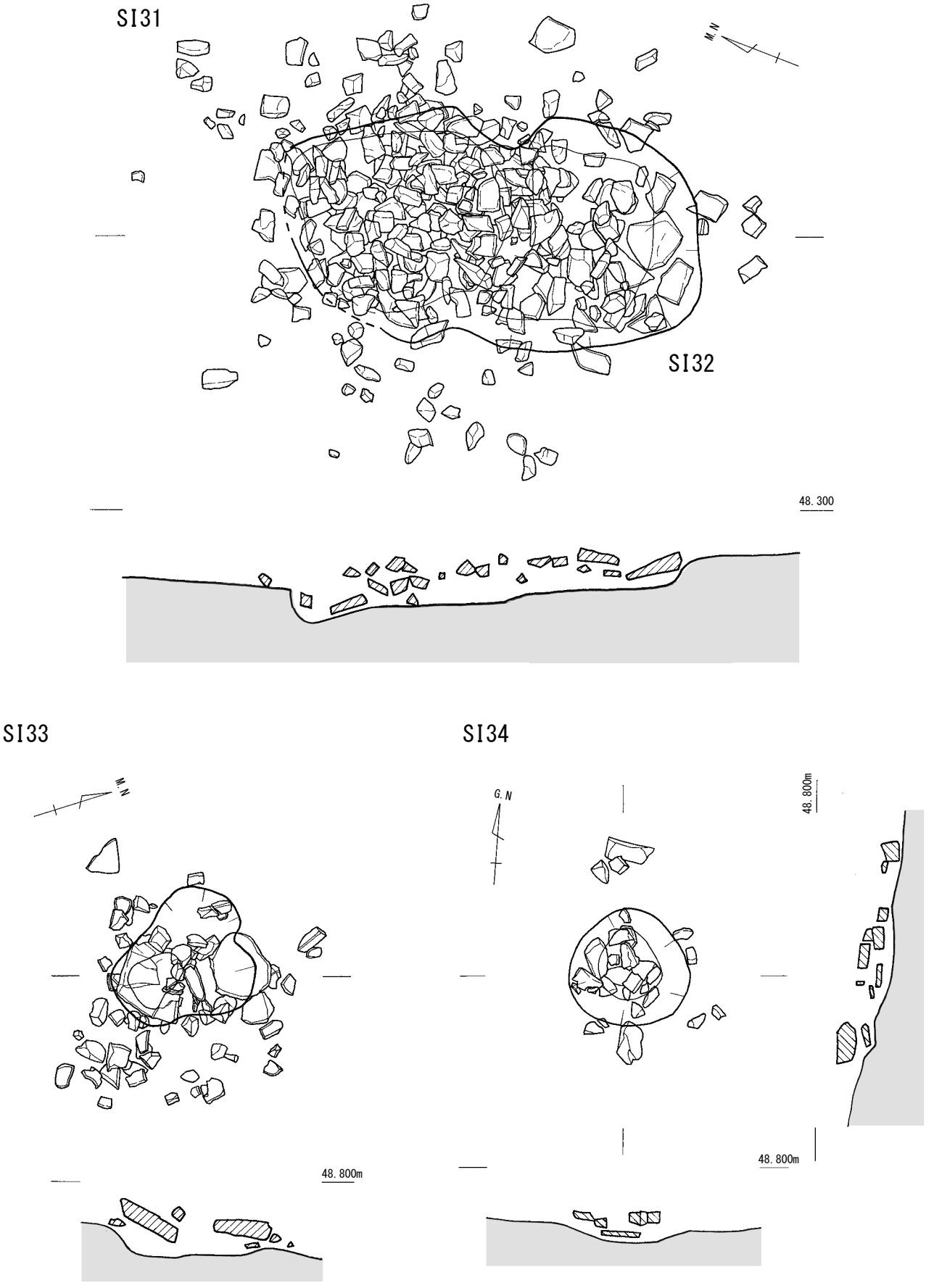
SI29



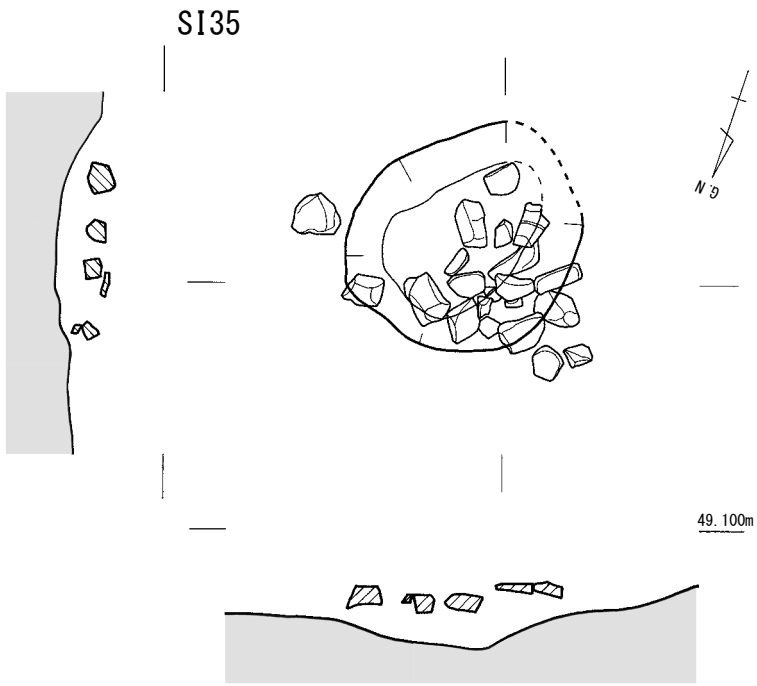

SI30



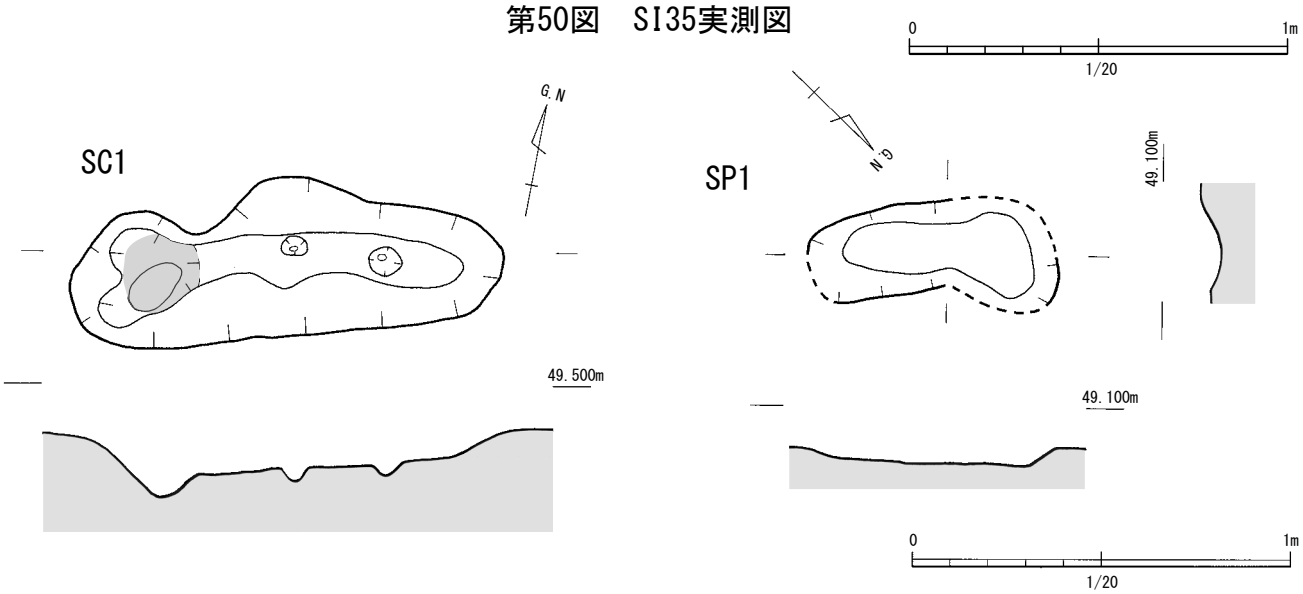

第48図　SI29・SI30実測図




第49図　SI31～SI34実測図




第50図　SI35実測図




第51図　土坑・炉穴実測図

## 第15表　縄文時代集石遺構一覧表

| 集石番号 | 出土位置（グリッド） | 掘り込み規模（cm） | | | 掘り込み形状 | 配石の有無 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長軸 | 短軸 | 深さ | | |
| ＳＩ１ | A3 | 61 | 55 | 32 | 楕円 | ○ |
| ＳＩ２ | B3 | － | － | 10 | － | ○ |
| ＳＩ３ | B3 | － | － | 15 | － | ○ |
| ＳＩ４ | B3 | 70 | 60 | 25 | － | ○ |
| ＳＩ５ | B3 | － | － | 6 | － | ○ |
| ＳＩ６ | B3 | － | － | 10 | － | ○ |
| ＳＩ７ | B3 | 95 | 75 | 7 | 楕円 | ○ |
| ＳＩ８ | B4 | 68 | 54 | 10 | 楕円 | ○ |
| ＳＩ９ | B4 | 63 | 61 | 10 | 円 | ○ |
| ＳＩ10 | B4 | 58 | 40 | 11 | 楕円 | ○ |
| ＳＩ11 | B4 | 120 | 85 | 25 | － | ○ |
| ＳＩ12 | B4 | 90 | 80 | 10 | 楕円 | ○ |
| ＳＩ13 | B4 | － | － | － | － | － |
| ＳＩ14 | B4 | － | － | － | － | ○ |
| ＳＩ15 | B4 | 105 | 85 | 39 | 円形 | ○ |
| ＳＩ16 | B4 | － | － | 16 | － | ○ |
| ＳＩ17 | B4 | 115 | 65 | 15 | － | ○ |
| ＳＩ18 | B4 | － | － | 22 | － | ○ |
| ＳＩ19 | B4 | － | － | － | － | × |
| ＳＩ20 | B4 | － | － | 27 | 楕円 | ○ |

| 集石番号 | 出土位置（グリッド） | 掘り込み規模（cm） | | | 掘り込み形状 | 配石の有無 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長軸 | 短軸 | 深さ | | |
| ＳＩ21 | B4 | － | － | 16 | － | ○ |
| ＳＩ22 | B4 | － | － | 7 | － | － |
| ＳＩ23 | B3 | － | 65 | 10 | － | ○ |
| ＳＩ24 | B3 | 130 | 77 | 30 | 楕円 | ○ |
| ＳＩ25 | B4 | 54 | 50 | 15 | 円 | ○ |
| ＳＩ26 | B4 | 83 | 52 | 12 | 楕円 | ○ |
| ＳＩ27 | B4 | － | － | 12 | 不定形 | ○ |
| ＳＩ28 | B4 | 30 | 27 | － | 円 | ○ |
| ＳＩ29 | C3 | 74 | 70 | 11 | 円 | ○ |
| ＳＩ30 | C3 | 94 | － | 37 | － | ○ |
| ＳＩ31 | C3 | 80 | 66 | 24 | 不定形 | ○ |
| ＳＩ32 | C3 | 64 | 47 | 13 | 不定形 | ○ |
| ＳＩ33 | C3 | 54 | 50 | 18 | 不定形 | ○ |
| ＳＩ34 | D3 | 46 | 42 | 8 | 円 | ○ |
| ＳＩ35 | D4 | 62 | 62 | 17 | 円 | ○ |
| ＳＩ36 | A4 | － | － | － | × | － |
| ＳＩ37 | A4～Ｂ４ | 86 | 64 | － | － | － |
| ＳＩ38 | A4～Ｂ４ | － | － | － | － | － |
| ＳＩ39 | B4 | － | － | － | － | － |
| ＳＩ40 | B4 | － | － | － | － | － |

86cm、短軸64cmの円形に10cm程の礫で配石されている。SI38は長軸180cm、短軸90cmの楕円形に配石されており、掘り込み内に配置したと見られる扁平な礫が存在するが、構成礫の残存状況が良好ではなく、配石や掘り込みの状況は不明である。SI39・SI40は長軸90cm、短軸70cmの楕円形に礫が配石されている。平面を見ると、２つの切り合いがある可能性がある。

**（２）炉穴（第51図）**

本調査区の炉穴は１基が確認されている。C4Gr内に位置し、主軸は北西方向を向いている。長軸約120cm、短軸約40cmのプランを有しており、くびれた楕円形を呈している。床面に約30cm径の焼土の痕跡が２箇所、確認された。

**（３）土坑（第51図）**

本調査区の最高所中央付近より、１基の土坑が確認されている。主軸は東西方向を向いており、長軸約230cm、短軸約90cmである。この土坑床面には２つのピットと落ち込みが１つあり、各ピットの間隔は約30cmである。西側の落ち込みは深さが約36cmであり、焼土が確認されたため、炉穴として使用された可能性がある。また残りの２つのピットは深さ6cm程で底面には杭の痕跡があったと仮定すると、陥し穴として使用された可能性もある。

**3-3. 遺物**

**（１）縄文時代早期の土器（第52図、図版16）**

縄文時代早期の土器に関しては、風化が著しく実測に耐えられる20点を掲載した。

**貝殻条痕文土器（第52図７～13）**

７～９は深鉢の口縁部である。７の外面には斜め方向に貝殻条痕文が施され、外側にやや反った形状をしており、口唇部は丸みを帯びている。８の外面は垂直に上に伸びる形状をしており、端部は丸みを帯びている。深鉢の口縁部である。９の外面はやや外側に反った形状をしており、口唇部は平坦にまとめてある。10は外面には風化が激しいものの貝殻条痕文が確認でき、一部にスス状の炭化物が付着している。口唇部は内面にやや肥厚している。11～13は深鉢の胴部であり、内面には貝殻条痕文が施されている。

**楕円押型文土器（第52図14～20）**

14～15は深鉢の口縁部から胴部である。外面に楕円押型文が施され、内面にナデ調整が行われている。14の外面は逆ハの字形に反っており、口唇部はU字形を呈している。15には内面に板状の工具を使ったと見られる横方向の調整がある。16～19は深鉢の胴部である。外面には楕円押型文が施され、内面にはナデ調整が施されている。20は深鉢の口縁部であり、外面は垂直に上に伸びる形状をしており、口唇部はくの字形をしている。内面に楕円押型文が施されている。

**山形押型文土器（第52図21～24）**

21は深鉢の口縁部である。外面は垂直に上に伸びる形状をしており、口唇部はU字形をしている。山形押型文が施され、内面にはナデ調整がほどこされている。22～24は深鉢の胴部である。外面の風化が激しいが、山形押型文が確認でき、内面にはナデ調整が施されている。24は手向山式土器である。

**撚糸文土器（第52図25～26）**

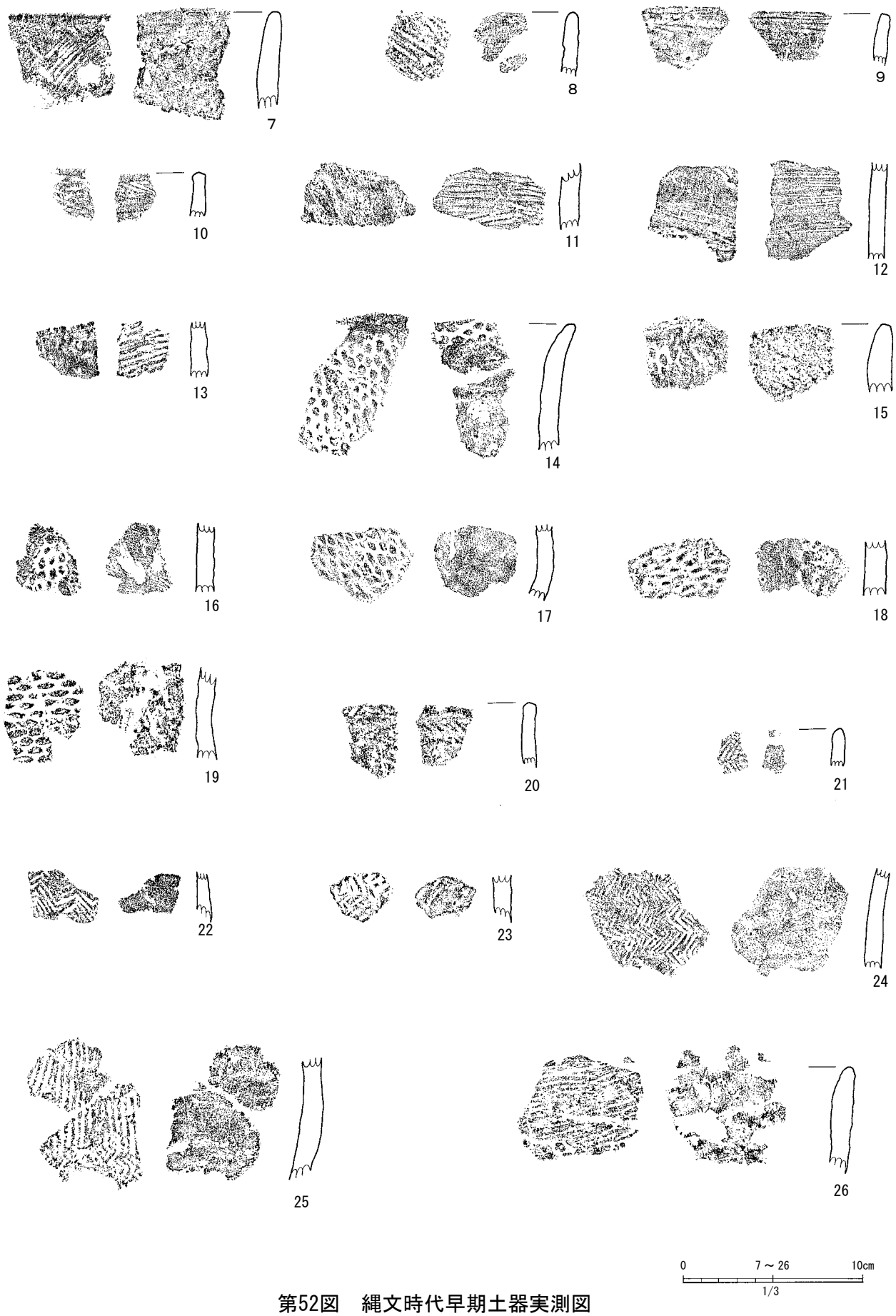
25は深鉢の胴部である。外面は風化が著しいものの撚糸文と山形押型文が確認できる。内面はナデ調整が行われている。26は深鉢の口縁部であり、垂直に上へと続いているが、内面はやや外側に反っている。口唇部は、丸くおさめられている。外面には撚糸文が施され、内面は一部欠損しているものの、ナデ調整が行われている。

**（２）縄文時代晩期の土器（第53図、図版17）**

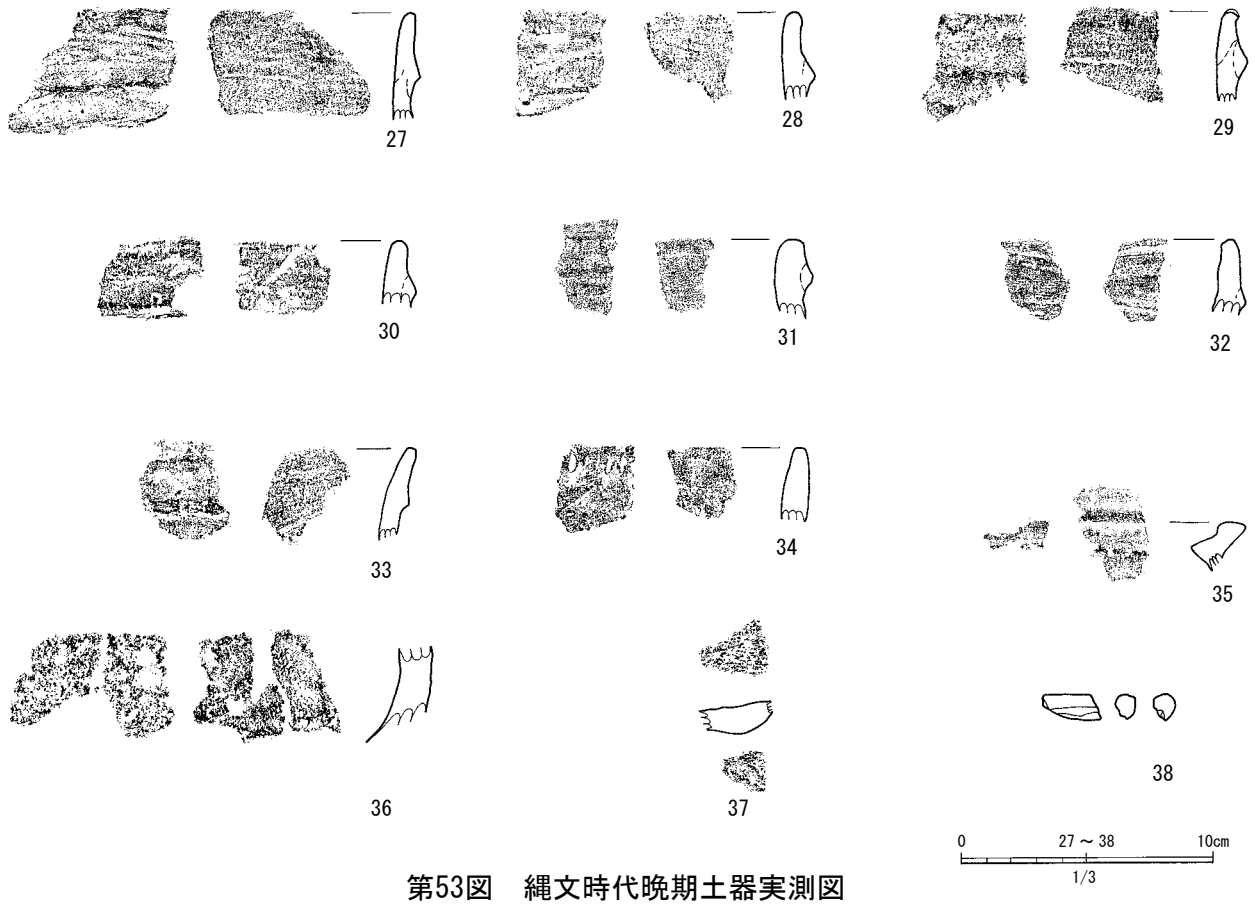
縄文時代晩期の土器も風化が著しく実測に耐えられる12点を掲載した。

**無刻目突帯文（第53図27～33）**

27は深鉢の口縁部である。粘土紐を貼付した突帯が施され、口縁端から突帯頂部までが直線的に続く形状をしている。器壁は薄く、口唇部は丸みを帯びている。28は深鉢の口縁部である。粘土紐を貼付した突帯文が施され、口唇部はU字形を呈している。29は浅鉢の口縁部である。口唇部は外面にやや肥厚している。30～31は深鉢の口縁部である。粘土紐を貼付した突帯文が施され、30は口唇部が丸みを帯びており、31は器壁が厚く、平坦にまとめられている。32は浅鉢の口縁部である。外面には、貼付突帯文が施され、口唇部は、やや平坦な形状を呈している。33は深鉢の口縁部であり、緩やかに外反している。口唇部は平坦な面を有する。




第52図　縄文時代早期土器実測図




第53図　縄文時代晩期土器実測図

**刻目文土器（第53図34）**

34は鉢の口縁部であり、器壁は厚い。口唇部は平坦にまとめられている。外面には刻目文が施されており、本調査区では刻目文は1つしか出土していない。

**鉢（第53図35～38）**

35は浅鉢の口縁部である。大型の鉢であり、外面にはナデ調整、内面には横方向のナデ調整が施してある。36は深鉢の底部である。外面は風化が著しく、内面にわずかにナデ調整の痕が見られる。37は深鉢の底部である。内面、外面とも風化が著しい。内面にススの炭化物が付着している。38は浅鉢の口縁部である。

**（３）石器（第54～64図、図版14～16）**

石器を石材ごとに分けると、砂岩173点、流紋岩12点、チャート48点、ホルンフェルス93点、尾鈴山溶結凝灰岩32点、頁岩5点、珪質頁岩50点、石英1点、泥岩1点、凝灰岩１点である。

**石鏃（第54図39～44）**

石鏃は本調査区から６点が出土し、すべてを図化した。石材は39・40、42～44がチャート製である。41は頁岩である。39･41は、ほぼ二等辺三角形をしており、左右対称の作りとなっている。先端部は鋭くとがっており、基部に心もち、凹みを持たしてある。42の平面形は先端部が欠損しているが、基部にアーチ状の浅い抉りがあり、脚端が丸みを帯びている。43は先端部が欠損しているが、基部に抉りがある。脚端はやや鋭い。44の先端部は鋭くとがっており、基部に抉りがなく、未製品の可能性がある。

**楔形石器（第54図45）**

45は楔形石器であり、本調査区では唯一の出土品である。石材はチャート製であり、扁平な小礫を素材にしている。

**スクレイパー（第54図46～56）**

スクレイパーは本調査区から11点が出土しすべてを図化した。46・48・49・51は砂岩製である。52・56はホルンフェルス製である。47・50は珪質頁岩である。53は流紋岩製である。54は本調査区では唯一の石英である。46は横長の剥片を使用し、正面に剥離痕が

見られ、刃部を形成している。47は背面側より加工を施し、両側縁から下部にかけて、弓状の刃部を形成している。48は当初は礫器として製作された後、両側縁から下部にかけて細かい加工を施し、スクレイパーに転用された可能性がある。49は横長の剥片を使用し左側縁から下部にかけて、刃部を作り出している。50は横長の剥片を使用し、正面と主要剥離面より加工を施し、下縁に鋸歯状の刃部を形成している。51は石核を礫器として製作した後、加工を施し、スクレイパーへと転用された可能性がある。52は幅広の剥片を使用し、裏面より加工を施し、刃部を作り出している。53は横長の剥片を使用し、側縁に細かい鋸歯状の加工が施されている。54は幅広の剥片を使用している。55は敲打による粗い加工が施され、赤化した部分や火熱のために割れたと見られる摂理面を有する。56は当初は礫器として製作された後、下部に加工を施すことでスクレイパーへ転用されたと思われる。

**二次加工剥片（第55図57・58）**

二次加工剥片は本調査区より２点が出土しており、すべてを図化した。57の石材はホルンフェルス製であり、右側側縁が欠損しているが、横長の剥片を使用したと見られる。上面に二次加工が施されている。58の石材は珪質頁岩製であり、右側縁下部に細かい二次加工が施されている。

**剥片（第55図59～70）**

剥片は本調査区より225点が出土しており、その内、12点を図化した。59･63･65･70は流紋岩製である。60･67･69が珪質頁岩であり、61・62は頁岩である。64はホルンフェルス製であり、66・68はチャート製である。59は縦長剥片を使用し、両側縁に微細剥離痕がある。60は横長剥片を使用し、右側縁下部に微細剥離痕がある。61は横長剥片を使用し、右側縁部に微細剥離痕がある。62～64･66は縦長剥片を使用し、66は右側縁下部、左側縁上部に加工が施してある。67・68･70は下部が欠損しているが、縦長剥片を使用していたと見られる。

**蛤形剥片石器（第56･57図71～96）**

蛤形剥片石器は本調査区より102点が出土しており、その内、26点を図化した。石材は73・79・80・82～84までがホルンフェルスであり、74・95が珪質頁岩、71～72、75～78、81・85・88～91・93・94・96が砂岩､86～87、92は尾鈴山溶結凝灰岩を素材にしている。本調査区の蛤形剥片石器の特色として、横長や縦長の剥片を素材として、側縁や下縁に二次的な加工をしてあるものや微細剥離痕を有するものがある。共通の形状としては下縁に丸みを帯びた三角形をしているものが多い。71～75は側縁または下縁部に微細剥離痕がある。横長剥片を素材にしており、左側縁から下部にかけて微細剥離痕が見られる。76～85は横長剥片、縦長剥片を素材にしており、側縁や下部に二次的な加工を施している。86～96は横長剥片、縦長剥片を素材にしており、加工を施さず、側縁部や下縁部にかけて刃部を形成している。

**礫器（第58図97～110）**

礫器は本調査区から14点が出土しており、すべてを図化した。97・99・104・106・107までは尾鈴山溶結凝灰岩製である。98・101～103・108はホルンフェルス製である。100・105・109・110の石材は砂岩製である。97は大型の横長剥片を素材にしており、上部と下部に加工の痕が見られる。重量があり、形状の観点から剥片としてではなく、礫器と判断して報告する。98は円礫を利用し、上部に粗い加工を施し、片面剥離による刃部を作り出している。99は上面から右側縁にかけて自然面が残る。正面・裏面は大きく剥離されている。100は円礫を利用し、自然面を広く有している。上部に粗い加工を施し、両面剥離による刃部を作り出している。101は上部に粗い加工を施している。刃部の打点面に対してエッジが入っている。102は円礫を利用している。自然面を有し、上部に加工を施して、片面剥離による刃部を作り出している。103は円礫を素材にしており、表面、裏面に自然面も確認できる。上部に粗い剥離面がある。104～110までは上部に自然面を有した縦長や横長剥片を素材にしており、底部にピック状の尖った部分を作り出している。110は一部に自然面を有している。両面剥離により刃部を作り出し、更に二次加工を施している。

**石斧（第59図111～121）**

石斧は本調査区から11点が出土しており、その内、7点を図化した。111が尾鈴山溶結凝灰岩製である。112～114・117・120・121はホルンフェルス製である。

122～124の石材は砂岩である。本調査区の石斧はいずれも打製石斧であり、基部に抉りをもたず、刃部に続くもののみが出土している。111は多方向から粗雑な調整が施されている。加工の痕がある。112は重量のある礫を使用している。正面には自然面、裏面には主要剥離面となっている。113は使用により裏面が剥離し、破損している。両側縁にかけて細かい加工が施されている。114は刃部が欠損しており、破損したものをさらに再加工して尖った錐先を作り出している。115は厚みのある礫を使用しており、正面には自然面、裏面には主要剥離面となっており、刃部が欠損している。116は使用により、大きく破損している。正面には一部、自然面が残り、裏面には主要剥離面があったものと推測される。117は正面には自然面、裏面には主要剥離面となっており、使用により、刃部欠損している。118は大きく破損している。正面には一部、自然面が残り、裏面には主要剥離面があったものと推測される。119は正面には自然面、裏面には主要剥離面となっており、基部が欠損している。120は大きく破損している。正面には一部、自然面が残り、裏面には主要剥離面があったものと推測される。121は基部の部分と思われるが、大きく破損している。

**石核（第60・61図122～134）**

石核は本調査区から21点が出土しており、その内、13点を図化した。122～124・126・127、131・132は砂岩製、125・128は尾鈴山溶結凝灰岩製、129は珪質頁岩製である。130・133はホルンフェルス製、134はチャート製である。122は円礫を素材にしており、正面、裏面に自然面を有する。上部から両側縁にかけて、粗く剥片を剥離して、残った部分である。123は円礫を素材としている。124は裏面に自然面を有している。上部に粗い剥離面がある。125は円礫を素材にしており、正面、裏面に自然面を有する。上部より剥片を剥離して残った部分である。126は円礫を素材にしており、自然面を有する。多方向からの剥離により剥片を作り、残った部分である。127は円礫のものを素材につくられ、下部に磨面がある。磨石として使用していたものが破損し、後に石器をつくるための石核として使用された可能性がある。128は円礫のものを素材にしている。いずれも欠損部分があるものの、両縁と両側面に磨面を確認することができる。129は右側縁に縦の規則的な剥離の痕がある。131・134は厚みのある円礫を素材にしており、裏面に多くの自然面を有している。133は多方向から、細かい剥離が行われている。

**石錘（第62図135～143）**

石錘は本調査区から9点が出土しており、その内、すべてを図化した。135～141・143までの石材は砂岩である。142の石材は珪質頁岩である。本調査区では当初、別の器種で製作されたものが破損し、それに抉りをつけて石錘として再利用したものが数点出土している。135～140は扁平な円礫を素材として、両側縁を打ち欠いて抉りを作り、錘部を形成している。141は元々、石斧として使用されたものが破損し、その後、上部と下部に抉りをつけ、石錘として再利用したものと考える。142は蛤形剥片石器だったものに抉りをつけ、石錘として再利用したものと考える。143は石核だったものを再利用して、抉りをつけて石錘として使用した可能性がある。

**敲石（第62図144）**

敲石は本調査区から１点が出土しており、図化した。144の石材は砂岩であり、縦長の礫を使用している。長軸の両端、両側面に磨面がみられ、使用しやすいように加工してある。上部と下部には敲打痕が確認できる。

**凹石（第63図145）**

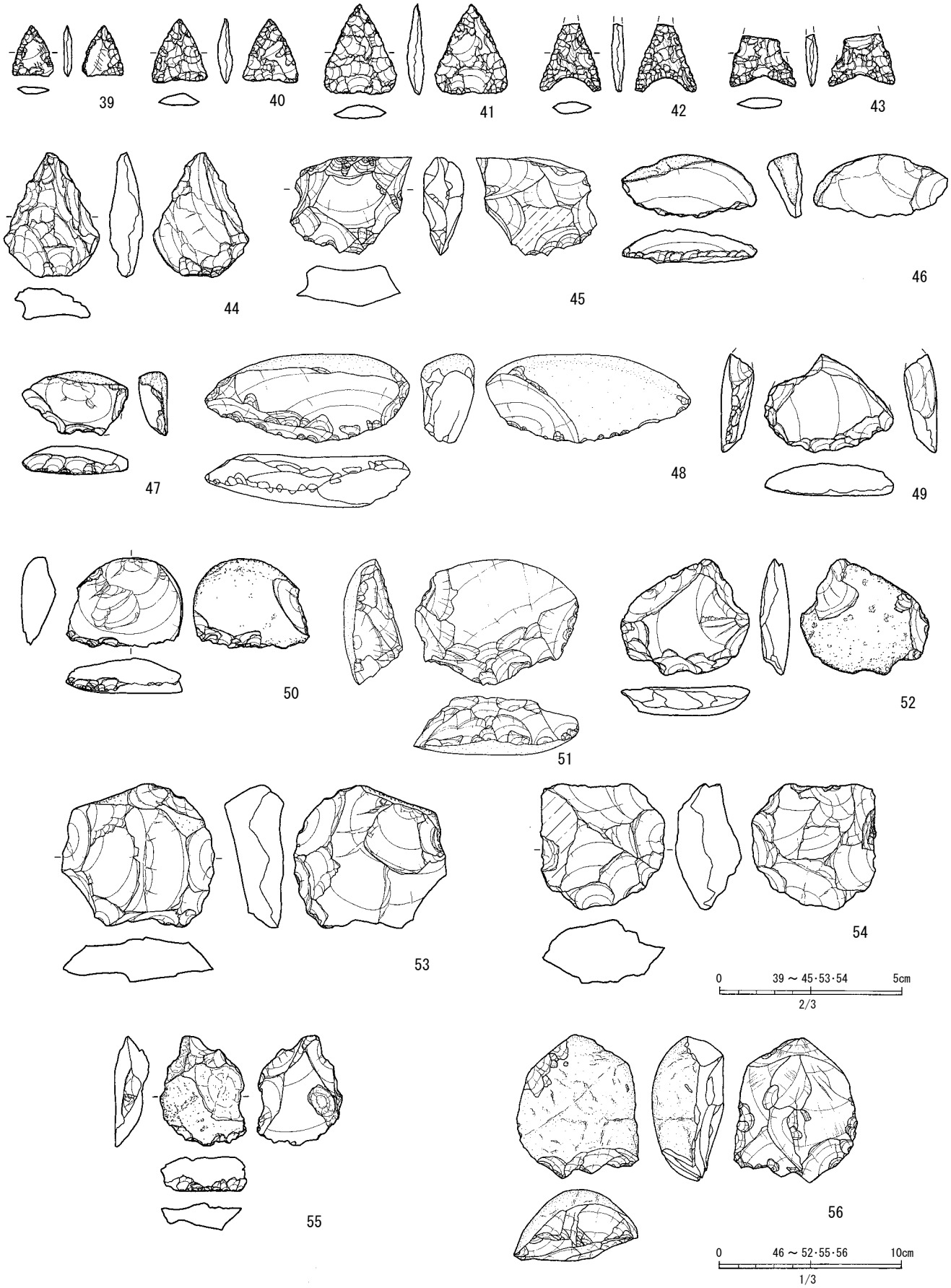
145の石材は砂岩であり、厚みのある円礫を使用している。礫平坦部の両面に2㎜程の凹みがある。

**磨石（第63図146～148）**

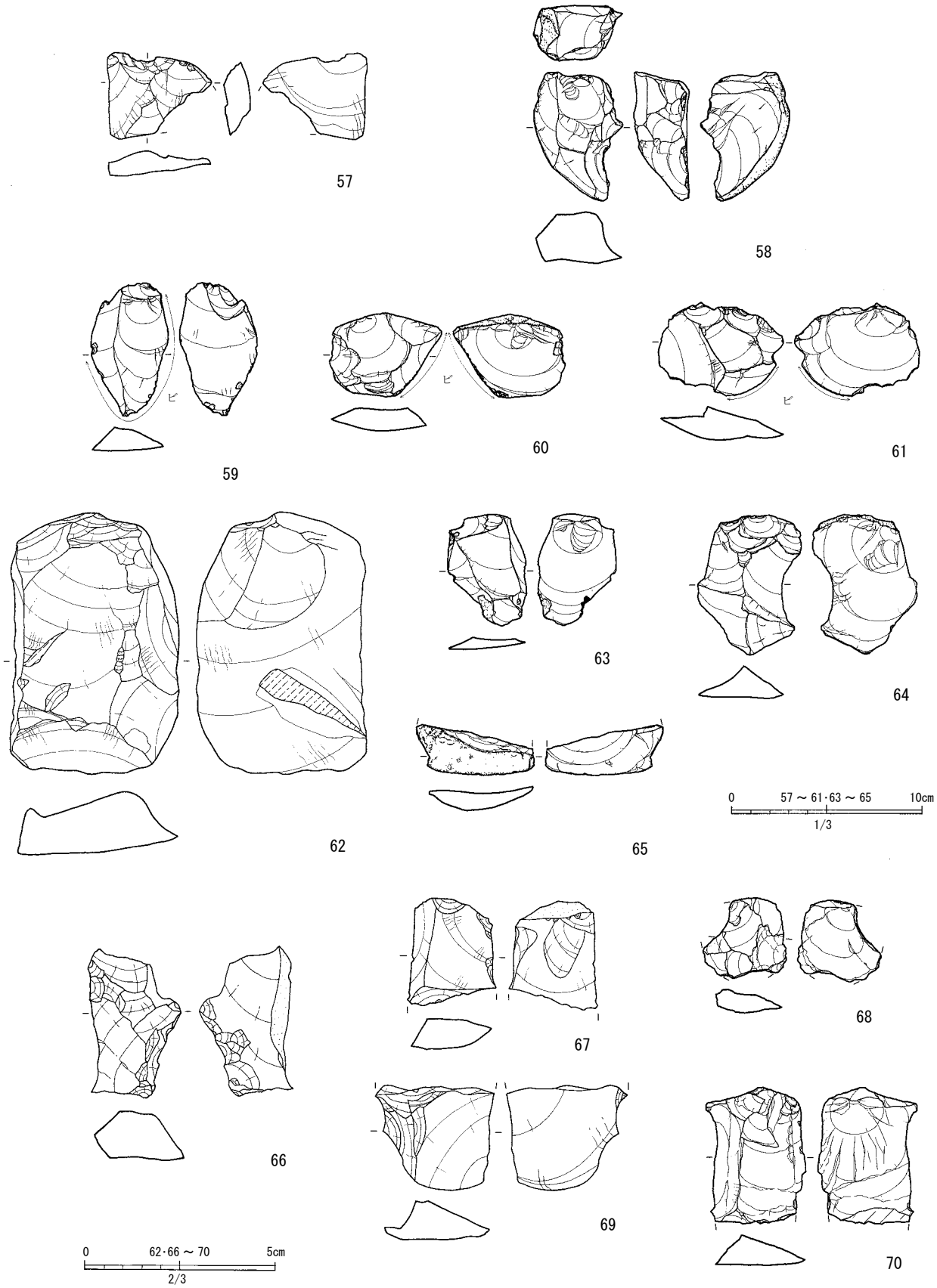
磨石は本調査区から52点が出土しており、その内、３点を図化した。146～147は尾鈴山溶結凝灰岩であり、148は砂岩である。146～148は円礫を素材にしている。いずれも欠損部分があるものの、両側面にはっきり磨面を確認することができる。

**石皿（第63図149･150）**

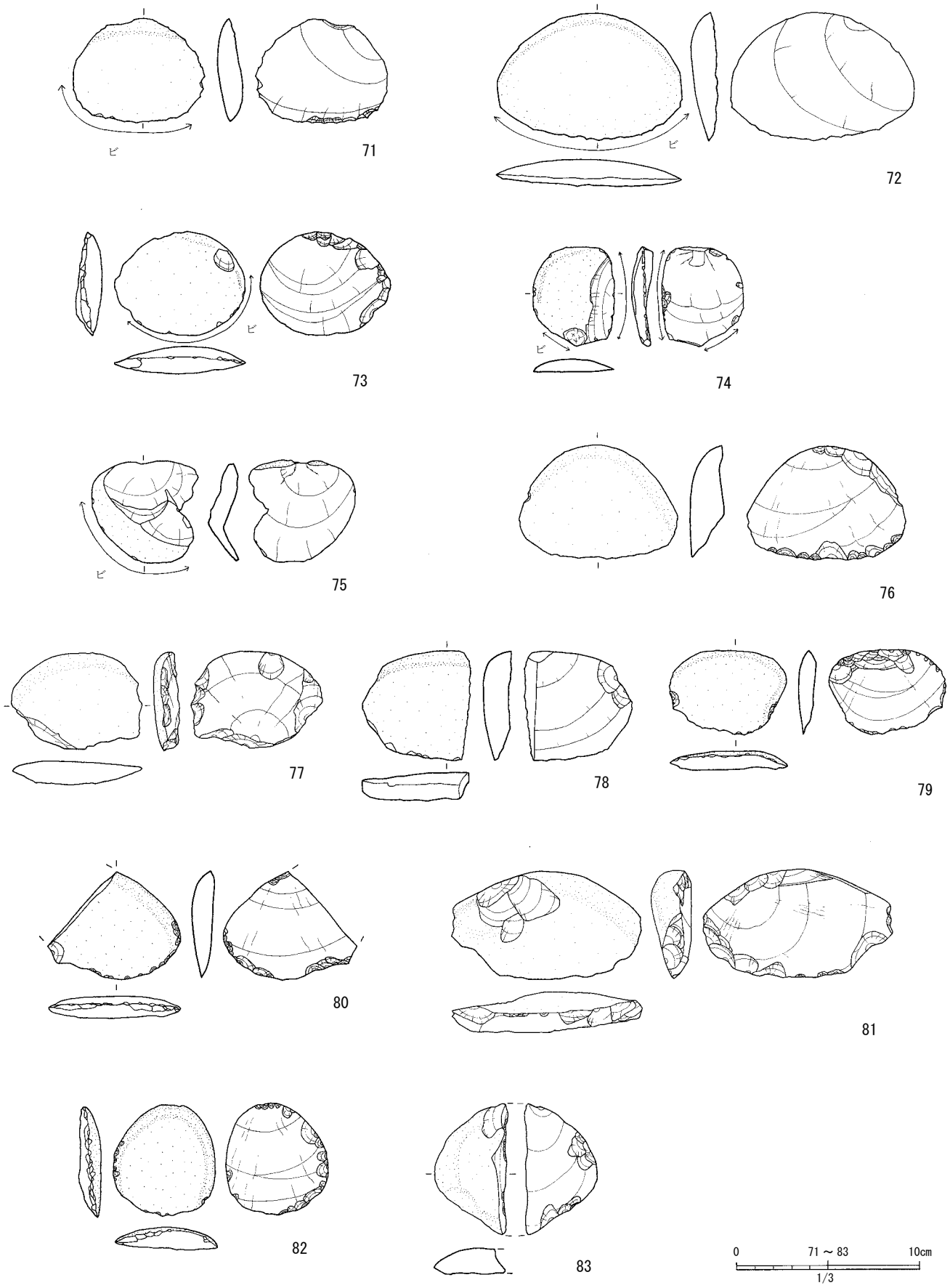
石皿は本調査区から４点が出土しており、その内、２点を図化した。149の石材は砂岩であり、円礫の扁平なものを使用している。正面・裏面に磨面があり、両側縁には敲打痕が見られる。150の石材は砂岩であり、円礫を使用している。中央部が全面、磨面になっ



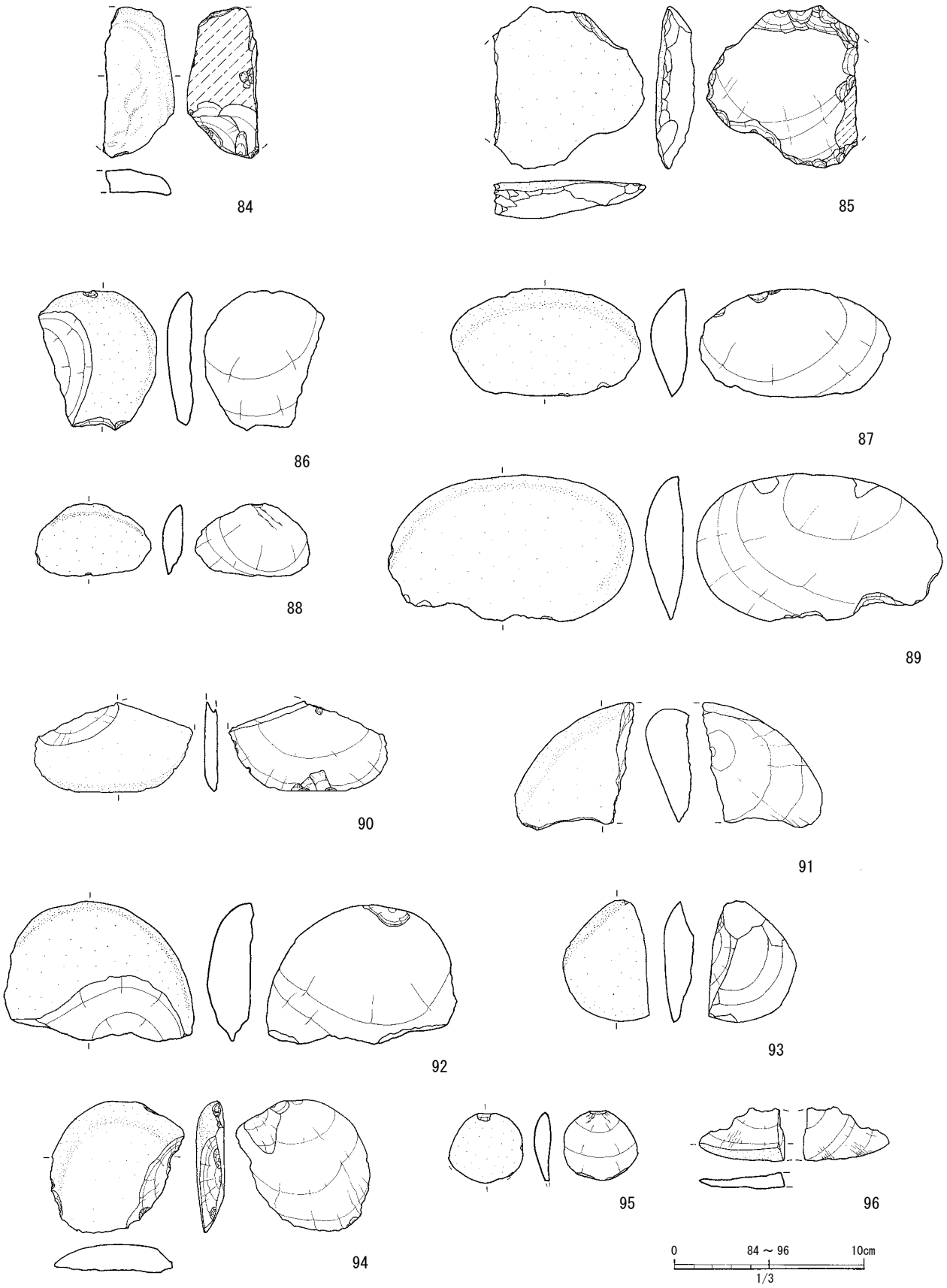

第54図　縄文時代石器実測図（１）



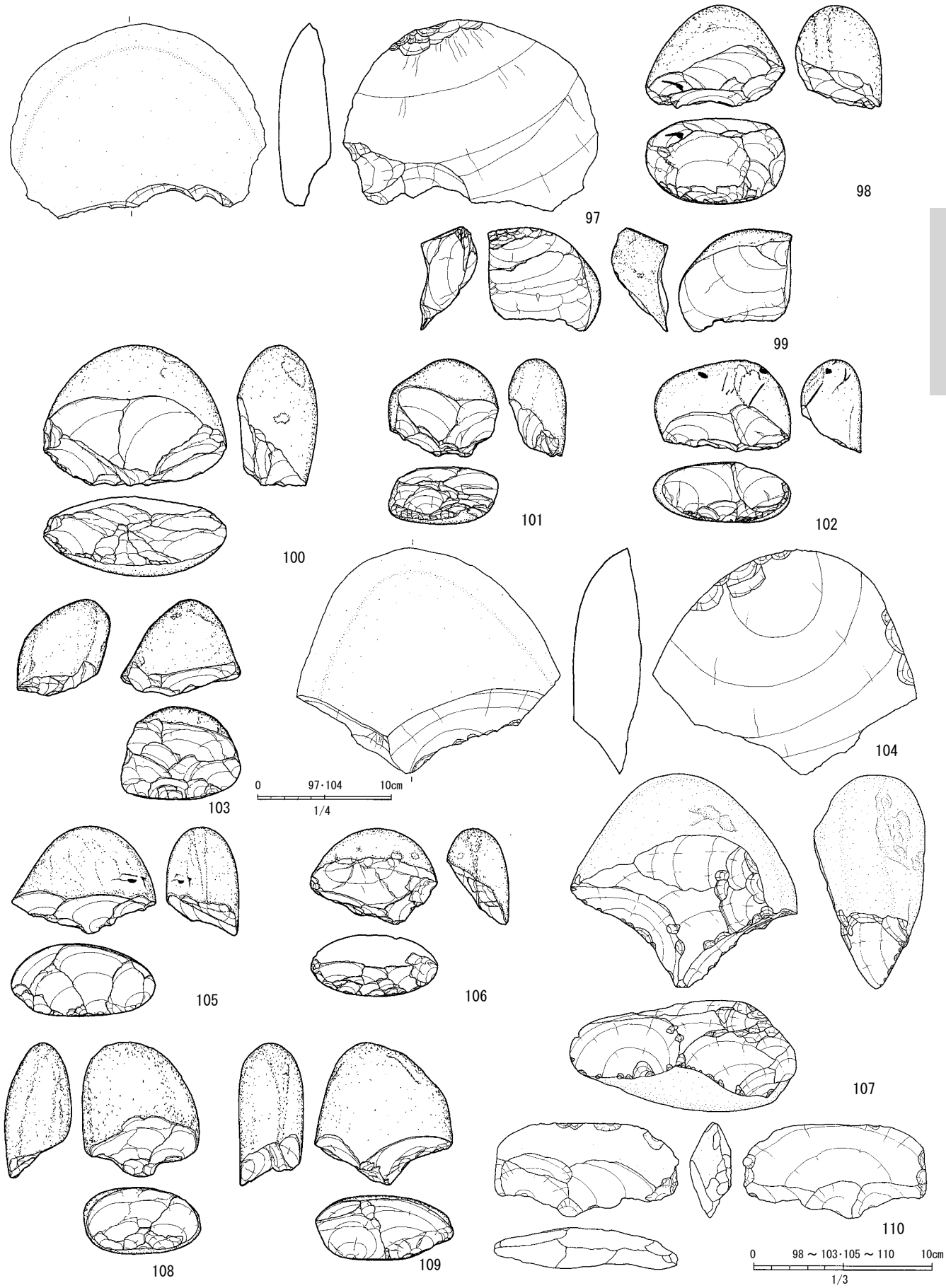

第55図　縄文時代石器実測図（２）



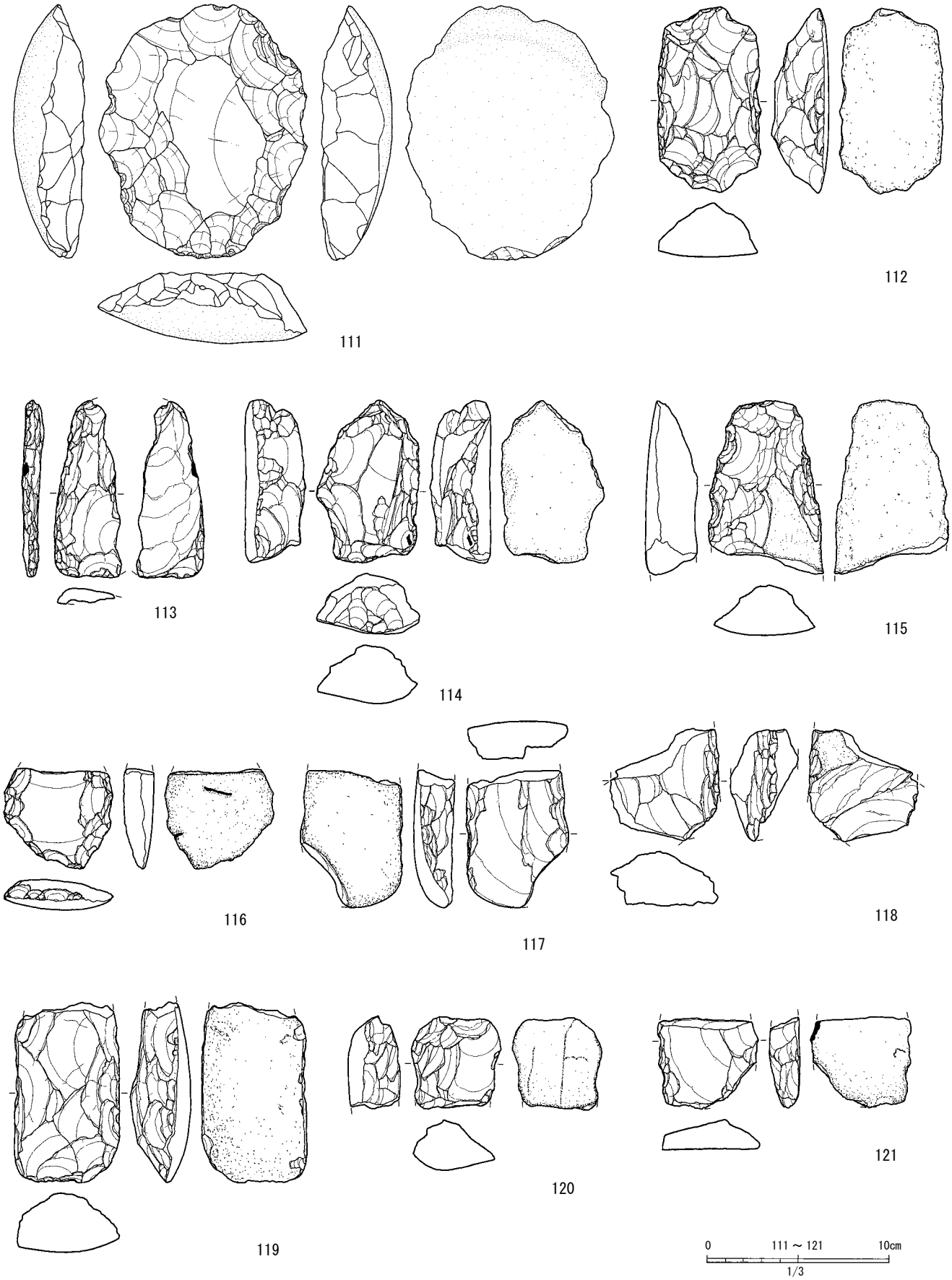

第56図　縄文時代石器実測図（３）



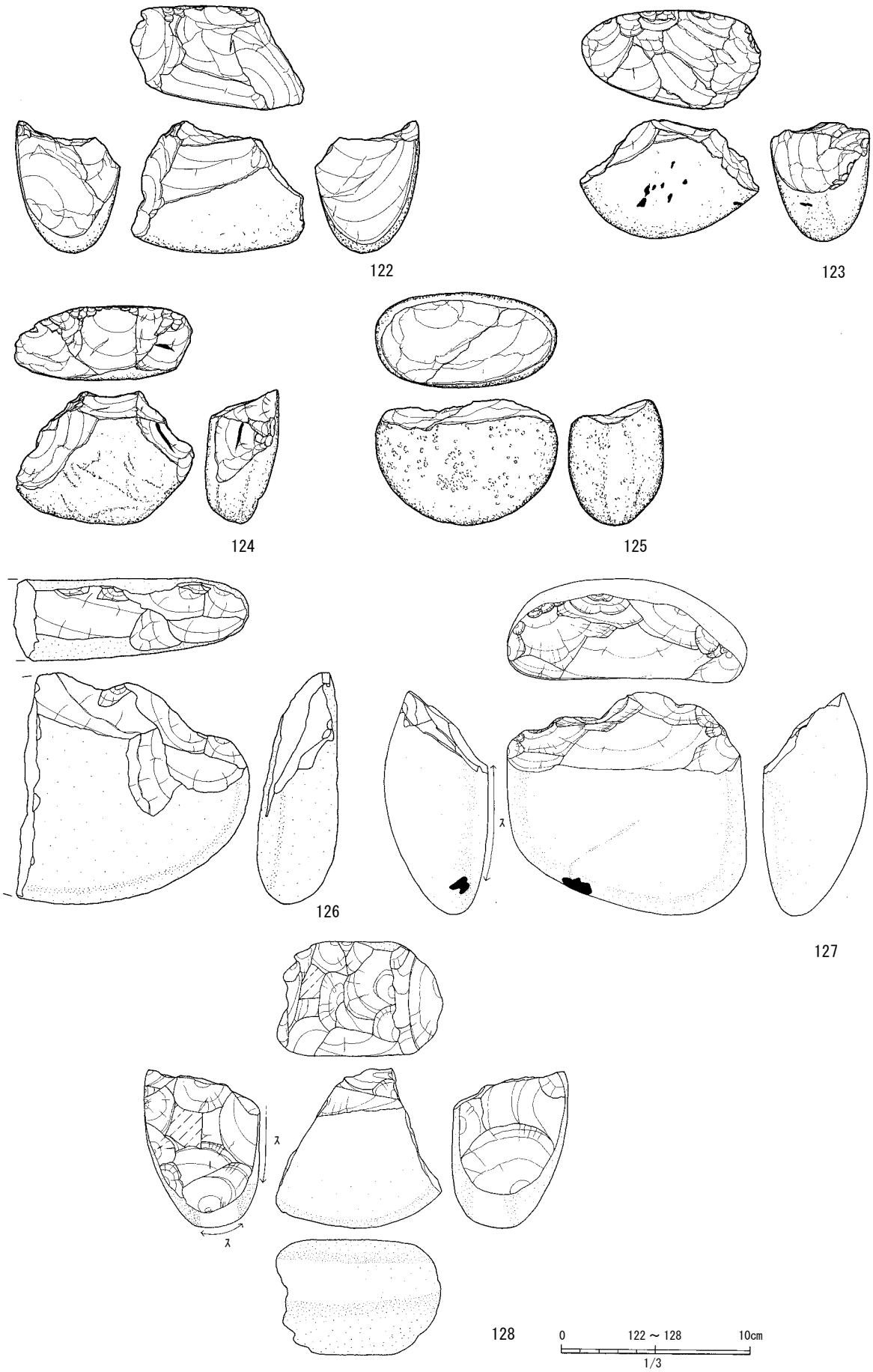

第57図　縄文時代石器実測図（４）



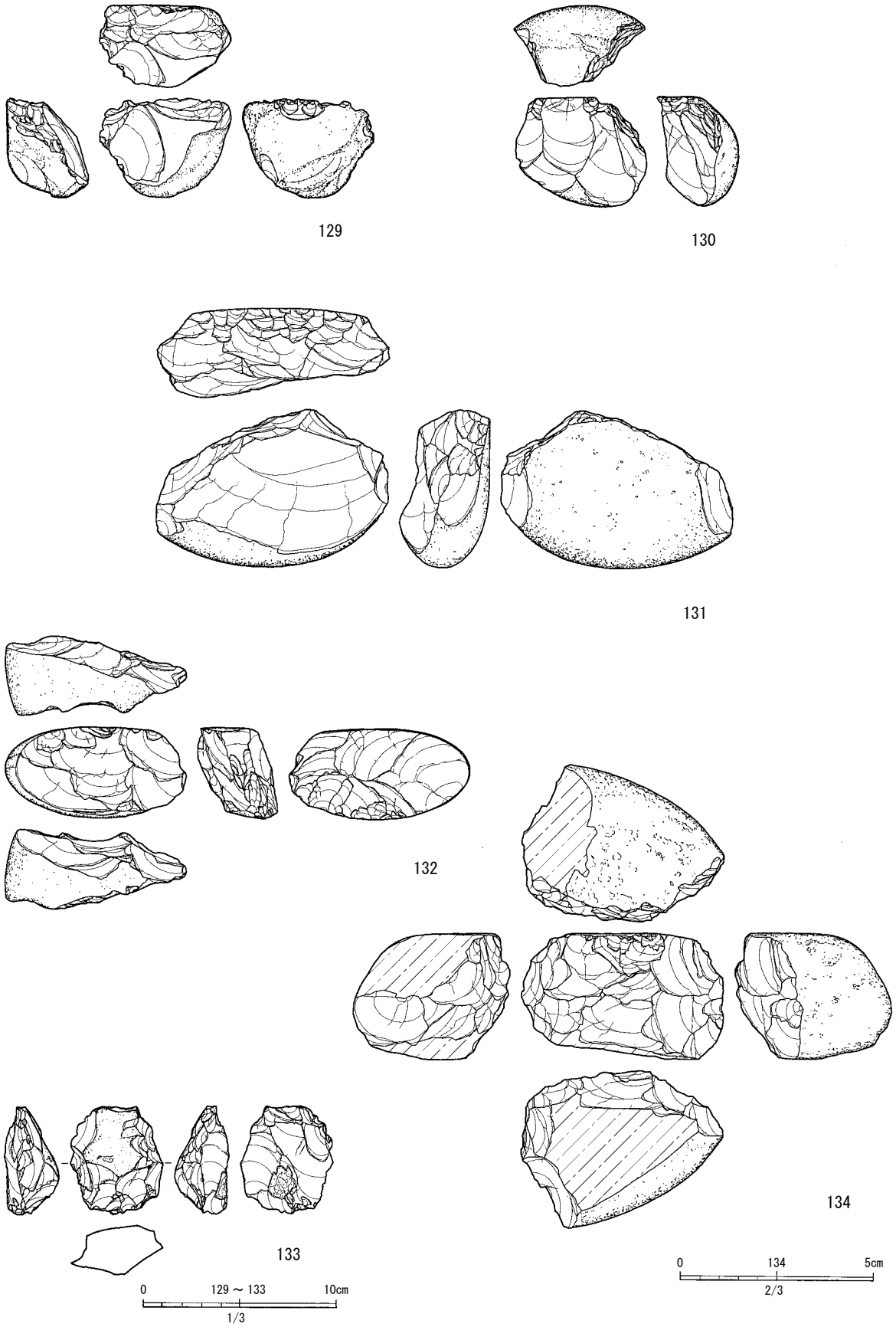

第58図　縄文時代石器実測図（５）



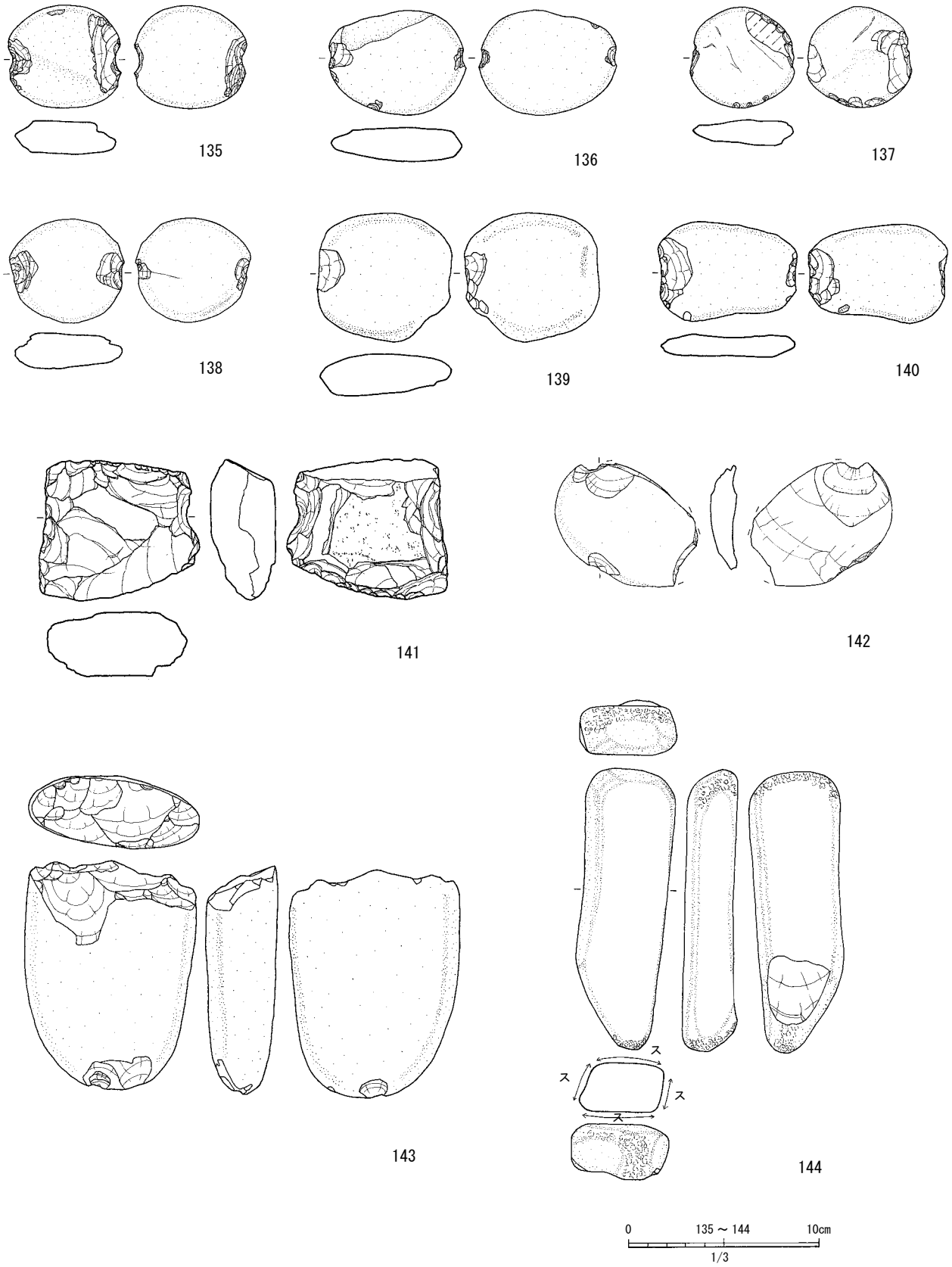

第59図　縄文時代石器実測図（６）



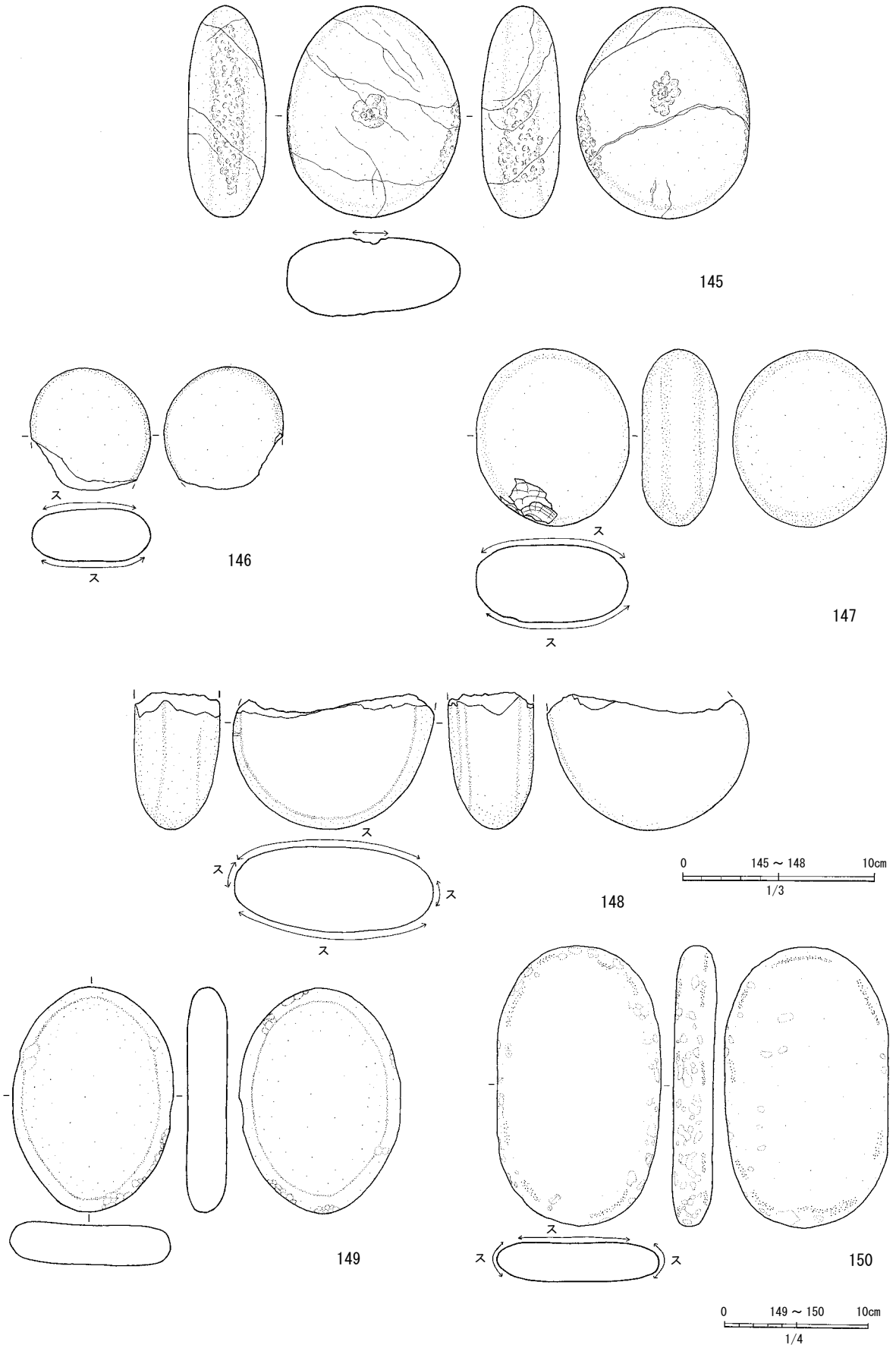

第60図　縄文時代石器実測図（７）



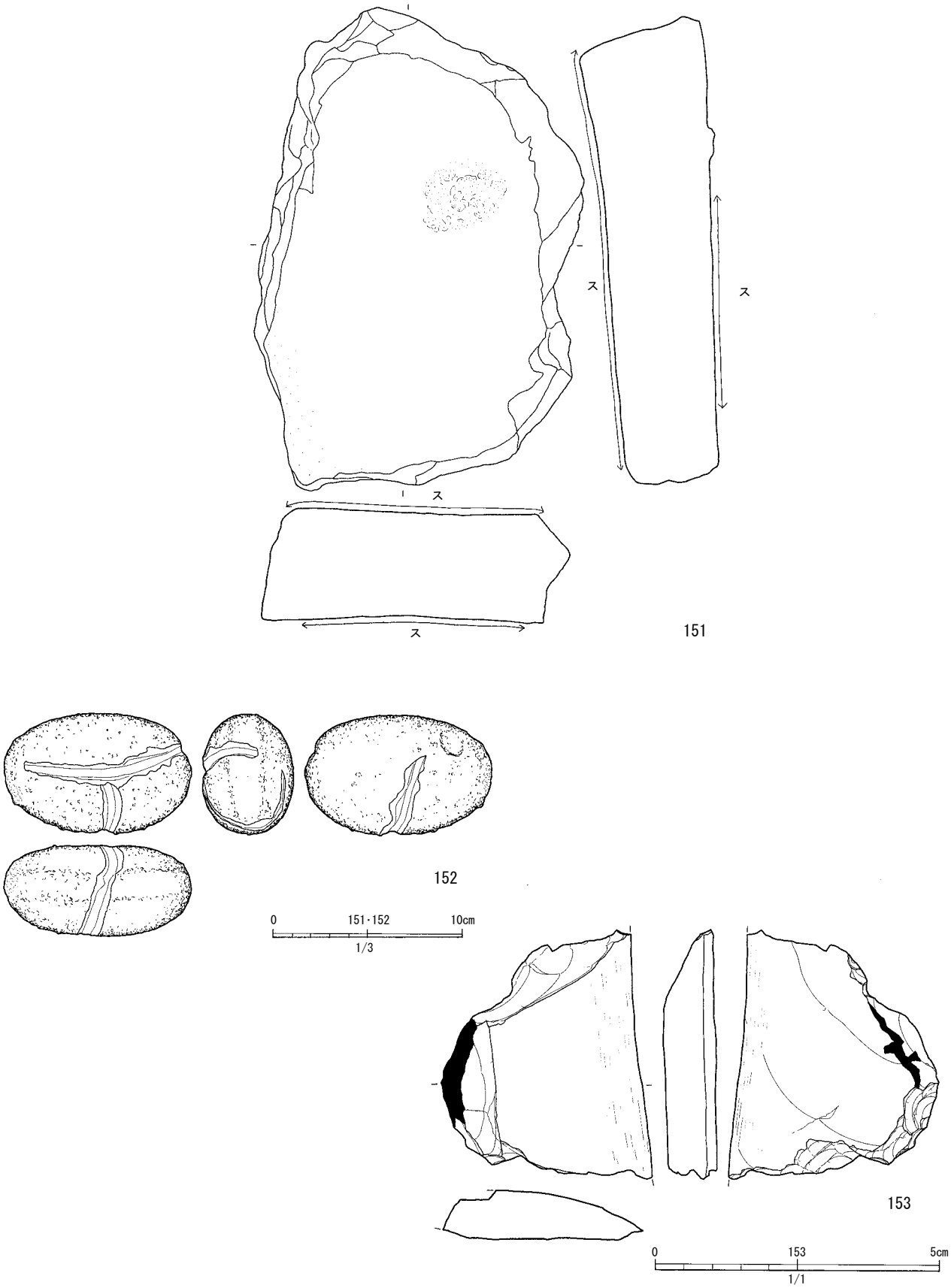

第61図　縄文時代石器実測図（８）




第62図　縄文時代石器実測図（９）




第63図　縄文時代石器実測図（10）




第64図　縄文時代石器実測図（11）

ていることから、磨石の台として使用された可能性もある。

**台石（第64図151）**

151の石材は尾鈴山溶結凝灰岩であり、約９kgの重量がある。広い平坦面を持つ礫を使用している。中央部に磨面を有している。

**有刻石製品（第64図152）**

152の石材は尾鈴山溶結凝灰岩であり、層位横転箇所より出土している。楕円形の円礫にＴ字に５㎜程の深さの線刻がほどこされており、裏面にまで線刻が続いている。有溝石錘のように思えるが、用途については不明であるため、有刻石製品として報告する。

**磨製石製品（第64図153）**

153の石材は泥岩である。断面を見ると刃部は反対側の二平面を挟んで薄型に作られてり、側縁にしか存在しないが、石刀の可能性がある。また刃部の側縁が少し湾曲していることから天附型石刀の可能性もある。

## 第16表　縄文土器観察表

| No. | 出土地点（グリッド・遺構他） | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 手法・調整・文様ほか | | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 外 | 内 | 外 | 内 | |
| 7 | Ｂ４ | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 斜方向の貝殻条痕文 | 横方向のナデ | 褐色 10YR4／4 | にぶい黄褐色 10YR4／3 | ３mm以下の灰白色粒、透明光沢粒、黒色光沢粒を多く含む。 |
| 8 | Ａ４ | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 貝殻条痕文 | 一部ハクリ | 赤色 10R5／6 | 赤色 10R5／6 | １mm以下の透明光沢粒を多く含む。１mm以下の灰白色粒、２mm以下の灰色粒をごくわずか含む。 |
| 9 | Ｂ４ | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 貝殻条痕文 | 貝殻条痕文 | 橙色 5YR6／6 | 橙色 7.5YR6／6 | ３mm以下の灰色粒、４mm以下の灰白色粒をわずかに含む。 |
| 10 | － | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 風化著しい、貝殻条痕文、一部スス | 貝殻条痕文 | にぶい赤褐色 5YR5／4 | 明赤褐色 5YR5／6 | １mm以下の褐色粒、灰白色粒、褐灰色粒を多く含む。１mm程度の褐色粒、灰白色粒を少し含む。微細な黒色光沢粒、透明光沢粒をわずかに含む。 |
| 11 | Ａ５ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | ナデ | 貝殻条痕文 | 橙色 5YR6／6 | にぶい黄褐色 10YR5／4 | ２mm以下の黒色粒、橙色粒、灰白色粒、透明光沢粒、１mm以下の黒色光沢粒を多く含む。４mm程度の黒色光沢粒を１つ含む。 |
| 12 | Ｂ４ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | ナデ | 貝殻条痕文 | 橙色 7.5YR6／6 | 橙色 7.5YR6／6 | ２mm以下の浅黄橙粒、透明光沢粒、１mm以下の黒色光沢粒を多く含む。１mm以下の灰白色粒、明褐色粒を少し含む。 |
| 13 | － | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | ナデ | 貝殻条痕文 | にぶい橙色 7.5YR6／4 | にぶい褐色 7.5YR5／4 | 微細な灰白色粒を多く含む。１mm以下の灰白色粒、褐色粒を少し含む。微細な透明光沢粒をわずかに含む。 |
| 14 | Ｂ３ | 深鉢 | 口縁部～胴部 | － | － | － | 楕円押型文 | 楕円押型文、ナデ | 明赤褐色 2.5YR5／6 | 明赤褐色 5YR5／6 | 微細な白色光沢粒、黒色光沢粒を多く含む。微細な褐色粒を少し含む。２mm以下の暗赤褐色粒をわずかに含む。８mm程度の褐色粒を１つ含む。 |
| 15 | Ｂ２ | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 風化著しい、楕円押型文 | 工具？ナデ | 明赤褐色 2.5YR5／6 | 褐色 10YR4／4 | １mm以下の透明光沢粒をわずかに含む。５mm以下の赤褐色粒をごくわずか含む。 |
| 16 | Ｂ２ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 楕円押型文 | ナデ | 明赤褐色 2.5YR5／8 | 明赤褐色 2.5YR5／8 | ３mm以下の暗赤褐色粒、灰白色粒、１mm以下の透明粒、黒色光沢粒を少し含む。 |
| 17 | Ａ４ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 楕円押型文 | ナデ | にぶい黄橙色 10YR7／4 | にぶい黄橙色 10YR6／4 | 微細な灰白色粒を多く含む。１mm以下の褐灰色粒、黒色光沢粒を少し含む。 |
| 18 | － | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 楕円押型文 | ナデ | 明赤褐色 5YR5／8 | 褐色 10YR4／6 | １mm以下の透明光沢粒をわずかに含む。 |
| 19 | Ｂ１ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 風化著しい、ナデ、一部欠損 | 風化著しい、楕円押型文 | にぶい褐色 7.5YR5／4 | にぶい褐色 7.5YR5／4 | １mm以下の灰白色粒を多く含む。１mm以下の針状黒色光沢粒をわずかに含む。 |
| 20 | Ｂ５ | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | ナデ | 楕円押型文、ナデ | 浅黄橙色 10YR8／4 | にぶい黄橙色 10YR7／4 | １mm以下の透明光沢粒をわずかに含む。 |
| 21 | － | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 山形押型文 | ナデ、一部欠損 | 明褐色 7.5YR5／6 | 明褐色 7.5YR5／6 | 微細な灰白色粒を多く含む。微細な黒色光沢粒を少し含む。３mm強の褐色粒を１つ含む。 |
| 22 | － | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 山形押型文 | ナデ | 明褐色 7.5YR5／6 | にぶい褐色 7.5YR5／4 | １mm以下の針状黒色光沢粒、透明光沢粒を多く含む。微細な灰白色粒、褐色粒、黒褐色粒を少し含む。 |
| 23 | － | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 山形押型文 | ナデ | 明赤褐色 5YR5／6 | 明赤褐色 5YR5／6 | １mm以下の灰白色粒を多く含む。１mm以下の赤褐色粒、褐灰色粒、透明光沢粒、微細な黒色光沢粒、透明光沢粒を少し含む。 |
| 24 | － | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 風化気味、山形押型文 | ナデ | 明黄褐色 10YR6／6 | 明黄褐色 10YR6／6 | １mm以下の赤褐色粒、褐色粒、褐灰色粒、灰白色粒を多く含む。微細な透明光沢粒、黒色光沢粒をわずかに含む。５mm強の褐灰色粒を１つ含む。 |
| 25 | Ｂ３ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 風化著しい、撚糸文　山形押型文 | ナデ | 橙色 7.5YR6／6 | にぶい黄橙色 10YR6／4 | １mm以下の灰白色粒を多く含む。１mm以下の針状黒色光沢粒、微細な透明光沢粒、黒色光沢粒を少し含む。 |
| 26 | Ｃ３ | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 撚糸文 | ナデ、一部欠損 | にぶい黄褐色 10YR4／3 | 灰黄褐色 10YR4／2 | ３mm以下の透明光沢粒、灰白色粒を多く含む。 |
| 27 | Ｃ５ | 鉢 | 口縁部 | － | － | － | 貼付突帯文、ナデ | ナデ | 橙色 7.5YR6／6 | 黄褐色 2.5Y5／4 | ３mm以下の灰色粒、灰白色粒を少し含む。 |
| 28 | Ｂ５ | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 貼付突帯文、ナデ | ナデ | にぶい橙色 7.5YR6／4 | 明黄褐色 7.5YR7／6 | １mm以下の黒褐色粒、透明光沢粒をわずかに含む。 |
| 29 | Ｂ２ | 浅鉢 | 口縁部 | － | － | － | 風化著しい、貼付突帯文、ナデ | ナデ、粘土継目あり | 橙色 7.5YR6／6 | にぶい黄橙色 10YR6／4 | １mm以下、及び２mm程度の褐灰色粒、灰白色粒をとても多く含む。 |
| 30 | Ｂ４ | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 貼付突帯文、ナデ | ナデ | にぶい黄橙色 10YR7／4 | 褐灰色 10YR4／1 | ３mm以下の透明光沢粒、にぶい褐色粒を少し含む。 |
| 31 | Ｂ３ | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 貼付突帯文、ナデ | ナデ | 橙色 7.5YR6／6 | にぶい褐色 7.5YR5／4 | １mm以下の灰白色粒、微細な黒色光沢粒を多く含む。 |
| 32 | Ｂ４ | 浅鉢 | 口縁部 | － | － | － | 貼付突帯文、横方向のナデ | 横方向のナデ | 褐色 10YR4／4 | 黒褐色 10YR3／1 | ２mm以下の灰白色粒、透明光沢粒をわずかに含む。 |
| 33 | Ａ４ | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 風化著しい、突帯文 | 貝殻条痕文、一部ハクリ | にぶい黄橙色 10YR7／4 | にぶい黄橙色 10YR7／4 | １mm以下の透明光沢粒をごくわずか含む。１mm以下の白色粒、５mm以下の灰色粒をわずかに含む。 |
| 34 | Ｂ３ | 鉢 | 口縁部 | － | － | － | 刻み目、ナデ | ナデ | にぶい黄褐色 10YR5／4 | 黄褐色 10YR5／6 | １mm以下の透明光沢粒をわずかに含む。 |
| 35 | Ａ５ | 浅鉢 | 口縁部 | － | － | － | ナデ | 横方向のナデ | 灰白色 7.5YR8／2 | 浅黄橙色 7.5YR8／3 | １mm以下の灰白色粒を多く含む。 |
| 36 | Ｂ３ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 風化著しい | ナデ | 明赤褐色 5YR5／8 | 褐色 7.5YR4／6 | １mm以下の灰白色粒、黒色光沢粒を多く含む。 |
| 37 | － | 深鉢 | 底部 | － | － | － | 風化著しい | 風化著しい、炭化物付着 | にぶい黄橙色 10YR7／3 | にぶい赤褐色 5YR4／3 | 微細な灰白色粒を多く含む。 |
| 38 | Ｂ４ | 浅鉢 | 口縁部 | － | － | － | ナデ | ナデ | 黒褐色 2.5Y3／2 | 黒褐色 2.5Y3／2 | 微細な透明光沢粒を少し含む。 |

# 第17表　縄文時代石器計測表

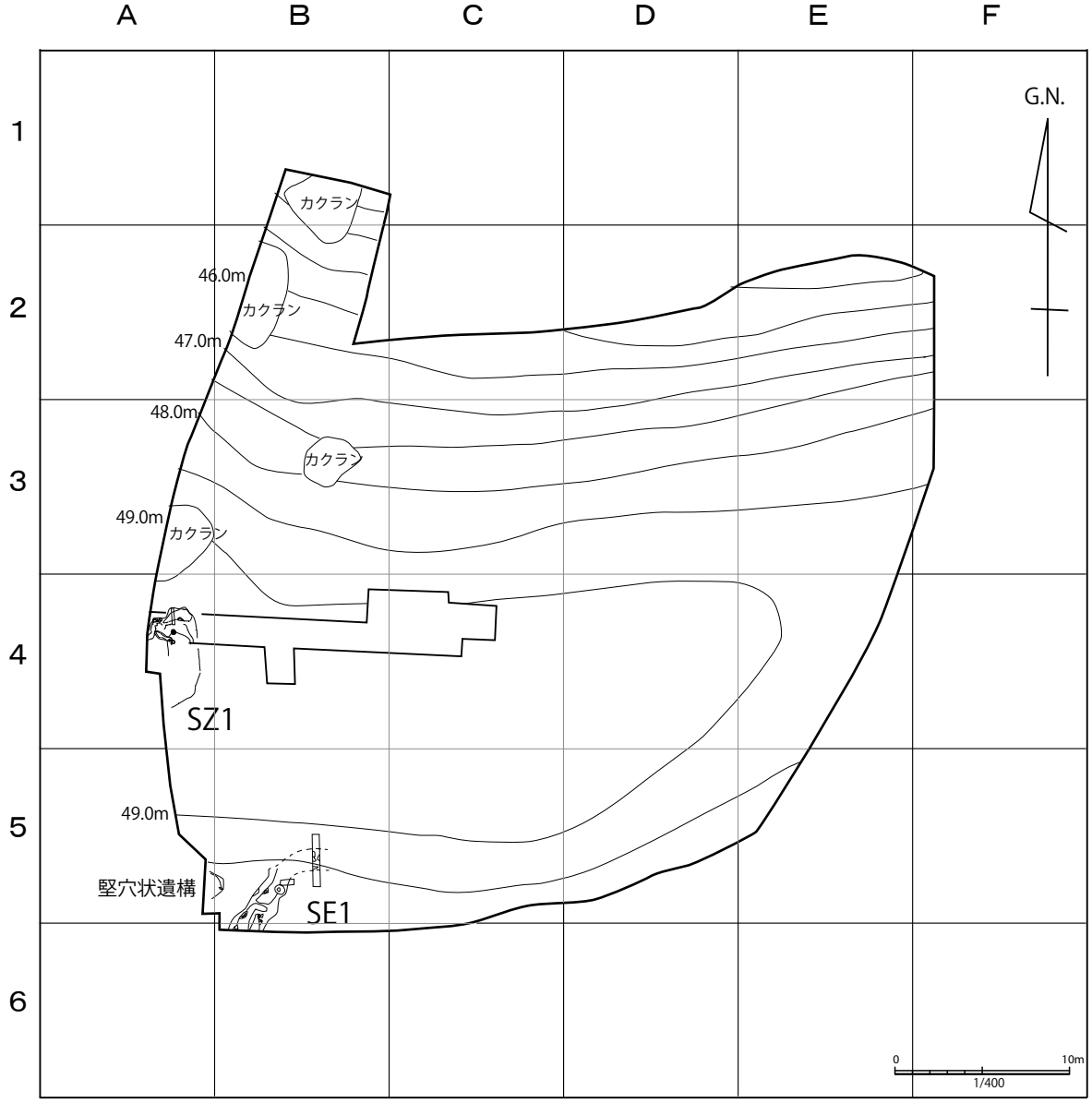
| No. | 出土地点（グリッド 遺構等） | 層 | 器　種 | 石　材 | 法　量 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） |
| 39 | － | Ⅱ | 石鏃 | チャート | 1.34 | 1.11 | 0.20 | 0.4 |
| 40 | Ｂ２ | － | 石鏃 | チャート | 1.63 | 1.50 | 0.36 | 0.8 |
| 41 | Ｃ２ | － | 石鏃 | 頁岩 | 2.39 | 1.95 | 0.43 | 1.8 |
| 42 | － | － | 石鏃 | チャート | 1.53 | 1.66 | 0.34 | 0.9 |
| 43 | Ｂ２ | Ⅳ | 石鏃 | チャート | 1.32 | 1.81 | 0.31 | 0.7 |
| 44 | Ｂ３ | Ⅳ | 石鏃 | チャート | 3.38 | 2.59 | 0.89 | 6.1 |
| 45 | Ｂ４ | Ⅳ | 楔形石器 | チャート | 2.65 | 3.30 | 1.10 | 0.4 |
| 46 | | － | スクレイパー | 砂岩 | 3.44 | 7.14 | 1.80 | 41.3 |
| 47 | Ｂ２ | Ⅲ | スクレイパー | 珪質頁岩 | 3.38 | 5.79 | 1.54 | 34.3 |
| 48 | | － | スクレイパー | 砂岩 | 4.85 | 11.20 | 2.90 | 173.2 |
| 49 | Ｂ３ | － | スクレイパー | 砂岩 | 5.28 | 7.03 | 1.69 | 65.3 |
| 50 | Ｂ４ | － | スクレイパー | 珪質頁岩 | 4.85 | 6.15 | 1.91 | 70.0 |
| 51 | Ｂ２ | － | スクレイパー | 砂岩 | 6.90 | 9.00 | 3.20 | 206.4 |
| 52 | Ｂ３ | Ⅴ | スクレイパー | ホルンフェルス | 6.22 | 7.05 | 1.62 | 78.3 |
| 53 | Ｂ３ | Ⅳ | スクレイパー | 流紋岩 | 3.74 | 4.16 | 1.58 | 25.0 |
| 54 | Ｂ２ | Ⅲ | スクレイパー | 石英 | 3.41 | 3.40 | 1.77 | 20.6 |
| 55 | ＳＩ１ | － | スクレイパー | 珪質頁岩 | 5.79 | 4.39 | 1.85 | 42.7 |
| 56 | Ｂ３ | Ⅳ | スクレイパー | ホルンフェルス | 7.90 | 6.75 | 3.95 | 229.3 |
| 57 | Ｂ４ | Ⅳ | 二次加工剥片 | ホルンフェルス | 4.60 | 5.45 | 1.40 | 27.9 |
| 58 | Ｂ５ | Ⅳ | 二次加工剥片 | 珪質頁岩 | 6.46 | 4.60 | 2.77 | 89.8 |
| 59 | Ｂ６ | Ⅳ | 剥片 | 流紋岩 | 6.81 | 4.02 | 1.44 | 36.8 |
| 60 | ＳＩ１ | － | 剥片 | 珪質頁岩 | 4.41 | 5.71 | 1.52 | 39.5 |
| 61 | Ｂ４ | Ⅳ | 剥片 | 頁岩 | 4.65 | 6.42 | 1.84 | 43.3 |
| 62 | － | － | 剥片 | 頁岩 | 6.85 | 4.45 | 1.65 | 62.4 |
| 63 | Ｂ４ | Ⅳ | 剥片 | 流紋岩 | 5.94 | 4.10 | 0.99 | 19.5 |
| 64 | Ｃ３ | － | 剥片 | ホルンフェルス | 7.30 | 4.75 | 1.82 | 55.0 |
| 65 | Ｂ３ | Ⅳ | 剥片 | 流紋岩 | 2.27 | 5.64 | 1.15 | 15.3 |
| 66 | ＳＩ５～７ | － | 剥片 | チャート | 3.40 | 2.40 | 1.30 | 13.0 |
| 67 | ＳＩ３０ | － | 剥片 | 珪質頁岩 | 2.80 | 2.40 | 0.80 | 7.4 |
| 68 | Ｂ４ | Ⅳ | 剥片 | チャート | 2.04 | 2.16 | 0.62 | 2.7 |
| 69 | ＳＩ３６ | － | 剥片 | 珪質頁岩 | 2.70 | 3.15 | 1.00 | 8.3 |
| 70 | ＳＩ10～11 | － | 剥片 | 流紋岩 | 3.59 | 2.48 | 0.97 | 8.0 |
| 71 | Ｂ４ | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 5.70 | 7.20 | 1.30 | 56.7 |
| 72 | Ｃ３ | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 7.00 | 10.00 | 1.50 | 117.5 |
| 73 | Ｂ４ | － | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 5.20 | 7.15 | 1.50 | 61.0 |
| 74 | Ｂ２ | Ⅴ | 蛤形剥片石器 | 珪質頁岩 | 5.45 | 4.40 | 1.20 | 26.9 |
| 75 | ＳＩ24 | － | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 5.55 | 5.75 | 0.90 | 39.8 |
| 76 | Ｂ５ | － | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 6.10 | 8.70 | 1.85 | 111.6 |
| 77 | Ｃ３ | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 5.30 | 7.20 | 1.40 | 62.1 |
| 78 | Ｂ５ | － | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 6.00 | 5.90 | 1.60 | 76.1 |
| 79 | ＳＩ24 | － | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 4.60 | 6.25 | 1.10 | 33.6 |
| 80 | Ｃ３ | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 5.90 | 7.20 | 1.20 | 62.0 |
| 81 | Ｂ３ | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 5.90 | 10.35 | 2.20 | 142.2 |
| 82 | ＳＩ10～11 | － | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 6.10 | 5.60 | 1.20 | 45.3 |
| 83 | ＳＩ９ | － | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 7.15 | 4.00 | 1.45 | 46.3 |
| 84 | ＳＩ36 | － | 蛤形剥片石器 | ホルンフェルス | 7.95 | 3.80 | 1.40 | 50.3 |
| 85 | Ｂ５ | － | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 8.55 | 7.95 | 2.00 | 150.6 |
| 86 | ＳＩ36 | － | 蛤形剥片石器 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 7.35 | 6.25 | 1.35 | 67.8 |
| 87 | Ｂ３ | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 5.70 | 11.10 | 1.85 | 125.0 |
| 88 | ＳＩ１ | － | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 3.85 | 6.05 | 1.10 | 25.6 |
| 89 | Ｂ２ | Ⅲ | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 7.70 | 12.90 | 2.00 | 265.1 |
| 90 | ＳＩ36 | － | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 4.75 | 8.35 | 0.70 | 34.0 |
| 91 | ＳＩ１ | － | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 6.70 | 6.20 | 2.45 | 87.2 |
| 92 | Ｃ４ | － | 蛤形剥片石器 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 7.35 | 10.05 | 2.40 | 200.1 |
| 93 | ＳＩ31～32 | － | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 6.40 | 4.60 | 1.50 | 43.2 |
| 94 | ＳＩ12～24 | － | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 6.90 | 7.05 | 1.50 | 82.0 |
| 95 | Ｂ５ | － | 蛤形剥片石器 | 珪質頁岩 | 3.70 | 3.90 | 0.90 | 12.9 |
| 96 | ＳＩ36 | － | 蛤形剥片石器 | 砂岩 | 2.90 | 4.55 | 0.90 | 8.4 |
| 97 | Ｂ３ | Ⅳ | 蛤形剥片石器 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 14.40 | 19.10 | 3.80 | 1111.4 |
| 98 | Ｃ２ | － | 礫器 | ホルンフェルス | 5.55 | 7.47 | 4.72 | 260.4 |
| 99 | ＳＩ25 | － | 礫器 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 5.14 | 6.21 | 3.01 | 109.4 |
| 100 | Ｃ４ | － | 礫器 | 砂岩 | 7.89 | 10.23 | 4.43 | 442.4 |
| 101 | Ｃ３ | － | 礫器 | ホルンフェルス | 5.69 | 6.13 | 3.18 | 127.1 |
| 102 | Ｃ２ | － | 礫器 | ホルンフェルス | 5.16 | 7.56 | 3.37 | 164.1 |
| 103 | Ｃ４ | － | 礫器 | ホルンフェルス | 5.18 | 6.60 | 4.74 | 183.0 |
| 104 | Ｂ４ | － | 礫器 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 16.90 | 19.80 | 5.10 | 1658.9 |
| 105 | Ｂ２ | Ⅴ | 礫器 | 砂岩 | 6.03 | 8.05 | 4.02 | 216.2 |
| 106 | Ｅ３ | Ⅱ | 礫器 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 5.23 | 7.10 | 3.19 | 124.2 |
| 107 | Ｂ２ | － | 礫器 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 11.95 | 12.65 | 6.20 | 828.7 |
| 108 | Ｄ３ | － | 礫器 | ホルンフェルス | 7.52 | 6.50 | 3.71 | 224.1 |
| 109 | Ｂ２ | Ⅳ | 礫器 | 砂岩 | 7.76 | 7.72 | 3.61 | 253.3 |
| 110 | Ｂ３ | Ⅳ | 礫器 | 砂岩 | 5.30 | 10.30 | 2.30 | 115.6 |
| 111 | Ｂ２ | Ⅲ | 石斧 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 13.95 | 11.40 | 3.85 | 679.6 |
| 112 | Ｂ２ | － | 石斧 | ホルンフェルス | 10.17 | 5.59 | 3.09 | 190.1 |
| 113 | Ｂ２ | Ⅲ | 石斧 | ホルンフェルス | 9.65 | 3.62 | 1.03 | 38.9 |
| 114 | Ｂ２ | Ⅳ | 石斧 | ホルンフェルス | 8.63 | 5.53 | 3.27 | 182.6 |
| 115 | Ｃ３ | － | 石斧 | 砂岩 | 8.97 | 6.16 | 2.83 | 185.6 |
| 116 | Ｂ３ | Ⅴ | 石斧 | 砂岩 | 5.39 | 5.94 | 1.64 | 64.4 |
| 117 | Ｃ３ | － | 石斧 | ホルンフェルス | 7.48 | 5.55 | 2.19 | 125.1 |
| 118 | Ｂ３ | Ⅳ | 石斧 | 砂岩 | 6.00 | 6.00 | 3.22 | 96.5 |
| 119 | Ｂ２ | － | 石斧 | 砂岩 | 9.82 | 5.74 | 3.30 | 257.0 |
| 120 | － | － | 石斧 | ホルンフェルス | 5.03 | 4.90 | 2.88 | 81.4 |
| 121 | Ｃ３ | － | 石斧 | ホルンフェルス | 4.94 | 5.38 | 1.66 | 55.9 |
| 122 | Ａ３ | － | 石核 | 砂岩 | 6.93 | 9.12 | 5.43 | 374.5 |
| 123 | Ｃ３ | － | 石核 | 砂岩 | 6.30 | 9.45 | 5.24 | 362.6 |
| 124 | － | － | 石核 | 砂岩 | 6.95 | 9.05 | 3.71 | 279.6 |
| 125 | Ｂ３ | Ⅳ | 石核 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 6.53 | 9.63 | 5.02 | 427.6 |
| 126 | Ｂ５ | － | 石核 | 砂岩 | 12.20 | 12.40 | 4.40 | 791.3 |
| 127 | Ｃ４ | Ⅳ | 石核 | 砂岩 | 11.80 | 12.70 | 5.50 | 1034.3 |
| 128 | Ｂ３ | Ⅳ | 石核 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 8.50 | 8.80 | 6.10 | 532.8 |
| 129 | Ｂ５ | Ⅳ | 石核 | 珪質頁岩 | 5.07 | 6.60 | 3.92 | 144.8 |
| 130 | Ｂ３ | － | 石核 | ホルンフェルス | 5.66 | 6.72 | 3.72 | 163.0 |
| 131 | Ｂ２ | Ⅴ | 石核 | 砂岩 | 7.95 | 11.89 | 4.42 | 524.5 |
| 132 | － | － | 石核 | 砂岩 | 4.72 | 9.35 | 3.60 | 191.5 |
| 133 | Ｅ３ | Ⅱ | 石核 | ホルンフェルス | 5.55 | 4.78 | 2.70 | 66.3 |
| 134 | Ｄ２ | | 石核 | チャート | 3.21 | 5.22 | 3.93 | 84.1 |
| 135 | Ｂ３ | Ⅳ | 石錘 | 砂岩 | 5.20 | 5.90 | 1.75 | 79.6 |
| 136 | Ｂ２ | Ⅲ | 石錘 | 砂岩 | 5.50 | 7.15 | 1.80 | 102.3 |
| 137 | Ｃ４ | － | 石錘 | 砂岩 | 5.30 | 5.45 | 1.35 | 52.3 |
| 138 | Ｃ２ | － | 石錘 | 砂岩 | 5.40 | 6.10 | 1.90 | 84.7 |
| 139 | Ｂ５ | Ⅳ | 石錘 | 砂岩 | 6.70 | 7.10 | 2.20 | 156.9 |
| 140 | Ｂ５ | Ⅳ | 石錘 | 砂岩 | 5.20 | 7.30 | 1.20 | 72.9 |
| 141 | Ｂ２ | － | 石錘 | 砂岩 | 7.30 | 8.29 | 3.37 | 257.9 |
| 142 | Ｂ４ | Ⅳ | 石錘 | 珪質頁岩 | 6.50 | 7.40 | 1.30 | 72.5 |
| 143 | ＳＩ６ | － | 石錘 | 砂岩 | 12.00 | 9.00 | 3.75 | 588.2 |
| 144 | Ｂ２ | Ⅳ | 敲石 | 砂岩 | 14.75 | 5.10 | 2.85 | 316.8 |
| 145 | Ｃ３ | Ⅳ | 凹石 | 砂岩 | 11.00 | 9.00 | 4.10 | 616.0 |
| 146 | － | － | 磨石 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 6.35 | 6.20 | 2.75 | 161.4 |
| 147 | Ｂ５ | － | 磨石 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 9.20 | 8.00 | 4.00 | 407.9 |
| 148 | ＳＩ24 | － | 磨石 | 砂岩 | 7.10 | 10.50 | 4.50 | 454.8 |
| 149 | Ｂ３ | Ⅴ | 石皿 | 砂岩 | 15.20 | 11.20 | 3.05 | 798.1 |
| 150 | Ｂ５ | Ⅳ | 石皿 | 砂岩 | 19.50 | 11.40 | 2.75 | 1063.1 |
| 151 | Ｂ５ | － | 台石 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 34.10 | 23.20 | 9.85 | 7000.0 |
| 152 | － | － | 有刻石製品 | 尾鈴山溶結凝灰岩 | 6.35 | 9.85 | 4.75 | 381.3 |
| 153 | Ｃ３ | － | 磨製石製品 | 泥岩 | 4.26 | 3.51 | 0.92 | 15.2 |

## 第４節　弥生時代の遺構と遺物

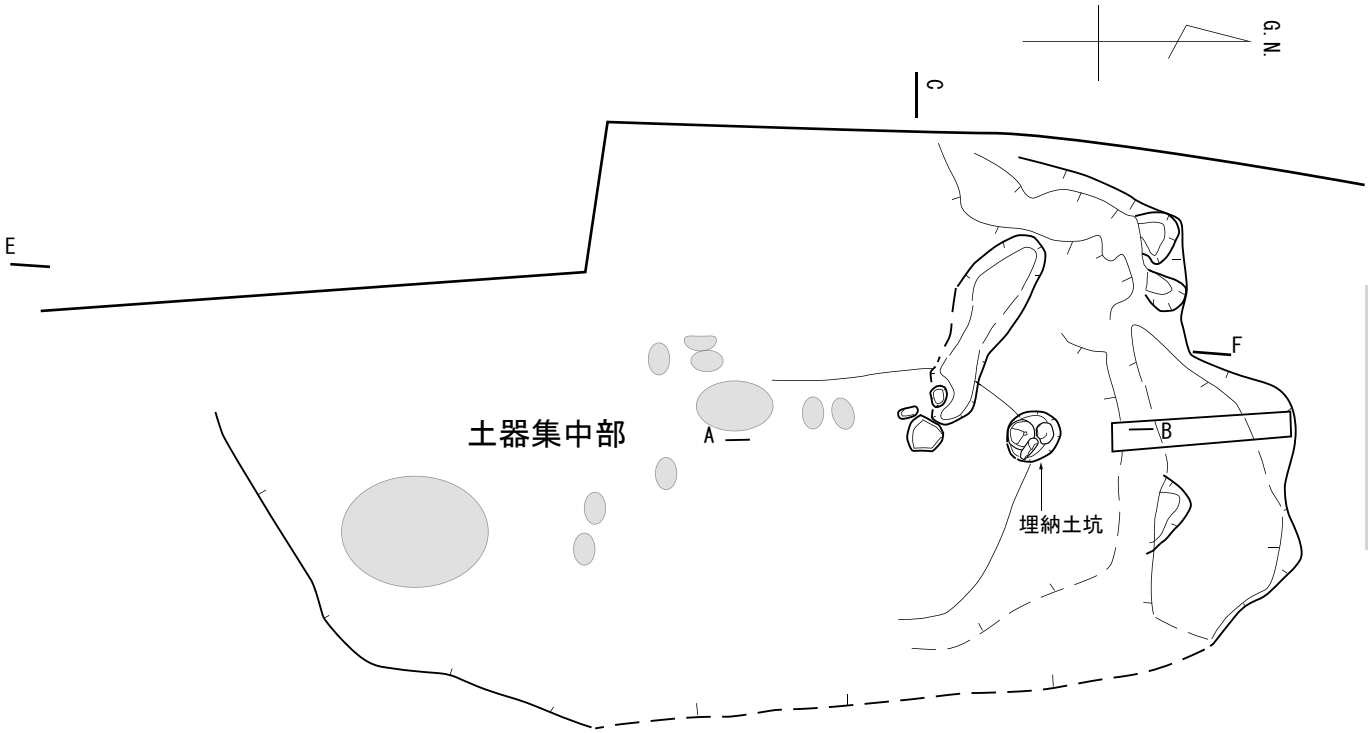
### 4-1.　概要

弥生時代の遺構は、A4Gr に位置する SZ1（不明遺構）のみである。この SZ1（不明遺構）からは打製石斧、壺、礫が共に配置された状態で埋納土坑が検出された。また、弥生時代終末期の壺や甕、鉢が焼土や炭化物と共に多数出土した。

埋納土坑から出土した打製石斧は、使用された痕跡はなく、同時に出土した礫も敲打による調整で形を整えている痕跡が確認された。また、壺は頸部から先が欠損した状態で出土している。なお SZ1 の上面と下面より出てきた炭化材を放射線炭素年代測定にかけたところ、上層の炭化材では 1845 ± 25 年 BP、下層の炭化材では 1835 ± 20 年 BP という年代結果が出た。

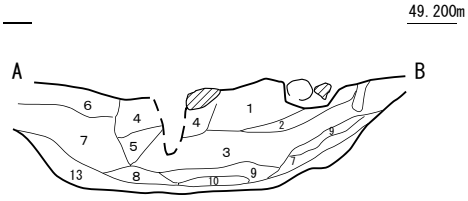


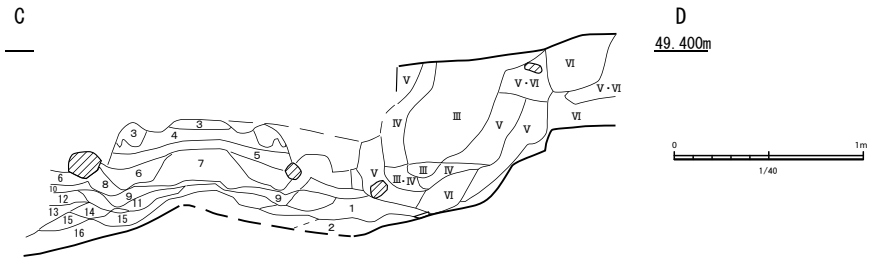

第65図　弥生時代以降の遺構分布図




A～B

1　黄褐色土　(Hue10YR5/6)　焼土粒、炭化物粒、少量を含む。やや軟。
2　黄褐色土　(Hue10YR5/6)　黒褐色土　(10YR3/2) の混入土、やや軟。
3　褐色土　(Hue10YR4/6)　褐色土、炭化材を焦少量含む。
4　褐色土　(Hue10YR4/1)　褐灰色土しまりがある。赤褐色の炭化物の粒が含まれる。
5　褐色土　(Hue10YR4/6)
6　明黄褐色土　(Hue10YR7/6)　明黄褐色土、炭化物３～５cm 程の礫を含む。
7　にぶい黄褐色土　(Hue10YR5/4)
8　黒褐色土　(Hue10YR2/2)　１～５cm 程の礫を含む。
9　にぶい黄褐色土　(Hue10YR5/4)　８の混入土
10　明黄褐色土　(Hue10YR7/6)　３～５cm 程の礫を含む。

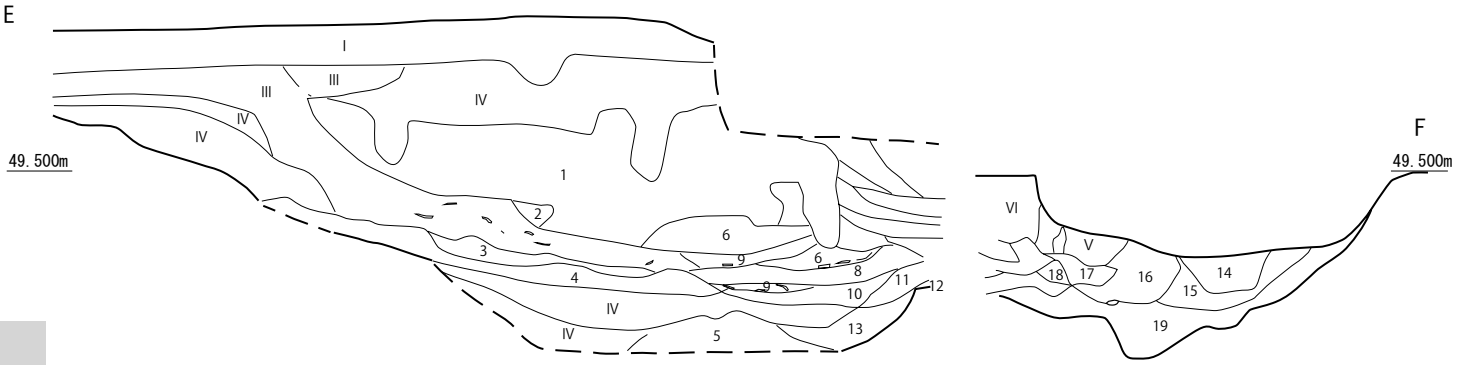



C～D

1　褐色粘質土　(Hue7.5YR4/3)　１mm 程の透明な粒や炭化物を含む。
2　褐色土　(Hue7.5YR4/6)　粘性がややあり、しまりがある。１mm 程の黒褐色粒をまばらに含む。
3　褐色粘質土　(Hue10YR4/6)　粘性が強く、硬質、しまりがある。炭化物粒をまばらに含む。
4　明褐色土　(Hue7.5YR5/6)　粘性があまりなく、ややしまりがない。白色性をわずかに含む。
5　明褐色土　(Hue7.5YR5/6)　４に似ているが、色調がやや暗く、炭化物や焼土粒をわずかに含む。
6　褐色土　(Hue7.5YR4/4)　やや粘質があり、ややしまりがある。黄褐色粒や白色粒を含む。
7　褐色土　(Hue7.5YR4/6)　やや粘質があり、ややしまりがある。白色粒を含む。
8　明褐色土　(Hue7.5YR5/6)　粘性があるものの、しまりがない。
9　褐色土　(Hue7.5YR4/3)　６に似ているが、より硬質である。
10　明褐色粘質土　(Hue10YR6/6)　粘質が強く、ややしまりがある。白色粒及び黄褐色粒を含む。
11　褐色土　(Hue10YR4/4)　粘質があり、ややしまりがある。褐色粒や白色粒を含む。
12　褐色土　(Hue7.5YR4/3)　15 と比べ、やや軟質でしまりがない。
13　褐色土　(Hue10YR4/4)　11 に特色が似ているが、両層ほどのしまりがない。
14　褐色土　(Hue7.5YR4/3)　粘性があり、しまりがある。赤色、白色、白色粒をわずかに含む。９、12 に似ている。
15　暗褐色粘質土　(Hue10YR3/4)　硬質でしまりがあり、粘質が強い。白色粒、黄色粒を多く含む。
16　黄褐色粘質土　(Hue10YR5/6)　粘質が強く、しまりがややある。炭化物をわずかに含む。

## 第66図　SZ1実測図・土層断面図（１）




| | | | |
|---|---|---|---|
| Ⅰ層 | 表土 | | |
| Ⅲ層 | 明褐色土 (Hue7.5YR5/8) | 二次堆積 K-Ah 層、やや粘性、しまりがある。炭化物、土器を大量に含む。北に行くにつれて、色調が白っぽく（橙色）が入る。 | |
| Ⅳ層 | 明褐色土 (Hue7.5YR5/6) | ややしまっていて、赤褐色土粒を若干、含む。 | |
| Ⅳ層 | 褐色土 (Hue10YR4/4) | | |
| Ⅳ層 1 | 灰白色土 (Hue7.5YR8/2) | Ⅳ層と比べ、削れやすい。 | |
| 2 | 黄橙色土 (Hue7.5YR7/8) | 炭化物を含み、しまりがある。5㎜から8㎜の灰白色を含む。 | |
| 3 | 橙色土 (Hue7.5YR6/8) | 灰白色粒をわずかに含み、しまり、粘質がややる。 | |
| 4 | 橙色土と灰白色土の混入土 | | |
| 5 | 灰白岩層 (Hue7.5YR8/1) | 地山層 | |
| 6 | 灰白色土 (Hue7.5YR8/2) | １層と比べ、礫が少なく、サラサラしている。炭化物を含む。 | |
| 7 | 橙色土 (Hue7.5YR6/8) | 炭化物、土器を含む。 | |
| 8 | 灰白色と橙色をわずかに含む。 | | |
| 9 | 明褐灰色 (Hue7.5YR6/2) | 土器、炭化物、焼土を含み、しまりがある。 | |
| 10 | にぶい橙色土 (Hue7.5YR7/3) | 灰白色が混入、しまりがある。 | |
| 11 | 灰褐色土 (Hue7.5YR5/2) | 灰白色で2㎜～3㎜の礫、黄褐色の礫を含み、しまりがある。 | |
| 12 | にぶい褐色土 (Hue7.5YR5/2) | 灰白色、炭化物を含み、粘性、しまりがある。 | |
| 13 | 明褐色土 (Hue7.5YR5/5) | 灰白色礫 (Hue 7.5YR 8/2) の混入土、しまりがあり、Ⅷ層の上に堆積。（地山層） | |
| 14 | 極暗褐色土 (Hue5YR2/4) | 焼土堆積層で炭化物を多く含む。粘性、しまり共にほとんどない。 | |
| 15 | 明褐色土 (Hue7.5YR5/6) | 粘性、しまりが弱い。炭化物をわずかに含む。 | |
| 16 | 褐色土 (Hue7.5YR4/4) | 粘性、しまりは共にややある。削るとボロボロに崩れる。白色粒を含む。 | |
| 17 | 黄褐色土 (Hue10YR5/6) | 粘性、しまりが弱い。 | |
| 18 | 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4) | 粘性、しまりは強い。黄褐色粒や白色粒、炭化物を多く含む。 | |
| 19 | 明褐色土 (Hue7.5YR5/6) | 15層に似ているが、わずかにしまりが強く、炭化物を含まない。 | |

**第67図　SZ1土層断面図（２）**

0　1m
1/40

## 4-2. 遺構

### （１）不明遺構（第 66 ～ 69 図図版 12・13）

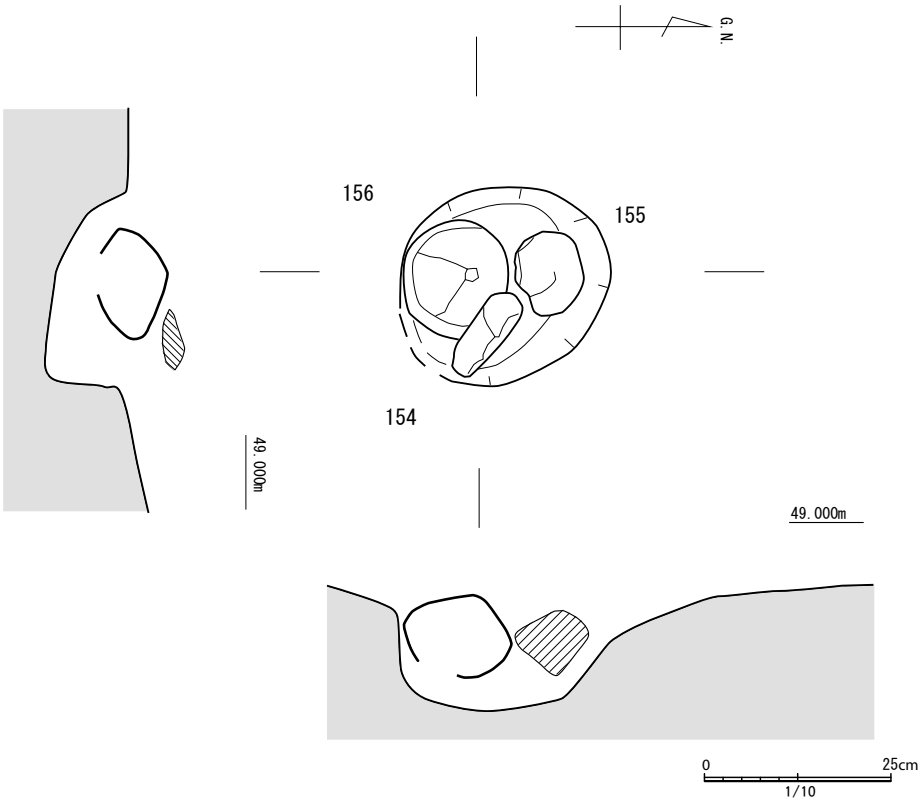
調査区最高所の西側縁辺で検出された本遺構は、第１次調査時に遺物の出土と焼土の検出によって認識されていた。

第１次調査で東西方向に設定したトレンチに弥生土器片と礫、トレンチ壁の断面に焼土らしき層の固まりが確認され、周辺とは事を異にする状況が見られた。その時点で、遺構が絡むことを想定し、第２次調査に移ってから周囲の土層堆積や遺物の出土状況を見ながら慎重に掘り下げを行った。遺構周辺の堆積層は、灰白色粒を含んだ明褐色土の混入した層に、炭化物等を含む非常にしまった褐色土が入る状態を遺構のラインとして掘り下げていった。

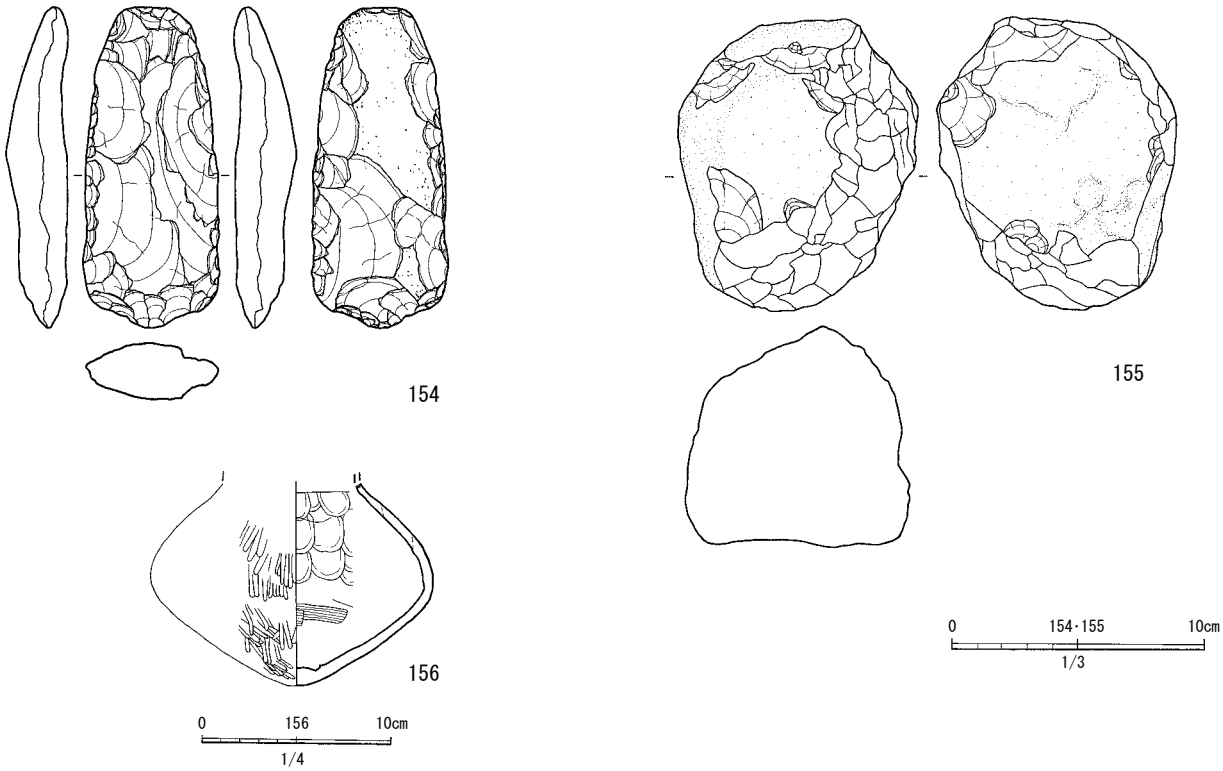
遺構は、当初北側に半円形状に検出され、検出面から約 40 ㎝ほど掘り下げたところで焼土の堆積を確認した（第 67 図）。遺構の南側は、土層反転等の撹乱により、プランが把握できる状況ではなかった。確認された焼土の堆積は、部分的にくびれのある長楕円形状を呈し、約 20 ㎝の深さで堆積していた（第 67 図）。焼土の堆積が確認され、鍛冶関連の遺構も想定されたので、フローテーションを行ったが鉄滓や鉄片、粒状滓等は確認されなかった。

さらに、焼土の周囲を掘り下げたところ、北側に頸部から先がなくなった壺の胴部と打製石斧、礫を検出した。壺は逆さまにして設置され、その上に重なるように石斧が置かれていた（第 69 図）。また、壺と礫は、検出面から 15 ㎝程度掘り込まれたほぼ円形の土坑に床面から浮いた状態で納まっていることが確認された（第 69 図）。この壺や礫を納めた土坑は、幅約１m程度の掘り込みが埋まったところで構築されている。壺と礫を納めた土坑は、さらに上部からの掘り込みがあったのかは検出された時点で確認することはできなかった。

さらに、断面観察で遺構と判断した掘り込みを追いながら南側に掘り進めていく過程で、弥生土器片が多量に出土するようになった。土器は、集中して折り重なるような状態で確認されることもあり、土器片の集中部分には焼土や炭化物も見られ、土器焼成遺構の可能性も想定しながら、出土地点を記録しつつ取り上げを同時に行っていった。遺構の南側には明褐色土を含んだ灰白色土が検出されており、この層が岩盤層としてとらえ、遺物を含む層を遺構の埋土として除去しながら掘り進んだ。断面観察では、弥生土器片を多量に含む層（灰白色粒を含む橙色土層）は、岩盤と考えている灰白色土層に挟まれるような




第68図　SZ1埋納土坑平面図




第69図　SZ1埋納土坑出土遺物実測図

状態で流れ込んでいる状況を確認している。

最終的には、北側の半円形状の遺構を含んだ長楕円形状の大きな落ち込みになったが、北側の埋納遺構を含む掘り込みと、南側の土器が多量に出土する落ち込みとの関係を把握することは困難であった。

### 4-3. 遺物

#### （１）土器（第 70 ～ 72 図、図版 18 ～ 22）

不明遺構（SZ1）から出土した土器の中から、実測に耐えられるものを実測・計測を行った。なお 189 のみ、調査区北側の B2Gr から出土している。

**甕（第 70 ～ 71 図 157 ～ 171）**

157・159・162・166 は大きく開く口縁部と長く屈曲する口縁部を持っており、屈曲度はやや深い。166 の口縁部は長く屈曲した口縁部を持ち、底部は厚く接地面の少ない平底を呈している。158・161・164 は甕の口縁部から胴部にあたる。短く屈曲する口縁部を持つが、屈曲度はやや浅い。外面は摩耗しており、黒班が付着している。160・163・165 は胴部より口縁部が広く、屈曲した逆ハの字形の口縁部を持っている。163 は長く屈曲する口縁部を有している。165 は短く浅い屈曲度を持つ口縁部をしており、底部は接地面の少ない平底である。167 は短く屈曲度の浅い口縁部を呈している。168 の底部は接地面の少ない丸底をしている。167 と 168 は同一個体である。169 は厚みのある平底となっている。外面、内面共に黒いススが付着している。170 は厚みがあり、接地面の少ない平底となっている。171 は比較的薄く、接地面の少ない平底となっている。

**壺（第 71・72 図 172 ～ 193）**

172 の胴部は丸みを帯びた形状をしており、厚い平底の底部に繋がっている。173 の口縁部はわずかに傾斜しており、口唇部は薄くなっている。174 の口縁部は二段階に屈曲し、上部はわずかに外側に反っている。175 の口縁部はわずかに外反しており、口唇部は厚く、工具によるナデが見られる。176 ～ 179 は接地面の少ない、厚みのある丸底や平底となっている。180 は広い平底を呈している。181 は接地面の少ない、平底となっている。182 は 1 ㎝程の平底となっている。183 は壺の底部と見られ、わずかに上げ底状の底部となっている。184 は外面、内面ともに丁寧なナデが行われている。185 ～ 188･192 は複合口縁の壺である。185･186 は口縁部に折拓波状文を施す。190 は外面、内面共にナデが見られる。191 は外面に刻目突帯文があり、内面には横方向にナデが確認できる。192 は内面に工具を使用したナデがある。193 は頸部が欠損しており、外面は縦方向のミガキがあり、内面には丁寧なナデが行われている。

**鉢（第 72 図 194 ～ 196）**

194 の口縁部は直線的に逆ハの字形に開いており、底部は欠損している。外面、内面ともに工具を使って丁寧なナデや指押さえがある。195 の口縁部は直線的に逆ハの字形に開いており、碗の形状は直線的に底部に続いている。底部には 1 ㎝ほどの接地面の少ない平底となっている。外面にはナデがあり、内面には横や斜方向にナデがある。196 は浅鉢の口縁部から底部にあたり、直線的に逆ハの字形に開いている。底部は 1 ㎝ほどの接地面の少ない平底となっている。外面 、内面共に摩耗が激しいものの外面に一部、ナデの痕がある。

#### (2) 遺構から出土した遺物（第 70 図 154 ～ 156）

**石斧（第 69 図 154）**

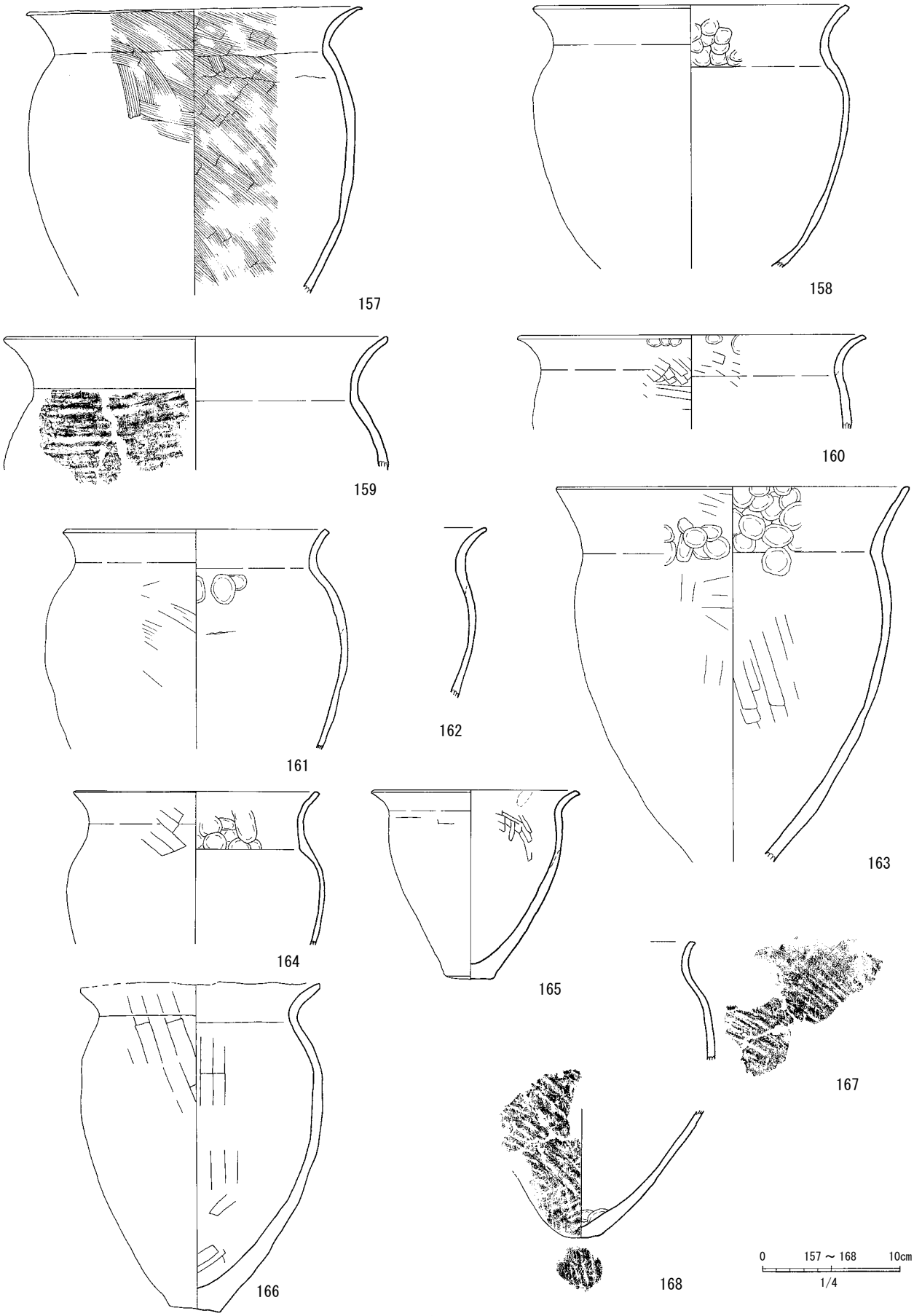
154 は砂岩製の石斧である。SZ1 より壺（156）、礫（155）と共に出土している。長さは 12 ㎝、幅は 5 ㎝、厚さは 3 ㎝である。表面には上部に自然面が残り、裏面には主要剥離面を残す肉厚の礫を用いており、石器縁部に細かな敲打による整形が施され、左右対称に作られている。刃部は絞られて整形されている。この石斧は、ほぼ完形であり、使用痕が見られない。

**礫（第 69 図 155）**

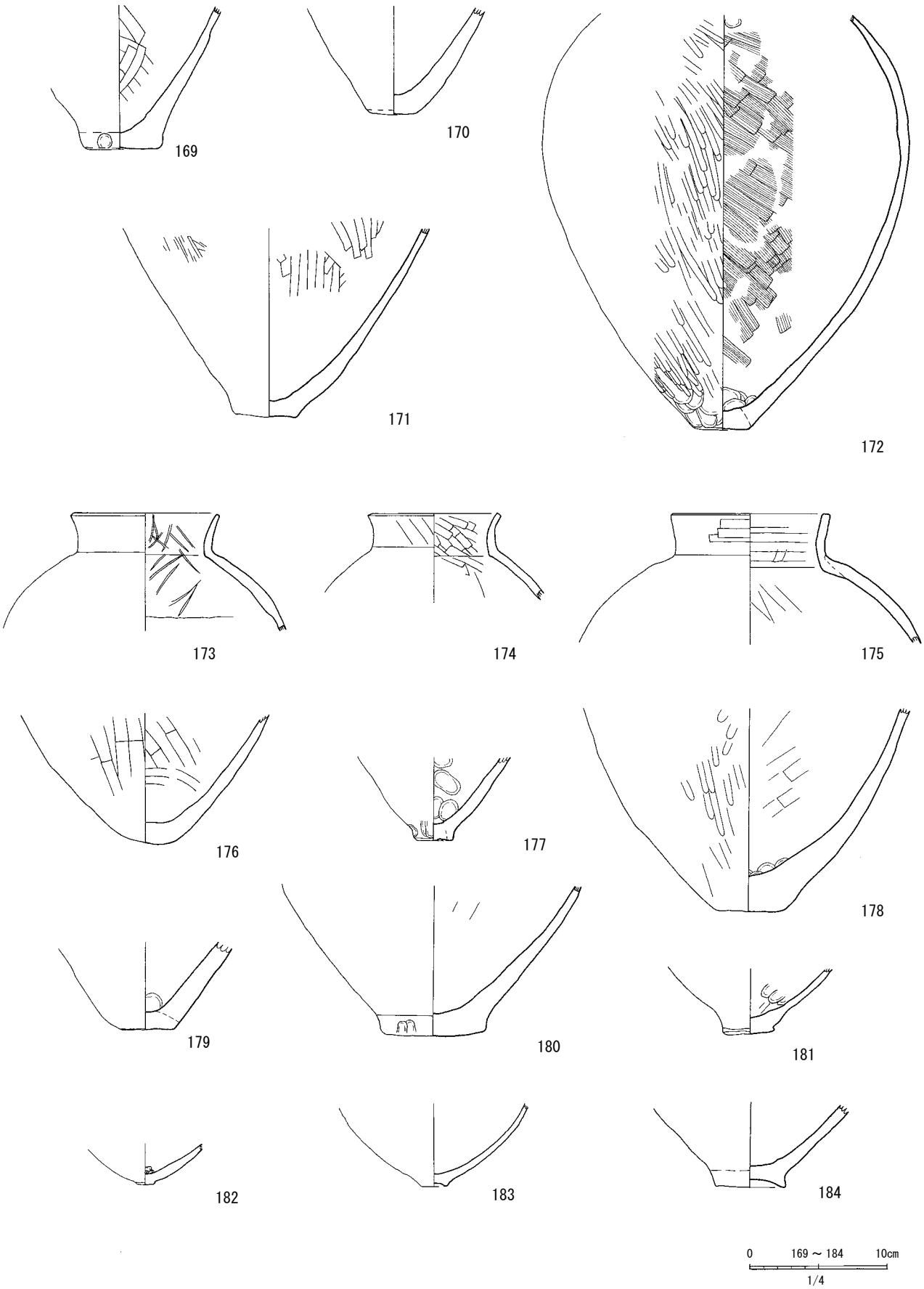
155 は 1.1 ㎏の尾鈴山溶結凝灰岩の礫であり、長さ 12 ㎝、幅 9 ㎝である。石斧（154）と壺（156）と一緒に並べられた状態で出土している。礫には敲いて形を整えた痕跡があり、全体的に角を取り、丸みをもたせてある。

**壺（第 69 図 156）**

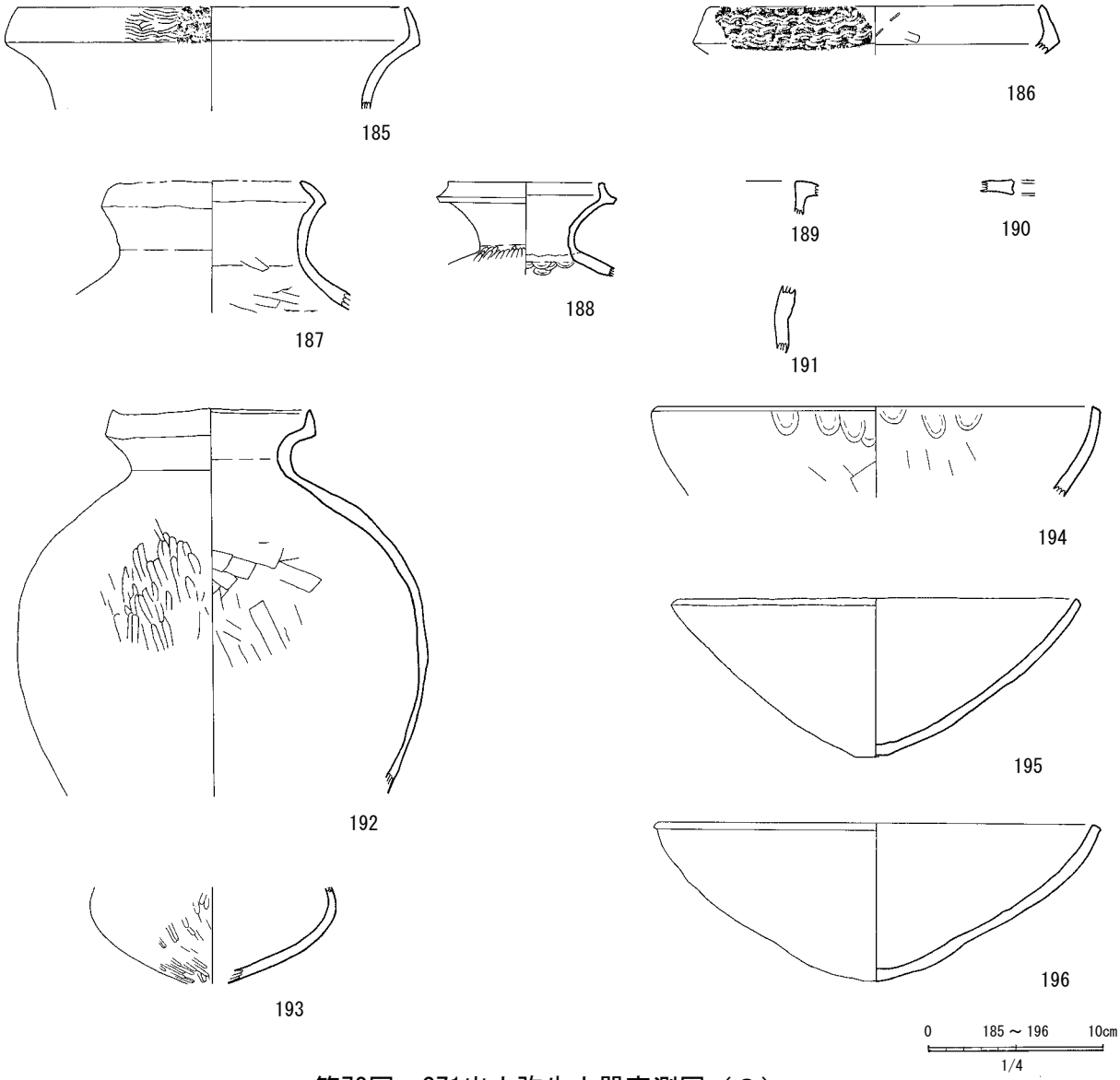
156 は頸部が欠損しており、長頸壺の胴部から底部にあたる。胴部は強い湾曲があり、やや浅い錘部状の底部が見られる。




第70図　SZ1出土弥生土器実測図（１）




第71図　SZ1出土弥生土器実測図（２）




第72図　SZ1出土弥生土器実測図（３）

## 第18表　弥生土器観察表（１）

| No. | 出土地点グリッド遺構他 | 器種 | 部位 | 法量（ｃｍ） | | | 手法・調整・文様ほか | | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 外 | 内 | 外 | 内 | |
| 157 | ＳＺ１ | 甕 | 口縁部～胴部 | 24.30 | — | — | 摩滅のため調整不明瞭、ハケ目 | 斜方向のハケ目 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | ２mm程度の褐灰色粒、赤褐色粒、１mm以下の褐灰色粒、赤褐色粒を多く含む。１mm以下の灰白色粒、黒褐色粒を少し含む。 |
| 158 | ＳＺ１ | 甕 | 口縁部～胴部 | 22.40 | — | — | 摩滅のため調整不明瞭、スス付着 | 摩滅のため調整不明瞭 | 橙色 7.5YR7/6 | 明黄褐色 10YR7/6 | ３mm以下の黒色粒、灰白色粒を多く含む。 |
| 159 | ＳＺ１ | 甕 | 口縁部～胴部 | 28.00 | — | — | 横方向のナデ、タタキ | 横方向のナデ | にぶい褐色 7.5YR6/3 | 浅黄橙色 10YR8/4 | ６mm以下の灰白色粒、黒褐色粒を多く含む。 |
| 160 | ＳＺ１ | 甕 | 口縁部～胴部 | 24.80 | — | — | 横・斜方向の工具ナデ、ナデ | 斜方向の工具ナデ、ナデ | 浅黄橙色 10YR8/4 | 浅黄橙色 10YR8/4 | ６mm以下の灰白色粒、４mm以下のにぶい橙色粒、褐灰色粒を多く含む。４mm以下の透明光沢粒を少し含む。 |
| 161 | ＳＺ１ | 甕 | 口縁部～胴部 | 18.80 | — | — | 斜方向の工具ナデ、ナデ | ナデ、指押さえ、粘土つなぎ目 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | ８mm以下の灰色粒、５mm以下の浅黄橙粒、３mm以下の灰褐色粒、灰白色粒を多く含む。１mm以下の透明光沢粒を少し含む。 |
| 162 | ＳＺ１ | 甕 | 口縁部～胴部 | — | — | — | 横・斜方向の工具ナデ、ナデ | 斜方向の工具ナデ、ナデ | 浅黄橙色 10YR8/4 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | ４mm以下の褐灰色粒、にぶい褐色粒、３mm以下の灰白色粒を多く含む。 |
| 163 | ＳＺ１ | 甕 | 口縁部～胴部 | 25.60 | — | — | 斜方向の工具ナデ、ナデ | 縦方向の工具ナデ、ナデ | 浅黄橙色 10YR8/4 | 浅黄橙色 10YR8/4 | ６mm以下のにぶい赤褐色粒、５mm以下の褐灰色粒、４mm以下の灰白色粒を多く含む。１mm以下の透明光沢粒を少し含む。 |
| 164 | ＳＺ１ | 甕 | 口縁部～胴部 | 18.00 | — | — | 斜方向の工具ナデ、ナデ | 斜方向の工具ナデ、横方向のナデ | 明黄褐色 10YR7/6 | 黄橙色 10YR7/8 | ５mm以下のにぶい褐色粒、黒褐色粒を多く含む。 |
| 165 | ＳＺ１ | 甕 | 口縁部～底部 | 15.15 | 3.55 | 13.70 | 工具ナデ後ナデ、黒斑あり | ナデ、指押さえ、一部欠損 | 橙色 5YR7/6 | 浅黄橙色 10YR8/4 | ４mm以下の灰色粒、灰褐色粒を多く含む。 |
| 166 | ＳＺ１ | 甕 | 口縁部～底部 | 17.35 | 3.45 | 23.90 | 調整不明瞭、一部斜方向のナデ | 縦・横・斜方向の工具ナデ | にぶい橙色 5YR7/3 | にぶい橙色 7.5YR6/4 | ６mm以下の灰色粒、３mm以下の灰白色粒を多く含む。 |
| 167 | ＳＺ１ | 甕 | 口縁部～胴部 | — | — | — | ナデ、斜方向のタタキ | 横方向のナデ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | ２～３mm程度の灰褐色粒、微細な褐色粒、灰褐色粒、灰白色粒を多く含む。４mm程度の灰褐色粒、灰白色粒をわずかに含む。 |
| 168 | ＳＺ１ | 甕 | 胴部～底部 | — | 2.80 | — | ″斜方向のタタキ″ | ナデ、指押さえ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | ２～３mm程度の灰褐色粒、微細な褐色粒、灰褐色粒、灰白色粒を多く含む。４mm程度の灰褐色粒、灰白色粒をわずかに含む。 |
| 169 | ＳＺ１ | 甕 | 胴部～底部 | — | 4.60 | — | 調整不明、指押さえ、スス付着 | 斜方向の工具ナデ、スス付着 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | 浅黄橙色 10YR8/4 | ４mm以下の灰白色粒を多く含む。 |

## 第19表　弥生土器観察表（２）

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 170 | ＳＺ１ | 甕 | 胴部～底部 | — | 2.85 | — | 調整不明 | 工具ナデ？ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | ５mm以下の灰褐色粒、灰白色粒を多く含む。 |
| 171 | ＳＺ１ | 甕 | 胴部～底部 | — | 4.55 | — | 摩滅のため調整不明瞭、ミガキ | 工具ナデ、ナデ、黒斑あり | 浅黄橙色 10YR8/4 | 浅黄橙色 10YR8/4 | ４mm以下の灰白色粒、褐色粒を多く含む。 |
| 172 | ＳＺ１ | 壺 | 胴部～底部 | — | 4.10 | — | ナデ、斜方向のミガキ | 斜方向のハケ目、指押さえ | 橙色 2.5YR7/6 | にぶい黄橙色 10YR7/3 | ５mm以下のにぶい赤褐色粒、４mm以下の褐灰色、灰白色粒を多く含む。 |
| 173 | ＳＺ１ | 壺 | 口縁部～胴部 | 10.30 | — | — | 横・斜方向のナデ | 工具（細棒？）調整 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | ５mm以下のにぶい褐色粒、灰白色粒を多く含む。 |
| 174 | ＳＺ１ | 壺 | 口縁部～胴部 | 9.00 | — | — | 縦方向のナデ、斜方向のナデ | 横・斜方向の工具ナデ、ナデ | にぶい黄橙色 10YR7/4 | 浅黄橙色 10YR8/4 | ３mm以下の灰白色粒、２mm以下のにぶい褐色粒を少し含む。 |
| 175 | ＳＺ１ | 壺 | 口縁部～胴部 | 11.60 | — | — | 工具ナデ、ナデ | 工具ナデ、強いナデ | にぶい黄橙色 10YR7/4 | 浅黄橙色 10YR8/4 | ４mm以下の褐色粒、灰白色粒、褐灰色粒を多く含む。 |
| 176 | ＳＺ１ | 壺 | 胴部～底部 | — | 3.00 | — | 縦方向の工具ナデ | 横・斜方向の工具ナデ | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | ４mm以下のにぶい褐色粒、３mm以下の灰白色粒を多く含む。 |
| 177 | ＳＺ１ | 壺 | 胴部～底部 | — | 2.60 | — | ナデ、指押さえ、粘土つなぎ目 | 丁寧なナデ、指押さえ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 淡黄色 2.5Y8/3 | ４mm以下の明褐灰色粒、にぶい橙色粒を多く含む。３mm以下の灰白色粒を少し含む。 |
| 178 | ＳＺ１ | 壺 | 胴部～底部 | — | 5.10 | — | 風化気味、斜方向のヘラミガキ | 風化気味、斜方向の工具ナデ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | にぶい黄橙色 10YR7/3 | ２mm程度の褐灰色粒、にぶい赤褐色粒、１mm以下の褐灰色粒、にぶい赤褐色粒を多く含む。 |
| 179 | ＳＺ１ | 壺 | 胴部～底部 | — | 4.35 | — | ナデ、粘土つなぎ目 | ナデ、指押さえ | にぶい黄橙色 10YR7/3 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | ４mm以下の黒褐色粒を多く含む。３mm以下の灰白色粒を少し含む。 |
| 180 | ＳＺ１ | 壺 | 胴部～底部 | — | 7.55 | — | 工具ナデ、ナデ、指押さえ | 摩滅のため調整不明瞭 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | 明黄褐色 10YR7/6 | ３mm以下の褐色粒、灰白色粒を多く含む。 |
| 181 | ＳＺ１ | 壺 | 胴部～底部 | — | 3.65 | — | ナデ | 摩滅のため調整不明瞭、指押さえ | にぶい黄橙色 10YR7/4 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | １～２mm程度のにぶい黄橙色粒、褐灰色粒を多く含む。 |
| 182 | ＳＺ１ | 壺 | 底部 | — | 1.30 | — | 丁寧なナデ | 丁寧なナデ、指押さえ | にぶい橙色 5YR7/4 | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | ４mm以下の褐灰色粒、３mm以下のにぶい赤褐色粒、灰白色粒、１mm以下の透明光沢粒を少し含む。 |
| 183 | ＳＺ１ | 壺 | 胴部～底部 | — | 1.80 | — | ナデ | 縦方向の丁寧なナデ | 浅黄橙色 10YR8/4 | 黄橙色 10YR8/6 | ５mm以下の灰褐色粒、４mm以下の褐灰色粒を多く含む。３mm以下の灰白色粒を少し含む。 |
| 184 | ＳＺ１ | 壺 | 底部 | — | 5.23 | — | 丁寧なナデ | 丁寧なナデ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | １mm以下の褐灰色粒を多く含む。２mm程度の褐色粒をわずかに含む。 |
| 185 | ＳＺ１ | 壺 | 口縁部 | 22.30 | — | — | 横方向のナデ | 縦方向の工具ナデ | 浅黄橙色 7.5YR8/6 | 浅黄橙色 10YR8/4 | ４mm以下の灰白色粒を多く含む。５mm以下のにぶい橙色粒を少し含む。 |
| 186 | ＳＺ１ | 壺 | 口縁部 | 19.00 | — | — | 横方向のナデ、櫛描文 | 横方向の工具ナデ | 浅黄橙色 10YR8/4 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | ３mm以下の灰白色粒を多く含む。 |
| 187 | ＳＺ１ | 壺 | 口縁部～胴部 | 10.60 | — | — | ナデ | 工具ナデ、ナデ | 明黄褐色 10YR7/6 | 黄橙色 10YR8/6 | ９mm以下の灰白色粒、褐色粒を多く含む。 |
| 188 | ＳＺ１ | 壺 | 口縁部～胴部 | 9.00 | — | — | 丁寧なナデ、縦方向のミガキ | 丁寧なナデ | 橙色 5YR7/6 | 橙色 7.5YR7/6 | １mm以下の灰白色粒、赤褐色粒、褐灰色粒を多く含む。 |
| 189 | Ｂ２ | 壺 | 口縁部～胴部 | — | — | — | ナデ | 横方向のナデ、ナデ | にぶい黄橙色 10YR7/4 | にぶい黄橙色 10YR6/3 | 微細な白色光沢粒、灰白色粒を少し含む。 |
| 190 | ＳＺ１ | 壺 | 口縁部 | — | — | — | 横ナデ | 横ナデ | にぶい黄橙色 10YR7/3 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | １mm以下の灰白色粒を少し含む。 |
| 191 | ＳＺ１ | 壺 | 胴部 | — | — | — | 刻目貼付突帯文 | 横ナデ | 浅黄橙色 10YR8/4 | 浅黄橙色 10YR8/3 | ３mm以下の灰褐色粒、２mm以下の灰白色粒を多く含む。 |
| 192 | ＳＺ１ | 壺 | 口縁部～胴部 | 11.30 | — | — | 縦・横方向のナデ、ミガキ | 工具ナデ、ナデ | 橙色 5YR6/8 | 黄橙色 10YR8/6 | ４mm以下の黒褐色粒、暗褐色粒を多く含む。 |
| 193 | ＳＺ１ | 壺 | 胴部 | — | — | — | 縦方向のミガキ | 丁寧なナデ | 橙色 7.5YR7/6 | 黄灰色 2.5Y5/1 | ４mm以下の灰白色粒、２mm以下のにぶい褐色粒、１mm以下の透明光沢粒を少し含む。 |
| 194 | ＳＺ１ | 鉢 | 口縁部 | 24.80 | — | — | 工具ナデ、丁寧なナデ、指押さえ | 工具ナデ、丁寧なナデ、指押さえ | 浅黄橙色 10YR8/4 | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | ２mm以下の褐灰色粒、にぶい褐色粒を多く含む。５mm強のにぶい橙色粒を１つ含む。 |
| 195 | ＳＺ１ | 鉢 | 口縁部～胴部 | 22.95 | 1.80 | 9.10 | ナデ | 横・斜方向のナデ | 浅黄橙色 10YR8/4 | 黄橙色 10YR8/8 | ６mm以下の灰白色粒、暗褐色粒を多く含む。 |
| 196 | ＳＺ１ | 鉢 | 口縁部～胴部 | 24.90 | 1.50 | 9.05 | 摩滅のため調整不明瞭、ナデ | 摩滅のため調整不明瞭 | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色 7.5YR7/6 | ２mm以下の褐灰色粒、灰白色粒、褐色粒を多く含む。３mm程度の褐色粒、灰白色粒を少し含む。 |

## 第５節　その他の時代の遺構と遺物

### 5-1. 概要

本調査区の南西隅に位置するB5Grで溝状遺構が１条検出されている。他にも丘陵部の頂上付近から１基の竪穴状遺構が確認されている。また遺物としてはⅡ層から青磁片が１点、出土している。

### 5-2.　遺構

#### （１）溝状遺構（第73図、図版13）

調査区の南から北東方向へ、走行軸はN－48°－Eで、緩やかなカーブを描き、３m程の長さで検出されており、溝幅は平均約1.4mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。延長確認のため、Trを設定したところ､幅１m程の延長部を確認したので、更に北東方向に延長している可能性がある。遺構の形状から、道路状遺構の可能性も考えられたが、今回の調査では硬化面は確認できなかった。

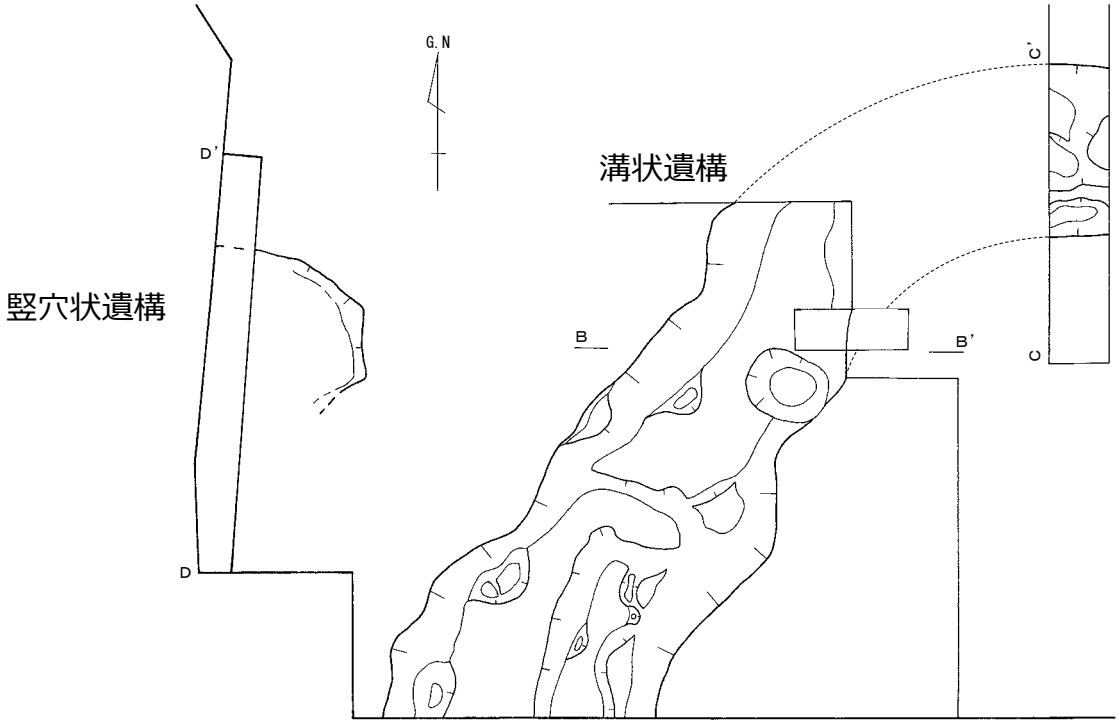
#### （１）竪穴状遺構（第73図、図版13）

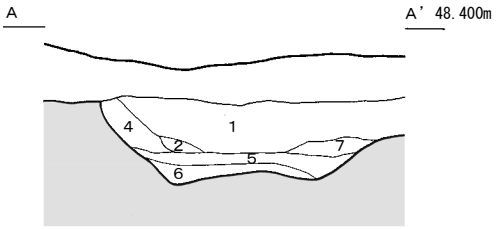
調査区のB5Grに位置しており、本来は西側に続いているが、調査区外のため遺構の角の部分的な検出となっている。遺構内からは台石（197）が出土していることから竪穴建物跡の可能性があるが、柱穴、壁帯溝などの建物を構成する要素や炉、かまどなどの調理施設が検出されていない。

### 5-3.　遺物

#### （１）台石（第74図、図版22）

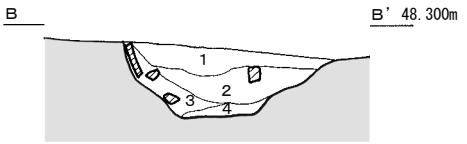
197の石材は尾鈴山溶結凝灰岩であり、約4kgの重量があり、長さ14㎝、幅22㎝、厚さ9㎝である。竪穴状遺構より出土している。広い平坦面を持つ礫を使用している。欠損しているため、151と同程度の大きな台石であった可能性もある。



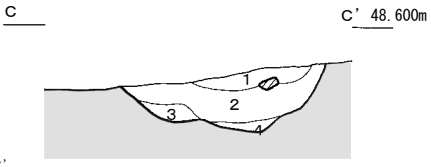

A～A'

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 明褐色土 (Hue7.5YR5/6) | 粘性がほとんどなく、しまりが弱い。K-Ah を多く含み、炭化物をまばらに含む。（二次堆積 K-Ah 層） |
| 2 | 明褐色土 (Hue7.5YR5/6) | 粘性がややあり、K-Ah を含む。１とほぼ同じだが、やや暗い。（二次堆積 K-Ah 層） |
| 3 | 明赤褐色土 (Hue5YR5/6) | 粘性はややあり、しまりはない。K-Ah を含む。１とほぼ同じでやや赤く、炭化材は認められない。 |
| 4 | 褐色土 (Hue10YR4/5) | 粘性はあり、しまりは弱い。Ⅳ層と同様、白色鉱物、褐色鉱物をまばらに含む。側面が崩れて形成された層である可能性がある。 |
| 5 | 明褐色土 (Hue7.5YR5/6) | 粘性はあり、しまりは弱い。5mm ほどの白色鉱物をブロックで含み、2mm 程の赤色鉱物をまばらに含む。地山層と考えられるが、しまりが弱く、ジャリジャリとしており、流れ土と考えられる。 |
| 6 | にぶい褐色土 (Hue7.5YR5/4) | 粘性はややあり、しまりはややある。2mm 程の白色鉱物を含む。機能面に堆積した土と考えられるが、硬化面は上位になく、地山面がやや硬化している。地形にそって土が流失していったものと考えられる。 |



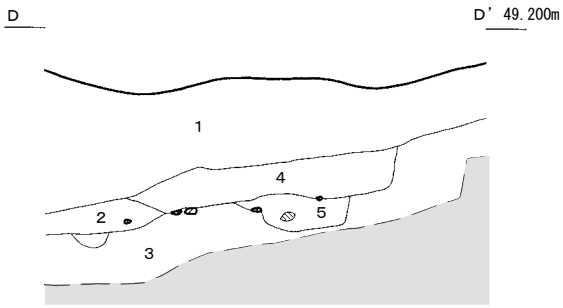

B～B'

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 明褐色土 (Hue7.5YR5/6) | 粘性がややあり、しまりがほとんどない。二次堆積 K-Ah が耕作でカクランされた土層と考えられる。炭化物をまばらに含む。微細な赤色鉱物をわずかに含む。 |
| 2 | 橙色土 (Hue7.5YR6/8) | 1に近いが、より粘性、しまりが強く、色調がやや明るくなる。微細な赤色鉱物をまばらに含む。 |
| 3 | 褐色土 (Hue7.5YR5/4) | 粘性がやや強く、しまりが強い。明褐色土が混ざる。微細な炭化物をまばらに含み、6～20mm の礫を含む。 |
| 4 | 褐色土 (Hue7.5YR4/6) | 粘性、しまりが強い。1mm 程の褐色鉱物、黄粒の鉱物をわずかに含む。一部に硬化している部分がある。 |



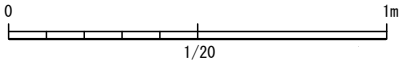

C～C'

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黄褐色土 (Hue10YR5/8) | 粘性、しまりがややある。1mm 以下の白色鉱物や赤色鉱物をわずかに含む。 |
| 2 | 褐色土 (Hue10YR4/6) | 粘性がやや強く、しまりも強い。炭化物をわずかに含み、5mm ほどの白色鉱物、1mm ほどの赤色鉱物をまばらに含む。部分的に非常にしまる部分があり、使用時の硬化面に由来する可能性もある。 |
| 3 | 褐色土 (Hue10YR4/6) | 粘性、しまりがややある。2より色調がやや明るいが、基本的には同一。2が非常にしまりの強い部分があるのに対して、本土層は全体的にしまりは弱い。1mm ほどの白色鉱物を含み、ジャリジャリとする質感を持つ。 |
| 4 | 褐色土 (Hue10YR4/6) | 粘性弱く、しまりが強い部分と弱い部分がある。3の色調に比べ、やや明るい。2mm 程の白色鉱物をまばらに含む。Ⅳ層に由来すると思われ、掘削時にできた層の可能性もある。 |

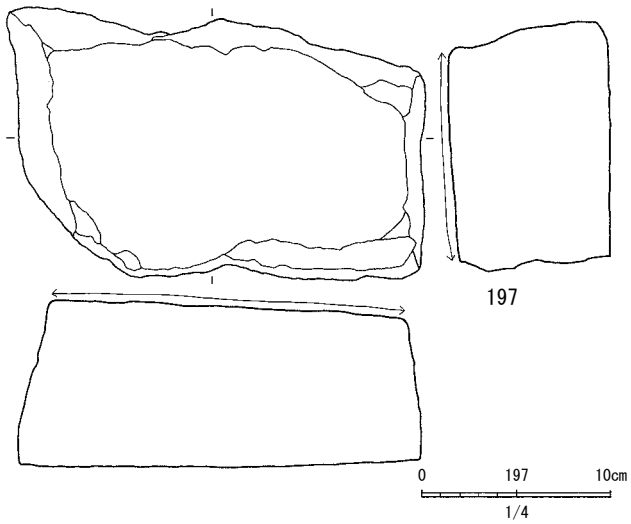



D～D'

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 表土 | |
| 2 | 橙色シルト土 (Hue7.5YR6/6) | 粘性がわずかにあり、黄色の粒子を微量に含む。 |
| 3 | オリーブ褐シルト土 (Hue2.5YR4/4) | 5mm 程の白色の粒子と黄色の粒子を含む。 |
| 4 | 橙色粘質土 (Hue7.5YR6/8) | 赤色、白色の粒子が含まれる。 |
| 5 | 橙色粘質土 (Hue7.5YR6/8) | 4より少し薄めの色調、基本は4と同じだか、炭化物は含まれない。 |
| 6 | 浅黄橙砂質土 (Hue7.5YR8/6) | さらさらしており、下層礫が粉状になったものに5の土が混ざった状態である。 |
| 7 | 橙色粘質土 (Hue7.5YR6/8) | 2、3が混ざったような土で炭化物は含まれない。 |

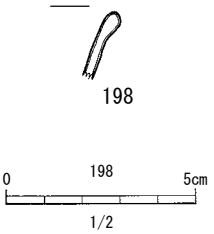



第73図　溝状遺構・竪穴状遺構実測図・土層断面図




（２）青磁（第 74 図、図版 21）

198 は 14 世紀後半から 16 世紀にかけて見られる龍泉窯系の丸碗である。口縁部の一部しか出土していない。口縁部が端反りとなる特徴を有することから、上田分類のＤ類に相当する。




第74図　竪穴状遺構遺物・青磁実測図

## 第６節　自然科学分析

本遺跡では、4 基の集石遺構と 1 基の不明遺構から炭化物が検出された。これらの出土した試料について年代測定を実施して、時期決定を行うと共に、不明遺構（SZ1）と集石遺構（SI33）から出土した炭化材の樹種同定を実施することにより、当時の木材利用状況を明らかにし、近隣森林の植生を推測するなどの有用な情報を得ること目的で実施した。各分析に使用した試料及び分析方法・結果等については下記に掲載した。

### １ 放射性炭素年代測定

#### 1-1. 試料と方法

第 20 表参照。

#### 2-2. 測定結果

加速器質量分析法（AMS）によって得られた $^{14}$C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（$^{14}$C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。

第 21 表にこれらの結果を示し、第 75 図に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

（１）$\delta^{13}$C 測定値

試料の測定 $^{14}$C /$^{12}$C 比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}$C /$^{12}$C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の $\delta^{13}$C 値を -25(‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

（２）放射性炭素（$^{14}$C）年代測定値

試料の $^{14}$C /$^{12}$C 比から、現在（AD1950 年基点）から何年前かを計算した値。$^{14}$C の半減期は 5730 年である国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差（±）は 1σ（68.2％確率）である。$^{14}$C 年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下 1 桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

（３）暦年代（Calendar Years）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 $^{14}$C 濃度の変動および $^{14}$C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素（$^{14}$C）年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な $^{14}$C 測定値およびサンゴの U/Th（ウラン / トリウム）年代と $^{14}$C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 09、較正プログラムは OxCal 3.1 である。なお、$^{14}$C 濃度比から現代の試料と考えられる №3 については OxCal 4.1（較正曲線データ：Post-bomb atmospheric NH2）を使用した。暦年代（較正年代）は、$^{14}$C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1σ（68.2％確率）と 2σ（95.4％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1σ・2σ 値が表記される場合もある。（　）内の％表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### 2-3. 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№.１では1835 ± 20 年 BP（２σの暦年代で AD 120 ～ 240 年)、№.２では1845 ± 25 年 BP（AD 80 ～ 110, 120 ～ 240 年)、№.４では9110 ± 30 年 BP（BC 8430 ～ 8400, 8390 ～ 8370, 8350 ～ 8250 年)、№.５では3390 ± 30 年 BP（BC1750 ～ 1610 年)、№.６では7995 ± 30 年 BP（BC7060 ～ 6800 年）の年代値が得られた。№.３は現代（AD1950 年±以降）の試料であり、何らかの原因で現代の炭化材が混入した可能性が考えられる。

文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon,37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, p.355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

Reimer, P. J., Brown, T. A., & Reimer, R. W. (2004). Discussion: Reporting and calibration of post-bomb C-14 data. Radiocarbon, 46(3), 1299-1304.

中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル．同成社，p.301-322.

## ２ 樹種同定

### 2-1. 試料

試料は、SZ １付近土器集中部および SI33 掘り込み内から採取された炭化材２点である。これらは、放射性炭素年代測定に用いられた№.１および№.６と同一試料である。

### 2-2. 方法

以下の手順で樹種同定を行った。

１）試料を洗浄して付着した異物を除去

２）試料を割折して、木材の基本的三断面（横断面：木口，放射断面：柾目，接線断面：板目）を作成

３）落射顕微鏡（40 ～ 1000 倍）で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

### 2-3. 結果

第 22 表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon マツ科　写真１

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は急で垂直樹脂道が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

シイ属　Castanopsis　ブナ科　写真２

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南)、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 20 m、径 1.5 mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。シイ属にはスダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、試料が小片で広範囲の観察が困難なためシイ属の同定にとどめた。

### 2-4. 考察

樹種同定の結果、SZ １付近土器集中部の炭化材（№.１）はシイ属、SI33 掘り込み内の炭化材（№.６）はマツ属複維管束亜属と同定された。シイ属は温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素である。マツ属複維管束亜属には温帯を中心に広く分布する常緑針葉樹であり、土壌条件の悪い岩山に生育し二次林を形成するアカマツと砂地の海岸林を形成するクロマツとがある。いずれの樹種も当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であった。

文献

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別１

## 第20表　測定試料、前処理・調整法および測定法

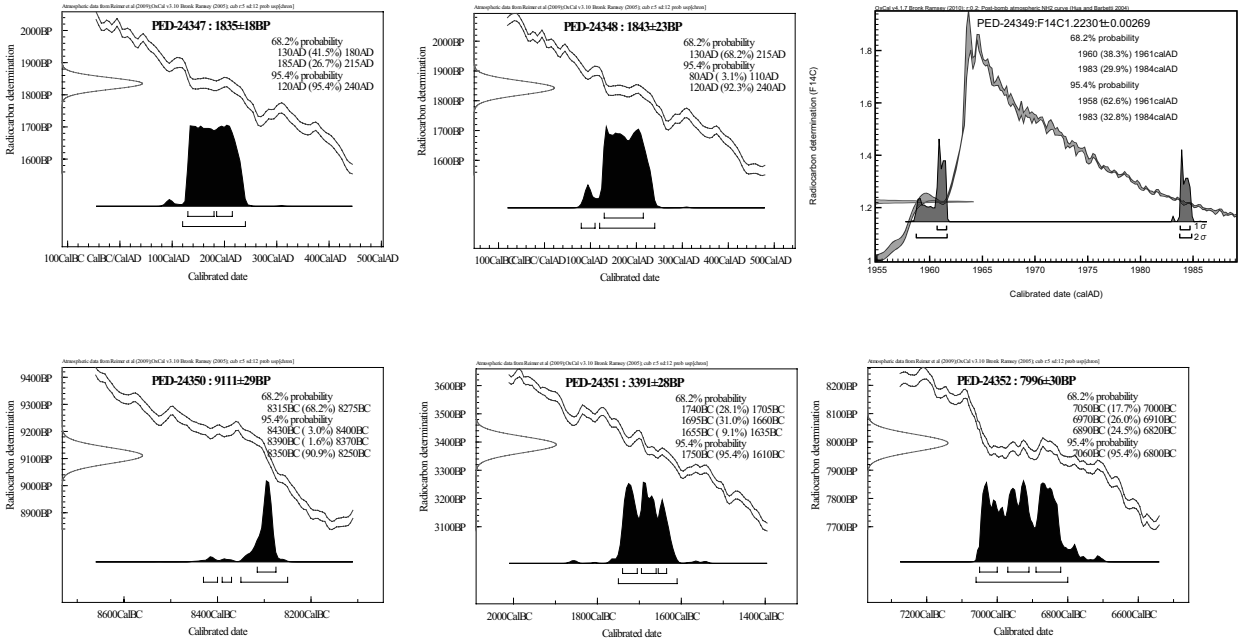
| 試料No. | 採取箇所 | 種類 | 前処理・調整法 | 測定法 |
|---|---|---|---|---|
| No.１ | SZ １付近土器集中部① | 炭化材（シイ属） | 超音波洗浄，酸－ｱﾙｶﾘ－酸処理 | AMS |
| No.２ | SZ １層位横転部粘土上② | 炭化材 | 超音波洗浄，酸－ｱﾙｶﾘ－酸処理 | AMS |
| No.３ | SI5.6.7 | 炭化材 | 超音波洗浄，酸－ｱﾙｶﾘ－酸処理 | AMS |
| No.４ | SI35 | 炭化材 | 超音波洗浄，酸－ｱﾙｶﾘ－酸処理 | AMS |
| No.５ | SI10.11 | 炭化材 | 超音波洗浄，酸－ｱﾙｶﾘ－酸処理 | AMS |
| No.６ | SI33- 掘り込み内 | 炭化材（マツ属複維管束亜属） | 超音波洗浄，酸－ｱﾙｶﾘ－酸処理 | AMS |

## 第21表　放射性炭素年代測定法結果

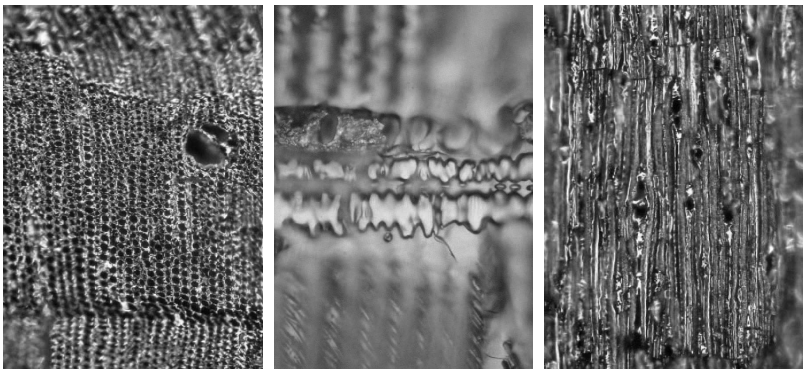
| 試料No. | 測定番号 PED- | $\delta^{13}C$ (‰) | 暦年較正用年代（年 BP） | $^{14}C$ 年代（年 BP） | 暦年代（較正年代）：cal- | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | １σ（68.2%確率） | ２σ（95.4%確率） |
| 1 | 24347 | -26.13 ± 0.23 | 1835 ± 18 | 1835 ± 20 | AD130-180(41.5%)<br>AD185-215(26.7%) | AD120-240(95.4%) |
| 2 | 24348 | -30.35 ± 0.34 | 1843 ± 23 | 1845 ± 25 | AD130-215(68.2%) | AD80-110(3.1%)<br>AD120-240(92.3%) |
| 3 | 24349 | -26.67 ± 0.27 | F14C:1.2230 ± 0.0027 | modern | Post-bomb NH2:<br>AD1960-1961(38.3%)<br>AD1983-1984(29.9%) | Post-bomb NH2:<br>AD1958-1961(62.6%)<br>AD1983-1984(32.8%) |
| 4 | 24350 | -27.09 ± 0.35 | 9111 ± 29 | 9110 ± 30 | BC8315-8275(68.2%) | BC8430-8400(3.0%)<br>BC8390-8370( 1.6%)<br>BC8350-8250(90.9%) |
| 5 | 24351 | -30.50 ± 0.44 | 3391 ± 28 | 3390 ± 30 | BC1740-1705(28.1%)<br>BC1695-1660(31.0%)<br>BC1655-1635( 9.1%) | BC1750-1610(95.4%) |
| 6 | 24352 | -26.80 ± 0.31 | 7996 ± 30 | 7995 ± 30 | BC7050-7000(17.7%)<br>BC6970-6910(26.0%)<br>BC6890-6820(24.5%) | BC7060-6800(95.4%) |

## 第22表　樹種同定結果

| 試料 | 結果（学名／和名） | |
|---|---|---|
| SZ1 付近土器集中部 | Castanopsis | シイ属 |
| SI33 掘り込み内 | Pinus subgen. Diploxylon | マツ属複維管束亜属 |

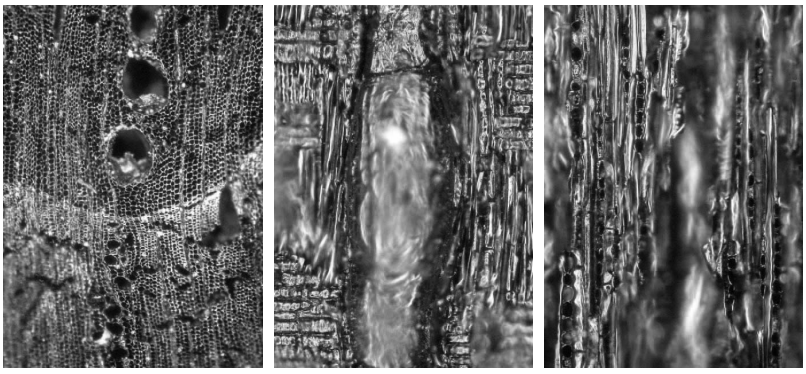



第75図　暦年較正結果



横断面 ―――― ： 0.2mm　放射断面 ―――― ： 0.1mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

１．SI24掘り込み内　マツ属複維管束亜属



横断面 ―――― ： 0.4mm　放射断面 ―――― ： 0.2mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

２．S21付近土器集中部　シイ属

第76図　馬込遺跡第２地点の炭化材

## 第７節　小結

今回の調査では旧石器時代、縄文時代早期・晩期、弥生時代終末期の遺構や遺物が出土した。また、青磁片も１点出土した。

本調査区は、風倒木による地層の横転や斜面地の土層堆積による遺物の流動があり、遺物の出土と層序関係を把握することが難しいところもあったが、慎重に掘り下げを行い、Ⅳ層からⅥ層を縄文時代早期の包含層として、調査を進めた。以下、今回の調査で確認された主要な遺構や遺物を基に考察を加えたい。

**縄文時代**

本調査区では縄文時代早期の遺構として、集石遺構 40 基、炉穴１基、土坑 1 基が検出されている。

馬込遺跡周辺で縄文時代早期の集石遺構や炉穴を検出した遺跡は次の通りである。板平遺跡で集石遺構 36 基、炉穴 55 基、岡遺跡で集石遺構 14 基、炉穴 17 基、平尾遺跡で集石遺構１基、坂元第２遺跡で集石遺構２基、向原中尾第２遺跡で集石遺構が 18 基、向原中尾第５遺跡で集石遺構が 13 基・炉穴 33 基が検出されている。周辺遺跡の遺構検出状況と本調査区の集石遺構と炉穴の検出状況を比較すると、集石遺構の検出数は多い方であるが、炉穴の検出数が極端に少ない。集石遺構の検出規模でほぼ同じ板平遺跡では、炉穴の検出が 50 基以上あり、本調査区内での検出数が著しく低い状況である。本調査区で確認された炉穴は、調査区内で最高所にあたる尾根頂部で検出されており、検出面からの深さが約 10 ㎝とひじょうに浅い掘り込みであり、他の炉穴があった場所と同様に後世の開墾等で削平された可能性がある。このことが、検出数が少ない理由の一つと考えられるが、斜面での検出が１基もなかったことは本遺跡のあり方を検討する上で、考慮しないといけない事象である。

本調査区で検出した集石遺構は、掘り込みを有するものがほとんどで、唯一 SI36 だけ掘り込みをもたなかった。周辺遺跡の状況を見ると、板平遺跡で 36 基の集石遺構が検出されており、掘り込みと配石があるものが 15 基、掘り込みがあり、配石がないものが 10 基、掘り込みのないものが 10 基、確認されている。向原中尾第２遺跡では 17 基が確認されており、掘り込み、配石があるものは５基、掘り込みがあり、配石がないものが８基、掘り込みも配石もないのが４基確認されている。岡遺跡では 14 基の集石遺構が確認され、ほとんどは掘り込みと配石を有している。このように、周辺で検出された集石遺構は全般的に３つのタイプに集約されるが、本遺跡の集石遺構も、同様の状況が見られる。また、周辺遺跡の集石遺構は独立した状態で検出されているが、本遺跡では、複数の集石遺構が切り合った状態で確認されており、同じ場所で何回も集石遺構を構築していた状況が見られる。

集石遺構内から炭化物等の検出が一部で見られたので、調査員の手によりサンプリングを行い放射性炭素年代測定と樹種同定を委託した。分析した集石遺構は、SI10 ～ SI11、SI33、SI35 である。その結果、SI33 は 7995 ± 30 年 BP、SI35 は 9110 ± 30 年 BP の測定結果が出ており、ほぼ縄文時代早期の範囲に含まれることが判明したが、SI10 ～ SI11 の結果が、3390 ± 30 年 BP という測定値が出された。本調査区からは縄文時代後期の包含層も遺物も確認されていないため、何らかの原因で違う時期の炭化物が混入した可能性が考えられるので、SI10･11 についても縄文時代早期の遺構として報告した。

炉穴は調査区の中央から１基確認されており、隣接する場所から土坑も１基確認された。この２つの遺構からは床面から焼土が検出されているため、土坑についても炉穴として使用されていた可能性がある。またこの土坑からは２つの小穴が確認されており、陥し穴として使用された可能性もある。馬込遺跡は標高 50m ほどの尾根上にあるため、現地調査の時に経験したが、風の通りがよく、炉穴を作って、煮炊きや蒸し焼き等の調理には適した場所と考えられる。また今回の調査では竪穴建物跡は検出されなかったが、本調査区は現在も湧水が見られ、生活の場としては、良好な環境であったと推測される。

遺物では縄文時代早期の土器が楕円押型文土器片、山形押型文土器片、撚糸文土器片、貝殻条痕文土器片、縄文時代晩期の土器が、無刻目突帯文土器や黒色磨研系の土器などが出土している。また石器とし

ては石鏃、スクレイパー、蛤形剥片石器、有刻石製品、磨製石製品等が出土している。本調査区で出土した石器の素材として最も多いものが砂岩製である。石器を器種ごとに見ると100点近く出土した蛤形剥片石器が多く、本調査区の周辺の河原にある円礫を素材にして蛤形剥片石器などを製作されたものと推測される。

**弥生時代**

この時期の遺構や遺物は、調査区西側から検出された埋納土坑を含む不明遺構（SZ1）とこれらの遺構から出土した土器がある。

埋納土坑からは、頸部から先が欠損した壺の胴部、石斧、および加工された礫が出土している。また、不明遺構の南側からは、炭化材や炭化物、焼土を伴った状態で多数の土器片が出土している。出土した土器は、複合口縁や単口縁を含む壺、甕、鉢に大別され形態から弥生時代終末期、板平遺跡と周辺地を含む土器編年[1]から、Ⅰ期ｂ段階の時期に相当すると考えられる。埋納土坑から出土した壺については、胴部がそろばん玉状の形態をしていることから、前記土器編年のⅠ期ａ段階の時期が考えられ、遺構の成り立ちに若干の先後関係が想定される可能性がある。遺構南側の土器集中箇所から採取した炭化材の放射性炭素の年代測定結果は、1835 ± 20 年 BP、北側の粘土層上の炭化物は 1845 ± 25 年 BP の結果が出ている。あわせて樹種同定も行い、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林を構成するシイ属であることが判明している。

不明遺構（SZ1）を一つの大きな遺構として報告しているが、遺構の成因については、埋納土坑を含む北側の半円形状の遺構と南側の土器集中出土箇所を含む落ち込みの関係を整理しなければならない。北側の半円形状の遺構は、南側に風倒木等による撹乱でプランが判然としない点はあるが、断面観察により、埋没した後幅約 1.5 ｍほどの土坑が掘られ、これもまた埋没の後、埋納土坑が構築されたとみられる。埋納土坑については、第４節でも触れているが、上方から掘り込まれていたか確認できなかったため、検出面を床面と考えて、同じレベルで検出された焼土を埋土とした土坑とともに何らかの遺構が構築された可能性がある。一方、南側の土器を多量に含む落ち込みについては、成因について明快な答えを出せない状況である。土層断面で示しているが、弥生土器を多量に含む褐色土層の堆積をどう説明できるか。灰白色の岩盤層に挟まれるような状態が確認されているので、岩盤層の隙間に流れ込んだのか、あるいは、岩盤層を掘り下げたところで火を使い、土器とともに岩盤層を含んだ土で人為的に埋めたのか検討が必要である。この北側、南側の遺構（落ち込み）については、双方を土層断面により確認することができず、成立に時期差があるのか、同時期に存在したのかが不明である。いずれにしても北側の遺構も南側の落ち込みも焼土や炭化物が見られ、火に関連する何らかの遺構であると想定でき、一つの考えとして祭祀に関連する遺構の可能性がある。馬込遺跡周辺の祭祀関連遺跡は、南の都農町内で調査された俵石第２遺跡が報告されている。俵石第２遺跡は、水穴による陥没した自然遺構に、土器を一括廃棄した事例で弥生時代終末期の時期に比定されている。報告の中で水（穴）に対する祭祀関連と報告されており、本遺跡の火に関する祭祀を想定するものとは状況が異なるようである。

馬込遺跡周辺では、隣接する岡遺跡や平尾遺跡などから弥生時代の遺構は確認されていない。馬込遺跡で弥生時代終末期の遺構が確認されたことは、祭祀遺構のような非日常的な遺構の可能性を含め、周囲に集落の存在を予想させるものである。

註

(1) 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『板平遺跡（第 3･4 次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 199 集

参考文献

(1) 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『尾立第２遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 169 集
(2) 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『岡遺跡（第６・７次調査）・坂元第２遺跡宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 212 集
(3) 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『向原中尾１・２遺跡　向原中尾第４遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 213 集
(4) 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『俵石第１遺跡（第２次調査）　俵石第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 216 集
(5) 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『岡遺跡（第９･13･15 次調査）』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 223 集
(6) 上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』№. 2
(7) 日向市史編さん委員会 2010『日向市史　通史編』

# 第Ⅳ章　東九州自動車道建設に伴う調査成果

## １　東九州自動車道建設に伴う発掘調査

東九州自動車道は、北九州市を起点とし大分・宮崎・鹿児島県の各県を結び、鹿児島市に至る全長436㎞の高速自動車国道である。そのうち宮崎県部分の大分県境～清武間までの136㎞の発掘調査を西日本高速道路株式会社九州支社（旧日本道路公団）・国土交通省延岡河川国道事務所の委託を受けて県・県教育委員会・県埋蔵文化財センターが行った。

西都～清武間（26.9㎞、33遺跡）の調査は平成7～10年度、都農～西都間（25.0㎞、79遺跡）は11～21年度、門川～日向間（13.9㎞、７遺跡）は17～21年度、県境～北川間（16.5㎞、15遺跡）は19～21年度、日向～都農間（20.0㎞、32遺跡）は20～24年度に行い、25年３月末の馬込遺跡第２地点（日向市）ですべての調査が終了した。発掘調査終了後の整理作業及び報告書作成は西都～清武間が11～13年度に29遺跡18冊、都農～西都間は15～22年度に59遺跡66冊、門川～日向間は18～23年度に5遺跡４冊、県境～北川間は18～22年度に７遺跡３冊を刊行した。日向～都農間は22年度から着手し、25年度の５遺跡２冊を含めて14遺跡12冊を刊行し、東九州自動車道（大分県境～清武間）建設に伴う遺跡の記録保存の措置はすべて終了する。なお平成13年３月に西都～清武間が、22年７月に高鍋～西都間、22年12月に門川～日向間の供用が開始され、日向～都農間の26年３月16日の開通で大分県境～清武間が全線開通し、北九州市～宮崎市までは26年度中には全線開通予定である。

昭和55～61年度の23遺跡約40万㎡の宮崎学園都市の発掘調査の成果を踏まえて、それを遙かに超える166遺跡180万㎡規模である東九州自動車道（大分県境～清武間）の発掘調査体制を県・県教育委員会は整備し、西都～清武間に着手する平成７年度には文化課埋蔵文化財第二係東九州班９人体制で着手し、埋蔵文化財センターとして総合博物館から分離独立する８年度には調査第一係25人体制、都農～西都間に着手する11年度に宮崎市佐土原町下那珂に新館を建設し、12年度に調査第一課41人体制（職員35人・非常勤６人）、ピーク時の14年度は53人体制（職員41人・非常勤12人）、25年度は９人体制である。なお高速道対策局併任職員が８年度から導入、任期付職員は16年度から採用され、19年度は最大19人であった。

平成12年度から旧石器時代　小畑弘己教授（熊本大学）、縄文時代　泉拓良教授（京都大学）・本田道輝教授（鹿児島大学）、弥生時代　田崎博之教授（愛媛大学）、古墳時代　広瀬和雄教授（国立歴史民俗博物館）・柳澤一男教授（宮崎大学）で構成された東九州自動車道調査指導委員会が設置され、調査・遺構・遺物についての指導・助言を得ながら調査を進めると共に、助言であった「調査マニュアル」作成・「土層の共通略称」の導入を行った。まず14年度には都農～西都間の調査の指針として『発掘調査・整理作業基本マニュアル』を策定し、19年度に『基本編』として改訂し、20年度には『整理作業～報告書作成編』を作成した。また都農～西都間では14年度から同時に10数箇所の調査を行うために、土層を遺跡間で比較する場合の「ものさし」として、基本的に認められるテフラ（火山灰層）やローム層、黒色土帯について共通の略称を用いることとし、ローム層の場合は上から「ML1」・「ML2」・AT・「ML3」・「ML4」、黒色土帯の場合は上から「MB1」・AT・「MB2」・「MB3」とした。頭に冠する「M」は「宮崎平野」を意味する。テフラは上位からKr-Th（高原スコリア）、K-Ah（鬼界アカホヤ）、Sz-S（桜島薩摩）、Kr-Kb（小林軽石）、AT（姶良Ｔｎ）、A-Fm（姶良深港）、A-Ot（姶良大塚）、Kr-Aw（霧島アワオコシ）、Kr-Iw（霧島イワオコシ）、A-Iw（姶良岩戸）、Aso-４（阿蘇４）などの火山灰を鍵層とした（『概報Ⅲ』2003）。なお旧石器時代の遺跡は遺構・遺物の分布の密度が低く、確認調査でも包含層の有無・密度のデーターが必ずしも正確に得られない場合も予想されるため10ｍ間隔のグリッドの1/4を掘り下げ確認を行い（「25％調査」と称する）、ある層で遺構・遺物が確認された場合は100％（全面）調査に移行した。また熊本大学甲元眞之教授の指導で13年度から導入されたフローテーション法を調査工程の中に位置づけることによっ

て遺構埋土の炭化種実・鉄片等の微細遺物が回収され、当時の食料事情・鉄生産などが明らかになったが、試料採取位置・記録方法・コンタミ等の課題もある（藤木2008）。また放射性炭素年代測定・火山灰分析・樹種同定等の自然科学分析によって遺構の年代や遺跡周辺の植生が明らかになった。

## ２　東九州自動車道の調査成果

ここでは調査成果の概要を後期旧石器時代から近世までを時代順に代表的な遺跡で述べることにする。なおそれぞれの遺跡の内容等については調査成果一覧表（第23表）と報告書刊行一覧（第24表）を参考にされたい。

### ①後期旧石器時代

AT下位の石器群は36遺跡で、AT上位の石器群は79遺跡で出土し、特に都農～西都間の58遺跡のうち50遺跡という多くの遺跡でATの上下で礫群が検出され、ナイフ形石器・角錐状石器・剥片尖頭器・細石刃核などの石器群が出土した。ここではAT下位、AT上位、細石刃期に分けて述べる。

なお宮崎県旧石器文化談話会の「宮崎県下の旧石器遺跡概観」2005では基本層序と石器群の出土層位によってAT下位を３段階（第１～３段階）、AT上位を４段階（第４～７段階）、細石刃石器群を３段階（第８～10段階）に分けた「宮崎10段階編年」である（以下「宮崎第○段階」と略す）。東九州道調査の基本層序との対応は、第１段階（ML3～MB3下部　台形様石器・石斧・鋸歯縁加工石器）、第２段階（MB3～MB2　台形様石器・二側縁加工ナイフ形石器）、第３段階（MB2　縦長剥片を素材とする二側縁加工ナイフ形石器・厚手の縦長剥片を素材とするスクレイパー）、第４段階（ML2下部　二側縁加工ナイフ形石器・縦長剥片を素材とするエンドスクレイパー）、第５段階（ML2上部～MB1下部　狸谷型ナイフ形石器・瀬戸内技法・剥片尖頭器・角錐状石器・円形の大型スクレイパー）、第６段階（MB1中部～下部　今峠型ナイフ形石器・北牛牧型ナイフ形石器・縦長剥片を素材とする基部及び部分加工のナイフ形石器・台形石器）、第７段階（MB1上部～ML1下部　小型の縦長剥片を素材とするナイフ形石器）、第８～10段階（ML1～MB0）である。第８段階は円錐形の細石刃核・黒曜石の小礫を素材とし、打面調整を施す細石刃核、第９段階が船野型・畦原型細石刃核、第10段階は西海技法の影響を受け、扁平な船野型・畦原型細石刃核を特徴とする。東九州道調査の遺跡では第１段階としては音明寺第２遺跡第Ⅰ文化層、第３段階としては東畦原第３遺跡第Ⅱ文化層・音明寺第２遺跡第Ⅱ文化層・北牛牧第５遺跡第Ⅰ文化層、第５段階としては小並第１・東畦原第３・長薗原・木脇遺跡、第６段階としては北牛牧第５・音明寺第２・上ノ迫遺跡、第７段階としては野首第２遺跡、第８段階としては上ノ原遺跡、第９段階は下星野遺跡、第10段階は塚原遺跡をあげている。

#### ＡＴ下位

AT下位の石器群については日向市板平・岡遺跡の２遺跡、日向市東郷町向原中尾第４遺跡（MB2、礫群1基）の１遺跡、都農町舟川第２（MB2、4基）・俵石第２（MB3･2、2基）・俵石第１（ML3～MB2、4基）・尾立第２（ML3～MB2、1基）・立野第５遺跡（MB2、4基）の５遺跡、川南町銀座第２（MB2、1基）・登り口第１（MB2）・市納上第２（MB2、1基掘り込み）・赤石天神本（MB2）・中ノ迫第１（MB3・2、8基）・中ノ迫第２（MB3・2）・中ノ迫第３（MB3・2、1基）・国光原（MB3）遺跡の８遺跡、高鍋町野首第２（MB3・2、78基）・北牛牧第５（MB2）・唐木戸第３（ML3～MB2）・小並第１（MB2、4基）・牧内第１（ML3～MB2、1基）・牧内第２（MB2）遺跡の６遺跡、新富町音明寺第２（ML3・MB2、15基）・東畦原第１（MB3・2、43基）・東畦原第２（MB3・2、16基）・東畦原第３（ML3・MB2、4基）・西畦原第１（MB2、1基）・西畦原第２（MB3・2、5基）・上新開（ML3～MB2、3基）・勘大寺（ML3～MB2、13基）・永牟田第１（MB2、3基）・永牟田第２（MB3・2、8基）・尾小原（MB2、5基）・向原第１遺跡（MB2）の12遺跡、西都市別府原遺跡（MB2、5基）の１遺跡、宮崎市上ノ原遺跡（MB2）の１遺跡であり、AT直下のMB２を中心に都農・川南、三財原面・新田原面（高鍋・新富）の台地上に遺跡が特に展開している。以上のように門川～日向間１遺跡、日向～都農間５遺跡、都農～西都間28遺跡、西都～清武間２遺跡の計36遺跡である。

県内の最古の石器群としては川南町後牟田遺跡第Ⅴ文化層で霧島イワオコシ層（約4～4.5万年前）直下のローム層から出土した石器群があるが、石器かどうかで見解が分かれている。礫群は後牟田遺跡第

Ⅲ文化層で霧島アワオコシ火山灰（約38,000年前）の下位から４基検出されている（後牟田遺跡調査団2002）。一方、東九州道調査のAT下位の最古の旧石器としては音明寺第１遺跡（新富町）の第Ⅰ文化層下（霧島アワオコシ・霧島イワオコシの下位、ML4・5）の７点については「自然礫」と「礫器と敲石」で見解が分かれており、確実なのは東畦原第３遺跡（新富町）の霧島アワオコシ上位のML3で礫群１基、石核・剥片が、この遺跡以外はその上位のMB3で東畦原第２遺跡など７遺跡で礫群・石器が確認されている。なお東九州道調査では霧島アワオコシ・イワオコシの下位では旧石器は出土していない。

特に野首第２遺跡（高鍋町）ではATの下位の３枚と上位の４枚の計７つの文化層が確認され、剥片尖頭器以外の各種のナイフ形石器・角錐状石器・細石刃核等が多数出土し、旧石器の編年を行う上では標識的な遺跡である。礫群が300基も検出されており、県内最大規模の遺跡であり、全国的にも有数である。第Ⅰ期はMB3下部で宮崎10段階編年の第１段階に相当し、剥片・石核類が少量出土した。第Ⅱ期はMB3上部～MB2下部の二側縁加工ナイフ形石器・台形石器の石器群で第２段階である。第Ⅲ期はAT直下のMB2上部で石刃・縦長剥片の二側縁加工ナイフ形石器と不定形剥片素材の一側縁加工ナイフ形石器を主体とする石器群で、局部磨製石斧も出土しており、第３段階である。AT上位のMB1下部の第Ⅳ期は二側縁加工ナイフ形石器（狸谷型ナイフ形石器）を主体とする石器群で剥片尖頭器を共伴しない事例で、第４段階と第５段階の間、もしくは第５段階前半に位置付けられている。MB1中部の第Ⅴ期は瀬戸内系石器群と大型の角錐状石器で構成され、第５～６段階である。横長の剥片を取る瀬戸内技法によって作られた国府型ナイフ形石器の石材は五ヶ瀬川流域の流紋岩である。MB1上部～Kr-Kb層中部の第Ⅵ期は終末期のナイフ形石器・台形石器で構成され、第７段階である。Kr-Kb層上部～ML1下部の第Ⅶ期は細石刃石器群で、①野岳・休場型、②船野型・畦原型と様々な細石刃核が出土し、①が第８段階、②が第９段階である。礫群の変遷は、AT下位は第Ⅰ期7基、第Ⅱ期32基、第Ⅲ期22基の合計61基、AT上位は第Ⅳ期47基、第Ⅴ期160基、第Ⅵ期6基、第Ⅶ期1基の合計214基で、AT上位のMB1中部の時期（第Ⅴ期）が最盛期である。礫群は礫が稠密な分布するⅠ類と疎らな分布をするⅡ類に分けられ、AT下位は第Ⅱ期にⅠ類がわずか４基あるのみでⅡ類が主体であるのに対してAT上位の第Ⅳ期にはⅠ類が目立ち始めるが、最盛期のⅤ期にはⅠ類が乏しくなる。放射性炭素年代法によれば霧島アワオコシ上位でAT下位のMB3上部の37号礫群は28,010±220年BP（以下「年BP」はAMS法放射性炭素年代測定法による）、AT直上の27号礫群は22,370±120年BPである。なおML3とアワオコシの下位からは石器は出土していない。

AT下位の礫群は礫の密集度も低く、散漫で掘り込みを持たないのに対して、上位は密集度も高く、掘り込みを持ち、石器が混在する傾向がある（『概報Ⅲ』2003）。東畦原第１遺跡（新富町）ではMB3（27基）が礫が散漫であるのに対してMB2（16基）では密集するものもある。

ナウマン象の解体・木材の伐採斧と考えられているAT下位（霧島アワオコシの上位）の局部磨製石斧は都農町尾立第２（MB3）・俵石第２遺跡（MB3～MB2）、川南町中ノ迫第３遺跡（MB3）、野首第２遺跡（MB2）などで出土し、注目されている。特に局部磨製石斧と密接な関係が想定されている環状ブロック群が立野第５遺跡（都農町）のⅧ層（MB2）で検出され、直径約20mの範囲に９つの石器ブロックが環状に東西に分かれて分布し、北部と南部に二箇所の出入り口が想定され、外にも１ブロック接続するが、局部磨製石斧は出土していない。なお東畦原第３遺跡（新富町）でもAT下位のMB3で直径18mの範囲に８つの石器ブロックが環状に巡っており環状ブロック群として再評価され、宮崎第１段階に相当する。なお県内における局部磨製石斧の出土状況と環状ブロック群との時期差については、関東地方とは異なった生業・行動・集団関係の可能性も指摘されている（日高2009）。

俵石第１遺跡（都農町）ではAT下位のⅠ期（ML3相当　宮崎第１段階）では剥片が、Ⅱ期（MB3～MB2第３段階）では礫群４基・縦長剥片素材の小形のナイフ形石器・削器・掻器と共に水晶製ナイフ形石器・二次加工剥片・剥片が出土した。AT下位の水晶製石

器の出土例は県内では延岡市北方町矢野原遺跡（県1995）以外には日向市東郷町向原中尾第４遺跡（Ⅰ期、礫群1基・剥片）・高鍋町北牛牧第５遺跡（MB2、石核・剥片）のみであり注目される。

なお尾立第２遺跡（都農町）のⅨ層中の姶良深港火山灰と姶良大塚火山灰は調査中肉眼では判別できなかったが、火山灰分析で同定できるという程都農町以北の調査では困難になり、宮崎平野部の基本層序にそぐわない点が明らかになった。

**ＡＴ上位**

AT上位の石器群は、大分県境～北川間は２遺跡、門川～日向間は１遺跡、日向～都農間は13遺跡、都農～西都間は48遺跡、西都～清武間は15遺跡の合計79遺跡から出土し、AT下位の遺跡数より倍増している。

AT上位のMB1下部から出土する剥片尖頭器は塩見城跡（日向市）が東九州道調査では最北端で、舟川第２遺跡（都農町）・前ノ田村上第２遺跡（川南町）・小並第１遺跡（高鍋町）・上ノ原遺跡（佐土原町）など日向市１遺跡、東郷町２遺跡、都農町７遺跡、川南町４遺跡、高鍋町６遺跡、新富町２遺跡、佐土原町３遺跡、国富町１遺跡の合計26遺跡で出土している。野首第２遺跡（高鍋町）では全く出土していない。舟川第２遺跡では日本最長の剥片尖頭器が出土している。剥片尖頭器は宮崎第５段階で、存在が目立つ大淀川～一ツ瀬川流域、目立たない一ツ瀬川流域～小丸川流域と指摘され（宮崎県旧石器文化談話会2005）、小丸川以北は目立つ。前ノ田村上第２遺跡では１期（Ⅶa層・ML2）は礫群15基と剥片尖頭器24・縦長剥片の石器群（宮崎第５段階）、２期（Ⅳ～Ⅴ層・MB1）は礫群25基と角錐状石器18・瀬戸内技法の石器群（第６段階）に分層でき、ML2の剥片尖頭器がMB1より大形で基部の抉りが明瞭という変遷が明らかになった。

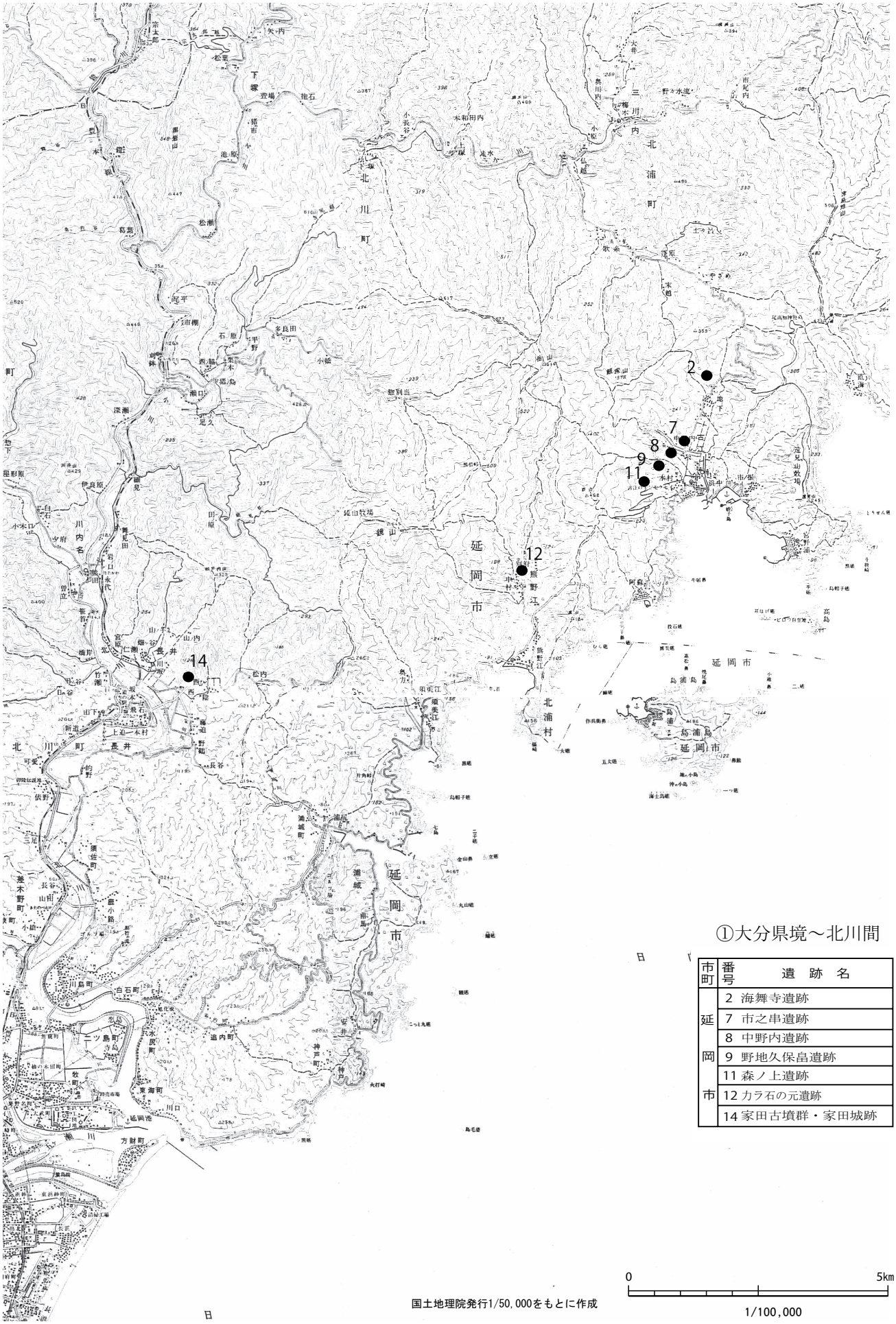
AT上位のMB1上部～中部・Kr-Kb中部～下部から出土する角錐状石器は東九州道調査では池ノ下遺跡（日向市）が最北端で、俵石第１遺跡（都農町）・中ノ迫第２遺跡（川南町31）・牧内第１遺跡（高鍋町）・下屋敷遺跡（佐土原町）など日向市１遺跡、東郷町２遺跡、都農町８遺跡、川南町10遺跡、高鍋町７遺跡、新富町11遺跡、西都市２遺跡、佐土原町３遺跡、国富町２遺跡の合計46遺跡で出土している。都農～西都間は西都～清武間の遺跡群と比較した場合、角錐状石器の出土点数が多く、逆に剥片尖頭器は少ない（「概報Ⅲ」2003）。勘大寺遺跡二次調査では161点も出土しているのに対して、剥片尖頭器は１点のみである。

横長の剥片をとる瀬戸内技法によって作られた国府型ナイフ形石器は舟川第２遺跡（都農町）・中ノ迫第１遺跡（川南町）・野首第２遺跡（高鍋町）・東畦原第１遺跡（新富町）・下屋敷遺跡（佐土原町）など多くの遺跡で出土しており、石材は五ケ瀬川流域産の流紋岩を主体に利用している。秋成雅博氏の集成によれば県内では76遺跡で出土しており（秋成2013）、東九州道調査では都農町７遺跡、川南町９遺跡、高鍋町９遺跡、新富町９遺跡、宮崎市佐土原町５遺跡、宮崎市１遺跡、国富町１遺跡の合計41遺跡で半数を占めている。国府型ナイフ形石器・翼状剥片・盤状石核・接合資料という瀬戸内技法の第１工程から第３工程まですべて揃っているのは中ノ迫第１・野首第２遺跡など８遺跡にとどまる。中ノ迫第１遺跡の石材の８割は流紋岩である。

俵石第１遺跡（都農町）はAT上位のⅢ期（ML2相当宮崎第５段階）は礫群９基・ナイフ形石器・台形石器・角錐状石器・剥片尖頭器が、Ⅳ期（ML1下部相当第６・７段階）は礫群７基・ナイフ形石器（北牛牧型・今峠型・国府型・片島型）・台形石器・剥片尖頭器が、Ⅴ期（ML1上部相当　第９・10段階）は野岳・休場型、畦原型細石刃核が確認された。なお舟川第２遺跡（都農町）のⅤａ層で縦長剥片素材を用いた二側縁加工のナイフ形石器から細石刃石器群までの幅広い時期の石器が出土しているように、俵石第１遺跡より以北になるとAT上位のKr-Kbが上下に散在して確認されるために、単一層として判断は困難である。

**細石刃期**

細石刃石器群は、日向～都農間は６遺跡、都農～西都間は37遺跡、西都～清武間は11遺跡の合計54遺跡から出土している。野岳型・船野型が尾立第２・尾花Ａ・別府原遺跡、野岳型・船野型・畦原型は野首第２遺跡、船野型・畦原型は前ノ田村上第２・小並第１・長薗原・塚原遺跡などで出土しており、層位的にはMB1～MB0に相当するが、野首第２遺跡にみられる




| 市町 | 番号 | 遺跡名 |
|---|---|---|
| 延岡市 | 2 | 海舞寺遺跡 |
| | 7 | 市之串遺跡 |
| | 8 | 中野内遺跡 |
| | 9 | 野地久保畠遺跡 |
| | 11 | 森ノ上遺跡 |
| | 12 | カラ石の元遺跡 |
| | 14 | 家田古墳群・家田城跡 |

国土地理院発行1/50,000をもとに作成

第77図　東九州自動車道（県境～北川間）関連遺跡位置図

ように包含層が薄いために層位的に調査するのは困難であった。しかし長薗原遺跡では石器ブロックとして大型の畦原型と船野二型が共存していることから、同時期として理解されると共に船野型の拡散にともなう地域石材適応と評価されている（宮田2010）。

舟川第２遺跡（都農町）では宮崎第８段階の野岳・休場型細石刃核、第９段階の船野型細石刃核、第10段階の泉福寺・羽佐島Ⅲ型細石刃核など３時期の細石刃石器群が出土し注目される。また県内初の姫島産安山岩製の船野型細石刃核も出土している。

永牟田第２遺跡（新富町）では黒曜石製の野岳型・船野型細石刃核が出土しているのに対して、小並第１遺跡（高鍋町）では砂岩を利用した畦原型細石刃核が層位的に出土している。なお畦原型細石刃核の畦原は新富町の東畦原・西畦原の地名に由来するが、天地返し等の耕作の影響のためか東九州道調査では新富町内で出土しなかった。耳川流域を北限として俵石第１（都農町）・前ノ田村上第２遺跡（川南町）などで、長薗原遺跡では９点も出土している。

唐木戸第４遺跡（高鍋町）では桑ノ木津留産（熊本・鹿児島県・宮崎県境）が63%と主体であり、日東産（鹿児島県大口市）が28%、腰岳産（佐賀県伊万里市）が5%と九州各地の黒曜石が利用されている。宮崎平野部においては黒曜石製石器群の中では桑ノ木津留産製細石刃核が主体であり、野岳型はほぼ黒曜石製であるが、船野型は黒曜石以外の石材も利用している（芝2011）。なお尾立第２遺跡出土の黒曜石を蛍光Ｘ線分析した結果、桑ノ木津留産・日東産・上牛鼻産以外はデーターベースにない産地のもので、尾立第２0X群として仮称されたが、いわゆる「霧島山産」黒曜石（坂田1982）に相当すると考えられ、菱刈系として設定されている（長井2010）。俵石第１・勘大寺・下屋敷遺跡でも確認されている（岸田2011）。

火山灰は高原スコリアが高鍋町域まで、桜島薩摩火山灰が都農町域まで、小林軽石が都農町域まで、ATは日向市域まで、姶良深港・姶良大塚は都農町域まで、霧島アワオコシは川南町域まで、霧島イワオコシは都農町域まで確認されているが、都農町域から北は肉眼で明瞭に確認できるのはK-AhとATのみであったために旧石器の調査の際に「土層の共通の略称」が適応しなくなった。

石材分類については、双眼実体顕微鏡を用い、原則として水に濡らして行った堆積岩類・火砕岩類・火成岩類・変成岩類の「石器石材分類表」と、流紋岩系は色・表面の模様・手ざわりなどでａ～ｇの７分類した宍戸章氏作成に加筆した「石器石材分類表（流紋岩系）1999.9.20」がある（『木脇遺跡』2001」所収）。流紋岩系は松田清孝によってⅠ（a類）、Ⅱ（d・f類）、Ⅲ（g類）、Ⅳ（b・c類）、Ⅴ（e類）に再分類された「石器石材分類表（流紋岩系）2000.9.8」がある（『東畦原第２遺跡』2005」所収）。この石器石材分類表をベースに『野首第２遺跡』2007のように各遺跡の担当者が肉眼観察、手触り、双眼実体顕微鏡を使って黒曜石・安山岩・ホルンフェルス・頁岩・砂岩・チャートなどを細分している。なお尾鈴山酸性岩類については24年度の報告書から尾鈴山溶結凝灰岩として表記している。

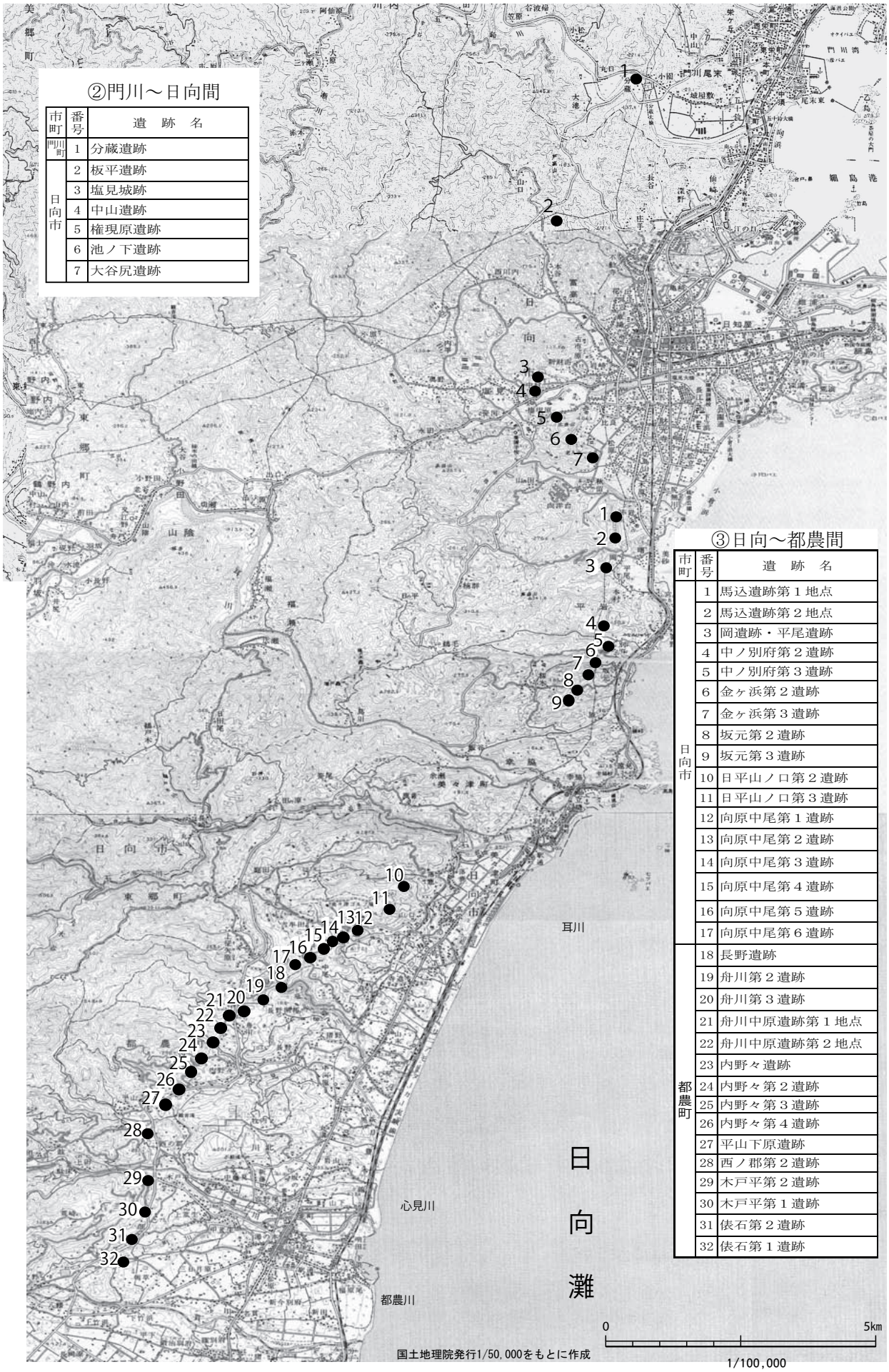
以上のように旧石器の時期を決める火山灰の存在と面的に調査した結果、宮崎県内の旧石器の編年の指標になるばかりでなく、旧石器時代の標準的な編年とされている武蔵野台地の編年と並んでその成果は全国的にも注目されている。

**②縄文時代**

都農～西都間では草創期が18遺跡に対して、早期になると55遺跡と増加するが、鬼界アカホヤ火山灰降灰後の前期になると７遺跡と激減し、中期が６遺跡、後期が11遺跡、晩期が12遺跡と変動する。日向～都農間でも早期16遺跡に対して前期2遺跡、中期1遺跡、後期1遺跡、晩期2遺跡と推移する。

**草創期**

草創期の隆帯文土器・爪形文土器は赤石天神本・国光原・尾花Ａ遺跡（川南町）、崩戸遺跡（高鍋町）、塚原遺跡（国富町）などで出土している。尾花Ａ遺跡の竪穴状遺構は長径2.6m、短径2.2mの規模の楕円形プランで、敲石・台石と共に貝殻や爪先による刺突を施す隆帯文土器が出土した。県内では上猪ノ原遺跡（清武町2009）の竪穴建物跡14軒のみで注目される。塚原遺跡出土の隆帯文土器は内面に赤色顔料（ベンガラ）を塗っており、非実用的な土器である可能性が高く、上猪ノ原遺跡の土器にも赤色




②門川～日向間

| 市町 | 番号 | 遺　跡　名 |
|---|---|---|
| 門川町 | 1 | 分蔵遺跡 |
| 日向市 | 2 | 板平遺跡 |
| | 3 | 塩見城跡 |
| | 4 | 中山遺跡 |
| | 5 | 権現原遺跡 |
| | 6 | 池ノ下遺跡 |
| | 7 | 大谷尻遺跡 |

③日向～都農間

| 市町 | 番号 | 遺　跡　名 |
|---|---|---|
| 日向市 | 1 | 馬込遺跡第１地点 |
| | 2 | 馬込遺跡第２地点 |
| | 3 | 岡遺跡・平尾遺跡 |
| | 4 | 中ノ別府第２遺跡 |
| | 5 | 中ノ別府第３遺跡 |
| | 6 | 金ヶ浜第２遺跡 |
| | 7 | 金ヶ浜第３遺跡 |
| | 8 | 坂元第２遺跡 |
| | 9 | 坂元第３遺跡 |
| | 10 | 日平山ノ口第２遺跡 |
| | 11 | 日平山ノ口第３遺跡 |
| | 12 | 向原中尾第１遺跡 |
| | 13 | 向原中尾第２遺跡 |
| | 14 | 向原中尾第３遺跡 |
| | 15 | 向原中尾第４遺跡 |
| | 16 | 向原中尾第５遺跡 |
| | 17 | 向原中尾第６遺跡 |
| 都農町 | 18 | 長野遺跡 |
| | 19 | 舟川第２遺跡 |
| | 20 | 舟川第３遺跡 |
| | 21 | 舟川中原遺跡第１地点 |
| | 22 | 舟川中原遺跡第２地点 |
| | 23 | 内野々遺跡 |
| | 24 | 内野々第２遺跡 |
| | 25 | 内野々第３遺跡 |
| | 26 | 内野々第４遺跡 |
| | 27 | 平山下原遺跡 |
| | 28 | 西ノ郡第２遺跡 |
| | 29 | 木戸平第２遺跡 |
| | 30 | 木戸平第１遺跡 |
| | 31 | 俵石第２遺跡 |
| | 32 | 俵石第１遺跡 |

第78図　東九州自動車道（門川～都農間）関連遺跡位置図

顔料がみられる。塚原遺跡の隆帯文土器付着物から11,850±60年BPと11,750±60年BPの年代が得られている（遠部2008）。塚原遺跡では丸ノミ形石斧の未製品が２点平行に並んだ状態で出土しており、土坑は確認できなかったが、埋納の可能性がある。

朝草原遺跡（都農町）で極めて薄手で胎土が堅緻な無文土器が出土し、尖底から二日市洞穴第５～４文化層に、直口する口縁部形態から柏原遺跡Ｆ地点Ⅱ層に相当し草創期末に比定されたが、その後の集成（『平山下原遺跡』2011）によれば39遺跡中半数の18遺跡が東九州道の調査で、川原田式直前の陽弓式段階の野首第２遺跡、陽弓式の下層に別府原式が出土する立野第２遺跡など早期前葉を中心としている。

崩戸遺跡では、隆起線文土器段階で細石刃（桑ノ木津留産黒曜石）・流紋岩製尖頭器が出土している。なお向原中尾第４遺跡（都農町）のチャート製柳又型有舌尖頭器と北牛牧第５遺跡の有舌尖頭器については草創期土器は出土していない。

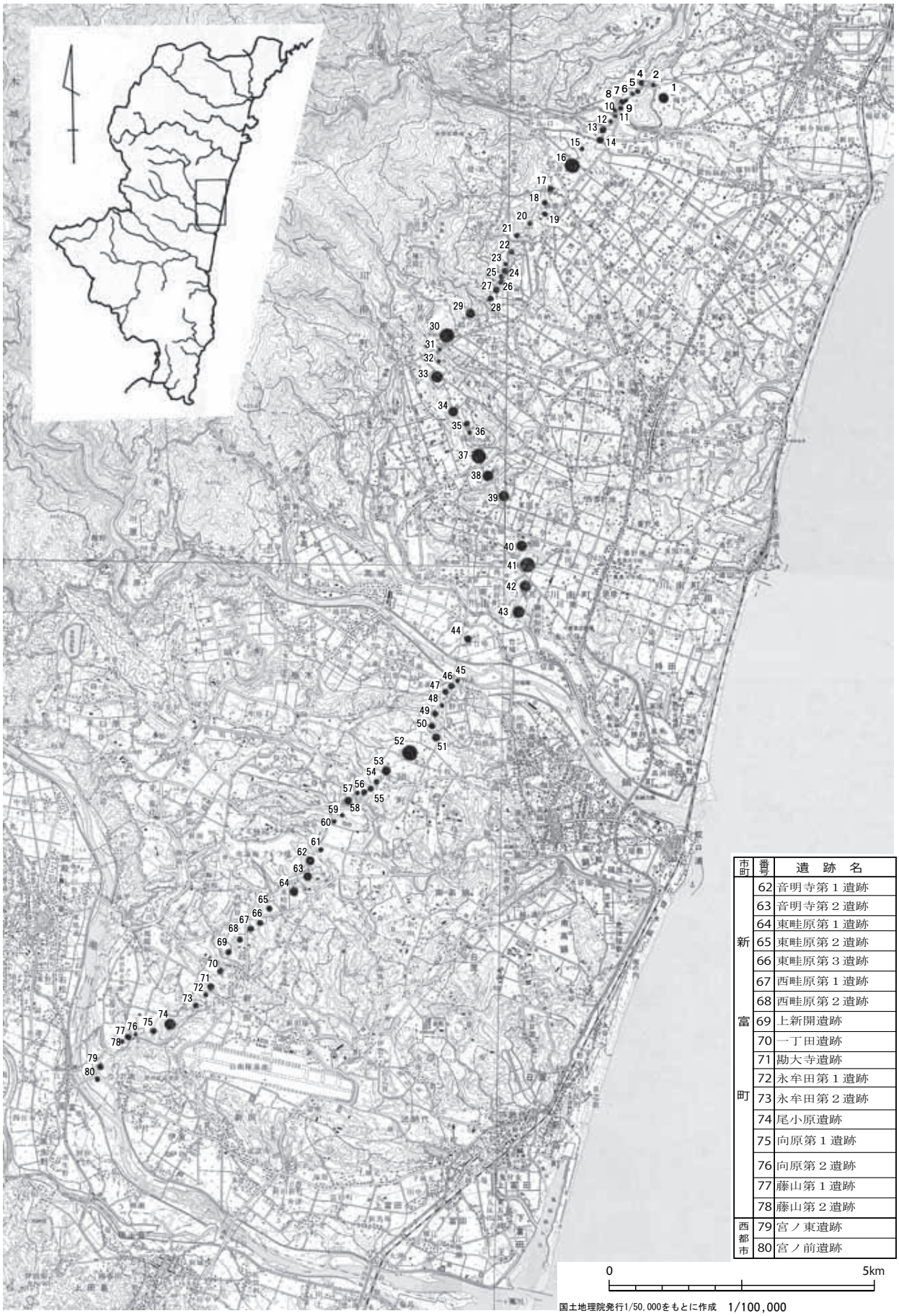
白ケ野第２・３遺跡（宮崎市）のⅨａ～Ⅸｂ層で細石刃核（野岳・船野型）・細石刃と共にシルト岩製神子柴型石斧が出土しており、接合関係から当遺跡で製作している。また唐木戸第３遺跡（高鍋町）からもホルンフェルス製神子柴系石斧が出土している。これらの九州出土の神子柴型石斧の位置づけについて慎重にならざるをえない（稲田2000・宮田2010）。

**早期**

早期になると県内の遺跡の数は増大し、東九州道調査でも同様に延岡市森ノ上遺跡（168基・貝殻文主体）、日向市板平（36基・貝殻文）・馬込遺跡（40基）、都農町舟川第２（33基・無文）・尾立第２遺跡（52基）、川南町市納上第２（32基・貝殻文）・中ノ迫第２（37基・押型文）・中ノ迫第３（32基・貝殻文）・国光原（63基）・尾花Ａ遺跡（243基・押型文）、高鍋町野首第１（34基・押型文）・野首第２（206基・押型文）・老瀬坂上第３（34基・貝殻文）・下耳切第３遺跡（32基）、新富町尾小原（65基・押型文）・藤山第１遺跡（42基）、佐土原町別府原遺跡（48基・押型文）、国富町松元（44基・貝殻文）・木脇遺跡（83基・貝殻文）、清武町白ケ野第２・３遺跡（90基・押型文）など集石遺構が30基前後ずつ検出されている。

その中で突出しているのは小丸川を挟んで左岸の早期前葉～中葉の押型文土器（沈目式主体、田村・ヤトコロ式併行）を主体とする尾花Ａ遺跡は243基、右岸の押型文土器（下菅生Ｂ式・田村式）を主体とする野首第２遺跡では206基も検出されており、県内最大級の規模である。尾花Ａ遺跡の集石遺構の19基は9,400～8,760年BP（４基）、8,480～8,115年BP（９基）、7,815～7,530年BP（５基）に分かれ8,300年代BPを中心とする。集石遺構の構成礫の石材は砂岩が主体である。炉穴は11基と非常に少なく、9基は丘陵南端部の集石遺構密集地ではなく、集石遺構の少ない北端部に分布している。一方、集石遺構206基に対して炉穴203基とほぼ拮抗している野首第２遺跡の集石遺構は9,160年BP（1基）、8,430～8,210年BP（15基）、8,120年BP（1基）の３群に分かれ、8,300年代BPが中心であり、炉穴も8,390～8,250年BP（6基）、8,110年BP（1基）の２群で8,300年代BPを中心とするので、集石遺構が早く形成されるが、両者とも最盛期は同時期である。集石遺構の密度が低い場所に炉穴が分布している。なお滑川第１遺跡（清武町2006）では集石遺構を放射性炭素年代で①ボオル状の大型の掘り込みを持つタイプ（9,350年BP頃）、②掘り込みを持つタイプ（8,500～8,200年BP）、③礫が平面形（円形）に集中するタイプ（7,500年BP頃）、④円形の掘り込みを持ち礫がギッシリ詰まった小型の集石遺構（6,800年BP）に分類され、野首第２遺跡では②が、尾花Ａ遺跡では①・②・③が追認されたが、野首第２遺跡では①→②については検証されなかった。尾立第２遺跡では②・③が、向原中尾第２遺跡は②、板平遺跡は②が追認された。なお岡遺跡の第９次調査区SI5や立野第５遺跡のSI1は放射性炭素年代では草創期の集石遺構の可能性がある。

集石遺構の構成礫については森ノ上遺跡が千枚岩、板平遺跡が砂岩、岡遺跡から前ノ田村上第２遺跡まで尾鈴山酸性岩類を主体とし、国光原遺跡で尾鈴山酸性岩類が半数になり、小丸川左岸の西ノ別府遺跡・尾花Ａ遺跡は砂岩が主体、小丸川右岸から南は尾鈴山酸性岩類・砂岩・ホルンフェルスで構成され、清武川周辺になると白ケ野第２・３遺跡は98%が清武川の河岸段丘底部の第三系宮崎層群の細粒砂岩




| 市町 | 番号 | 遺　跡　名 |
|---|---|---|
| 新富町 | 62 | 音明寺第１遺跡 |
| | 63 | 音明寺第２遺跡 |
| | 64 | 東畦原第１遺跡 |
| | 65 | 東畦原第２遺跡 |
| | 66 | 東畦原第３遺跡 |
| | 67 | 西畦原第１遺跡 |
| | 68 | 西畦原第２遺跡 |
| | 69 | 上新開遺跡 |
| | 70 | 一丁田遺跡 |
| | 71 | 勘大寺遺跡 |
| | 72 | 永牟田第１遺跡 |
| | 73 | 永牟田第２遺跡 |
| | 74 | 尾小原遺跡 |
| | 75 | 向原第１遺跡 |
| | 76 | 向原第２遺跡 |
| | 77 | 藤山第１遺跡 |
| | 78 | 藤山第２遺跡 |
| 西都市 | 79 | 宮ノ東遺跡 |
| | 80 | 宮ノ前遺跡 |

第79図　東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡位置図

④都農～西都間

| 市町 | 番号 | 遺　跡　名 |
|---|---|---|
| 都農町 | 1 | 朝倉遺跡 |
| | 2 | 尾立第２遺跡 |
| | 4 | 朝草原遺跡 |
| | 5 | 尾立第３遺跡 |
| | 6 | 尾立第４遺跡 |
| | 7 | 尾立第５遺跡 |
| | 8 | 立野第５遺跡 |
| | 9 | 立野第１遺跡 |
| | 10 | 立野第２遺跡 |
| | 11 | 立野第３遺跡 |
| | 12 | 立野第４遺跡 |
| 川南町 | 13 | 八幡第１遺跡 |
| | 14 | 八幡第２遺跡 |
| | 15 | 上ノ原・北分遺跡 |
| | 16 | 銀座第１遺跡 |
| | 17 | 銀座第２遺跡 |
| | 18 | 銀座第３A遺跡 |
| | 19 | 銀座第３B遺跡 |
| | 20 | 登り口第１遺跡 |
| | 21 | 登り口第２遺跡 |
| | 22 | 山ノ口遺跡 |
| | 23 | 谷ノ口遺跡 |
| | 24 | 市納上第１遺跡 |
| | 25 | 市納上第２遺跡 |
| | 26 | 市納上第３遺跡 |
| | 27 | 市納上第４遺跡 |
| | 28 | 市納上第５遺跡 |
| | 29 | 虚空蔵免遺跡 |
| | 30 | 赤石・天神本遺跡 |
| | 31 | 天神本第２遺跡 |
| 川南町 | 32 | 大内原遺跡 |
| | 33 | 中ノ迫第１遺跡 |
| | 34 | 中ノ迫第２遺跡 |
| | 35 | 中ノ迫第３遺跡 |
| | 36 | 中ノ迫第４遺跡 |
| | 37 | 前ノ田村上第１遺跡 |
| | 38 | 前ノ田村上第２遺跡 |
| | 39 | 赤坂遺跡 |
| | 40 | 国光原遺跡 |
| | 41 | 湯牟田遺跡 |
| | 42 | 西ノ別府遺跡 |
| | 43 | 尾花A遺跡 |
| 高鍋町 | 44 | 竹鳩遺跡 |
| | 45 | 崩戸遺跡 |
| | 46 | 野首第１遺跡 |
| | 47 | 野首第２遺跡 |
| | 48 | 南中原第１遺跡 |
| | 49 | 南中原第２遺跡 |
| | 50 | 老瀬坂上第３遺跡 |
| | 51 | 下耳切第３遺跡 |
| | 52 | 北牛牧第５遺跡 |
| | 53 | 唐木戸第１遺跡 |
| | 54 | 唐木戸第２遺跡 |
| | 55 | 唐木戸第３遺跡 |
| | 56 | 唐木戸第４遺跡 |
| | 57 | 唐木戸第５遺跡 |
| | 58 | 小並第１遺跡 |
| | 59 | 小並第２遺跡 |
| | 60 | 牧内第１遺跡 |
| | 61 | 牧内第２遺跡 |

を利用しており、その南の遺跡は砂岩である。藤山第２遺跡は砂岩とホルンフェルスが８～９割占めている。以上のように集石遺構の構成礫は身近に豊富にある遺跡周辺の供給源によると考えられる。

なお集石遺構の記録については唐木戸第４遺跡で問題点を整理し、尾小原遺跡三次調査では検出状況を写真で記録する方法が試験的に行われた。当センターの『発掘調査マニュアル基本編』では検出状況の平面図と配石のみの平面図、断面図は礫・土層の断面を描き、配石のみ断面に見通しを追加している。『応用編』では二方向の断面図と、「見通し図を作成することにより礫の密集度を視覚的に表現することができるが、その場合、実測図作成に時間を要するので、記録方針について調査者は検討しなければならない。」として見通し図については必ずとるかについては基数・残存状況などによって判断している。なお集石遺構は構成礫の属性として石材・重量・赤化度等のデーターを現場段階で記録後は廃棄しているが、旧石器時代の礫群については、全てセンターに持ち帰り、個々の属性を記録している。

早期前半の貝殻文土器を主体とする別府原遺跡（佐土原町）では集石遺構48基に対して炉穴が307基と突出しており、最高所の平坦面に集石遺構が分布し、炉穴は南側斜面を中心に等高線に直交して作られる。古い炉穴の前方に新しい炉穴を構築する例や、軸をずらし交差するように新たな炉穴を構築し、古い炉穴の一部を足場とする例が多く、35基も切り合うものもあった。48号炉穴（8,930±50年BP）からはユリ科のネギ属（ノビルなど）などの鱗茎が出土し、当時の食を復元する上で注目される。63号炉穴（9,460±100年BP）では炉部の手前（足場側）の底面で完形に近い深鉢形土器が潰れた状態で出土したことから、土器を利用した煮沸の可能性もあり、炉穴の機能を考える上で注目される。また早期には数少ない竪穴建物跡が２軒検出され、一辺3.7mと2.9mの方形プランである。打製石鏃700点、磨石65点に対して、石錘はわずか８点であるが、早期に特徴的な短軸に打ち欠きを入れるタイプである。

森ノ上遺跡（延岡市北浦町）では炉穴４基に対して集石遺構が168基も検出され、県北では笠下遺跡（延岡市北方町1990）の163基を抜いて最大規模である。集石遺構の構成礫は扁平な千枚岩で、掘り込み全体に配石を花弁状に立て並べ、一見すると花びらの形をしている。この千枚岩は北川層群中にあり、遺跡近辺に豊富にある。早期前葉～末の貝殻文系土器（前平式・知覧式・中原式）を主体としており、押型文土器（稲荷山式・早水台式）が客体であり、瘤付無文土器も出土している。黒曜石は姫島産が主体で、淀姫・針尾島と腰岳が少量出土する。石鏃・尖頭器、敲石・磨石が多数出土しているが、石錘は１点もない。なお中野内遺跡（延岡市北浦町）では集石遺構が1基検出され、9,405±28年BPである。

板平遺跡（日向市）では集石遺構36基・炉穴55基・陥し穴状遺構４基が検出され、早期前半の貝殻文土器（中原Ⅱ式）を主体とし、早期後半の手向山式・天道ケ尾式（妙見式）も出土している。集石遺構の構成礫の主体は砂岩であり、供給源は富高川と推定される。燃料材はコナラ類で、炉穴は9,260±30～9,230±

第80図　東九州自動車道（西都～清武間）関連遺跡位置図

⑤西都～清武間

| 市町 | 番号 | 遺　跡　名 |
|---|---|---|
| 西都市 | 1 | 蔵向遺跡 |
| | 2 | 大辻屋敷遺跡 |
| | 3 | 小田河原遺跡 |
| | 4 | 平田迫遺跡 |
| | 5 | 別府原・西ヶ迫遺跡 |
| | 6 | |
| | 7 | 上ノ原遺跡 |
| | 8 | 下屋敷遺跡 |
| | 9 | 梅ヶ島遺跡 |
| | 10 | 待居廻遺跡 |
| | 11 | 長薗原遺跡 |
| | 12 | 上ノ迫遺跡 |
| | 13 | 上松尾遺跡 |
| 国富町 | 14 | 松元遺跡 |
| | 15 | 井手口遺跡 |
| | 16 | 木脇遺跡 |
| | 17 | 塚原遺跡 |

| 市町 | 番号 | 遺　跡　名 |
|---|---|---|
| 宮崎市 | 18 | 中別府遺跡 |
| | 19 | 倉岡第２遺跡 |
| | 20 | 町屋敷遺跡 |
| | 21 | 北田城跡 |
| | 22 | 迫内遺跡 |
| | 23 | 野添遺跡 |
| | 24 | 生目村古墳周辺 |
| | 25 | 内宮田・柳迫遺跡 |
| | 26 | 本城跡 |
| | 27 | 白ヶ野第２・３遺跡 |
| | 28 | 上の原第１遺跡 |
| | 29 | 権現原２遺跡 |
| | 30 | 権現原１遺跡 |
| | 31 | 杉木原遺跡 |
| | 32 | 下星野遺跡 |
| | 33 | 永ノ原遺跡 |

30年BPであるのに対して、集石遺構は9,280±40年BPと8,215±20～8,180±40年BPに分かれ、土器に対応すると考えられる。

野首第２遺跡では礫を充填したピットが環状に巡る「環状ピット群」が３基検出された。１号環状ピット群は中央に１基のピットを中心に径2.3m×2.1mの楕円形状に15基のピットが巡る。

陥し穴状遺構は日向市板平遺跡（4基）の１遺跡、川南町銀座第１（4基）・中ノ迫第１（1基）・国光原遺跡（1基）の３遺跡、高鍋町北牛牧第５（1基）・唐木戸第１（10基）・唐木戸第２遺跡（2基）の３遺跡、音明寺第１（2基）・東畦原第１（1基）・上新開（1基）・尾小原遺跡（9基）など９遺跡、佐土原町下屋敷遺跡（2基）の１遺跡、清武町上ノ原第１（1基）・杉木原遺跡（1基）の２遺跡など小河川に降りる谷部付近で検出され、旧石器時代末のものもある（『西畦原第２遺跡（二次・三次）』2005）。尾立第２遺跡では谷地形の傾斜に沿うように等間隔で26基の土坑が分布しており、杭痕跡はないが分布状況から「けもの道」に配置された陥し穴状遺構の可能性がある。赤石・天神本遺跡では楕円形プランが長方形プランに切られており、床面に2個の杭痕跡を有し、草創期～早期に比定されている。

ハイヒール土坑と呼ばれる根菜類の採取痕跡の可能性がある土坑群は俵石第１・前ノ田村上第２・牧内第１遺跡などで意識的に調査されている。

早期の土器としては尖底土器（音明寺第１遺跡）、貝殻文円筒土器（権現原第１・老瀬坂上第３・中ノ迫第１遺跡）、押型文土器（白ケ野第２・３遺跡）、平栫・塞ノ神式土器（白ケ野第２・３遺跡）など南九州の貝殻文土器と全国的に普遍的な押型文土器を中心に出土している。木脇遺跡（国富町）の貝殻文円筒土器付着物は9,505±55年BPと9,430±55年BPの年代を得られている（遠部2008）。

平山下原遺跡ではナデ調整の器壁が１㎝以下の薄手の尖底無文土器が出土しており、土器の混和剤として繊維を利用している。県内では39遺跡知られているが、特に尾立第２・朝草原・尾花Ａ遺跡など都農町から川南町の遺跡に多く、二日市洞穴第４文化層から第５文化層、陽弓式の段階である。

尾花Ａ遺跡では土坑の中に早期中葉の貝殻条痕文深鉢形土器の口縁部を下にして置いた土器埋設遺構（SC210）が検出され、土器内部の土を水洗選別したところユリ科植物の鱗茎と炭化物が検出され、炭化物は8,150±40年BPである。土器埋設遺構は非日常的な場面での調理が想定されており、当遺跡では同タイプのものが出土していないことからも首肯される。なお早期の土器埋設遺構としては県内最北であり、逆位の事例としては伊勢ケ谷第１遺跡（都城市2007）に次いで２例目である。

向原中尾第２遺跡（東郷町）は手向山式土器が主体で集石遺構が17基検出され、ホルンフェルス製打製石斧が２点並んで出土し、掘り込みもあることから石斧埋納遺構である。埋納遺構の事例としては土坑に尾鈴山溶結凝灰岩製磨石を３点並べた白ケ野第２・３遺跡、ホルンフェルス製打製石斧が７点まとまって出土した老瀬坂上第３遺跡などがある。

粗製剥片石器は、川南町藏座村遺跡（県2002）で「蛤形剥片石器」と提唱され、向原中尾第２遺跡（東郷町）・内野々遺跡（都農町）でも出土しており、石材の主体は藏座村遺跡・下那珂遺跡が砂岩・ホルンフェルス製であるの対して、内野々遺跡は尾鈴山溶結凝灰岩・砂岩である。

**前期～中期**

アカホヤ降灰後の前期・中期の遺跡は県内では非常に少なくなる時期で、都農～西都間でも同様に前期は11遺跡・中期８遺跡と激減するが、中期の集落跡で

ある下耳切第３遺跡（高鍋町）は特筆される。

前期の西唐津式土器は野首第１・老瀬坂上第３遺跡（高鍋町）、長薗原遺跡（佐土原町）、白ケ野第２・３遺跡（宮崎市・清武町）の４遺跡、曽畑式土器（古段階）は力ラ石の元遺跡（延岡市）、尾花Ａ遺跡（川南町）、崩戸・野首第１・老瀬坂上第３遺跡（高鍋町）、上ノ原第１・白ケ野第２・３遺跡（宮崎市・清武町）、権現原第１遺跡（清武町）など８遺跡、曽畑式土器（新段階）は内野々第４遺跡（都農町）、尾花Ａ遺跡、崩戸・野首第１遺跡など５遺跡、轟Ｃ・Ｄ式土器は野首第１・老瀬坂上第３遺跡、上ノ原第１遺跡など３遺跡で出土している（桑畑2013）が、竪穴建物跡等の遺構は検出されていない。なお滑石が混入している土器は尾花Ａ・老瀬坂上第３遺跡のみである。県内では西唐津式土器が15遺跡、曽畑式土器（古段階）が59遺跡、曽畑式土器（新段階）が34遺跡、轟Ｃ・Ｄ式土器が15遺跡で出土し、曽畑式土器（古段階）の段階に遺跡の増加が見られており、東九州道の遺跡も対応している。

下耳切第３遺跡は竪穴建物跡９軒・平地式建物跡32軒・土坑143基で構成された集落跡で、瀬戸内系土器である船元Ⅱ・Ⅲ式及び春日式北手牧段階の時期である。遺構は谷に向かって弧状に分布し、竪穴建物跡・平地式建物跡は東群と西群に二分される。竪穴建物跡は円形プランで、床面の面積は８～14㎡と23～29㎡に分かれる。ピットがある一定の間隔で円形や楕円形に巡る平地式建物跡は９～14㎡で、小型の竪穴建物跡に相当する。SA22・82・83は３軒の切り合いで、SA22は直径約６ｍ、SA82は直径約5.8ｍ、SA83は直径約4.9ｍと二度建て替えており、面積も最大規模であるので、当集落の中心的な建物である。土坑のうちSC42・43からは多量の炭化したドングリ（イチイガシ）が出土しており、貯蔵穴の可能性がある。イチイガシの３点は4,430～4,380±40年BPである。土器に付着した煤の３点は4,630～4,370±50年BPである。石鏃６点に対して石錘が326点と卓越しており、重量は10～90ｇが多く、中心は10～50ｇ前後である。一方、土器片錘は18点出土しており、伝播論を再考する上で重要である。

**後期～晩期**

後期になると県内では遺跡の数が増加し、都農～西都間でも後期が11遺跡、晩期12遺跡である。

野首第２遺跡（高鍋町）では後期後葉の竪穴建物跡46軒が調査され、多数の土器・石器と共にヒスイ製玉や石刀・石棒などの「第二の道具」が出土することから拠点的な集落と考えられる。丸尾式段階（第１期）から黒川式段階（第５期）までの５時期に分かれ、中心は三万田式～鳥井原式段階（第３期）である。竪穴建物跡の規模は約３×３ｍ、床面積約９㎡程度の小規模なものが多く、円形プランで、壁面の立ち上がりが皿状になるものが多い。約５×５ｍ以上、床面積約25㎡以上の中・大型が一定数存在する。当遺跡ではアカホヤ火山灰の堆積がほとんど見られないこと、竪穴建物跡の埋土にも認められないことから、この「不整合堆積」は後期後葉前後の集落造営の時期に行われた大規模な土木工事の可能性が高い。また丸玉・小玉・鰹節形垂飾などのヒスイ製玉は新潟県糸魚川・青海産と推定され、北陸地方からブランド品（希少性・硬さ・緑色の威信財）として各地域の拠点的な集落を経由しながら搬入されたと推定される。宮崎県域はヒスイ製丸玉の存在やヒスイ製玉の多さから九州では最も敏感に反映していると評価されている（大坪2003）。また底面を持つ三角形おにぎり状の形をした石冠状石製品が出土しており、宮ノ東遺跡（西都市）でも出土した。打欠石錘は4,612点も出土し、40～90ｇにピークがある。なお竪穴建物跡は内野々遺跡（都農町）で４軒、赤石・天神本遺跡（川南町）で２軒調査された。

内野々遺跡では後期前半～中葉（丸尾式主体）の竪穴建物跡が４軒調査され、土器表面の圧痕をレプリカ法で転写し、走査型電子顕微鏡で観察した結果、ダイズ属・アズキ亜属などのマメ科のヘソの他にコクゾウムシが確認された。マメ類の栽培を考える上で注目されると共に、打製石斧も４点出土している。SA4出土のイチイガシは3,484±23年BPである。

石錘は小丸川流域の野首第２遺跡4,612点・野首第１遺跡278点・南中原第１遺跡232点、一ツ瀬川流域の宮ノ東遺跡1,866点、市納上第４遺跡185点出土しており、40～70ｇにピークがある。市納上第２遺跡では打欠96点に対して有溝が30点である。

晩期になると朝鮮半島の系譜が考えられる孔列文土器が岡遺跡（日向市）・尾花Ａ遺跡（川南町）・上ノ原遺跡（宮崎市）などで出土している。孔列文の孔は完全に貫通していないもの（３類）が多く、朝鮮半島から北部九州そして南九州というルート（片岡1998）と、朝鮮半島から直接南九州というルートが想定されている（千2008）。

なお東九州道の各時期の放射性炭素年代の結果は縄文時代の時期区分に対して与えられた放射性炭素年代の範囲内である（辻2013）。

**③弥生時代**

**早期**

弥生時代における突帯文土器段階の石庖丁として擦切石庖丁が五ヶ瀬川下流域の古川（延岡市）、耳川中流域の峰の前（西郷村）で表採されていた（下條1977）が、清武川下流域の宮崎市前原北遺跡（県1988）、大淀川上流域の黒土1994・肱穴2000・平田遺跡2008（都城市）などの発掘調査で出土し、肱穴遺跡では松菊里型住居の柱穴から出土している。大淀川中流域の木脇遺跡（国富町）のものは擦切途中で終了しており、抉りを有する。坂元Ａ遺跡（都城市2001）で不整形の小区画水田が調査されているが、東九州道では台地上の調査が多いたため弥生時代の水田は検出されなかった。

**前期**

県内で最北の花弁状住居跡（北浦町1997）が調査された中野内遺跡で4.6m×3.3mの方形プランの竪穴建物跡が１軒検出され、下城式の甕や壺から前期後半～中期初頭の時期に比定される。磨製石鏃の未製品・剥片等の出土から磨製石鏃の製作が行われていた。またほ場整備調査の遺物中に大分方面より搬入された蛇紋岩製扁平片刃石斧がある。土器は内面の指押さえ痕や外面のハケ目調整の点で豊前・豊後地域のものに酷似している。

尾花Ａ遺跡（川南町）では前期から中期前半の竪穴建物跡は検出されていないが、抉り入り片刃石斧が２点、太型蛤刃石斧も２点出土している。

板平遺跡（日向市）での大分県沿岸部を中心とする下城式土器と北部九州地域を代表とする突帯文土器の系譜の「亀ノ甲」タイプという二系統の甕の共存は、前期末～中期前半の土器の一様相として中野内遺跡でも確認される。

**中期**

中期後半～後期初頭に集落形成が始まる尾花Ａ遺跡（川南町）では23軒のうち３軒は「花弁状住居」である。この遺構は円形プランや方形プランを基調として内側の複数の突出壁によって間仕切りされた空間を複数持ち、上から見ると花びらの形をした竪穴建物跡で、宮崎・鹿児島県を中心として熊本・佐賀・福岡県、愛媛・徳島県などにも分布している。なお最近では西寒水四本柳遺跡（佐賀県みやき町2009）では中期前葉（須玖Ｉ式古段階）の径7.2mの円形プランを基調とした典型的な花弁状住居（SH2012）が松菊里型住居と共存して検出されており、南九州の花弁状住居より古い時期であることから朝鮮半島からの系譜も想定されている（中間1987）。しかし、宮崎県南部・鹿児島県では集落の主体を花弁状住居が占めているのに対して、他地域では単独で存在する。

中期後半～後期前半に集落形成が始まる宮ノ東遺跡（西都市）では竪穴建物跡が38軒調査され、在地の中溝式甕と共に瀬戸内系の凹線文を有する壺や脚部に矢羽根透かしを有する高坏、太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧などの大陸系磨製石斧も出土している。これらの瀬戸内系土器の多くは愛媛県松山市を中心とした伊予地域の搬入品で、備讃地域が続き、特に壷・高坏などが多く県内で見つかっている（梅木2004）。東九州道では搬入品は西畦原第１遺跡の凹線文壺・宮ノ東遺跡の伊予系高坏・町屋敷遺跡の讃岐系壺などに限られており、多くは模倣・折衷である（河野2011）。舟で瀬戸内海～日向灘という海のルートで運ばれたと考えられる。なお瀬戸内系土器は花弁状住居からよく出土する。

塚原遺跡（国富町）Ｃ区で中期～古墳時代前期の土坑５基・土坑墓２基が検出された。３基の「スロープ付土坑」は段掘りになっていて、スロープ部分は柱を引き込むための施設であり、土坑の中央に木柱を立てると考えると、ムラの入り口や境界に立てて集落の境を守る役割を果たす「大柱遺構」の可能性がある（東2009）。そのうちの５号土坑からは「鳥」や「家」などを表現した軽石製品が出土しており、

「鳥」形軽石製品は弥生時代の鳥形木製品に、「家」形軽石製品は縄文時代から系譜の追える陰陽石に類するものと考えられている。これらは県内初の事例である。

**後期**

後期後半になると小丸川以北の台地上に集落が増え、都農町向原中尾第２（８軒中５軒焼失）・木戸平第２遺跡（５軒中４軒）、川南町八幡第２（９軒中５軒）・赤坂（23軒中８軒）・湯牟田（21軒中11軒）・尾花Ａ遺跡（246軒中111軒）などで多数の「焼失住居」が検出されている。焼失住居とは竪穴建物が火事になったために柱や屋根などの建築部材が炭化して良好に残るもので、焼土なども検出される。焼失の原因としては『魏志倭人伝』の「倭国大乱」などの戦乱、失火、「忌避的放火」、「焼却廃棄」、アイヌ民族の「家焼き・家送り風習」等が考えられている。湯牟田遺跡では焼失住居の床面からは完形の土器ではなく小片が多数出土している状況からすると戦乱・失火による「焼けた家」ではなく、集落間の移動などの何らかの理由による片付けとして「住居の焼却廃棄」した「焼いた家」と考えられる。また炭化材の上の焼土の存在から「草葺き」ではなく「土葺き」という「土屋根」が推定される。焼失住居の炭化材を自然科学分析することによって、上屋構造の復元、放射性炭素年代測定法による絶対年代、樹種同定による周辺環境の復元・自然環境の利用状況などの多くの情報が得られた。

尾花Ａ遺跡では中期末～古墳時代前期の246軒中111軒45.1%が焼失住居である。Ⅰ期（中期末～後期初頭　23軒中１軒4.3%）・空白期・Ⅱ期（後期後葉　８軒中５軒　62.5%）・Ⅲ期（庄内１式　10軒中６軒60%）・Ⅳ期（庄内２式　22軒中12軒　54.5%）・Ⅴ期（布留１～２式　71軒中37軒　52.1%）・Ⅵ期（布留２～３式　51軒中28軒　54.9%）・Ⅶ期（布留４式以降　22軒中８軒36.4%）と変遷し、後期前葉の空白期を挟んで集落の最盛期は弥生時代末～古墳時代前期（Ⅲ～Ⅵ期）であるが、その前段階である後期後葉（Ⅱ期）から半数以上が焼失し、最盛期の古墳時代前期も同様である。焼失住居の炭化材はクリ・コナラなどの広葉樹、シイ・アカガシなどの照葉樹林が多く、試料総数204点のうちブナ科が122点60%と多い。ブナ科はクリやコナラ・シイなどのドングリがとれる木である。ほとんどが常緑の中高木で、比較的大きな木材がとれ、遺跡周辺で採取可能な樹種である。

中期後半～古墳時代初頭の集落跡である向原第１遺跡（新富町）では方形プランの竪穴建物６軒・土坑10基が調査され、うち２軒が焼失住居である。SA1は方形プランの焼失住居で、鉄鏃・三角形鉄片・棒状鉄片が出土していることから鉄器を製作した可能性がある。フローテーション法の結果、イネ・ドングリの種子等が出土している。イネがSA1から423点、SA3から119点も採取されたが、石庖丁は出土していない。SA3の炭化米は2,060±40年BP、SA1の炭化材は1,960±40年BPで、集落変遷はSA2・3・4（中期後半）→SA5→SA1（後期末）→SA6（古墳初頭）である。

後期後半～終末期の集落跡である赤坂遺跡では竪穴建物23軒・周溝状遺構３基・周溝墓１基が調査され、２軒が方形基調の花弁状住居である。SA12は主柱穴が６本柱の花弁状住居で、住居中央から放射状に延びた垂木の上の茅状の炭化物はタケ亜科であった。SA9・10・11からは東部瀬戸内系壺が出土している。SA15出土の瓢形壺の類例は下郡遺跡（大分市2006　120次SD1200　後期中葉主体・一部後葉）の瓢形土器316があるが、筒状の注口がある。SA17から出土した磨石に付着した赤色顔料を蛍光Ｘ線分析した結果、ベンガラ（酸化第二鉄）と判明した。石庖丁は16点で、９軒の建物跡から出土し、１点以外はすべて抉り入り石庖丁であり、石材はすべてホルンフェルスである。SA6出土の壺の肩部の圧痕は小畑弘己氏による圧痕レプリカ法でイネと同定された。1,950±40年BP（SA22）、1,940±40年BP（SM1）、1,920±40年BP（SA4・11・12・17）、1,900±40年BP（SA1・3）であり、松永編年（松永2001）の第５期を中心に第３～６期である。また14.1m×13.1mの円形周溝墓が１基検出され、内部主体は単一埋葬の木棺が想定され、東部瀬戸内系の長頸壷と共に鉄鏃が１点出土している。なお周溝墓は後期中頃から終末期に延岡市山田遺跡（県2007）、東平下遺跡（川南町1982・県1986）、川床遺跡（新富町1986）、生目古墳群（宮崎市）など宮崎平野部に分布しており、主体部が単体（単一埋葬）

で、方形周溝墓より円形周溝墓が多数を占めることから東部瀬戸内地域、特に播磨地域の影響が考えられる。主体部からは素環頭太刀・剣・鉄鏃等が副葬されており、規模や周溝を有することから他の木棺墓・土坑墓との格差は見られるが、他地域に見られるような鏡・玉類の出土がないことから、それほど突出した階層ではない。周溝からは供献された東部瀬戸内系の壺や装飾高坏等が出土している。周溝状遺構については県内では宮崎平野部と大淀川上流域を中心として18遺跡で検出されており、中期後半から古墳時代初頭の時期であるが、主体は後期後半～末である。周溝状遺構は集落内に営まれていることから集落を構成する一要素であり、周溝の北側や東から土器が集中して出土する点、周溝内の焼土の存在から集落で行われる「祭祀」の可能性が指摘されているが、土器の器種構成は甕が半数を占める点、周溝に囲まれた空間の柱穴の存在の事例など「祭祀」とは異なる様相も示している。前ノ田村上第１遺跡で終末期の周溝状遺構の周溝からイネが出土している。

後期後葉～古墳時代初頭の集落跡である木戸平第２遺跡では竪穴建物跡５軒・土坑墓１基が調査された。張り出しを有する方形プランのSA1からは頁岩製石庖丁・鉄製穂摘み具が、SA2からは瀬戸内地域との関連がある抉り入り石斧・碧玉製管玉・鉄鏃が、方形プランを基調とする花弁状住居であるSA3からは米粒状の炭化物が内面底部付近に多数付着した甕が出土した。炭化材からSA1が1,945±20年BP、SA4が1,855±20年BPである。SD1は２段の掘り込みから木蓋土坑墓と推定され、副葬品はなかったが、装飾高坏が出土した。SA5（後期後葉）→SA1（終末期初頭）→SA2・4、SD1（終末期中～後半）→SA3（古墳初頭）と変遷が追え、集落が都農川に近接する場所に移動した時に土坑墓が集落より高い位置に造営されている。

西畦原第１遺跡（新富町）では終末期～古墳時代初頭のSA2から鉄製釣り針が出土しており、この時期のものとしては県内唯一の事例である。

森ノ上遺跡（延岡市北浦町）は方形プランの竪穴建物跡が11軒検出され、内訳は終末期が２軒、終末期～古墳時代前期が６軒、前期が３軒である。建物跡の規模は10㎡代の小型、20㎡代の中型、45㎡の大型（SA3）に分かれる。切り合いはSA5→SA3のみで、５軒は地床炉である。SA4は埋没過程の浅い窪地状の段階に胎土はややこげ茶色で器壁の薄い布留系甕などの大量の土器・石器の他、鉄製刀子・イネ・コムギ・モモなどが出土していることから、一定期間継続して用いられた廃棄場と推定されている。出土土器は松永編年の４～９期に相当する。石庖丁を欠如している。なお鹿児島国際大学中園聡氏の蛍光X線による胎土分析によれば森ノ上遺跡の縄文時代早期土器、中野内遺跡の弥生土器、森ノ上遺跡の前期土師器では共通する胎土が使用されているが、中野内遺跡の中期土師器の胎土は異なる。

町屋敷遺跡（宮崎市）Ｂ区では１号自然流路と２号自然流路の合流部で検出された１号堰跡は洪水等によって杭がすべて西から東へ倒壊している。堰跡の構造は川底に一列に杭を打ち込み、横木で押さえた後、樹皮を張り、その上に杭を敷き詰め、さらに樹皮を張っている。杭はアカガシ・クリ・クヌギ等の広葉樹を利用し、1,790±60年BPの年代値が得られ、後期後半～古墳時代前期である。なおこの遺構については「梁」のような漁撈施設や木材の「水漬け遺構」の可能性も指摘されている。またＡ区では旧河道の本流とみられる幅約9～10mの１号流路から多数の木材が出土し、木材が流れないように杭が打ち込まれた跡から木材の変形を防ぎ安定化を図る「水漬け遺構」の可能性がある。この杭列付近から出土したほぞ穴のある両開きの扉は堅硬で耐久性の強いクスノキ１本の木から一枚板の扉を削り出していることから当時の木工技術の高さがうかがえる。国内での扉は30数例ほどで非常に珍しく、出土土器から後期後半～古墳時代前期である。

稲の穂摘み具として普遍的にみられる２つの穴を有する半月形の石庖丁とは形が異なり、方形で両端に抉りを有する抉り入り石庖丁が宮崎では８割以上を占めており（長津2004）、東九州道調査でも数多く出土する。尾花Ａ遺跡では出土した石庖丁233点中の87%が抉り入り石庖丁で、石材もホルンフェルスが87%も占めている。未製品も出土していることから当地で製作していたと考えられ、県内最大の出土数である。川南町域ではホルンフェルス製が主体であるが、前

ノ田村上第１・木戸平第２遺跡はすべて頁岩、向原中尾第２遺跡は頁岩・砂岩である。一方、佐土原町下那珂遺跡（県2004）では149点出土し、83％が抉り入り石庖丁であるが、石材は頁岩が87％も占めている。瀬戸内系土器と抉り入り石庖丁は、瀬戸内地域に顕著に分布することから日向灘～瀬戸内海という海のルートを通じての瀬戸内地域との交流が指摘されている。

赤色顔料については向原中尾第２遺跡の塊と内面付着土器、木戸平第２遺跡の内面付着土器、前ノ田村上第１遺跡のベンガラ内面付着土器、赤坂遺跡のベンガラ付着磨石があり、向原中尾第２遺跡は蛍光Ｘ線分析によればヒ素成分が多いベンガラである。

**④古墳時代**

**前期**

板平遺跡（日向市）は前期の竪穴建物跡が25軒検出され、方形・長方形プランで主柱穴は２・４本柱で、地床炉である。耳川・塩見川・五ヶ瀬川流域の土器を古墳時代初頭～中期をⅠ期（庄内式土器併行期）、Ⅱ期（甕の球形胴指向や庄内式・布留式系譜の小型器種の登場と展開）、Ⅲ期（布留式系譜の高坏や小型丸底壺の盛行と衰退期）に区分した土器編年に基づき、Ａ期（Ⅱａ・ｂ期　前期前葉）が３軒、Ｂ期（Ⅱｃ期　前期後葉）が５軒、Ｃ期（Ⅲａ期　中期前葉）が２軒、Ｄ期（Ⅲｂ・ｃ期　中期中葉）が３軒、Ｅ期（Ⅲｄ期　中期後葉）が１軒、Ｆ期（後期前葉　MT15）が３軒、Ｇ期（後期後葉）が１軒と集落変遷しており、盛行期はＢ～Ｄ期である。その集落の規模は一時期に３～５軒程度で、拠点的な集落ではなく小規模な集落を想定している。SA9からは庄内系有段高坏・布留系高坏・山陰系高坏、SA7からは布留系甕・高坏が出土している。なお埋没した自然流路から出土した車輪石は、全体の1/4程度の破片であるが、県内唯一のもので、三浦俊明編年のⅡ段階に相当する（三浦2005）。車輪石は九州では７遺跡９例目（辻田2009）で、同タイプである向野田古墳（熊本県　前方後円墳集成編年４期）と共に分布の南限になる。車輪石の評価については、①板平遺跡付近の前期古墳の崩壊、②板平遺跡の盛行時期（前期後葉～中期中葉）は塩見川流域の初現的地域首長墓である富高２号墳（全長83m前方後円墳　前方後円墳集成４期後半～５期）の時期とほぼ重なるため、塩見川流域の勢力伸長過程の中で入手され、板平遺跡にも首長層との関係性を示すために分与（分割）が想定され、向野田古墳でも指摘されているように車輪石はヤマト王権から入手した後、前期末まで伝世され集落に廃棄された可能性がある。

塚原遺跡（国富町）Ｃ区では径15mの円墳が調査され、内部主体の２mの木棺には鉄剣・刀子・鉄鏃・ガラス玉が副葬され、４世紀前半に比定される。

迫内遺跡（宮崎市）Ｄ区の丘陵部の尾根上の古墳３基と斜面部の横穴墓２基が調査され、古墳３基は丘陵の頂上部に周溝を入れ、地山整形で造営している。３号墳は９ｍ×８ｍの方墳で、木棺直葬の内部主体から鉄剣が出土し、木棺直上の土師器高坏・周溝の土師器壺から４世紀後半に比定される。２号墳と３号墳が共有する溝に土師器壺は穴を掘って埋置されており、うち３個は焼成後穿孔である。２号墳（径９m円墳）は５世紀前半に、１号墳（残存長径15m）は６世紀後半に、２号横穴墓は６世紀後半に造営され、７世紀初頭に追葬されている。以上のように前期から終末期への墓制の変遷と葬送儀礼が具体的に明らかになった。

前期の集落跡としては尾花Ａ遺跡（川南町）で竪穴建物跡が120軒調査され、焼失住居が50軒も検出されているのは県内最大規模である。最盛期のＶ期（布留１～２式併行期　71軒）の次のⅥ期（布留２～３式併行期　51軒）に調査区中央南側に断面Ｖ字形の幅約0.5～1.0m・深さ約0.4mの溝で囲まれた長辺約29m、短辺約24mの長方形区画が検出され、区画内の同時期の竪穴建物は北東隅の１軒のみである。阿波・讃岐系壺や布留系甕・有段鉢・小型丸底壺・山陰系甕など外来系土器の数量が多い。骨鏃形鉄鏃は国内で３例目であり、朝鮮半島産と考えられる。銅鏃の出土例は県内唯一である。一次拡張区SA609から出土した舟形土製品は舟首に波除け用の竪板を持つ準構造船を表現しており、土製品は全国的にも30例しかなく、特に瀬戸内海沿岸に16例も集中していることから海を通じての交通手段を具体的に示すものである。谷を挟んで西側に川南古墳群が立地することからその古墳群を造営した拠点的集落と考えられる。

尾花Ａ遺跡の北に位置する西ノ別府遺跡（川南町）の前期（布留１・２式）の竪穴建物跡から出土した完鏡の倣製重圏文鏡は愛媛県では６面も出土しており（国立歴史民俗博物館1994）、瀬戸内地域との関連もうかがえる。なお弥生時代後期の破鏡は五ヶ瀬川上流域の高千穂町神殿遺跡SA10（県1999）、一ツ瀬川中流域の新富町銀代ケ迫遺跡SA９（新富町1982）・松本原遺跡（西都市）、石崎川下流域の佐土原町下那珂遺跡SA96（県2004）などの後期後半～終末期の竪穴建物跡から出土しており、墳墓からは出土していない。下那珂遺跡の前漢鏡（虺龍文鏡）以外はすべて後漢鏡で、これらの破鏡を有する集落はその地域において拠点的な集落である。なお大淀川下流域の生目古墳群（宮崎市1996）では魚陰洞遺跡と同范の小型倣製鏡の完鏡が表採されている。

湯牟田遺跡（川南町）の前期のSA3のベッド状遺構上の炭化したアカガシ製一木鋤の出土状況は類例が少ないため、そのまま切り取り、保存処理した上で西都原考古博物館に展示している。SA7出土の朝鮮半島製板状鉄斧は「伝世品」の可能性が指摘されている。後期後葉～終末期の９軒と古墳時代初頭～前期の７軒の計16軒のうち11軒が焼失し、炭化材上部の焼土は重鉱物観察からアカホヤ等の竪穴の掘削土と考えられ、繊維質植物遺体、「断面船底状の垂木材」など土屋根構造の傍証になるが、断定までには至らなかった。

町屋敷遺跡Ｂ区（宮崎市）では畦畔の存在から水田跡が13枚確認され、方形区画で、約5～6㎡の小区画水田である。水口も７箇所検出された。

**中期**

家田古墳群（延岡市北川町）は北川に臨む丘陵先端に位置し、迫内古墳群と同様に溝を共有して地山整形する４基の小型古墳が調査され、一辺７ｍ程度の方墳や径4.5m程度の不整形の円墳である。１号墳の主体部は岩盤を掘り込んだ長軸4.6m、幅2m、深さ0.6mの墓坑で、主軸は東西方向で、鉄剣４・鉄鏃21が副葬されていた。鉄鏃の組成が三角形短頸鏃と柳葉鏃が大半を占めることから中期前半に比定される。内部主体は２～４号墳もすべて１号墳と同じで、２号墳には鉄剣１・鉄鏃１が、３号墳には刀子１が副葬されていた。区画溝などから出土した土師器から４基とも中期前半の時期に比定される。

中野内遺跡（延岡市北浦町）で竪穴建物跡６軒（＋12軒ほ場整備調査）が調査され、SA3からは須恵器無蓋高坏・坏蓋、鉄鋳が付着する台石などが出土し、TK208の無蓋高坏は胎土分析の結果、陶邑産の可能性が高い。なおほ場整備調査のSA11の高坏転用の鞴羽口から小鍛冶が指摘されている。集落跡の端で検出されたSC4については塚原遺跡Ｃ区のような柱を引き込むためのスロープ部分や鳥形製品等はないが、①柱を固定する際の段の設置、②直径約90㎝、検出面からの深さ110㎝という土坑の規模と直径約40㎝の柱材、③柱の使用後、柱の上部を切って礫の設置、④集落の縁辺に位置し、１本柱という４点から集落の入り口・境界を守る「大柱遺構」と評価されている。また中野内・森ノ上遺跡出土土器編年によれば弥生時代終末期～古墳時代初頭（４期）の甕には大分県南域の倒卵形甕の影響があり、一部にタタキがみられる。前期前半（５～６期）は大分地域に近い様相が強いが、前期後半（６～７期）は宮崎北部の様相と共通点が多くなる。中期（７～８期）には甕の肩部が大きく張る特徴は中野内遺跡独自である。後期（９期）は甕の長胴化と粘土紐の繋ぎ目の調整が粗くなり、粘土紐痕を残す。弥生時代前期～古墳時代中期の北浦地域においては中野内遺跡（弥生前期後葉～後期初頭6軒）→空白期→森ノ上遺跡（弥生終末期～古墳前期11軒）→中野内遺跡（中期18軒）という集落の移動の一要因として中野内遺跡での土石流が考えられる。

板平遺跡（日向市）の竪穴建物跡7軒のうち中期中葉のSA1から鍛冶炉が検出され、鉄滓・高坏を転用した鞴の羽口・金床石が出土したことから、集落における鍛冶工房的な建物跡と推定される。集落縁辺部の谷地形の谷風を利用できる位置に立地している。金属分析の結果、椀形滓の始発原料は砂鉄で鍛錬工程に伴う鍛冶滓と判明したが、鉄製品や鍛造鉄片は出土しておらず、鉄器生産が行われたかについては確認できなかった。県内では都城市平峰遺跡（県2012）など調査事例は少ないが、高坏を転用した鞴の羽口（Ｖ式羽口）は畿内地方にほとんど見られず、九州や関東地方に多いという指摘（野島2009）や、鍛冶具

が畿内では鉄器を使用するのに対して、石器を使用するのは弥生時代的鉄器生産形態と解釈されている（角南2000）。なおSA1は焼失建物である。

野首第２遺跡（高鍋町）では竪穴建物跡が34軒も調査され、５世紀後半に盛行している。竪穴建物跡は方形・長方形プランで、一辺２～３ｍの小型住居と一辺５～６ｍの大型住居に分かれる。火処は竈・甑がなく、竈出現前の段階である。

塚原遺跡（国富町）Ｂ区では斜めに打ち込まれた立杭と横木で構成された合掌型の堰跡が検出され、出土土器から中期～古代の時期である。先端を尖らせた杭は樹種同定ではヒノキやツブラジイである。

木脇遺跡（国富町）のSA17出土の須恵器壺と２号溝状遺構出土の壺と包含層出土の小型丸底壺、塚原遺跡Ｄ地区包含層出土の把手付椀は市場南組窯（愛媛県伊予市）系須恵器と判明した（三吉2004）。

**後期**

宮ノ東遺跡（西都市）では古墳時代の竪穴建物跡が418軒も調査され、中期の５世紀代が19軒、後期の６世紀代が108軒、終末期の７世紀代が260軒で、最盛期は終末期である。火処については５世紀後半に出現し、６世紀後半～７世紀前半に盛行する土器埋設炉は当遺跡では８世紀後半まで存続する。また６世紀後半に本格的に導入される竈は土器埋設炉と同じ建物跡で共用しており、６世紀前葉の竈は県内最古例である。須恵器に生焼けに近いものが含まれることから須恵器工人集団との関連も考えられる。

**終末期**

下耳切第３遺跡（高鍋町）では古墳時代終末期から古代初めにかけて古墳２基・地下式横穴墓８基という「墓」と竪穴建物跡75軒という「住」がほぼ近接して営まれている集落跡として注目される。牛牧１号墳は二重周溝を有する直径約20ｍの円墳が調査され、内部主体は木棺４基で、耳環・勾玉の位置から須恵器を枕にして５体想定される。木棺からは須恵器（TK209新段階～TK217新段階）・耳環・勾玉・刀子などが出土した。第１～４主体部の墓坑の柱穴について「築造から埋葬までの儀礼における結界」（田中1999）と評価されている。この円墳の周溝に竪坑を掘り、玄室を墳丘外に向ける地下式横穴墓が６基も寄生する「地下式横穴墓寄生型円墳」（筌瀬2003）で、県内では最北の地下式横穴墓である。また３号地下式横穴墓では長大な竪坑内での初葬時での須恵器・土師器の一括配置と追葬時での須恵器大甕の破砕行為という竪坑祭祀が明らかになった。３・４号地下式横穴墓の竪坑内の小柱穴については木柱の痕跡として「霊魂を呼び寄せるための依代の役割を果たすもの」（土生田1998）と「古墳の所在明らかにするため」（石川1979）のものとして評価されている。この古墳の外周溝の外で馬具の轡が出土した土抗が２基見つかり、そのうちの１基は馬歯が付着した轡であることから馬埋葬土坑と考えられる。この馬埋葬土坑は県内では10遺跡28例が知られ、Ⅰ期（５世紀後半～６世紀初頭）は大淀川下流域と川内川上流域に、Ⅱ期（６世紀前半～中頃）には一ツ瀬川中流域に拡大し、Ⅲ期（６世紀後半～７世紀前半）には小丸川下流域に更に拡大し、地下式横穴墓の分布圏と重なっている（甲斐2009）。なお『日本書紀』の推古20（612）年の「馬ならば日向の駒」、『延喜式』兵部省諸国牧条に野波野・堤野・都濃野の馬牧が記載されており、当地域における「馬匹生産」の様相を示している。

高鍋町野首第１遺跡（県2004）では７世紀前半の横穴式石室が新たに２基確認され、１号墳は直径７ｍの円墳で、石室内に金銅装馬具・大刀・須恵器（TK209新段階～TK217古段階）が副葬されていることから小地域首長墓と想定される。

**⑤古代（奈良・平安時代）**

**集落跡**

７～８世紀代の集落跡としては下耳切第３遺跡（高鍋町）・宮ノ東遺跡（西都市）があり、須恵器円面硯（７世紀末前後）から識字層あるいは律令行政組織の末端組織である「里長」の存在が推定される。なお円面硯は県内では５例のみである。

７～８世紀初頭の集落跡である下耳切第３遺跡ではA期（TK209段階　６世紀末～７世紀初頭）は円墳２基・地下式横穴墓２基・馬埋葬土坑１基の造営に始まり、B期（TK217古段階　７世紀第１四半期）は古墳の追葬・地下式横穴墓３基・竪穴建物７軒・掘立柱建物４棟、C期（TK217新段階　７世紀第２四半期）は地下式横穴墓の追葬・22軒・16棟、D期（TK46段階　７

世紀第３四半期）は27軒・11棟、E期（TK48段階　７世紀第４四半期）は11軒・11棟、F期（TK21段階　７世紀末～８世紀初頭）は８軒・20棟、その後は廃絶する。C・D・E・F期は遺構の切り合いと主軸方向で更に二期に分かれる。６世紀末～７世紀初頭の古墳の造営に始まり、７世紀第１四半期には古墳と谷の間に集落が形成され、ピークは７世紀第３四半期である。火処については地床炉→土器埋設炉（７世紀第１四半期～８世紀初頭）→竈（７世紀後半～８世紀初頭）と変遷するが、地床炉のみ、竈のみがそれぞれ約１割に対して、土器埋設炉と竈を併用する建物跡が約半数の40軒である。県内では５世紀後半に出現する土器埋設炉と６世紀後半（TK43段階）に出現する竈の併用については炊飯・調理・煮沸などの炊事の機能は竈に特化し、炊事以外の甕の再加熱・暖房等の「囲炉裏」的役割が想定されている（今塩屋2004）。SA74からは須恵器円面硯が出土しているが、転用硯・墨書土器は出土していない。しかし、８世紀後半には谷を隔てた北側丘陵頂部の老瀬坂上第３遺跡に壮年男性の火葬骨を納めた須恵器蔵骨器が古代墓として造営され、集落と隔絶した場所に墓地が形成される。

７～10世紀の集落跡である宮ノ東遺跡では竪穴建物跡が５世紀は19軒、６世紀108軒、７世紀260軒、８世紀は118軒、９～10世紀は91軒、10世紀は９軒と変遷し、７世紀にピークがある。一方、掘立柱建物は古代26棟、古代以降10棟と少ない。遺物では８世紀前半のループ状の暗文を有する畿内系土師器、８世紀後半の企救型甕・豊後型甕などが出土しており、畿内や豊前・豊後地域との交流がうかがえる。８～９世紀の須恵器円面硯・転用硯、８世紀後半の「也」とヘラ描きされた須恵器高台付埦などの出土から識字層の存在がうかがえ、石帯（丸鞆）も出土していることから、一ツ瀬川に臨む古代の重要な公的機関の可能性がある。なお９世紀初頭に地崩れが起きているが、その後に集落を復興している。

柳迫遺跡（宮崎市）・中別府遺跡（宮崎市）では墨書土器が、塚原遺跡（国富町）A区ではシャシャンボ製舟形木製品が出土している。

**水田・畠跡**

内宮田遺跡（宮崎市）では水田跡が検出され、区画は不定形で、面積は100㎡以下と小規模であり、土師器などから古代前半に比定される。

平田迫遺跡（佐土原町）では上段部である西側で畝30条、下段部である東側で10条が検出された。畝幅は約30㎝と比較的狭く、プラント・オパール分析の結果、少量ながらイネが検出され、陸稲の可能性がある。またアワも検出されている。なお放射性炭素年代測定の結果、礫層直下の褐色土は９世紀後半の年代が得られたので、古代の畠跡と推定される。なお遺物としては須恵器円面硯（８～９世紀代）・石帯（巡方）・縄目叩き瓦・布痕土器などがある。

町屋敷遺跡（宮崎市）D区で高原スコリア（1235年降灰）直下で水田跡が７枚検出され、区画は不定形で、面積は約1.8～3.7㎡と小区画水田である。A区の７号自然流路の３号堰跡は杭がきれいに加工され、杭も太くなり、水留めの樹皮の張り方も丁寧で耐久性を高める技術が施されている点などから灌漑施設建築の進歩が見られ、すべての杭は堅硬で強靱、弾力性も高いアカガシが選定されている。

**⑥中世・近世**

**集落跡**

古代官道沿いに立地する銀座第１・前ノ田村上第１遺跡（川南町）では中世の方形の区画溝で囲まれた屋敷跡が検出された。銀座第１遺跡は一辺が54mの区画溝があることから、半町を単位とした宅地が想定されるのに対して、前ノ田村上第１遺跡では一辺が約62m、39mの区画溝があり、１町ないし半町に近い単位である。銀座第１遺跡は溝内から中国産青磁・白磁・備前焼が主体として出土しており、15世紀代を中心とする年代が想定される。銀座第１遺跡出土の体部内外面に成形時の調整痕を明瞭に残す「ロクロ目土師器」坏は、豊後大友府内館跡の坏と器形・胎土の特徴は極めて似ているが、糸切りでなく、ヘラ切りで、15世紀末～16世紀中葉に比定される。塩見城跡（日向市）でも出土している。

板平遺跡（日向市）では掘立柱建物跡24棟（中世14棟、近世10棟）検出され、美々津・細島港に近いためか越州窯・龍泉窯・景徳鎮窯産の輸入陶磁器や青磁の香炉・水注、古瀬戸の瓶子などが出土している。

海舞寺遺跡（延岡市北浦町）では掘立柱建物跡12

棟が検出され、輸入青磁碗・石鍋・周防型羽釜などから13世紀後半～14世紀後半である。

**城跡**

家田城跡（延岡市北川町）は北川左岸の北方の山地から派生した尾根の一つを幅約８ｍの堀切で断ち割り独立させて、標高約81ｍの最高所に主郭を、南北方向にそれぞれ段状の曲輪群を、北東・南西方向にも曲輪群を配置している。特に主郭から南西方向に伸びる細い尾根筋には数箇所の堀切によって、横幅が約10ｍの小規模な曲輪を７つ連鎖状に配置している。今回、７つの曲輪のうち丘陵先端から４つの曲輪（Ａ～Ｄ）が調査された。曲輪Ａは３号墳・４号墳の墳丘を削って曲輪１を、最高所に位置するため櫓台と推定されていた曲輪Ｂは２号墳の墳丘の一部を削って曲輪２を作っていたが、櫓台関係の遺構は検出されなかった。曲輪Ｃは南北に細長い曲輪３で、北半分は１号墳の墳丘の一部を削り、南半分は盛土を行って、曲輪Ｄである曲輪４との比高を約６ｍ以上確保して、「切岸」的構造をしている。曲輪３と曲輪４の間の斜面中腹には幅1.2ｍの犬走り状遺構が巡る。なお構造的には県北部山間地に数多く散見できる丘陵立地型の小規模城館に分類され、縣土持氏の築城が想定されている川坂城を本城として、防御性に欠けるが、交通の要衝に睨みをきかせる見張りの城として東に配された支城の可能性が指摘されている（堀田2005）。

塩見城跡（日向市）は主郭を除く曲輪や谷部をほぼ全面的に調査した結果、曲輪13・掘立柱建物跡194棟・柵列99条などが検出された。西側曲輪群（Ａ～Ｃ群）では薬研掘りの堀切や裾を巡る横堀が、南側曲輪群（Ｄ～Ｍ群）では南北に貫く道路状遺構が１条検出され、少なくとも３回改修されていた。水の手曲輪では谷の入り口を塞ぐように造られた石積遺構や井戸・堀・暗渠が検出された。城郭の改変が３時期以上行われており、13世紀後半～17世紀初頭における塩見城の全容が明らかになった。遺構・遺物から８つの画期に分けられ、Ⅰ期（11世紀後葉～12世紀末）は中世城館成立の前段階の時期、Ⅲ期（14世紀後半～15世紀前半）は西側及び南側曲輪群で掘立柱建物群が設置される土持氏支配の時期、Ⅳ期（15世紀中頃～末）は塩見城の整備拡充される伊東氏支配の時期、Ⅴ期（16世紀初頭～前葉）は水の手曲輪における石積遺構や木杭列の構築など防禦性の向上の時期、Ⅵ期（16世紀中葉～17世紀初め）は水の手曲輪として井戸等を設置する縄張りの最終段階の時期、Ⅶ期（17世紀初め）は道路状遺構の封鎖などの痕跡から髙橋氏による破城の時期である。出土遺物からはⅢ～Ⅵ期が多く、特にⅣ～Ⅴ期が多い。調査の結果、15世紀後半以降の塩見城跡は、主郭を円環状に巡る堀切・横堀・竪堀と帯曲輪と幅狭い平坦面で主郭を防御する内郭と、屋敷地や中世寺院や工房等で構成される外郭が結合した二元構造であった。この縄張りは、家田城跡でみられた痩せ尾根上に鎖状に曲輪群が有機的に結合する「丘陵立地型」（北郷1999）と独立・並列的な曲輪構造を特徴とする「九州館屋敷型」（千田2000）の折衷型と評価されている。吊り紐痕が布袋の外に出ている16世紀代の瓦以外に、17世紀代のコビキＢの痕跡と九州タイプの吊り紐痕をもつ瓦も出土しており、瓦葺き建物の可能性があるが、出土量から総瓦葺きでなく限定的な使用が想定される。遺物としては12世紀～16世紀後半の輸入陶磁器・国産陶磁器が出土しており、特筆される遺物としては座敷飾りや室禮の「威信財」としての曲輪M出土の13世紀後半～14世紀前半の龍首水注青白磁や、「茶の湯」の茶入れとしての曲輪Ｇ出土の16世紀後半～17世紀初頭の景徳鎮産青磁小壺などがある。なお瓦質の「土製聖人像」は南側曲輪群の１号道路状遺構から出土し、表面に「聖母マリア」とみなされる女性聖人の顔の一部と植物の葉のレリーフがある。聖母マリア像の左右が反転する点を重視すると慶長期（1596～1615年）の『マリア五玄義図』との類似点が指摘されている（神庭1998）。上部に２箇所の穿孔が存在するので、身につけるメダイや壁や箱の内部に掛け垂らして崇拝の対象とするキリシタン遺物と考えられる。共伴遺物から16世紀末～17世紀初頭に比定される。この土製聖人像は中世日向におけるキリスト教受容の実像を解く重要な遺物であり、キリスト教関連遺物の土製品としては類例がない。なおイエズス会の『日本年報』天正９（1581）年に日向国のある港に住むキリシタンのルカスを紹介している（若山2012）。

**水田跡**

塚原遺跡（国富町）Ｂ区では文明ボラ（1471年降下）の下で水田の畦畔が検出され、プラント・オパール分析からも多量のイネが検出された。町屋敷遺跡（宮崎市）Ｃ区で中世の水田跡が９枚検出され、水田区画は約100～140㎡程度であるのに対して、Ｄ区の唯一判明した水田区画は約21.1㎡である。

**石塔群・墓**

迫内遺跡（宮崎市）の磨崖板碑は「七本塔婆」と呼ばれるもので、石塔群から出土した瀬戸産瓶子蔵骨器・糸切り底土師器などから13世紀後半～16世紀の時期と推定され、県内唯一の事例であり注目される。なお13世紀後半の瀬戸産蔵骨器の中の焼骨は分析の結果、熟年男性と推定された。また平田迫遺跡（佐土原町）では石積遺構２基の多量の河原石の下にそれぞれ成人の火葬骨を納めた14世紀の常滑焼蔵骨器が安置されていた。

カラ石の元遺跡（延岡市熊野江町）ではいわゆる円角混同式の日向式六地蔵幢に分類される「天文17（1548）年」銘の六地蔵幢が、宮ノ東遺跡（西都市）では中世後半～近世前半の石組遺構・茶毘遺構・石敷遺構が、迫内遺跡（宮崎市）では「宝永５（1808）年」の紀年銘のある近世墓群が調査された。

以上のように東九州自動車道（大分県境～清武間）建設に伴って尾花Ａ・野首第２・宮ノ東遺跡などの複合遺跡に代表される166遺跡の調査を行い、103冊の報告書を刊行して「記録保存」の措置はいちおう終了したが、これは到達点でなく通過点である。それぞれの報告書で明らかにされたことや問題点・課題点を各時代・地域毎に整理・総括し、今後の調査に生かしていくと共に、出土した膨大な遺物を考古資料として県北・県央・県西・県南という地域性や多様性、そして同質性を踏まえながら地域の歴史あるいは日向の歴史を明らかにしたい。


参考文献

秋成雅博2013「宮崎県における瀬戸内技法の様相」『九州旧石器』第17号　九州旧石器文化研究会

池畑耕一1976「石庖丁にみられる瀬戸内地方と宮崎県の関係」『宮崎考古』第２号　宮崎考古学会

石川悦雄1984「宮崎平野における弥生土器編年試案」『宮崎考古』第９号　宮崎考古学会

石川悦雄1986「宮崎県における弥生文化の成立と大陸文化」『考古学ジャーナル』264号

石川悦雄1991「宮崎県における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』第５号

石川恒太郎1979「国富町本庄地下式２号古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第14集

稲田孝司2000「神子柴石器群と縄文時代のはじまり」『九州の細石器文化』Ⅲ　九州旧石器文化研究会

今塩屋毅行・松永幸寿2002「日向における古墳時代中～後期の土師器―宮崎平野部を中心として―」『中期古墳の検討』九州前方後円墳研究会

今塩屋毅行2004「南部九州古墳時代の火処」『福岡大学考古学論集―小田富士雄先生退職記念』

筌瀬明宏2003『堂ケ島第２遺跡』西都市埋蔵文化財調査報告書第33集

後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会2002『後牟田遺跡―宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究―』

梅木謙一2004「四国・南九州における凹線文土器の交流」『西南四国―九州間の交流に関する考古学的研究』研究代表下條信行

大坪志子2003「縄文の玉から弥生の玉へ」『先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会

小野正敏2003「威信財としての貿易陶磁器と場」『戦国時代の考古学』

遠部慎・宮田佳樹2008「宮崎県における土器付着炭化物の炭素14年代測定―縄文時代前半期を中心に―」『宮崎考古』第21号　宮崎考古学会

甲斐貴充2009「宮崎県における馬埋葬土坑」『研究紀要』第５号　宮崎県立西都原考古博物館

片岡宏二1998「日本出土の前・中期無文土器」『環濠集落と農耕社会の形成』九州考古学会・嶺南考古学会

神庭信幸・小島道裕・横島文夫・坂本満1998「京都大学所蔵「マリア十五玄義図」の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第76集

加覧淳一2009「宮崎県における弥生時代後期の社会変化」『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究会

河野祐次2011「南部九州における弥生時代瀬戸内系土器の基礎的研究」『地域政策科学研究』第８号

岸田裕一・日高優子2011「「霧島産」黒曜石の産出状況」『蛍光Ｘ線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定―基礎データー集２－』明治大学古文化財研究所

清武町教育委員会2006『滑川第１遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書第21集

桑畑光博2013「宮崎県の曽畑式土器」『曽畑式土器とその前後を考える』九州縄文研究会

国立歴史民俗博物館1994「日本出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集

堺靖紀2001「弥生時代大柱祭祀の一例―春日市立石遺跡の検討―」『古文化論叢』第47集

坂田邦洋1982「九州の黒曜石」『史学論叢』13

芝康次郎2011『九州における細石刃石器群の研究』六一書房

下條信行1977「九州における大陸系磨製石器の生成と展開」『史淵』第114輯

下條信行1980「東アジアにおける外湾刃石庖丁の展開」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』

下條信行2002「瀬戸内における石庖丁の型式展開と文化交流」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会

新東晃一2013「地域の様相　九州南部」『日本の考古学講座３　縄文時代上』青木書店

角南総一郎2000「Ⅳ　小結」『永野原遺跡』高山町埋蔵文化財調査報告書第７集

千田嘉博2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会

千羨行2008「西日本の孔列土器」『日本考古学』25

田中良之1999「人骨及び人骨付着昆虫遺体からみた古墳時代モガリの研究」『平成９～10年度科学研究費補助金研究成果報告書』

辻誠一郎2013「縄文時代の年代と陸域の生態系史」『日本の考古学講座３　縄文時代上』

辻田淳一郎2009「九州出土の腕輪形石製品」『奴国の南』九州大学総合研究博物館

長井雅史ほか2010「鹿児島県北部における新黒曜石原産地の発見と意義―いわゆる「霧島山産」黒曜石の解明にむけて―」『日本文化財科学会第27回大会発表要旨集』

長津宗重1985「日向型間仕切り住居の研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集

長津宗重2004「日向における石庖丁の展開」『西南四国―九州間の交流に関する考古学的研究』

中間研志1987「松菊里型住居」『東アジアの考古学と歴史』

野島永2009『初期国家形成過程の鉄器文化』

土生田純之1991「古墳における儀礼の研究―木柱をめぐって」『九州文化史研究所紀要』第36号　九州大学九州文化史研究施設

東徹志2009「南九州の弥生の鳥が語るもの―「スロープ付土坑」から出土した鳥形木製品について―」『南の縄文・地域文化論考新東晃一代表還暦記念文集』中巻

日高優子2009「宮崎県の様相」『九州旧石器』第13号　九州旧石器研究会

広瀬和雄1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成　九州編』山川出版社

藤木聡2008「宮崎県の炭化種子類からみたイネ資料及びその周辺」『南部九州における水稲農耕受容期の様相』宮崎考古学会県南例会実行委員会

堀田孝博・福田泰典2005「東臼杵郡北川町所在の家田城跡（仮称）について」『南九州城郭研究』第３号

北郷泰道1989「南九州における間仕切り壁住居の成立と終焉」『宮崎県史研究』第３号

北郷泰道1991「日向の中世城館跡」『宮崎県地方史研究紀要』第20輯

松永幸寿2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号

松永幸寿2004「日向における古式土師器の成立と展開―宮崎県平野部を中心として―」『西南四国―九州間の交流に関する考古学的研究』

三浦俊明2005「車輪石生産の展開」『待兼山考古学論集』

都城市史編さん委員会2007『都城市史　資料編考古』都城市

宮崎県旧石器文化談話会2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66　旧石器文化談話会

宮田栄二2010「九州の旧石器・縄文移行過程」『日本の考古学講座２　旧石器時代下』

三吉秀充2004「九州出土の市場南組系須恵器について」『西南四国―九州間の交流に関する考古学的研究』

村上恭通2007『古代国家成立過程と鉄器生産』

森岡秀人・西村歩編2006『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター

若山浩章2012「塩見城跡の歴史的位置」『塩見城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第210集

# 第23表　東九州自動車道調査成果一覧表

## ①　大分県境～北川間（７遺跡３冊）

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査年度 | 時代 | 遺跡の内容 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 海舞寺遺跡<br>(1,988 ㎡) | 延岡市<br>北浦町 | 19<br>20 | 旧石器<br>中世<br><br><br>近世 | 削器、縄文後・晩期土器、古墳　須恵器、古代　土師器<br>掘立柱建物跡 12 棟・土坑 1 基、輸入陶磁器・東播系捏鉢・<br>周防型瓦質土器・石鍋・北宋銭・貝（ハマグリ）・種実（コムギ）<br>国産陶磁器（備前・肥前・瀬戸・堺）・火打石　　※横穴 4 | 189 |
| 7 | 市之串遺跡<br>(4,400 ㎡) | 延岡市<br>北浦町 | 20 | 弥生～古墳<br>近世 | 土器<br>陶磁器・焙烙　　※横穴 7 | 189 |
| 8 | 中野内遺跡<br>(11,149 ㎡) | 延岡市<br>北浦町 | 19<br>20 | 縄文早期<br>弥生前期<br>古墳中期<br><br><br>古代～近世 | 集石遺構 1 基（9,405 ± 28 年 BP、広葉樹）<br>竪穴建物跡 1 軒、土器（下城式）・磨製石鏃・磨石・砥石・台石<br>竪穴建物跡 6 軒・掘立柱建物跡 5 棟・大柱遺構 1・自然流路、<br>土師器・須恵器無蓋高坏（ＴＫ 208）・砥石・錘具・刀子<br>ピット、陶磁器 | 189 |
| 9 | 野地久保畠遺跡<br>(4,006 ㎡) | 延岡市<br>北浦町 | 20<br>21 | 縄文晩期<br>中世<br>近世 | 土器・石鏃・剥片<br>ピット列 3、青磁<br>掘立柱建物跡 5 棟・土坑 3 基・ピット、国産陶磁器（備前・薩摩・<br>肥前・瀬戸・堺）・火打石・種実（ムギ類・マメ科）※横穴 2 | 196 |
| 11 | 森ノ上遺跡<br>(5,666 ㎡) | 延岡市<br>北浦町 | 19<br>20 | 旧石器<br>縄文早期<br><br>弥生末～ 古墳前期 | ナイフ形石器・スクレイパー・石核<br>集石遺構 18 基・炉穴 4 基、土器（貝殻文・押型文・無文）・打製石鏃・<br>磨石・敲石・台石・粗製剥片石器<br>竪穴 11（1,737 ± 19、モモ）、土器・磨石・敲石・台石・鉄鏃・刀子・種子 | 189<br>196 |
| 12 | カラ石の元遺跡<br>(1,648 ㎡) | 延岡市<br>熊野江 | 19<br>20 | 縄文前期<br>古墳中期<br>中世～近世 | 土器（曽畑式）・敲石・石核<br>竪穴建物跡 2 軒（1,584 ± 19、ツブラジイ）、土師器・磨石・砥石・種子<br>六地蔵幢・無縫塔・五輪塔・土坑 9 基・ピット・溝・石垣、<br>輸入陶磁器・国産陶磁器・焙烙・砥石・火打石・銭貨・煙管・<br>魚骨（カツオ）・貝（アワビ・カキ）・種実（イネ・コムギ） | 189 |
| 14 | 家田古墳群<br>家田城跡<br>(4,100 ㎡) | 延岡市<br>北川町 | 21 | 古墳中期<br>中世<br>近代 | 古墳 4 基、鉄剣・鉄鏃・刀子・土師器（甕・高坏）<br>曲輪 4、犬走り状遺構、白磁・火打石<br>スナイドル銃弾 | 198 |

## ②　門川～日向間（５遺跡４冊）

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査年度 | 時代 | 遺跡の内容 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 分蔵遺跡<br>(612 ㎡) | 門川町<br>門川 | 17 | 縄文後期<br>縄文晩期 | 土器（天城式）・石鏃・打製石斧・石錘<br>土器（黒川式、無刻目突帯文）・打製石斧・石錘・横刃状石器 | 139 |
| 2 | 板平遺跡<br>(21,080 ㎡) | 日向市<br>冨高 | 17<br>18<br>20<br>21 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br><br>縄文後期<br><br>縄文晩期<br>弥生前期～中期<br>弥生後期<br>古墳前期～後期<br><br>古代～近世 | 楔形石器・石核・二次加工剥片・剥片<br>ナイフ形石器（今峠型）<br>集石 36（9,280 ± 40、コナラ）・炉穴 55（9,260 ± 30、クリ）・陥し穴 4、<br>土器（貝殻文、中原Ⅱ式・手向山式・天道ケ尾式）・打製石鏃・磨石<br>土坑 1 基・石組遺構 1 基、土器（太郎迫式～三万田式・市来式・<br>鳥井原式）<br>土器（黒川式、無刻目突帯文）<br>土器（下城式・亀ノ甲・須玖式）<br>竪穴建物跡 1 軒、土器（免田式）<br>竪穴 25（焼失 2 軒 1,670 ± 20、ツブラジイ）、車輪石・土師器・須恵器・<br>磨石・石錘・鍛冶（高坏転用轆羽口・鉄滓）・ガラス玉・種実（イネ）<br>掘立柱建物跡 24 棟、溝 8 条、土師器（布痕土器・内黒土器）・<br>輸入陶磁器・銭貨・火打石・煙管 | 176<br>199 |
| 3<br>4 | 塩見城跡<br>(25,250 ㎡)<br><br>中山遺跡 | 日向市<br>塩見 | 17<br>18<br>19<br>20<br>21 | 旧石器<br>縄文早期<br>弥生中期～後期<br>中世<br><br><br>近世 | ナイフ形石器・剥片尖頭器・台形石器・削器・掻器・剥片<br>土器（貝殻文、知覧式）・打製石鏃<br>土器、古墳～平安　須恵器（坏ＭＴ 15）・土師器<br>曲輪・堀切・土塁・掘立柱建物跡 194 棟・柵列 99・道状遺構・井戸・<br>鍛冶、輸入陶磁器（龍首水注青白磁・景徳鎮小壺）・国産陶磁器・<br>土師質土器・茶臼・木製品・石塔・つぶて石・キリシタン遺物<br>近世墓 23 基、銭貨（洪武・永楽・寛永）・金銅製飾り鈑・ガラス数珠 | 210 |
| 6 | 池ノ下遺跡<br>(1,534 ㎡) | 日向市<br>塩見 | 17<br>18 | 旧石器 | 角錐状石器 | 210 |

## ③　日向～都農間（18遺跡８冊）

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査年度 | 時代 | 遺跡の内容 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 馬込遺跡第 2 地点<br>(1,800 ㎡) | 日向市<br>平岩 | 24 | 旧石器<br>縄文早期<br><br>縄文晩期<br>弥生終末期 | ナイフ形石器・角錐状石器・スクレイパー・剥片<br>集石遺構 40（9,111 ± 29、マツ属）・炉穴 1・土坑 1、土器（貝殻文・<br>押型文・撚糸文）・打製石鏃・石斧・石錘・磨石・敲石・石皿・台石<br>土器（無刻目突帯文）<br>土坑 1 基、弥生土器・石斧・炭化材（1,835 ± 18 年 BP、シイ属） | 230 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 岡遺跡<br>(12,610 ㎡) | 日向市<br>平岩 | 21<br>22<br>23<br>24 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br><br>縄文前期<br>縄文晩期<br><br>古墳中期<br>中世～近世 | 石錐・スクレイパー・石核・剥片<br>礫群５基、ナイフ形石器・スクレイパー・礫器・石核・剥片<br>集石遺構 14 基（10,880 ± 34 年 BP）・炉穴 17 基（9,564 ± 32、コナラ節）、<br>土器（貝殻文・押型文・無文、手向山式）・打製石鏃・スクレイパー・石錘・凹石・粗製剥片石器<br>土器（轟式）<br>土坑１基・埋甕１、土器（黒川式、組織痕・孔列文・刻目突帯文・<br>無刻目突帯文）・石鏃・石斧・石錘・敲石・台石・粗製剥片石器<br>竪穴建物跡１軒、須恵器（坏ＴＫ 47 ～ＭＴ 15・甕）・土師器<br>掘立柱建物跡４棟・石組遺構１基、輸入陶磁器・国産陶磁器 | 212<br>223<br>230 |
| | 平尾遺跡 | | | 縄文早期<br>縄文晩期<br><br>中世～近世 | 集石遺構１基、土器（貝殻文・押型文・撚糸文）<br>土器（組織痕・孔列文・刻目突帯文・無刻目突帯文）・石鏃・<br>石斧・石錘・敲石・台石・トロトロ石器<br>掘立柱建物跡５棟、輸入陶磁器・東播系捏鉢・国産陶磁器 | 212<br>223 |
| 8 | 坂元第２遺跡<br>(315 ㎡) | 日向市<br>平岩 | 21･22<br>23 | 縄文早期<br>古墳 | 集石遺構２基（8,536 ± 30 年 BP）、土器・スクレイパー・石斧・磨石<br>土師器高坏 | 212 |
| 12 | 向原中尾第１遺跡<br>(1,165 ㎡) | 日向市<br>東郷町 | 20<br>22 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期 | 石核<br>土器・打製石鏃・磨石・凹石・粗製剥片石器 | 213 |
| 13 | 向原中尾第２遺跡<br>(1,820 ㎡) | 日向市<br>東郷町 | 22<br>24 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br><br>弥生終末期 | ナイフ形石器・スクレイパー・石刃・石核・剥片<br>集石遺構 18（8,327 ± 31）・石斧埋納遺構１、土器（貝殻・押型・無文、<br>前平式・手向山式）・打製石鏃・石斧・磨石・敲石・粗製剥片石器<br>竪穴建物８軒（焼失５軒、1,877 ± 60、アワブキ属）、土器・石庖丁・<br>砥石・敲石・磨石・鉄鏃・ベンガラ・種実（イネ・アワ・コナラ属） | 213<br>229 |
| 15 | 向原中尾第４遺跡<br>(5,680 ㎡) | 日向市<br>東郷町 | 20<br>21<br>22 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文草創期<br>縄文早期<br><br>縄文前期以降 | 礫群１基、ナイフ形石器・スクレイパー・石刃・石核・剥片・敲石<br>礫群４基、ナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・スクレイパー・<br>石刃・石錐・敲石・石核・細石刃核・細石刃・剥片<br>有舌尖頭器（柳又型）<br>土器（貝殻文・押型文、別府原式・中原式・手向山式）・円盤形土製品・<br>打製石鏃・打製石斧・石匙・石錘・磨石・敲石・礫器<br>陥し穴７基、縄文中期土器、弥生中期土器 | 213 |
| 16 | 向原中尾第５遺跡<br>(445 ㎡) | 日向市<br>東郷町 | 20<br>24 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br><br><br>弥生終末～古墳初頭 | 礫群１基、ナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・敲石・石核<br>集石 13（9,460 ± 40、コナラ属）・炉穴 33（9,180 ± 40、クリ）、土器<br>（貝殻文・押型文・無文、前平式・中原式・知覧式・手向山式）・<br>打製石鏃・打製石斧・磨石・敲石・台石・粗製剥片石器<br>竪穴建物跡２軒（焼失１軒、1,790 ± 30 年 BP、クリ）、土器・石庖丁 | 229 |
| 17 | 向原中尾第６遺跡<br>(200 ㎡) | 日向市<br>東郷町 | 24 | 旧石器<br>弥生後期 | 礫群２基、スクレイパー・使用痕剥片・磨石<br>土器 | 229 |
| 18 | 長野遺跡<br>(4,600 ㎡) | 都農町<br>川北 | 23<br>24 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br>弥生後期後半 | 礫群１基、ナイフ形石器・尖頭器・石核・剥片<br>土坑１基・焼土面７、土器（押型文）・打製石鏃・打製石斧・石核<br>竪穴建物２軒（焼失２軒、1,875 ± 20、アカガシ亜属）、土器・石庖丁・<br>砥石・磨石・敲石・種実（モモ・ガマズミ属）　縄文前期以降陥し穴２ | 226 |
| 19 | 舟川第２遺跡<br>(5,420 ㎡) | 都農町<br>川北 | 21<br>22<br>23 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期<br><br><br><br>縄文晩期 | 礫群４基（28,660 ± 110、コナラ節）、ナイフ形石器・スクレイパー・磨石・敲石・石核・剥片<br>礫群 33 基、ナイフ形石器（狸谷・北牛牧型）・台形石器・剥片尖頭器・<br>角錐状石器・磨石・細石刃核（野岳型・船野型・泉福寺型）・細石刃<br>集石遺構 29 基・配石遺構１基、土器（貝殻文・押型文・無文、<br>下剥峯式・塞ノ神式・手向山式・稲荷山式・早水台式）・打製石鏃<br>・磨石・敲石・石核・剥片<br>土器（無刻目突帯文） | 214<br>226 |
| 23 | 内野々遺跡<br>(4,720 ㎡) | 都農町<br>川北 | 21<br>22 | 縄文早期<br><br><br>縄文前期<br>縄文後期<br><br><br>弥生末～古墳初頭 | 集石遺構５基、土器（貝殻文・押型文、早水台式・下菅生Ｂ式・<br>手向山式）・打製石鏃・石匙・石核・粗製剥片石器<br>土器（探浦式、尾田式系）、中期土器（船元式・春日式）<br>竪穴４（3,484 ± 23、イチイガシ）、（鐘崎・市来・鳥井原式）・石鏃・<br>石匙・石錐・石斧・磨石・敲石・粗製剥片石器・土器圧痕（マメ科）<br>竪穴建物跡１軒（焼失、スダジイ）、土器（重弧文）・磨製石鏃 | 202 |
| 24 | 内野々第２遺跡<br>(1,420 ㎡) | 都農町<br>川北 | 20<br>21 | 縄文早期 | 集石遺構３基、土器（押型文、田村式）・石錐・磨石・石核・剥片 | 202 |
| 25 | 内野々第３遺跡<br>(280 ㎡) | 都農町<br>川北 | 22 | 縄文<br>弥生 | 磨石・石核・剥片<br>磨製石鏃 | 202 |
| 26 | 内野々第４遺跡<br>(920 ㎡) | 都農町<br>川北 | 20<br>21 | 縄文早期<br><br>縄文前期 | 集石遺構２基、土器（貝殻文・無文、塞ノ神式）・打製石鏃・石錐<br>・磨石・石核・剥片<br>土器（曽畑式・轟式）・玦状耳飾 | 202 |
| 27 | 平山下原遺跡<br>(7,990 ㎡) | 都農町<br>川北 | 20<br>21<br>22 | 旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期 | 礫群３基、ナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・スクレイパー<br>・削器・石核・細石刃・剥片<br>集石遺構１基・土坑４基、土器（貝殻文・押型文・無文、天道ケ尾・<br>妙見・陽弓式）・打製石鏃・石斧・敲石・磨石・台石・剥片 | 201 |
| 29 | 木戸平第２遺跡<br>(2,880 ㎡) | 都農町<br>川北 | 20<br>21<br>22 | 旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期<br>弥生末～古墳初頭 | 礫群４基、ナイフ形石器・剥片尖頭器・スクレイパー・敲石・<br>石核・細石刃・剥片<br>土器（平拵式）・打製石鏃・局部磨製石鏃<br>竪穴建物５軒（焼失４軒 1,945 ± 20、ツブラジイ）・土坑５・土坑墓１、<br>土器（装飾高坏）・石庖丁・磨製石鏃・磨製石斧・磨石・石錘・<br>鉄鏃・鉄製摘鎌・管玉・種実（イネ・ササゲ属・ブドウ属） | 215 |
| 31 | 俵石第２遺跡<br>(3,380 ㎡) | 都農町<br>川北 | 21<br>22 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期<br><br>弥生終末期 | 礫群２基、局部磨製石斧・ナイフ形石器・スクレイパ－・石核<br>礫群７基、ナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・スクレイパー・<br>石刃・石核・細石刃核（船野型）・細石刃・剥片<br>集石遺構６（8,608 ± 33、コナラ節）、土器（貝殻・押型・撚糸・無文、<br>桑ノ丸式）・打製石鏃・磨石・敲石・石核・剥片・トロトロ石器<br>祭祀遺構１、土器（壺・甕 1,938 ± 22 年 BP・器台・装飾高坏・杓子形） | 216 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 32 | 俵石第１遺跡<br>（11,700 ㎡） | 都農町<br>川北 | 20<br>21<br>22 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期<br><br><br>弥生後期 | 礫群４基、ナイフ形石器（水晶）・掻器・敲石・石核・剥片<br>礫群 18 基、ナイフ形石器（北牛牧型・今峠型・片島型）・<br>剥片尖頭器・角錐状石器・スクレイパー・台形石器・石刃・石核・<br>細石刃核（船野型）・細石刃・剥片<br>陥し穴 11 基・土坑 33 基・土坑群、土器（貝殻文・押型文・無文、<br>田村式）・打製石鏃・尖頭器・石匙・石錐・剥片<br>竪穴建物跡１軒（焼失）、土器 | 200<br>216 |

## ④　都農～西都間（59遺跡66冊）

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査年度 | 時代 | 遺跡の内容 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>2 | 朝倉遺跡<br><br>尾立第２遺跡<br>（7,189 ㎡） | 都農町<br>川北 | 16<br>17 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期<br><br>弥生後期後半 | 礫群１基、局部磨製石斧・敲石・ナイフ形石器・打製石斧・敲石<br>礫群４基（24,900 ± 160BP）、ナイフ形石器・台形様石器・剥片尖頭器<br>角錐状石器・二次加工剥片・細石刃核（船野型・野岳型）・細石刃<br>集石遺構 52 基（8,410 ± 50 年 BP）・土坑 26、（無文・貝殻刺突文尖底・<br>押型文、田村式）・打製石鏃・石斧・礫器・剥片・玦状耳飾（滑石製）<br>土坑１基（2,080 ± 40 年 BP）、土器（壺・甕・鉢） | 169 |
| 4 | 朝草原遺跡<br>（5,565 ㎡） | 都農町<br>川北 | 16<br>17 | 旧石器<br>縄文草創期<br>縄文早期 | 礫群２基、ナイフ形石器・角錐状石器・細石刃核（船野型）・敲石<br>土器（無文・繊維痕）・磨石<br>集石遺構３・土坑３（8,530 ± 50BP）、土器（無文・貝殻文）・石鏃 | 147 |
| 5 | 尾立第３遺跡<br>（1,160 ㎡） | 都農町<br>川北 | 17 | 旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期 | 礫群 10 基、ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・<br>翼状剥片・スクレイパー・石核・二次加工剥片・細石刃核<br>集石遺構２基（9,210 ± 60 年 BP、9,060 ± 60 年 BP、コナラ）、打製石鏃 | 147 |
| 8 | 立野第５遺跡<br>（3,880 ㎡） | 都農町<br>川北 | 17 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期 | 礫群４基・環状ブロック群、ナイフ形石器・スクレイパー<br>礫群 35 基（14,240 ± 60 年 BP）・土坑２、ナイフ形石器・台形石器・<br>剥片尖頭器・角錐状石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃<br>集石遺構２基（12,090 ± 60 年 BP、コナラ・ブナ）・土坑１、石鏃・石匙 | 156 |
| 10 | 立野第２遺跡<br>（212 ㎡） | 都農町<br>川北 | 17 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期 | 礫群１基、ナイフ形石器（今峠型）・石核・剥片<br>集石遺構 15 基、土器（貝殻文・無文、陽弓式）・打製石鏃 | 156 |

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査年度 | 時代 | 遺跡の内容 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 八幡第２遺跡<br>（6,640 ㎡） | 川南町<br>川南 | 15･16<br>17 | 縄文草創期<br>弥生後期後半 | 集石遺構１基（11,400 ± 60 年 BP、コナラ）、隆帯文土器・石鏃<br>竪穴 9（焼失５軒 1,990 ± 40、イネ・イチイガシ）、土器（土佐系）・石庖丁 | 148 |
| 16 | 銀座第１遺跡<br>（19,130 ㎡） | 川南町<br>川南 | 14<br>15<br>16<br>20 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br>弥生終末期～古墳初頭<br>中世～近世 | ナイフ形石器・角錐状石器・細石刃核（船野型）・細石刃・剥片<br>集石遺構 10 基・陥し穴４基、石鏃・土器（条痕文）<br>竪穴建物跡４軒、土器（装飾高坏）・石庖丁・磨石・台石<br>掘立柱建物跡 25 棟・溝 51 条、土師器・輸入陶磁器・国産陶磁器 | 120<br>194 |
| 17 | 銀座第２遺跡<br>（7,500 ㎡） | 川南町<br>川南 | 14 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期 | 礫群１基、ナイフ形石器・剥片<br>礫群２基、ナイフ形石器・台形石器・細石刃核・石核<br>土器（貝殻文・押型文）・石鏃、近世　掘立柱建物跡３棟 | 115 |
| 18 | 銀座第３Ａ遺跡<br>（400 ㎡） | 川南町<br>川南 | 14 | 縄文早期 | 土坑１基、土器（貝殻文・押型文・無文・撚糸文、下剥峯式・<br>稲荷山式・田村式）・石鏃・石核、縄文後期土器 | 80 |
| 20 | 登り口第１遺跡<br>（1,410 ㎡） | 川南町<br>川南 | 16<br>17 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期 | ナイフ形石器・スクレイパー・二次加工剥片・石核<br>ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・細石刃、縄文草創期隆帯文<br>炉穴９・土坑５、土器（貝殻文、前平式・別府原式・中原式）・石鏃 | 141 |
| 21 | 登り口第２遺跡<br>（4,150 ㎡） | 川南町<br>川南 | 16<br>17 | 縄文早期<br>古墳中期 | 土器（押型文・貝殻文）・打製石斧・剥片<br>竪穴建物跡１軒、土師器・刀子・台石・磨石 | 141 |
| 24 | 市納上第１遺跡<br>（7,200 ㎡） | 川南町<br>川南 | 15<br>16 | 旧石器<br>縄文早期<br>弥生後期 | ナイフ形石器・石核<br>土器（押型文・貝殻文）・石鏃・石斧・磨石<br>竪穴建物跡１軒・周溝状遺構１基（1,780 ± 40 年 BP、イネ・マメ） | 121 |
| 25 | 市納上第２遺跡<br>（2,490 ㎡） | 川南町<br>川南 | 16<br>17 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br>縄文後期後半 | 礫群１基（28,340 ± 250BP、コナラ）、ナイフ形石器・スクレイパー・敲石・石核<br>ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・細石刃<br>集石遺構 32（8,820 ± 40 年 BP、コナラ）、（貝殻・押型文、別府原式）・石鏃・磨石<br>土器・石鏃・石錘・尾鈴山酸性岩類剥片 | 170 |
| 27 | 市納上第４遺跡<br>（200 ㎡） | 川南町<br>川南 | 16 | 縄文早期<br>縄文後期 | 土器（貝殻文・押型文、下剥峯式・田村式）<br>土器（並木式・出水式）・石鏃・石匙・石錘・磨石・尾鈴山酸性岩類剥片 | 121 |
| 29 | 虚空蔵免遺跡<br>（900 ㎡） | 川南町<br>川南 | 15 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文草創期<br>縄文早期 | 礫群２基、ナイフ形石器（今峠型）・角錐状石器・細石刃核（船野型）<br>土器（隆帯文）<br>集石遺構１・炉穴１、土器（貝殻文・押型文・無文、中原Ⅱ式）・石斧 | 122 |
| 30 | 赤石・天神本遺跡<br>（6,630 ㎡） | 川南町<br>川南 | 15 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文草創期<br>縄文後期後半～晩期<br>弥生後期後半 | スクレイパー・剥片<br>礫群２基、ナイフ形石器・角錐状石器・スクレイパー・細石刃核<br>土器（隆帯文）、縄文早期　陥し穴２基、無文土器・打製石鏃<br>竪穴建物跡２軒・集石遺構１基、土器・石斧・石鏃・磨石・台石<br>竪穴建物跡１軒、土器・敲石 | 122 |
| 31 | 天神本第２遺跡<br>（880 ㎡） | 川南町<br>川南 | 15<br>16 | 旧石器<br>縄文早期 | 細石刃核・細石刃<br>集石遺構２、（押型・無文、早水台・手向山・平拵式）・石鏃・剥片 | 123 |
| 32 | 大内原遺跡<br>（3,625 ㎡） | 川南町<br>川南 | 15<br>16 | 弥生終末期～古墳初頭<br>中世 | 竪穴建物１・土坑１（2,180 ± 40 年 BP、スダジイ・アワブキ・イネ）<br>土壙墓１基、礫石経・土師皿、東播系須恵器・青磁・石鍋・火打石 | 123 |
| 33 | 中ノ迫第１遺跡<br>（18,330 ㎡） | 川南町<br>川南 | 13<br>15<br>16 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期<br>弥生後期 | 礫群８基、ナイフ形石器・二次加工剥片・敲石・石核<br>礫群 36 基、台形石器・角錐状石器・ナイフ形石器（国府型）<br>細石刃核・細石刃<br>集石遺構２基・陥し穴１基、土器（平拵式）・打製石鏃<br>竪穴建物跡１軒、土器・石庖丁・台石 | 143 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 34 | 中ノ迫第２遺跡<br>(20,190 ㎡) | 川南町<br>川南 | 13<br>16<br>17 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期<br><br>弥生後期後半 | 剥片<br>礫群 8 基、ナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・スクレイパー<br>・細石刃核・細石刃<br>集石 37（8,734 ± 47 年 BP、コナラ）・炉穴１（8,000 ± 44、コナラ）、<br>（押型・貝殻・貝殻刺突文、下剥峯式）・石鏃・石斧・敲石・石匙<br>竪穴 2（焼失 1 軒 1,643 ± 32、コナラ）、石庖丁・砥石（擦切）・磨石 | 167 |
| 35 | 中ノ迫第３遺跡<br>(3,040 ㎡) | 川南町<br>川南 | 16<br>17 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期 | 礫群 1 基、局部磨製石斧・剥片<br>礫群 6 基・土坑 2 基・陥し穴 1 基、ナイフ形石器・角錐状石器・細石刃<br>集石 32（9,140 ± 40）・炉穴 21（9,700 ± 40）、（貝殻・押型・無文）・石鏃・石斧 | 144 |
| 37 | 前ノ田村上第１遺跡<br>(15,800 ㎡) | 川南町<br>川南 | 13<br>14<br>15 | 旧石器ＡＴ上位<br>弥生終末期<br>中世～近世 | 彫器・台形石器・剥片<br>竪穴 1（焼失、1,900 ± 50）・周溝状１（イネ・アワ）、石庖丁・鉄鏃<br>掘立柱建物跡 52 棟・溝 30・区画溝 16・石組遺構 1、輸入陶磁器 | 116 |
| 38 | 前ノ田村上第２遺跡<br>(10,049 ㎡) | 川南町<br>川南 | 13<br>17<br>21 | 旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文草創期～早期<br>弥生終末期～古墳初頭 | 礫群 55 基・土坑群、角錐状石器・ナイフ形石器（国府型）・<br>剥片尖頭器・細石刃核（船野型・畦原型）・細石刃<br>集石 5・炉穴１・土坑 8（8,010 ± 30）・土坑群、隆帯文・無文・石鏃<br>竪穴建物 3 軒（焼失 2 軒、1,950 ± 40、クヌギ）、土器・石庖丁・磨石 | 161<br>197 |
| 39 | 赤坂遺跡<br>(17,400 ㎡ ) | 川南町<br>川南 | 15<br>16 | 弥生後期後半～古墳初<br><br>中世 | 竪穴 23（焼失 8 軒 2,000 ± 40、クヌギ）・周溝墓１（1,940 ± 40）・周溝状 3、<br>土器（吉備系・東部瀬戸内系、イネ圧痕）・石庖丁・勾玉・鉄鏃・ベンガラ磨石<br>掘立柱建物跡 19 棟・溝状遺構 4 条、東播系　旧石器　ナイフ形石器 | 151 |
| 40 | 国光原遺跡<br>(8,400 ㎡) | 川南町<br>川南 | 15<br>16<br>17 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文草創期<br>縄文早期<br>弥生終末期 | 台形石器・礫器・石核、石斧・敲石・スクレイパー<br>礫群 1 基、角錐状石器・台形石器・ナイフ形石器・細石刃核・細石刃<br>土器（爪形文・隆帯文）<br>集石 63（9,870 ± 70）・炉穴 41（9,160 ± 60）・陥し穴 1、押型・貝殻文<br>竪穴 7（焼失 1 軒 1,950 ± 40）・周溝状１、（瀬戸内系・イネ圧痕）・石庖丁 | 149 |
| 41 | 湯牟田遺跡<br>(14,050 ㎡) | 川南町<br>川南 | 13<br>14<br>15<br>16 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br>弥生中期～古墳前期<br><br>古代以降<br>中世 | 礫群 1 基、角錐状石器・ナイフ形石器・細石刃核（船野型・畦原型）<br>集石遺構 23 基、土器（押型文、田村式・手向山式）・石鏃・石匙<br>竪穴建物跡 24 軒（焼失 11 軒、1,900 ± 40 年 BP、クリ）、土器・炭化鋤<br>・板状鉄斧・石庖丁・磨製石鏃・砥石・磨石・鉄鏃・ヤマモモ・イネ<br>道路状遺構 12 条（波板状凹凸面）<br>掘立柱 23・竪穴状 3・溝状 13、東播系・青磁・白磁・古瀬戸・土師器 | 107<br>152 |
| 42 | 西ノ別府遺跡<br>(6,420 ㎡) | 川南町<br>川南 | 16 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br>古墳前期 | ナイフ形石器・剥片<br>集石遺構 13 基、土器（押型文・貝殻文、弘法原式）・石鏃・石匙・石斧<br>竪穴建物跡１軒・土坑 1 基、土師器・石庖丁・磨石・仿製重圏文鏡 | 124 |
| 43 | 尾花Ａ遺跡<br>(21,400 ㎡) | 川南町<br>川南 | 16<br>17<br>18 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文草創期<br>縄文早期<br><br>縄文晩期<br>弥生中期～古墳前期<br><br>古代～中世 | ナイフ形石器・角錐状石器・石核・細石刃核（船野型）・細石刃<br>竪穴状遺構 1、土器（爪形・隆帯・無文、11,440 ± 50）・敲石・台石<br>集石 243（9,400 ± 50）・炉穴 11・土器埋設遺構 1、土器（押型・貝殻文、<br>沈目式・前平式）・石鏃・局部磨製石鏃・玉　前期曽畑式<br>土器（黒川式・組織痕・突帯文・孔列文）・石斧・石錘<br>竪穴 246（焼失 111 軒 1,740 ± 20、ブナ）、土器（瀬戸内系）・石庖丁<br>磨石・鉄鏃・板状鉄斧・筋砥石・鉄床石・種実（コナラ・イネ・アワ）<br>掘立柱建物跡 29 棟・石組遺構２基・溝状遺構、青磁・椀形鍛冶滓 | 185<br>195 |

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査年度 | 時代 | 遺跡の内容 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 45 | 崩戸遺跡<br>(青木遺跡)<br>(650 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 13<br>14 | 縄文草創期<br>縄文早期<br>中世 | 土器（隆帯文）・細石刃・有舌尖頭器<br>集石遺構 5 基、土器（押型文・無文、田村式）・石鏃、前期曽畑式<br>掘立柱建物 3 棟・土坑 7・土坑墓 1、土師器・銭貨・茶臼・備前・青磁 | 103 |
| 46 | 野首第１遺跡<br>(10,600 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 12<br>13･14<br>15･16 | 縄文早期<br>古墳終末期<br>近世 | 集石 34（8,670 ± 40、コナラ）、貝殻・押型文、前期西唐津・曽畑・轟式<br>横穴式石室 2・竪穴 2（1,280 ± 40、土器埋設炉）、暗文・須恵器・鉄鏃<br>建物跡・土坑 30（イネ・オオムギ・コムギ）、陶磁器・木製品 | 157 |
| 47 | 野首第２遺跡<br>(13,670 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 12<br>13<br>14<br>15<br>16<br>19<br>20 | 旧石器ＡＴ下位<br><br>旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期<br><br>縄文後期～晩期<br>古墳中期 | 礫群 78 基（28,010 ± 220 年 BP）、ナイフ形石器・台形石器・敲石・<br>二次加工剥片・石核・局部磨製石斧・剥片<br>礫群 214 基(22,370 ± 120 年 BP)、ナイフ形石器(狸谷型･国府型)・台形石器･<br>スクレイパー・角錐状石器・磨石・細石刃核（野岳型・畦原型・船野型）・細石刃<br>集石 206（9,160 ± 50 年 BP）・炉穴 203（8,390 ± 40）・環状ピット群 3、<br>土器（押型文・貝殻文、下菅生Ｂ式・田村式・加栗山式）・打製石鏃<br>竪穴建物 46 軒、土器・ヒスイ玉・石斧・石錘・「石冠」・種実（アワ）<br>竪穴 34 軒、土師・須恵　古代　掘立柱 4・緑釉・布目瓦・企救型甕 | 158<br>172<br>188 |
| 48 | 南中原第１遺跡<br>(14,220 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 13<br>15<br>16<br>17<br>18 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br>縄文後期<br>古墳後期 | 石斧（？）<br>礫群 1 基、ナイフ形石器・石核・剥片<br>集石遺構 19 基（9,460 ± 30 年 BP）・土坑 13、土器（貝殻文）・石鏃<br>平地式建物跡 1 軒、縄文晩期土器（孔列文）・石錘<br>竪穴建物 1 軒（焼失、1,495 ± 20 年 BP、クヌギ節）、土師器・須恵器 | 162<br>179 |
| 50 | 老瀬坂上第３遺跡<br>(老瀬坂上遺跡)<br>(6,600 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 13<br>14 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br>縄文前期<br>古代 | 礫群 6 基、ナイフ形石器・角錐状石器・細石刃核・細石刃<br>集石 34(8,530 ± 50)、（貝殻文・押型文、水迫式）・石鏃・石斧埋納<br>土器（西唐津式、曽畑式、轟Ｃ・Ｄ式）、草創期　隆起線文土器<br>土坑 2、蔵骨器・転用硯・布痕土器、縄文晩期　孔列文土器 | 118 |
| 51 | 下耳切第３遺跡<br>(20,800 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 12<br>13<br>14 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br>縄文中期<br>古墳終末期<br>～古代 | ナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・細石刃核・細石刃<br>集石遺構 32 基、土器（押型文・貝殻文・無文、田村式・桑ノ丸式）<br>竪穴 9・平地式 32・土坑 143（4,430 ± 40 イチイガシ）、船元・春日式<br>古墳 2・地下式横穴墓 8・竪穴 75（土器埋設炉・竈）・掘立柱 82・土坑墓 4<br>・馬埋葬土坑 2、土師（企救型）・須恵・耳環・鉄鏃・馬具・円面硯 | 125 |
| 52 | 北牛牧第５遺跡<br>(18,240 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 12<br>13<br>18 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文草創期<br>縄文早期 | 水晶製石核・二次加工剥片・敲石<br>礫群 3 基、ナイフ形石器（今峠型）・台形石器・剥片尖頭器<br>・角錐状石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃<br>土坑 4（11,190 ± 70 年 BP、コナラ属）・尖頭器　土坑 1（高原スコリア）<br>陥し穴 2 基、土器（平拵式）・打製石鏃・トロトロ石器・石錐・敲石 | 80 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 53 | 唐木戸第１遺跡<br>(8,500 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 13<br>14<br>15 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br>中世 | 礫群 1 基、ナイフ形石器・角錐状石器・スクレイパー<br>集石遺構 3 基・陥し穴 10 基、土器（貝殻文、塞ノ神式）<br>掘立柱建物跡 4 棟、土師器皿・東播系須恵器 | 92 |
| 54 | 唐木戸第２遺跡<br>(4,680 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 13<br>14 | 縄文草創期～早期<br>中世 | 陥し穴 2 基、打製石鏃<br>竪穴建物跡 1 軒（810 ± 40 年 BP、クヌギ節）・掘立柱建物 5 棟・溝 17 条 | 100 |
| 55 | 唐木戸第３遺跡<br>(2,900 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 12<br>13<br>14 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期 | 石核・敲石・磨石・剥片<br>礫群 7 基、ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・<br>スクレイパー・細石刃核（畦原型）・細石刃　※御子柴系石斧<br>集石 23（8,820 ± 50）・土坑 23・陥し穴 1（11,580 ± 150）、貝殻文 | 105 |
| 56 | 唐木戸第４遺跡<br>(8,010 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 12<br>13 | 旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期 | 礫群 10 基、ナイフ形石器・角錐状石器・スクレイパー・細石刃核・<br>細石刃、黒曜石（桑ノ木津留・日東・腰岳産）<br>集石遺構 23 基・炉穴 6 基、土器（貝殻文）・打製石鏃　晩期勾玉 | 126 |
| 58 | 小並第１遺跡<br>(7,700 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 13<br>14 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期 | 礫群 4 基、ナイフ形石器・スクレイパー・石核・敲石・磨石<br>礫群 24 基、ナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・スクレイパー<br>細石刃核（畦原型・船野型）、Kr-Iw 下位炭化材（48,280 ± 1,540BP）<br>集石遺構 21 基・炉穴 7 基、土器（貝殻文、前平式）・打製石鏃・石匙 | 159 |
| 60 | 牧内第１遺跡<br>(14,400 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 12<br>13<br>14<br>15 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期 | 礫群 1 基、台形様石器・スクレイパー・敲石・磨石・剥片<br>礫群 29（19,030 ± 90）・土坑 25、ナイフ形石器（国府・狸谷型）・<br>台形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・石核・細石刃核・細石刃、水晶<br>環状ピット群 3 基・土坑群、打製石鏃　草創期爪形文 | 104<br>163 |
| 61 | 牧内第２遺跡<br>(5,300 ㎡) | 高鍋町<br>上江 | 12<br>13 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文草創期<br>縄文早期 | 敲石・磨石<br>礫群 8 基・土坑 25、ナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・敲石・<br>スクレイパー・細石刃核・細石刃・剥片（水晶）<br>土器（隆帯文・貝殻刺突文）<br>集石遺構 1 基・陥し穴 1 基、打製石鏃 | 108 |

東九州自動車道の調査成果

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査年度 | 時代 | 遺跡の内容 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 62 | 音明寺第１遺跡<br>(5,500 ㎡) | 新富町<br>新田 | 12<br>13 | 旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期<br><br>中世 | 礫群 15 基（20,220 ± 110）・陥し穴 2 基、ナイフ形石器・角錐状石器・<br>スクレイパー・石錐・敲石・細石刃核・細石刃<br>集石遺構 9・炉穴 1（9,370 ± 60）・陥し穴 2、土器（無文・押型文・<br>貝殻文、前平式・手向山式）・打製石鏃・敲石・礫器<br>道路状遺構 10 条（波板状凹凸面） | 102 |
| 63 | 音明寺第２遺跡<br>(8,500 ㎡) | 新富町<br>新田 | 12<br>13<br>14 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期<br>古代～中世 | 礫群 5 基、ナイフ形石器・二次加工剥片・敲石・磨石・石斧<br>礫群 4 基、ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・<br>スクレイパー・石錐・敲石・細石刃核・細石刃・剥片<br>炉穴 3 基・陥し穴 2 基、土器（無文・押型文、ヤトコロ式）・打製石鏃<br>道路状遺構 22( 波板状凹凸面）霧島高原スコリア・霧島新燃享保軽石 | 81<br>94 |
| 64 | 東畦原第１遺跡<br>(14,800 ㎡) | 新富町<br>新田 | 13<br>14<br>15<br>16 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期 | 礫群 43 基（30,980 ± 320 年 BP）、ナイフ形石器・スクレイパー・敲石<br>礫群 30・陥し穴 1（12,890 ± 80）、ナイフ形石器（国府型・北牛牧型）・<br>角錐状石器・スクレイパー・敲石・細石刃核・細石刃・剥片<br>集石遺構 4（8,270 ± 40）、土器（撚糸文・縄文）・石鏃 | 127<br>128<br>140 |
| 65 | 東畦原第２遺跡<br>(7,100 ㎡) | 新富町<br>新田 | 13<br>14 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期 | 礫群 16 基、鋸歯縁石器・ナイフ形石器<br>礫群 15 基、ナイフ形石器・角錐状石器・敲石・石核・細石刃<br>陥し穴 1 基、土器（平拵式）・打製石鏃　土坑 1（高原スコリア） | 98 |
| 66 | 東畦原第３遺跡<br>(7,200 ㎡) | 新富町<br>新田 | 12<br>13 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期<br>弥生 | 礫群 4 基、ナイフ形石器・二次加工剥片・スクレイパー・敲石<br>礫群 8 基、ナイフ形石器・角錐状石器・台形石器・二次加工剥片・<br>敲石・磨石・細石刃核・細石刃・剥片<br>集石遺構 3 基・土坑 1 基、土器（押型文・無文）・打製石鏃<br>土坑墓 2 基 | 87 |
| 67 | 西畦原第１遺跡<br>(13,450 ㎡) | 新富町<br>新田 | 12<br>13<br>14 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br>弥生中期後半～後期初頭 | 礫群 1 基<br>礫群 2 基、ナイフ形石器・敲石・磨石・剥片<br>集石遺構 3 基・土坑 2 基、土器（貝殻文・撚糸文）・打製石鏃・磨石<br>竪穴建物跡 3 軒・掘立柱建物跡 3 棟、土器（瀬戸内系）・磨製石鏃・<br>砥石・鐸形土製品 | 82 |
| 68 | 西畦原第２遺跡<br>(13,200 ㎡) | 新富町<br>新田 | 12<br>13<br>14<br>15 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期<br>弥生末～古墳初頭 | 礫群 5 基、ナイフ形石器・二次加工剥片・敲石・磨石・剥片<br>礫群 8・陥し穴 6（13,350 ± 60）、ナイフ形石器・角錐状石器・敲石<br>スクレイパー・石核・二次加工剥片・細石刃核・細石刃・剥片<br>集石 7 基・陥し穴 1・土坑 18、貝殻文・石鏃　縄文前期土器（轟式）<br>竪穴 3（焼失 2、クヌギ）、土器（瀬戸内系）・石庖丁・磨石・鉄製釣針 | 82<br>106<br>109 |
| 69 | 上新開遺跡<br>(4,200 ㎡) | 新富町<br>新田 | 14<br>15 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期 | 礫群 3 基、ナイフ形石器・スクレイパー・二次加工剥片・磨石<br>礫群 3 基、ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・角錐状石器・<br>剥片尖頭器・敲石・磨石・石核・細石刃・剥片<br>集石遺構 5 基・陥し穴 1・土坑 24、土器（押型文）・打製石鏃 | 129 |
| 71 | 勘大寺遺跡<br>(7,670 ㎡) | 新富町<br>新田 | 12<br>14<br>16<br>17 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期 | 礫群 13 基、ナイフ形石器・石核・敲石・磨石・剥片<br>礫群 48 基（20,800 ± 190BP、ブナ科）、ナイフ形石器・台形石器・<br>角錐状石器・スクレイパー・敲石・石斧・石核・剥片<br>集石 4（8,830 ± 50、ブナ科）・陥し穴 3(11,440 ± 40)・土坑 25、石鏃・敲石 | 110<br>153 |
| 72 | 永牟田第１遺跡<br>(2,190 ㎡) | 新富町<br>新田 | 12<br>15 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期 | 礫群 3 基、礫器・磨石・剥片<br>礫器・敲石・磨石・石核・剥片<br>集石遺構 1 基、打製石鏃・スクレイパー・敲石 | 114 |
| 73 | 永牟田第２遺跡<br>(2,150 ㎡) | 新富町<br>新田 | 12<br>14<br>16 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期 | 礫群 8 基、敲石・台石・スクレイパー・石核・礫器・剥片<br>礫群 4 基、ナイフ形石器（国府型）・スクレイパー・角錐状石器・<br>二次加工剥片・細石刃核・細石刃・剥片<br>集石遺構 6 基・土坑 4 基、土器（貝殻文・無文）・打製石鏃・磨石 | 134 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 74 | 尾小原遺跡<br>（14,178 ㎡） | 新富町<br>新田 | 12<br>13<br>14<br>15<br>16<br>17 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期<br><br><br>縄文晩期<br>弥生後期後半 | 礫群 5 基、剥片・砕片<br>礫群 16 基、ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・角錐状石器・<br>二次加工剥片・敲石・磨石・細石刃核・細石刃・剥片<br>集石 65（8,240 ± 40、コナラ節）・炉穴 7（8,300 ± 40）・陥し穴 9、<br>（押型・貝殻文、田村・桑ノ丸式）・石鏃・石錐・石斧・敲石・磨石<br>土器（黒川式、孔列文）・打製石斧・石錘・砥石<br>竪穴建物跡 3 軒、土器・磨製石鏃 | 117<br>133<br>150 |
| 75 | 向原第１遺跡<br>（4,000 ㎡） | 新富町<br>新田 | 11<br>12<br>13<br>14 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期<br><br><br>弥生中期～古墳初頭 | 剥片<br>礫群 4 基、ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・角錐状石器・<br>二次加工剥片・石錐・石核・敲石・磨石・砥石・剥片<br>集石遺構 19 基・炉穴 11・陥し穴 1、土器（貝殻文・無文、前平式・<br>中原式）・打製石鏃・敲石・磨石・台石　晩期孔列文土器<br>竪穴 6（焼失 2 軒 1,960 ± 50、ヤブツバキ）、土器・石庖丁・鉄鏃・鉄片・<br>磨製石鏃・種実（イネ 2,060 ± 40 年 BP・ササゲ属・モモ・ドングリ） | 119 |
| 77 | 藤山第１遺跡<br>（2,342 ㎡） | 新富町<br>新田 | 13<br>14<br>16 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期 | ナイフ形石器・スクレイパー・敲石・磨石・細石刃核・細石刃<br>集石遺構 42 基・土坑 5 基、土器（貝殻文・押型文・無文、前平式）・<br>打製石鏃・石斧・石錘・敲石・磨石　晩期土器（孔列文・突帯文） | 142 |
| 78 | 藤山第２遺跡<br>（1,000 ㎡） | 新富町<br>新田 | 12 | 縄文早期<br>縄文前期 | 集石遺構 5 基・土坑 1、土器（押型文、田村式）・打製石鏃・磨石<br>土器（轟式）、弥生早期土器（夜臼式）　近世薩摩焼 | 95 |
| 79 | 宮ノ東遺跡<br>（9,310 ㎡） | 西都市<br>岡富 | 11<br>15<br>16 | 旧石器<br>縄文早期<br>縄文後期～晩期<br><br><br>弥生中期～後期<br>古墳中期～後期<br>古代<br><br><br>中世～近世 | 礫群 4 基、ナイフ形石器・台形石器・角錐状石器・敲石・剥片<br>土器（貝殻文・押型文）、前期土器（轟式）、縄文中期土器（船元式）<br>竪穴建物跡 6 軒、土器（孔列文・突帯文）・円盤状土製品・石鏃・<br>石斧・石錘・敲石・台石・「石冠」<br>竪穴建物跡 38 軒、土器（伊予系）・石庖丁・石斧・磨製石鏃・鉄鏃<br>竪穴建物跡 418 軒（1,630 ± 40、土器埋設炉・竈）、土器・鉄鏃・耳環<br>竪穴建物跡 213 軒（土器埋設炉・竈）、暗文土器・陶硯・豊後型甕・<br>企救型甕・緑釉陶器・石帯・越州窯青磁・鞴・種実（イネ・コムギ）<br>掘立柱建物跡 175 棟・石組遺構・茶毘遺構（190 ± 40BP）、輸入陶磁器・<br>国産陶磁器・土師器・石鍋・銭貨・鞴羽口・管状土錘 | 173 |

## ⑤　西都～清武間（28遺跡18冊）

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査年度 | 時代 | 遺跡の内容 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 大辻屋敷遺跡<br>（700 ㎡） | 西都市<br>黒生野 | 10 | 平安時代<br>古代～近世 | 土師器・内黒土器・布痕土器・須恵器<br>竪穴状遺構・畦状遺構・溝状遺構、鞴羽口・土錘 | 32 |
| 4 | 平田迫遺跡<br>（10,530 ㎡） | 宮崎市<br>佐土原町<br>上田島 | 8<br>9 | 古墳終末期<br>古代<br>中世 | 横穴墓 1 基、須恵器<br>畠跡、土師器（企救型甕）・須恵器・布痕土器・丸瓦・陶硯・石帯<br>中世墓 4 基・見晴台 2・堀切 11、蔵骨器（常滑焼）・土師器坏・水晶玉 | 29 |
| 5 | 別府原遺跡<br>（7,950 ㎡） | 西都市<br>鹿野田<br>宮崎市<br>佐土原町<br>上田島 | 8<br>9 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期 | 礫群 5 基、二次加工剥片石核・剥片<br>礫群 15 基、ナイフ形石器・角錐状石器・スクレイパー・敲石・石核<br>・細石刃核（船野型・野岳型）・細石刃・剥片<br>竪穴建物 2 軒・集石遺構 48 基（9,220 ± 60）・炉穴 307 基（9,700 ± 100、<br>クリ材・ユリ科鱗茎・コナラ属子葉）・配石遺構 11 基、<br>土器（貝殻文，前平式）・石鏃・石斧・局部磨製石斧・石錘 | 61 |
| 5 | 別府原第２遺跡<br>（50 ㎡） | 西都市<br>鹿野田 | 9 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期 | スクレイパー・二次加工剥片・磨石・剥片<br>集石遺構 3 基、土器（押型文、手向山式）・楔形石器・石皿 | 61 |
| 6 | 西ケ迫遺跡<br>（920 ㎡） | 宮崎市<br>佐土原町<br>鹿野田 | 9 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期 | 角錐状石器・二次加工剥片・細石刃核（畦原型）・剥片<br>集石遺構 20 基、土器（貝殻文・押型文、桑ノ丸式・下菅生Ｂ式）・<br>石鏃・スクレイパー・局部磨製石斧・磨石・石錘・石皿 | 61 |
| 7 | 上ノ原遺跡<br>（11,002 ㎡） | 宮崎市<br>佐土原町<br>西上那珂 | 8<br>9 | 旧石器ＡＴ下位<br>旧石器ＡＴ上位<br><br><br>縄文早期<br><br><br>縄文晩期<br>中世 | 土坑 1 基、ナイフ形石器・スクレイパー・敲石・磨石・剥片<br>礫群 22、陥し穴 26（11,370 ± 50）、ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器<br>・角錐状石器・スクレイパー・敲石・磨石・剥片<br>集石遺構 16 基・炉穴 38 基（9,230 ± 50 年 BP）・土坑 8 基、土器（貝殻文<br>・押型文・無文、知覧式・吉田式・桑ノ丸式）・打製石鏃・磨石<br>土器（孔列文・無刻目突帯文）<br>掘立柱建物跡 18 棟・溝状遺構 3、　近世墓 1 基 | 58 |
| 8 | 下屋敷遺跡<br>（11,657 ㎡） | 宮崎市<br>佐土原町<br>西上那珂 | 8<br>9 | 旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期 | 礫群 44 基、ナイフ形石器（国府型）・剥片尖頭器・角錐状石器・<br>スクレイパー・石刃・石錐・石核・細石刃核（船野型）・細石刃<br>集石遺構 3 基・陥し穴 2 基（9,910 ± 60 年 BP）、土器（貝殻文、岩本式）<br>打製石鏃・石斧・石匙・掻器・敲石・礫器 | 56 |
| 9 | 梅ケ島遺跡<br>（1,072 ㎡） | 佐土原町<br>西上那珂 | 8<br>9 | 古代～中世 | 水田跡・畦畔、土師器・布痕土器・須恵器 | 32 |
| 11 | 長薗原遺跡<br>（10,474 ㎡） | 宮崎市<br>佐土原町<br>西上那珂 | 8<br>9 | 旧石器ＡＴ上位<br><br><br><br>縄文早期<br><br><br>縄文前期 | 礫群 7 基、ナイフ形石器（狸谷型）・台形石器・剥片尖頭器・<br>角錐状石器・スクレイパー・石刃・石錐・石核・敲石・磨石・<br>細石刃核（船野型・畦原型）・細石刃・剥片<br>集石遺構 7 基・炉穴 34 基（9,160 ± 50 年 BP、カヤ）・土坑 15・陥し穴 9、<br>土器（貝殻文・押型文、中原Ⅱ式）・打製石鏃<br>西唐津式、縄文中期　船元式 | 57 |
| 12 | 上ノ迫遺跡<br>（3,225 ㎡） | 佐土原町<br>西上那珂 | 8 | 旧石器器ＡＴ上位<br>縄文早期 | 礫群 2 基、ナイフ形石器・台形石器・掻器・敲石・磨石<br>土器（貝殻文・押型文、手向山式） | 40 |
| 14 | 松元遺跡<br>（6,580 ㎡） | 国富町<br>木脇 | 8<br>9 | 旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期<br><br><br>縄文前期<br>弥生後期<br>古墳後期 | 礫群 3 基、ナイフ形石器・角錐状石器・スクレイパー・石核・<br>細石刃核・細石刃・剥片<br>集石遺構 44 基、土器（貝殻文・撚糸文、平拵式・塞ノ神式）・打製石鏃<br>・局部磨製石斧・磨石・敲石・石皿・石核<br>土器（轟式）<br>竪穴建物跡 1 軒、土器・石皿<br>竪穴建物跡 3 軒、土師器・須恵器 | 44 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 15 | 井出口遺跡<br>(1,200 ㎡) | 国富町<br>木脇 | 8 | 弥生中期～古墳<br>中世以降 | 自然流路 3、弥生土器・磨製石鏃・土師器<br>水田跡、志野焼 | 44 |
| 16 | 木脇遺跡<br>(9,967 ㎡) | 国富町<br>木脇 | 8<br>9 | 旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文草創期<br>縄文早期<br><br>弥生早期～中期<br>古墳後期<br>古代<br>中世 | 礫群 2 基、ナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・スクレイパー・<br>敲石・磨石・細石刃核・細石刃・剥片<br>土器（隆帯文）<br>集石遺構 83 基・炉穴 47 基、土器（貝殻文・押型文、知覧式・下剥峯式・<br>桑ノ丸式・手向山式・平拵式・塞ノ神式）・打製石鏃・磨石<br>石庖丁（擦切・抉り）・磨製石鏃・土器（下城式・中溝式）<br>竪穴建物 43（土器埋設炉）・掘立柱建物 2、土師器・須恵器・勾玉<br>竪穴 2 軒（竈）・掘立柱建物 4 棟、土師器・鉄鎌・転用硯・布痕土器<br>土坑墓 1 基、土師器皿・刀子 | 43 |
| 17 | 塚原遺跡<br>(3,300 ㎡) | 国富町<br>塚原 | 8<br>9 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文草創期<br>縄文早期<br><br>弥生前期～後期<br>古墳前期<br>古代 | 細石刃核・細石刃・剥片<br>集石遺構 2 基・埋納遺構 1、隆帯文（赤彩ベンガラ）・局部磨製石斧<br>集石遺構 11 基、土器（貝殻文・押型文、知覧式・下剥峯式・手向山式）<br>・打製石鏃・磨石<br>土坑墓 3 基・大柱遺構 2、軽石製品（鳥・家）・磨製石鏃<br>古墳 1 基、土師器・鉄剣・刀子・鉄鏃<br>堰跡、杭　中世　水田跡 | 44 |
| 18 | 中別府遺跡<br>(4,100 ㎡) | 宮崎市<br>金崎 | 9 | 古代<br>中世 | 土師器・墨書土器（「寸」・「男山」）・布痕土器・須恵器<br>輸入陶磁器・天目茶碗・鞴羽口 | 30 |
| 19 | 倉岡第２遺跡<br>(2,203 ㎡) | 宮崎市<br>金崎 | 9 | 縄文前期<br>縄文晩期<br>古墳後期～古代 | 土器（曽畑式）　縄文後期　集石遺構 1 基、土器（綾式）・石錐<br>土器（孔列文）・打製石斧<br>竪穴建物跡 6 軒、土師器・須恵器・布痕土器 | 48 |
| 20 | 町屋敷遺跡<br>(32,600 ㎡) | 宮崎市<br>糸原 | 8<br>9 | 古墳<br>中世 | 水田跡・堰跡、扉（クスノキ）・建築部材・土師器・須恵器<br>水田跡・畦畔　弥生後期土器（讃岐系） | 39 |
| 22 | 迫内遺跡<br>(4,400 ㎡) | 宮崎市<br>富吉 | 9<br>10 | 古墳前期～後期<br>中世 | 古墳 3 基・横穴墓 2 基、土師器・鉄剣・刀子・鉄鏃・管玉<br>五輪塔・板碑・磨崖板碑・蔵骨器（瀬戸・茶釜）、土師器・輸入陶磁器 | 59 |
| 25 | 内宮田・柳迫遺跡<br>(2,830 ㎡) | 宮崎市<br>長嶺・浮田 | 8 | 古代 | 水田跡（畦畔）・水路（1,270 ± 60）、土師器・布痕土器・須恵器 | 30 |
| 26 | 本城跡<br>(17,226 ㎡) | 宮崎市<br>古城町 | 8<br>9 | 縄文早期<br>中世 | 集石遺構 3 基<br>曲輪・堀切・土塁・掘立柱建物跡 6 棟・土坑 6 基、土師器・石鍋<br>輸入陶磁器（白磁・青磁）・国産陶磁器（備前・肥前）・銭貨 | 60 |
| 27 | 白ケ野第２遺跡<br>白ケ野第３遺跡<br>(5,700 ㎡) | 宮崎市<br>清武町<br>船引 | 7<br>8 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文草創期<br>縄文早期<br><br><br><br><br>縄文前期<br>縄文後期<br><br><br>古代～近世 | 細石刃核・細石刃・石斧・スクレイパー・剥片<br>集石遺構 6 基、土器（爪形文）　※御子柴型石斧<br>集石遺構 90（8,220 ± 70、カヤ）・配石遺構 1・土坑 3・磨石埋納遺構、<br>土器（貝殻文・押型文・撚糸文、知覧式・下剥峯式・桑ノ丸式・<br>下菅生Ｂ式・妙見式・平拵式・塞ノ神式）・打製石鏃・局部磨製石鏃・<br>スクレイパー・石匙・磨石・敲石・環状石斧<br>土器（西唐津式・曽畑式）、縄文中期　土器（阿高式・大平式）<br>竪穴建物跡 5 軒・陥し穴 5 基、土器（岩崎式・市来式・丸尾式）、<br>打製石鏃・スクレイパー・磨石・敲石・石錘　縄文晩期孔列文土器<br>掘立柱建物跡 5 棟、土師器・内黒土器・青磁 | 52<br>62 |
| 28 | 上ノ原第１遺跡<br>(2,104 ㎡) | 宮崎市<br>清武町<br>船引 | 7 | 旧石器ＡＴ上位<br><br>縄文早期 | 礫群 4 基、ナイフ形石器・スクレイパー・二次加工剥片・石核・<br>細石刃核（野岳・休場型）・細石刃・剥片<br>土坑 2 基・陥し穴 1 基、土器（押型文、手向山式・平拵式）<br>打製石鏃・磨石　前期曽畑式・轟式　弥生　石剣・磨製石鏃 | 62 |
| 29 | 権現原第２遺跡<br>(1,200 ㎡) | 宮崎市<br>清武町<br>船引 | 7 | 縄文早期<br><br>縄文前期 | 集石遺構 8 基（8,500 ± 60 年 BP）、土器（貝殻文・押型文、前平式・<br>下剥峯式・塞ノ神式）・打製石鏃・敲石<br>土器（轟式） | 33 |
| 30 | 権現原第１遺跡<br>(6,300 ㎡) | 宮崎市<br>清武町<br>船引 | 7 | 縄文早期<br><br>縄文前期<br>弥生中期<br>古墳前期 | 集石遺構 8 基、土器（貝殻文・押型文、前平式・知覧式）・打製石鏃<br>・石斧・石匙・石錘・磨石・敲石<br>土器（曽畑式・轟式）<br>竪穴建物跡 2 軒、土器・石皿・台石<br>竪穴建物跡 1 軒、土師器 | 47 |
| 31 | 杉木原遺跡<br>(7,140 ㎡) | 宮崎市<br>清武町<br>今泉 | 7 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文草創期<br>縄文早期 | ナイフ形石器・スクレイパー・石核・細石刃<br>土器（隆帯文・爪形文）<br>集石遺構 42（8,530 ± 50、コナラ）・土坑 3・陥し穴 1、土器（押型文・貝殻文・無文、<br>下菅生Ｂ式・田村式・前平式・吉田式・下剥峯式・桑ノ丸式・塞ノ神式）・<br>打製石鏃・スクレイパー・磨石・敲石・台石 | 33 |
| 32 | 下星野遺跡<br>(4,146 ㎡) | 宮崎市<br>清武町<br>今泉 | 7 | 旧石器ＡＴ上位<br>縄文早期<br><br>縄文後期<br>弥生後期～古墳前期 | 礫群 2 基、細石刃核・細石刃・スクレイパー・二次加工剥片<br>集石遺構 14 基、土器（貝殻文・無文、前平式・塞ノ神式）・打製石鏃・<br>スクレイパー<br>土坑 1 基、土器（市来式・草野式）・石鏃・石斧・磨石・石錘<br>竪穴建物跡 3 軒、弥生土器・土師器 | 47 |
| 33 | 永ノ原遺跡<br>(10,153 ㎡) | 宮崎市<br>清武町<br>今泉 | 7<br>8 | 旧石器<br>縄文早期 | 細石刃核・細石刃<br>集石遺構 14 基、土器（貝殻文、前平式・下剥峯式・塞ノ神式）・<br>打製石鏃・スクレイパー・凹石・砥石・石核 | 33 |

## 第24表　東九州自動車道（県境～清武間）発掘調査に伴う報告書刊行一覧
## 『宮崎県埋蔵文化センター発掘調査報告書』

### ①　東九州自動車道（県境～北川間）

| | | 遺跡名 | 刊行年（刊行年度） |
|---|---|---|---|
| 第 189 集 | 東九州 1 | 海舞寺遺跡　市之串遺跡　中野内遺跡<br>森ノ上遺跡（弥生・古墳時代編）　カラ石の元遺跡 | 2010（21 年度） |
| 第 196 集 | 東九州 2 | 野地久保畠遺跡　森ノ上遺跡 | 2011（22 年度） |
| 第 198 集 | 東九州 3 | 家田古墳群　家田城跡 | 2011（22 年度） |

7 遺跡 3 冊

### ②　東九州自動車道（門川～日向間）

| | | 遺跡名 | 刊行年（刊行年度） |
|---|---|---|---|
| 第 139 集 | 東九州 1 | 分蔵遺跡 | 2006（18 年度） |
| 第 176 集 | 東九州 2 | 板平遺跡 | 2008（19 年度） |
| 第 199 集 | 東九州 3 | 板平遺跡（第３・４次調査） | 2011（22 年度） |
| 第 210 集 | 東九州 4 | 塩見城跡 | 2012（23 年度） |

5 遺跡 4 冊

| | | |
|---|---|---|
| 第 132 集 | 東九州自動車道（門川～日向間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ | 2006（17 年度 ） |

### ③　東九州自動車道（日向～都農間）

| | | 遺跡名 | 刊行年（刊行年度） |
|---|---|---|---|
| 第 200 集 | 東九州 1 | 俵石第１遺跡 | 2011（22 年度） |
| 第 201 集 | 東九州 2 | 平山下原遺跡 | 2011（22 年度） |
| 第 202 集 | 東九州 3 | 内野々遺跡　内野々第２・第３遺跡　内野々第４遺跡 | 2011（22 年度） |
| 第 212 集 | 東九州 4 | 岡遺跡（第６・７次調査）　坂元第２遺跡 | 2012（23 年度） |
| 第 213 集 | 東九州 5 | 向原中尾第１・２遺跡　向原中尾第４遺跡 | 2012（23 年度） |
| 第 214 集 | 東九州 6 | 舟川第２遺跡 | 2012（23 年度） |
| 第 215 集 | 東九州 7 | 木戸平第２遺跡 | 2012（23 年度） |
| 第 216 集 | 東九州 8 | 俵石第１遺跡（第２次調査）　俵石第２遺跡 | 2012（23 年度） |
| 第 223 集 | 東九州 9 | 岡遺跡（第９・13・15 次調査） | 2013（24 年度） |
| 第 226 集 | 東九州 10 | 長野遺跡　舟川第２遺跡（第３次調査） | 2013（24 年度） |
| 第 229 集 | 東九州 11 | 向原中尾第２遺跡（第３次調査）　向原中尾第５遺跡　向原中尾第６遺跡 | 2014（25 年度） |
| 第 230 集 | 東九州 12 | 岡遺跡（第 16 次調査）　馬込遺跡第２地点 | 2014（25 年度） |

14 遺跡 12 冊

### ④　東九州自動車道（都農～西都間）

| | | 遺跡名 | 刊行年（刊行年度） |
|---|---|---|---|
| 第 80 集 | 東九州 2 | 北牛牧第５遺跡　銀座第３Ａ遺跡 | 2003（15 年度） |
| 第 81 集 | 東九州 1 | 音明寺第２遺跡 | 2003（15 年度） |
| 第 82 集 | 東九州 3 | 西畦原第１遺跡　西畦原第２遺跡Ｄ区（鬼界アカホヤ火山灰上面） | 2004（15 年度） |
| 第 87 集 | 東九州 4 | 東畦原第３遺跡 | 2004（15 年度） |
| 第 92 集 | 東九州 5 | 唐木戸第１遺跡 | 2004（16 年度） |
| 第 94 集 | 東九州 6 | 音明寺第２遺跡（二次調査） | 2005（16 年度） |
| 第 95 集 | 東九州 7 | 藤山第２遺跡 | 2004（16 年度） |
| 第 98 集 | 東九州 8 | 東畦原第２遺跡 | 2005（16 年度） |
| 第 100 集 | 東九州 9 | 唐木戸第２遺跡 | 2005（16 年度） |
| 第 102 集 | 東九州 10 | 音明寺第１遺跡 | 2005（16 年度） |
| 第 103 集 | 東九州 11 | 崩戸遺跡 | 2005（16 年度） |
| 第 104 集 | 東九州 12 | 牧内第１遺跡（四次調査） | 2005（16 年度） |
| 第 105 集 | 東九州 13 | 唐木戸第３遺跡 | 2005（16 年度） |
| 第 106 集 | 東九州 14 | 西畦原第２遺跡（第一次調査） | 2005（16 年度） |
| 第 107 集 | 東九州 15 | 湯牟田遺跡（一次調査） | 2005（16 年度） |
| 第 108 集 | 東九州 16 | 牧内第２遺跡 | 2005（16 年度） |
| 第 109 集 | 東九州 17 | 西畦原第２遺跡（二次・三次） | 2005（16 年度） |
| 第 110 集 | 東九州 18 | 勘大寺遺跡（一次調査） | 2005（16 年度） |
| 第 114 集 | 東九州 19 | 永牟田第１遺跡 | 2005（17 年度） |
| 第 115 集 | 東九州 20 | 銀座第２遺跡 | 2005（17 年度） |
| 第 116 集 | 東九州 21 | 前ノ田村上第１遺跡 | 2005（17 年度） |
| 第 117 集 | 東九州 22 | 尾小原遺跡（二次調査） | 2005（17 年度） |
| 第 118 集 | 東九州 23 | 老瀬坂上第３遺跡 | 2005（17 年度） |
| 第 119 集 | 東九州 24 | 向原第１遺跡 | 2006（17 年度） |
| 第 120 集 | 東九州 25 | 銀座第１遺跡（一・二・三・四次調査） | 2006（17 年度） |
| 第 121 集 | 東九州 26 | 市納上第１遺跡　市納上第４遺跡 | 2006（17 年度） |
| 第 122 集 | 東九州 27 | 虚空蔵免遺跡　赤石・天神本遺跡 | 2006（17 年度） |
| 第 123 集 | 東九州 28 | 天神本第２遺跡　大内原遺跡 | 2006（17 年度） |
| 第 124 集 | 東九州 29 | 西ノ別府遺跡 | 2006（17 年度） |
| 第 125 集 | 東九州 30 | 下耳切第３遺跡 | 2006（17 年度） |
| 第 126 集 | 東九州 31 | 唐木戸第４遺跡 | 2006（17 年度） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第 127 集 | 東九州 32 | 東畦原第１遺跡（二次調査） | 2006（17 年度） |
| 第 128 集 | 東九州 33 | 東畦原第１遺跡（三・四次調査） | 2006（17 年度） |
| 第 129 集 | 東九州 34 | 上新開遺跡 | 2006（17 年度） |
| 第 133 集 | 東九州 35 | 尾小原遺跡（第一次調査） | 2006（18 年度） |
| 第 134 集 | 東九州 36 | 永牟田第２遺跡 | 2006（18 年度） |
| 第 140 集 | 東九州 37 | 東畦原第１遺跡（一次調査） | 2006（18 年度） |
| 第 141 集 | 東九州 38 | 登り口第１遺跡　登り口第２遺跡 | 2007（18 年度） |
| 第 142 集 | 東九州 39 | 藤山第１遺跡 | 2007（18 年度） |
| 第 143 集 | 東九州 40 | 中ノ迫第１遺跡（一次・二次） | 2007（18 年度） |
| 第 144 集 | 東九州 41 | 中ノ迫第３遺跡 | 2007（18 年度） |
| 第 147 集 | 東九州 42 | 朝草原遺跡　尾立第３遺跡 | 2007（18 年度） |
| 第 148 集 | 東九州 43 | 八幡第２遺跡 | 2007（18 年度） |
| 第 149 集 | 東九州 44 | 国光原遺跡 | 2007（18 年度） |
| 第 150 集 | 東九州 45 | 尾小原遺跡（第三次調査） | 2007（18 年度） |
| 第 151 集 | 東九州 46 | 赤坂遺跡 | 2007（18 年度） |
| 第 152 集 | 東九州 47 | 湯牟田遺跡（二次調査） | 2007（18 年度） |
| 第 153 集 | 東九州 48 | 勘大寺遺跡（二次調査） | 2007（18 年度） |
| 第 156 集 | 東九州 49 | 立野第５遺跡　立野第２遺跡 | 2007（18 年度） |
| 第 157 集 | 東九州 50 | 野首第１遺跡Ⅱ | 2007（18 年度） |
| 第 158 集 | 東九州 51 | 野首第２遺跡（第一分冊　後期旧石器時代～縄文時代早期編） | 2007（18 年度） |
| 第 159 集 | 東九州 52 | 小並第１遺跡 | 2007（18 年度） |
| 第 161 集 | 東九州 53 | 前ノ田村上第２遺跡 | 2007（19 年度） |
| 第 162 集 | 東九州 54 | 南中原第１遺跡（一次） | 2007（19 年度） |
| 第 163 集 | 東九州 55 | 牧内第１遺跡（一次～三次調査） | 2007（19 年度） |
| 第 167 集 | 東九州 56 | 中ノ迫第２遺跡 | 2008（19 年度） |
| 第 169 集 | 東九州 57 | 尾立第２遺跡 | 2008（19 年度） |
| 第 170 集 | 東九州 58 | 市納上第２遺跡 | 2008（19 年度） |
| 第 172 集 | 東九州 59 | 野首第２遺跡（第二分冊　縄文時代後期・晩期、弥生時代、古墳時代、古代以降編） | 2008（19 年度） |
| 第 173 集 | 東九州 60 | 宮ノ東遺跡 | 2008（19 年度） |
| 第 179 集 | 東九州 61 | 南中原第１遺跡（二次） | 2008（20 年度） |
| 第 185 集 | 東九州 62 | 尾花Ａ遺跡Ⅰ（旧石器時代～縄文時代編） | 2009（20 年度） |
| 第 188 集 | 東九州 63 | 野首第２遺跡（二・三次調査） | 2010（21 年度） |
| 第 194 集 | 東九州 64 | 銀座第１遺跡（五次調査） | 2011（22 年度） |
| 第 195 集 | 東九州 65 | 尾花Ａ遺跡Ⅱ（弥生時代以降編） | 2011（22 年度） |
| 第 197 集 | 東九州 66 | 前ノ田村上第２遺跡（二次・三次） | 2011（22 年度） |

59 遺跡 66 冊

| | | |
|---|---|---|
| 第 49 集 | 東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ | 2001（12 年度） |
| 第 64 集 | 東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ | 2002（13 年度） |
| 第 76 集 | 東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ | 2003（14 年度） |
| 第 91 集 | 東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ | 2004（15 年度） |
| 第 111 集 | 東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅴ | 2005（16 年度） |
| 第 131 集 | 東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅵ | 2006（17 年度） |

## ⑤　東九州自動車道（西都～清武間）

| | | 遺跡名 | 刊行年　（刊行年度） |
|---|---|---|---|
| 第 29 集 | 東九州Ⅰ | 平田迫遺跡 | 2000（11 年度） |
| 第 30 集 | 東九州Ⅱ | 内宮田遺跡　柳迫遺跡　中別府遺跡 | 2001（12 年度） |
| 第 32 集 | 東九州Ⅲ | 梅ケ島遺跡　大辻屋敷遺跡 | 2001（12 年度） |
| 第 33 集 | 東九州Ⅳ | 権現原第２遺跡　杉木原遺跡　永ノ原遺跡 | 2001（12 年度） |
| 第 39 集 | 東九州Ⅴ | 町屋敷遺跡 | 2001（12 年度） |
| 第 40 集 | 東九州Ⅵ | 上ノ迫遺跡 | 2001（12 年度） |
| 第 43 集 | 東九州Ⅶ | 木脇遺跡 | 2001（12 年度） |
| 第 44 集 | 東九州Ⅷ | 松元遺跡　井出口遺跡　塚原遺跡 | 2001（12 年度） |
| 第 47 集 | 東九州Ⅸ | 権現原第１遺跡　下星野遺跡 | 2001（12 年度） |
| 第 48 集 | 東九州Ⅹ | 倉岡第２遺跡 | 2001（12 年度） |
| 第 52 集 | 東九州Ⅺ | 白ケ野第２・第３遺跡（第１分冊　縄文時代草創期・早期編） | 2002（13 年度） |
| 第 56 集 | 東九州Ⅻ | 下屋敷遺跡 | 2002（13 年度） |
| 第 57 集 | 東九州ⅩⅢ | 長薗原遺跡 | 2002（13 年度） |
| 第 58 集 | 東九州ⅩⅣ | 上ノ原遺跡 | 2002（13 年度） |
| 第 59 集 | 東九州ⅩⅤ | 迫内遺跡 | 2002（13 年度） |
| 第 60 集 | 東九州ⅩⅥ | 本城跡 | 2002（13 年度） |
| 第 61 集 | 東九州ⅩⅦ | 別府原遺跡　西ケ迫遺跡　別府原第２遺跡 | 2002（13 年度） |
| 第 62 集 | 東九州ⅩⅧ | 白ケ野第２・第３遺跡（第２分冊　縄文前期～中・近世編）　上の原第１遺跡（Ｂ地区） | 2002（13 年度） |

29 遺跡 18 冊

# 図　版

図版１

調査区全景（西から）

作業風景（東から）

Tr1　土層断面（南西から）

Tr2　土層断面（南西から）

Tr3　土層断面（北西から）

図版２

Ⅵ層　散礫（北東から）

SI1　（東から）

SI2　（東から）

SI3　（東から）

SI4　（南東から）

SP2　焼土検出状況（南東から）

SP1･2　完掘状況（南東から）

SP3　完掘状況（北から）

SP4･5･6･7･8　完掘状況（南東から）

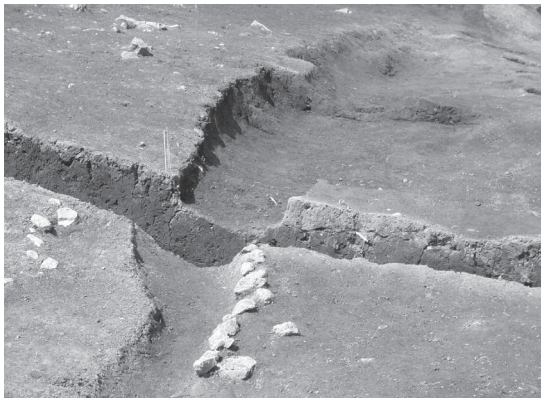
SP9　完掘状況（西から）

SI5　（北東から）

SI6　（東から）

SI7　（東から）

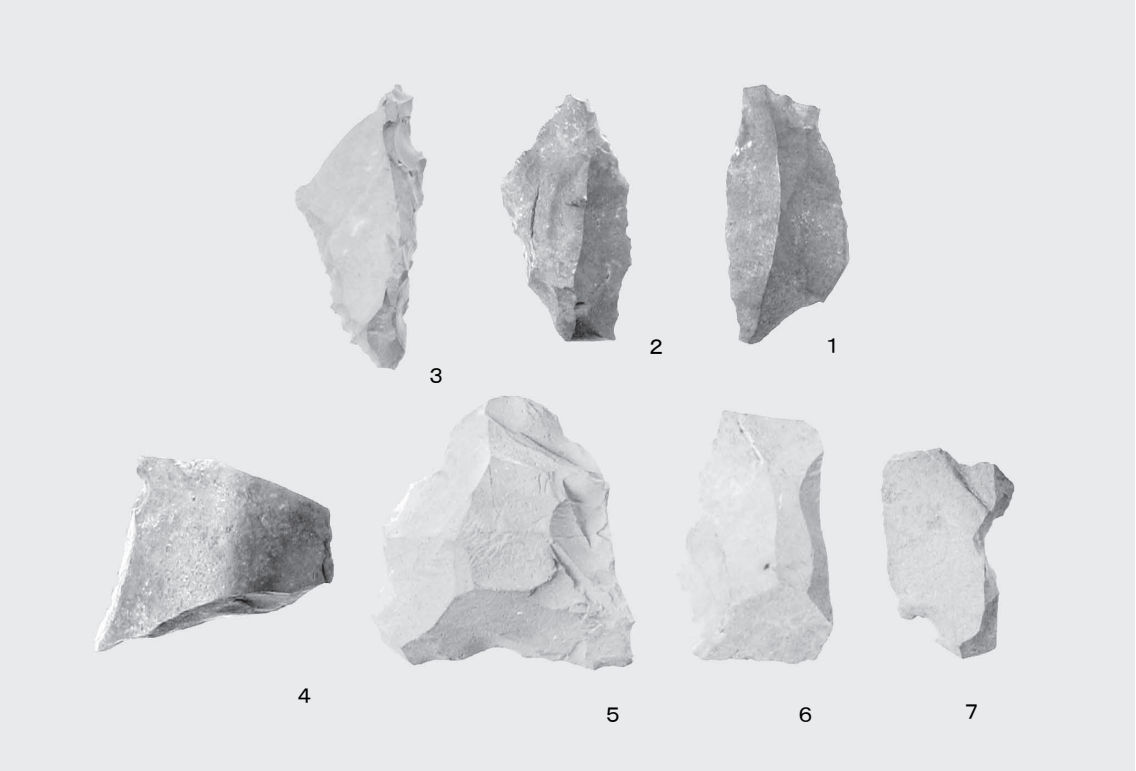
Ⅱ層下段　完掘状況（北から）



SE2　完掘状況（南から）

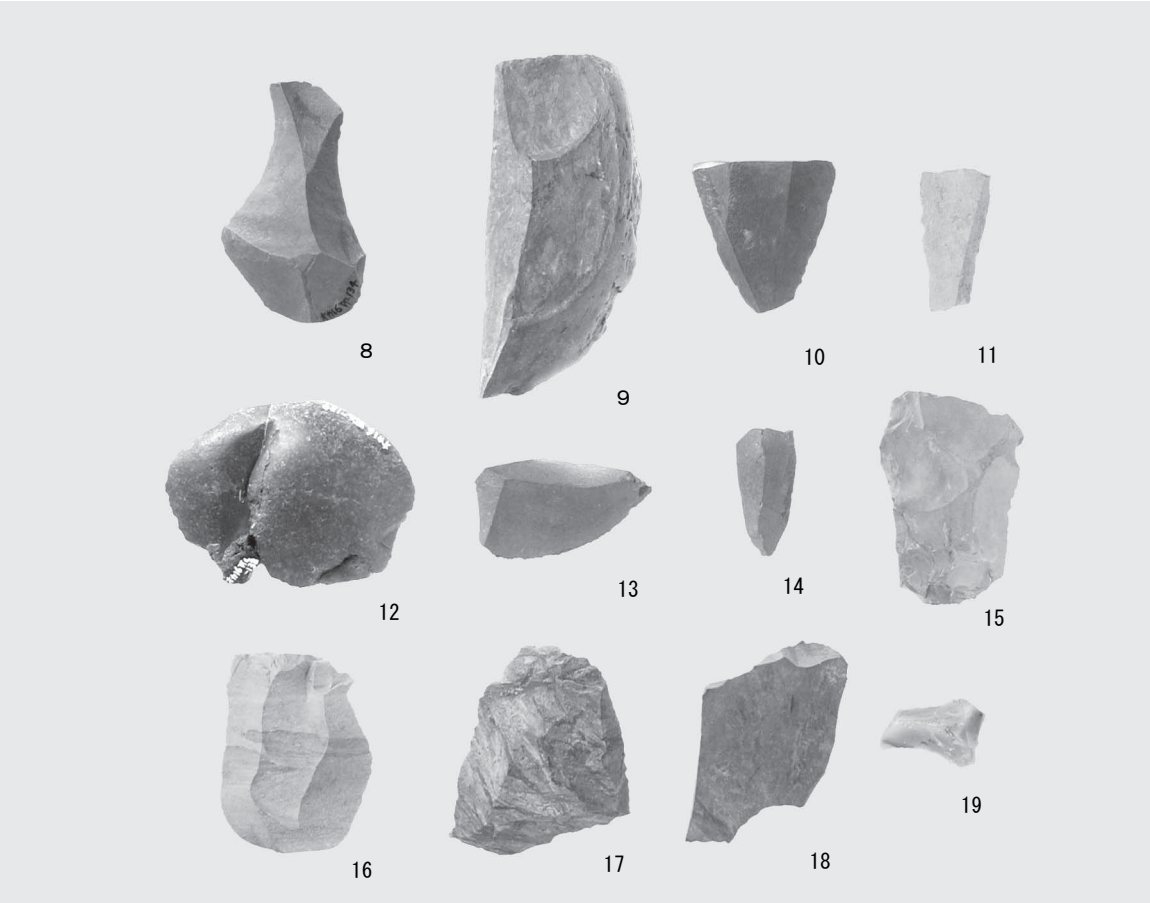
SC3　完掘状況（西から）

図版４



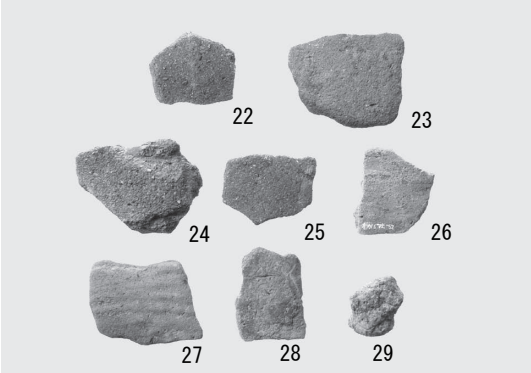

後期旧石器時代の遺物



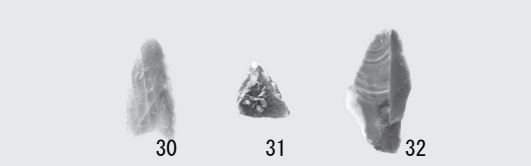



後期旧石器時代の遺物

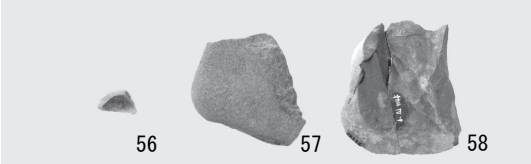
炉穴（第２群）出土遺物



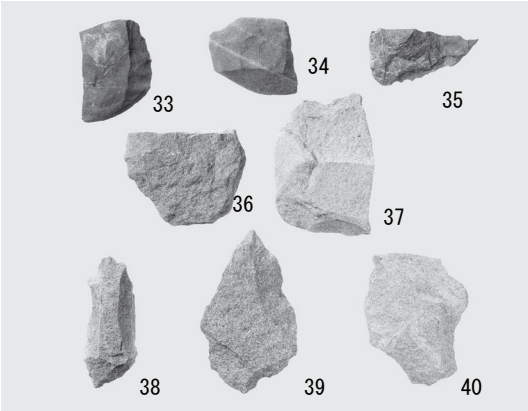

縄文時代早期の土器




縄文時代早期の石器

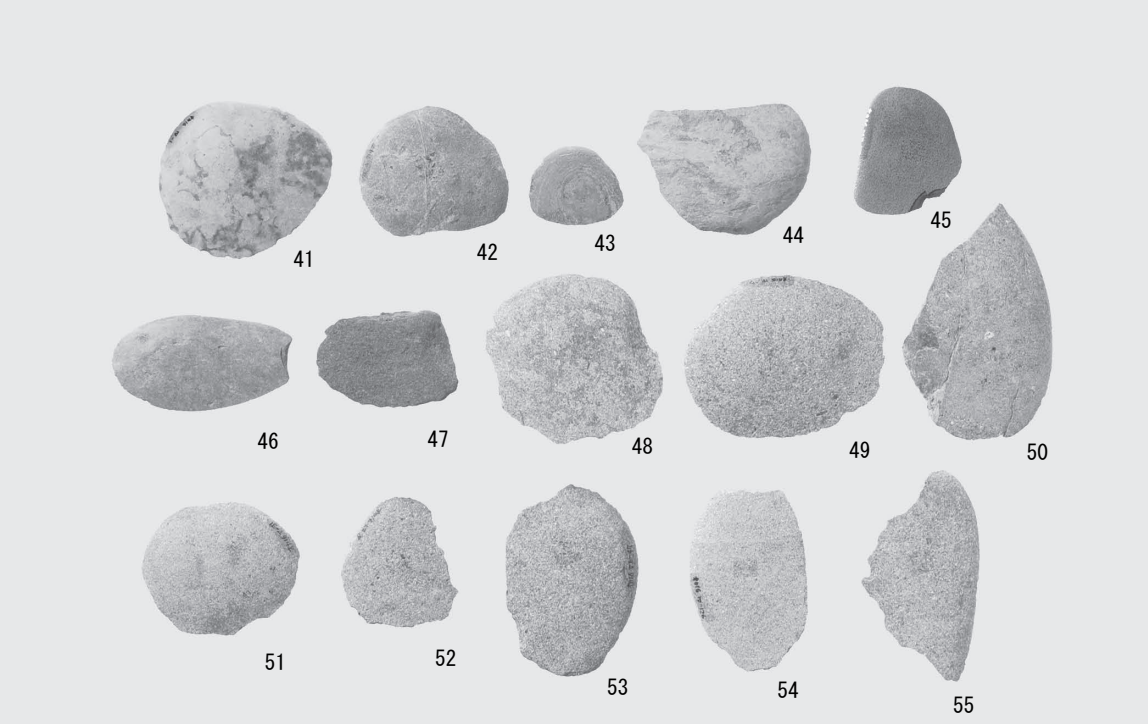



縄文時代早期の石器



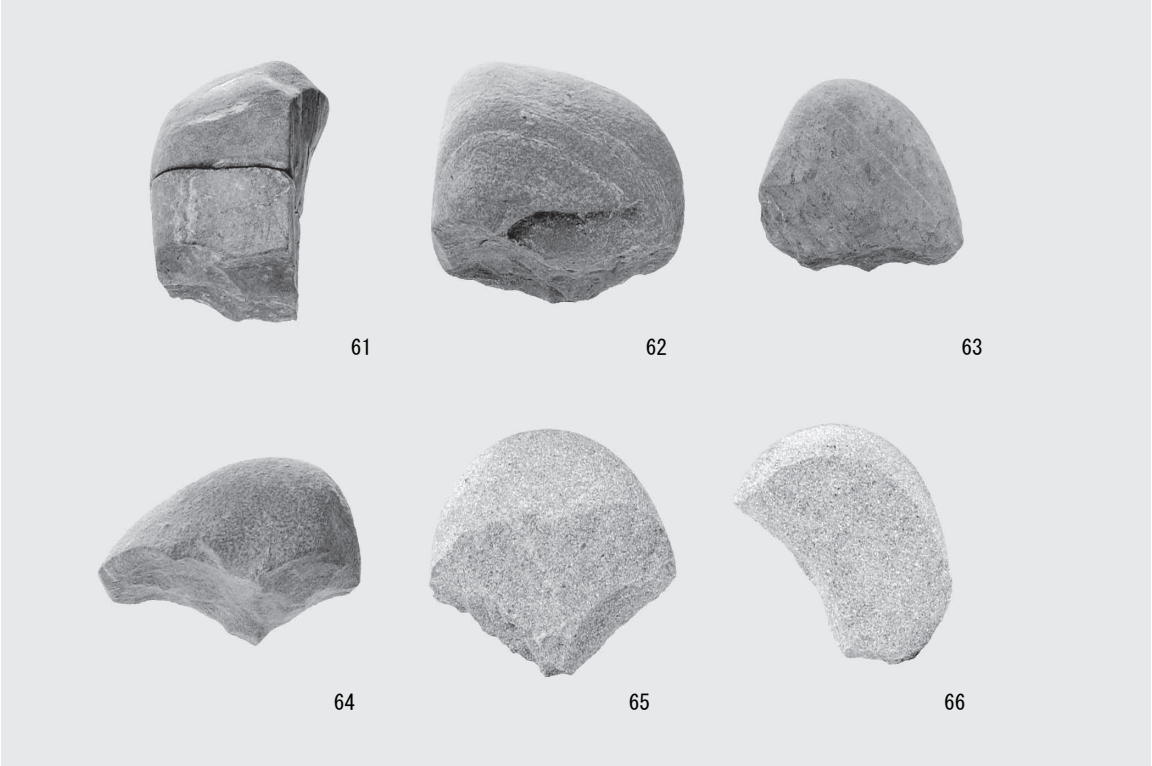

縄文時代早期の石器

縄文時代早期の石器



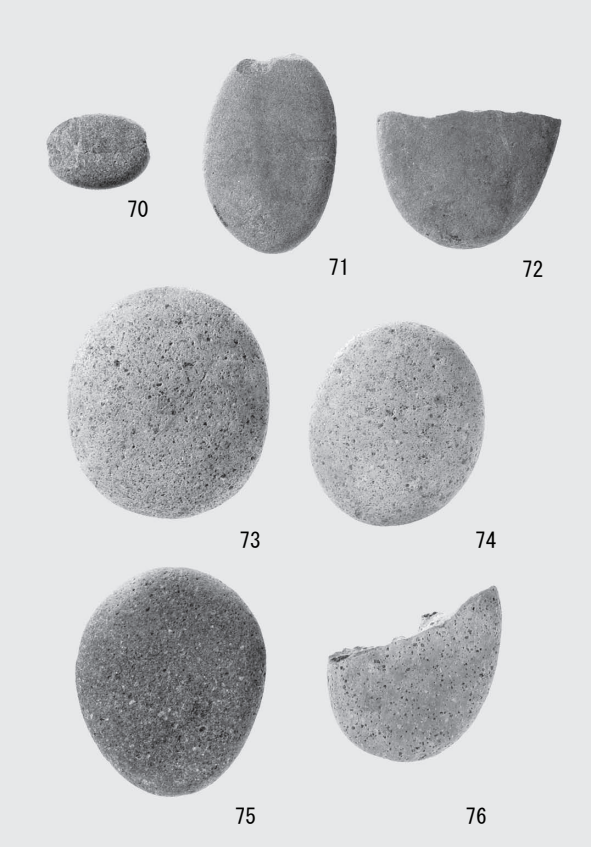

縄文時代早期の石器

図版６

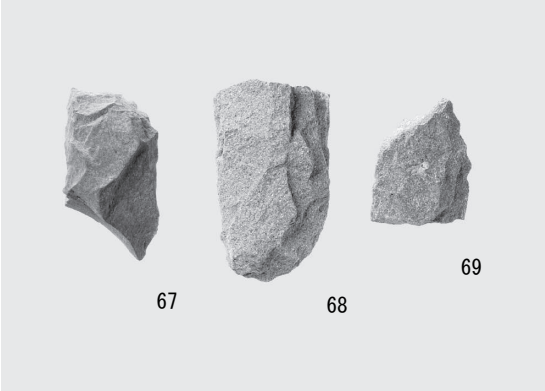



縄文時代早期の石器

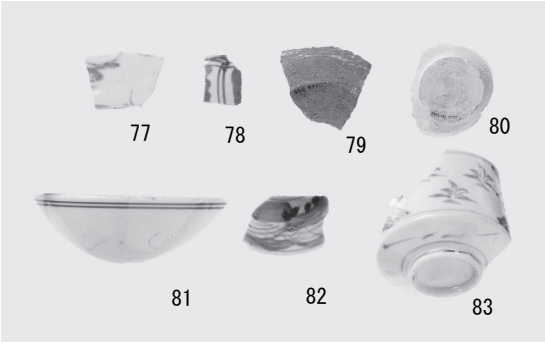





縄文時代早期の石器




縄文時代早期の石器




陶磁器

調査区全景

調査区（南より）

作業風景

図版８

土層断面（北西より）

散礫（東より）

散礫（東より）

SI1　（東より）

SI1　完掘（北東より）

SI2～4　（北西より）

SI5～7　配石（西より）

SI5～7　配石（北より）

SI8　（南西より）

SI9　（北西より）

SI10･11（北より）

SI12～22　（北西より）

SI12～22　完掘（北西より）

図版10

SI12～22　配石（北西より）

SI24　（南西より）

SI24　配石（南西より）

SI23･24　完掘（北東より）

SI25　（北より）

SI26～28　（北西より）

SI26～28　配石（北西より）

SI26～28　完掘（北西より）

SI29　（北西より）

SI30　（南東より）

SI31･32　（南東より）

SI31･32　完掘（北より）

SI33　（南より）

SI34　（南西より）

SI35　（南より）

SI36　（北より）

図版12

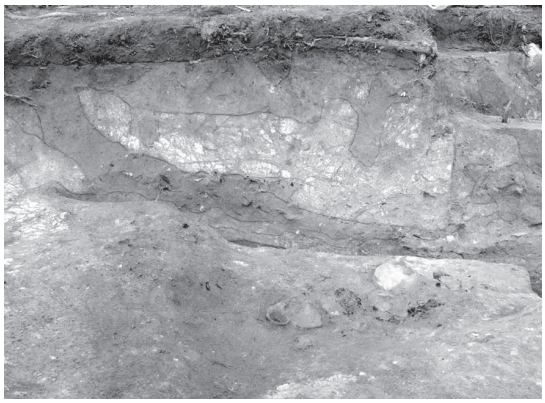
SI37～40　（南より）

SP1　完掘（北より）

SC1　（南東より）

SZ1　（南東より）

埋納土坑出土遺物（東より）



SZ1　土層断面図（東より）

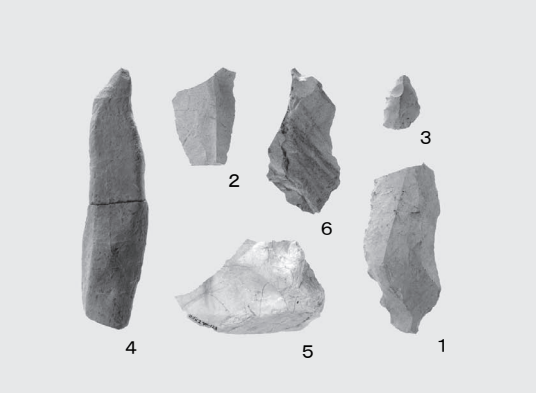
SZ1　完掘（西より）

SZ1　完掘（北東より）

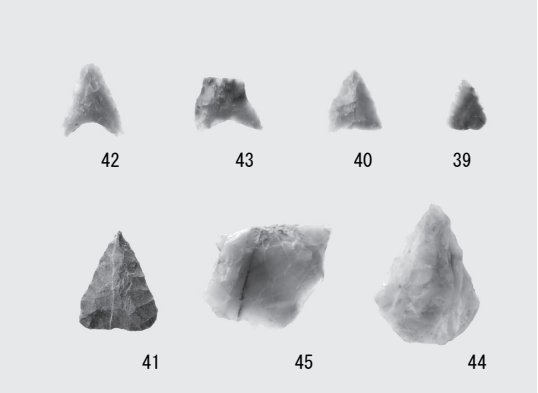
SE1　（西より）

SE1・竪穴状遺構（北東より）

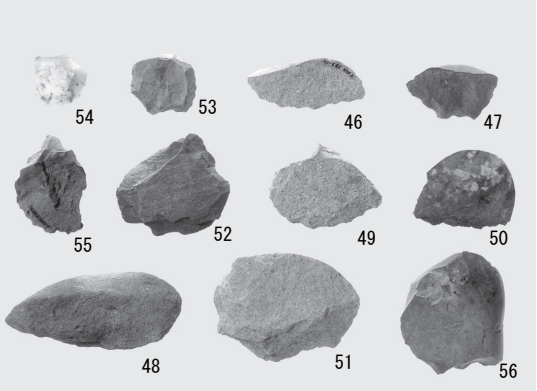
図版14



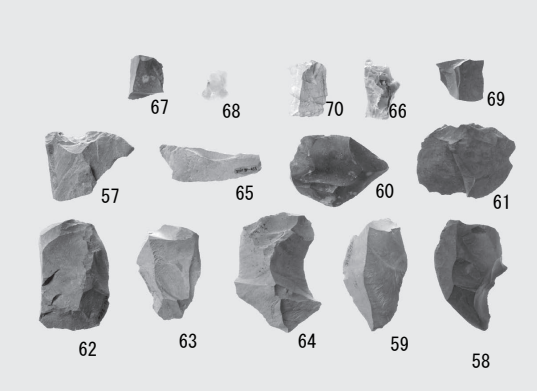

旧石器時代石器



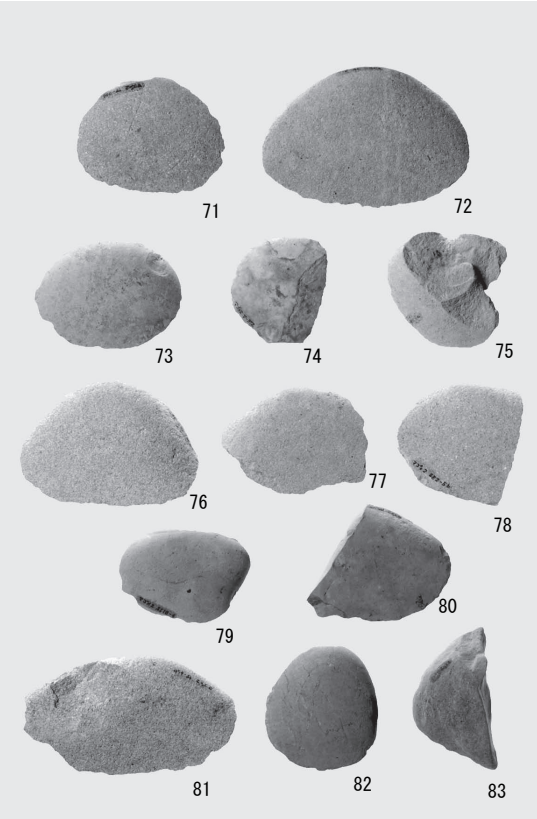

縄文時代早期石器（１）



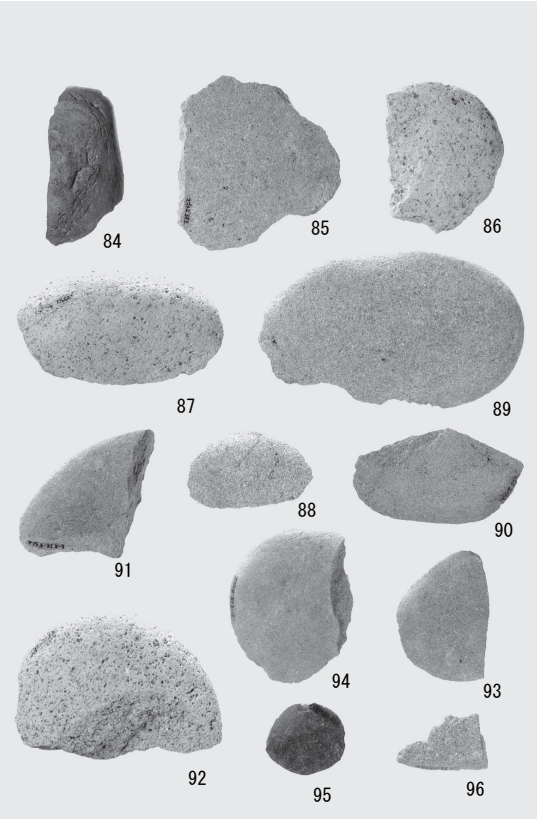

縄文時代早期石器（２）



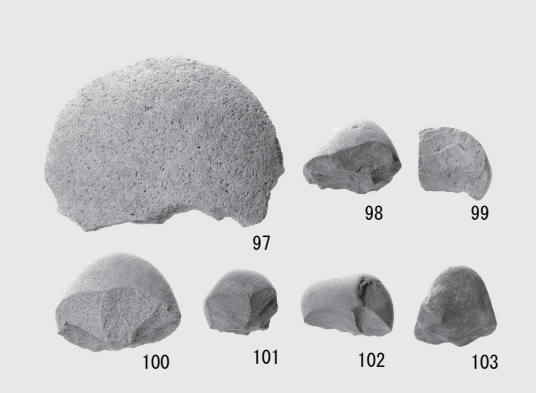

縄文時代早期石器（３）



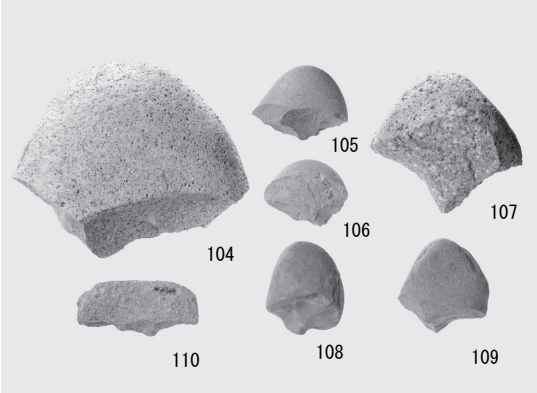

縄文時代早期石器（４）



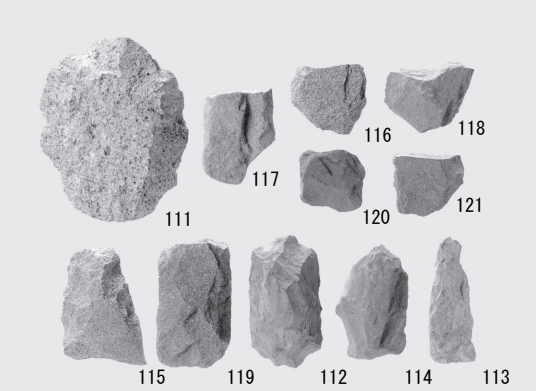

縄文時代早期石器（５）



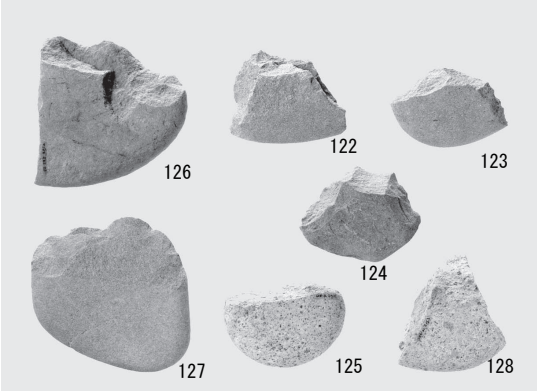

縄文時代早期石器（６）




縄文時代早期石器（７）

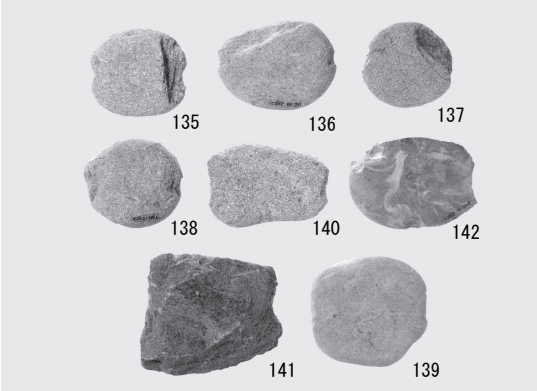



縄文時代早期石器（８）

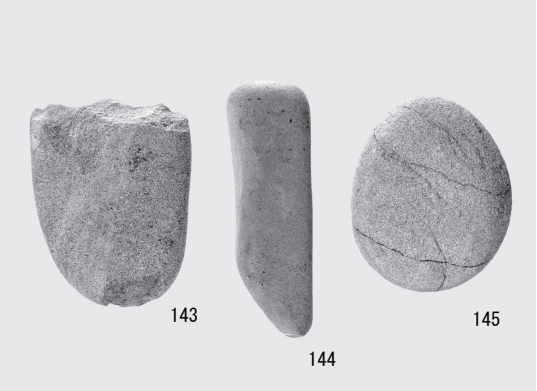



縄文時代早期石器（９）

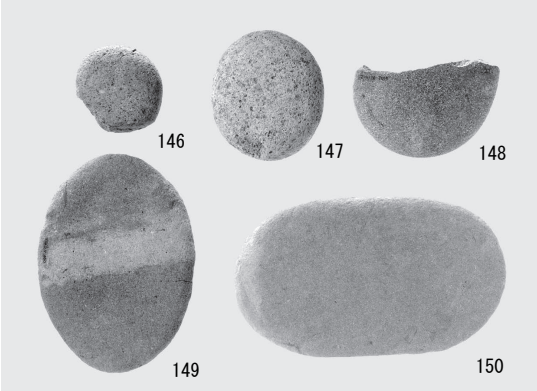
縄文時代早期石器（10）




縄文時代早期石器（11）




縄文時代早期石器（12）

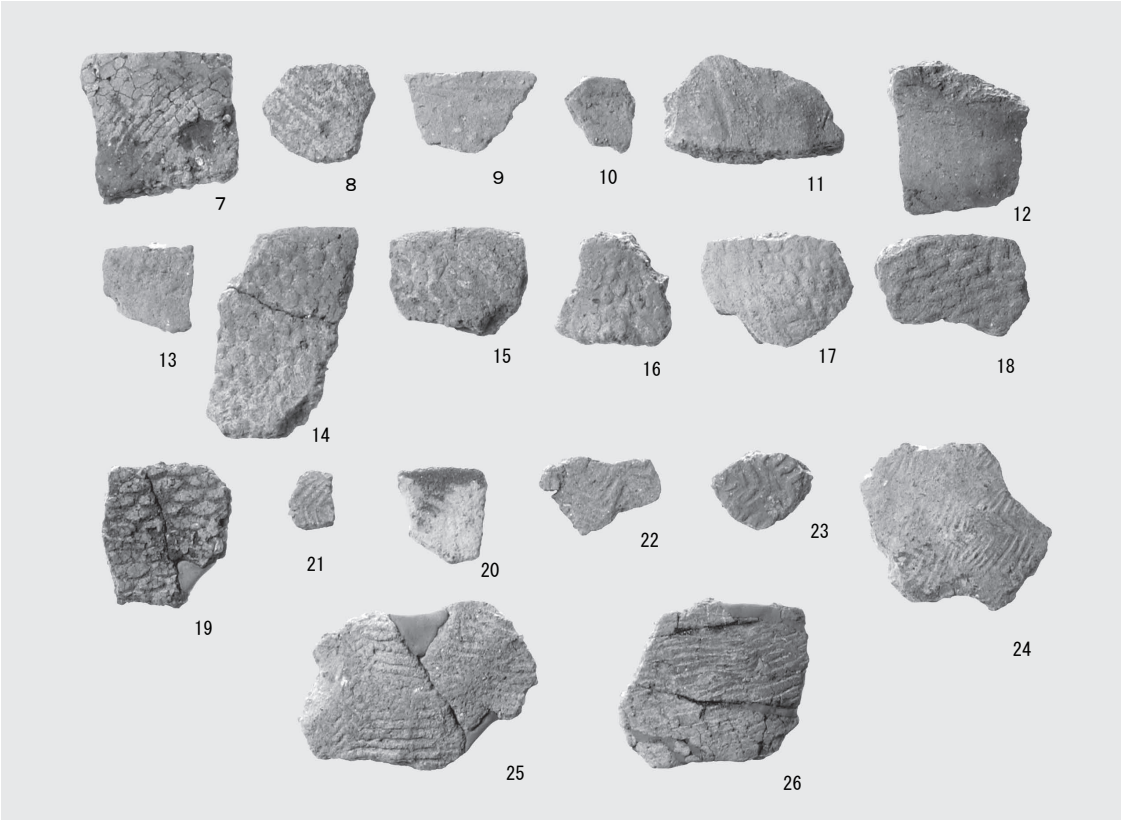



縄文時代早期石器（13）

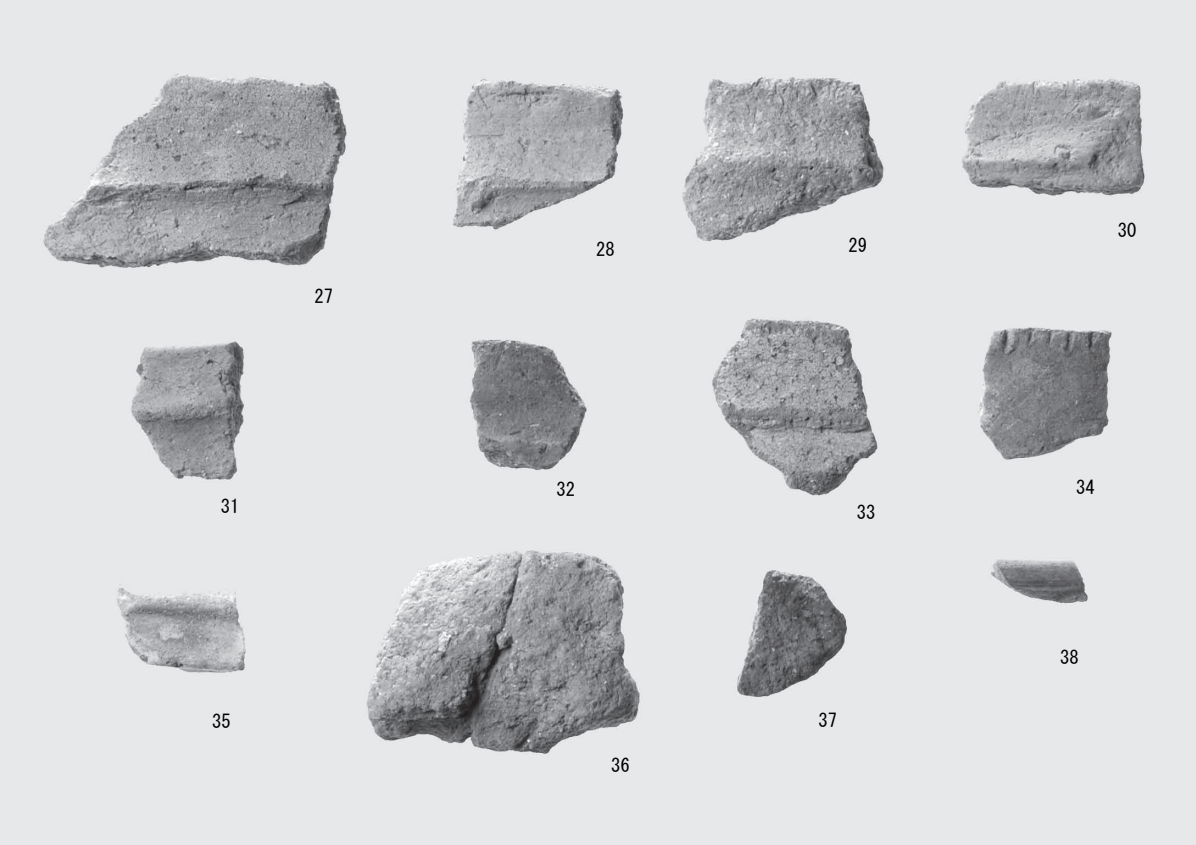
図版16

縄文時代早期石器（14）

縄文時代早期石器（15）

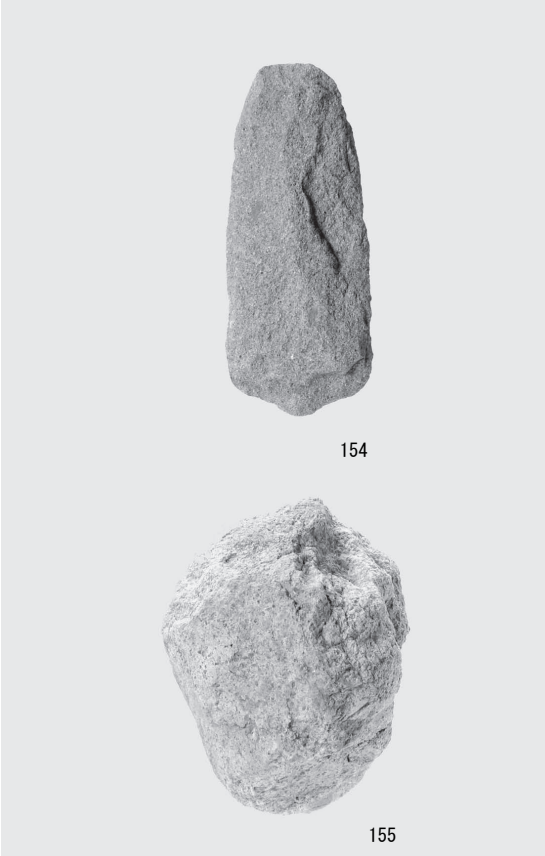



縄文時代早期土器




縄文時代晩期土器

SZ1埋納土坑出土遺物（１）

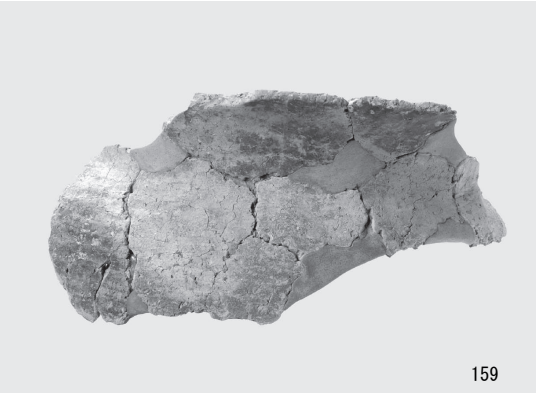



SZ1埋納土坑出土遺物（２）

図版18

弥生土器（１）

弥生土器（２）

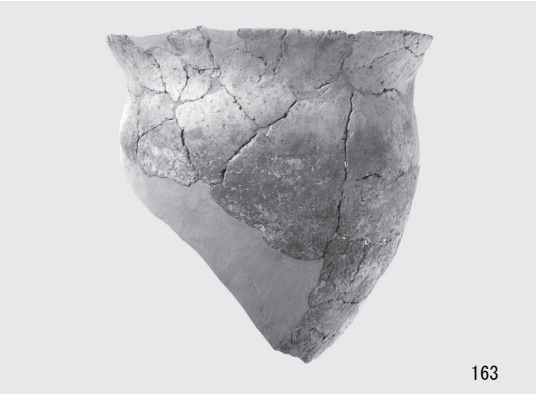



弥生土器（３）

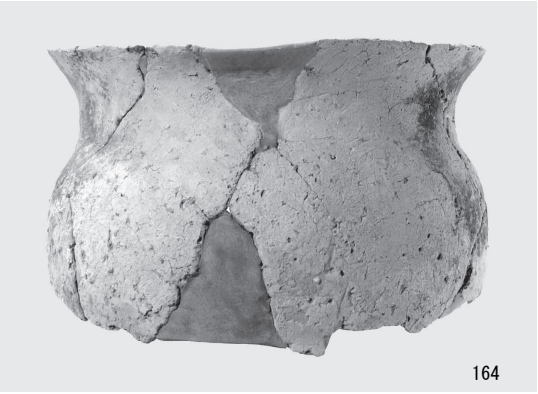
弥生土器（４）

弥生土器（５）

弥生土器（６）



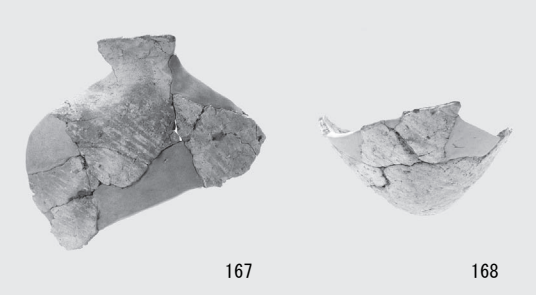

弥生土器（７）




弥生土器（８）

弥生土器（９）

弥生土器（10）




弥生土器（11）

弥生土器（12）

弥生土器（13）

弥生土器（14）

図版20

弥生土器（15）

弥生土器（16）

弥生土器（17）

弥生土器（18）

弥生土器（19）

弥生土器（20）

弥生土器（21）

弥生土器（22）

弥生土器（23）

弥生土器（24）

弥生土器（25）

弥生土器（26）

弥生土器（27）

弥生土器（28）

弥生土器（29）

図版22

弥生土器（30）

弥生土器（31）

弥生土器（32）

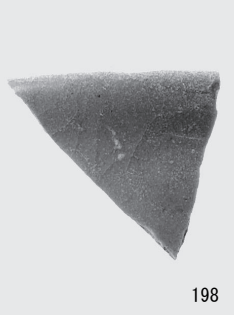
弥生土器（33）

弥生土器（34）

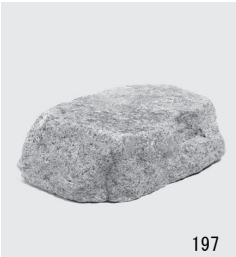
弥生土器（35）

弥生土器（36）

弥生土器（37）




青磁




竪穴状遺構出土台石

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | おかいせき（だいじゅうろくじちょうさ） まごめいせきだいにちてん |
| 書名 | 岡遺跡（第 16 次調査） 馬込遺跡第２地点 |
| 副書名 | 東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 12 |
| シリーズ名 | 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第 230 集 |
| 執筆・編集担当者名 | 二方和也・新谷清・飯田博之・長津宗重・松林豊樹・松浦朋彦 |
| 発行機関 | 宮崎県埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒 880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂４０１９番地 |
| 発行年月日 | ２０１４年 ３月 ７日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所 在 地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 岡遺跡<br>（第 16 次調査） | 宮崎県日向<br>大字平岩字岡 | 45206 | 6005 | 32 度<br>23 分<br>02 秒 | 131 度<br>37 分<br>18 秒 | 2012.4.9<br>～<br>2012.8.10 | 1,000 ㎡ | 記録保存調査 |
| 馬込遺跡第２地点 | 宮崎県日向市大字<br>平岩字馬込 | 45206 | 6004 | 32 度 23 分<br>09 秒 | 131 度<br>37 分<br>19 秒 | 2012.12.17<br>～<br>2013.3.29 | 1,600 ㎡ | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 岡遺跡<br>（第 16 次調査） | 散布地<br>集落跡 | 後期旧石器時代 | 礫群４基 | ナイフ形石器、石核、剥片、スクレイパー | 後期旧石器時代の礫群が４基検出 |
| | | 縄文時代早期 | 集石遺構３基、炉穴９基、土坑２基 | 石鏃、楔形石器、打製石斧、スクレイパー、磨石、縄文土器 | |
| 馬込遺跡第２地点 | 散布地<br>集落跡 | 旧石器時代 | | ナイフ形石器、角錐状石器、スクレイパー、剥片 | 縄文時代早期の集石遺構が 40 基検出 |
| | | 縄文時代 | 集石遺構 40 基、炉穴１基<br>土坑１基 | 石鏃、楔形石器、スクレイパー、石斧、有刻石製品、磨製石製品、縄文土器 | |
| | | 弥生時代 | 埋納土坑 | 弥生土器 | |
| | | 中世～近世 | | 青磁 | |

| | |
|---|---|
| 要 約 | 岡遺跡（第 16 次調査）では、後期旧石器時代の礫群、縄文時代早期の集石遺構や炉穴を検出した。後期旧石器時代は、旧日向市内では３例目となる AT 降灰以前の遺物である微細剥離剥片が出土した。AT 降灰後の遺構として散礫の中から礫群を４基検出し、遺物はナイフ形石器、スクレイパー、石核等が出土している。縄文時代早期の遺構としては集石遺構３基、炉穴９基、土坑２基検出している。特に、炉穴は数基が切り合う形で検出され、地形を意識して何度も作り替えられた様子が窺えた。また、炉穴の炭化物からクリ、コナラ属、クルミ属といった植物を利用していることも確認された。<br>馬込遺跡第２地点では、旧石器時代～弥生時代、中世の遺構や遺物を確認した。旧石器時代では遺構は検出されなかったが、ナイフ形石器、角錐状石器等の遺物が確認された。縄文時代では早期の遺構・遺物と晩期の遺物が確認された。早期の遺構は集石遺構 40 基、炉穴 1 基、土坑 1 基を検出した。集石遺構はほとんどが掘り込みや配石を有しており、掘り込み同士が上下に切り合った遺構が確認された。縄文時代早期の遺物は石鏃、楔形石器、石斧、有刻石製品、磨製石製品、縄文土器（楕円押型文・山形押型文・貝殻条痕文・撚糸文）、縄文時代晩期の遺物は縄文土器（無刻目突帯文）が検出された。弥生時代は埋納土坑を含む大きな土坑を検出し、遺構内からは大量の土器片（壺・甕・鉢）が焼土や炭化物と共に出土した。埋納土坑からは、壺や石斧、加工された礫が出土した。その他、時代は不明であるが竪穴状遺構と溝状遺構を検出した。 |

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 230 集

岡遺跡（第 16 次調査）
馬込遺跡第２地点

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 12

２０１４年３月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒 880 - 0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL 0985(36)1171　　FAX 0985(72)0660
印　刷　有限会社　いろは企画
〒 889 - 1603　宮崎市清武町正手３丁目 19-2
TEL 0985(85)5889　　FAX 0985(85)5889